福 岡 市

羽根戸遺跡

－ 西区西部墓園建設にともなう調査 －

羽根戸古墳群Ｎ群・羽根戸原Ｃ遺跡群第３次調査

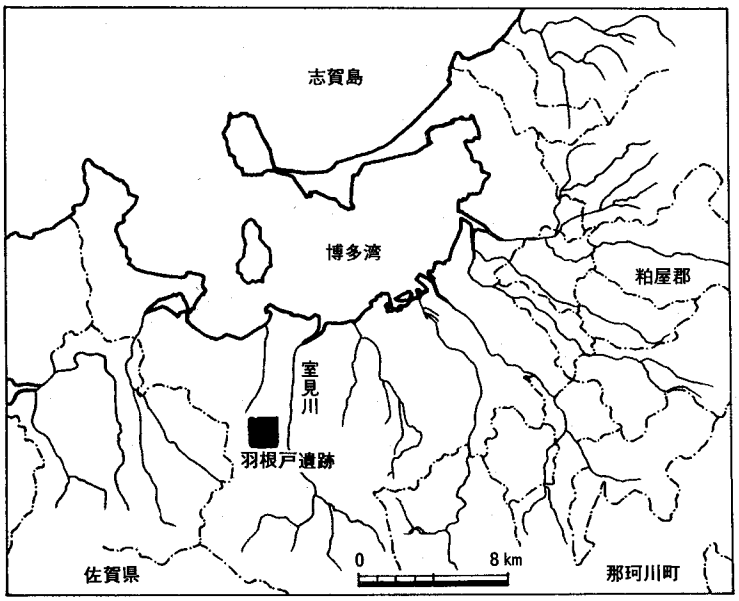
福岡市埋蔵文化財調査報告書第180集

１９８８

福 岡 市 教 育 委 員 会

福岡市

羽根戸遺跡



調査番号	HDK-N （羽根戸古墳群N群） NDC-Ⅱ （羽根戸原C遺跡群）
遺跡略号	8529 （羽根戸古墳群N群） 8528 （羽根戸原C遺跡群）

1988

福岡市教育委員会

序　文

近年、福岡市域と周辺地域では都市化にともなう人口の増加が著しく、このための諸開発によって市域に数多く分布する古来の遺跡群についての影響が出て来ています。

福岡市教育委員会では、このような開発によって失なわれる遺跡の保存調査に努めているところであります。

今回の調査は、市営西部墓園建設に伴うもので、弥生時代終末から古墳時代後期に亘る広汎な遺跡であります。

調査に際しましては関係各位に御協力をいただき、多くの成果を得ることが出来ました。これも本市文化財に対する皆様方の深い御理解と考え、深く感謝する次第であります。

昭和63年３月31日

福岡市教育委員会

教育長　佐藤善郎

例　言

1．本書は福岡市教育委員会が、市営西部墓園建設にともなって、1985年７月～1986年６月におこなった羽根戸古墳群Ｎ群および羽根戸原Ｃ遺跡群（第３次）の調査報告書である。

2．遺構の実測は、松村道博・佐藤一郎・吉武学（以上埋蔵文化財課）および田中稿二（明治大学）の強力な応援を得て、田中寿夫・荒牧宏行・瀧本正志・横山邦継で行なった。

3．遺構の写真撮影は、田中・瀧本・横山で行なった。

4．遺物の実測は、その殆どを宮井善朗（本課）および長家伸・中村真由美（九州大学考古学研究室）により、他は田中・横山で行なった。また製図・写真撮影は田中・横山で行った。

5．本書の編集は、田中の協力を得て横山が行ない、執筆は羽根戸古墳群Ｎ群（Ⅱ区）を横山、羽根戸原Ｃ遺跡群（Ⅰ区）のうちＩａ～ｂ区を田中、Ｉｃ～ｅ区を横山が担当した。

6．本報告書に収録された遺物および記録類（実測図・写真）は、福岡市埋蔵文化財センター（博多区井相田二丁目）に収蔵・保管されるので御活用されたい。

本文目次

Ⅰ　はじめに……1
Ⅱ　遺跡の立地と環境……3
Ⅲ　調査の記録……7
1．羽根戸古墳群N群の調査……7
(1)　第1号古墳……8
(2)　第2号古墳……25
(3)　第3号古墳……39
(4)　第4号古墳……45
(5)　第5号古墳……50
(6)　第6号古墳……58
(7)　第7号古墳……71
(8)　第8号古墳……78
(9)　第27号古墳……89
(10)　第28号古墳……100
(11)　第30号古墳……104
(12)　土壙……107
(13)　石棺墓……114
―小結―……117
2．羽根戸原C遺跡の調査……119
(1)　Ⅰa区の調査……121
(2)　Ⅰb区の調査……125
(3)　Ⅰc区の調査……141
(4)　Ⅰd区の調査……158
(5)　Ⅰe区の調査……158
Ⅳ　まとめ……159

図版目次

PL. 1　羽根戸古墳群N群調査全景（東より）
PL. 2　(1)　N群第1号墳調査前全景（西より）
　　(2)　第1号墳玄室奥壁（玄門部より）
PL. 3　(1)　第1号墳羨道閉塞状況（南より）
　　(2)　第1号墳羨道（玄室より）
PL. 4　(1)　第1号墳墳丘遺存全景（南より）
　　(2)　第1号墳墳丘遺存全景（東より）
　　(3)　第1号墳石室側面観（西より）
　　(4)　第1号墳石室俯瞰（北より）
PL. 5　(1)　第2号墳石室遺存状況（西南より）
　　(2)　第2号墳墳丘遺存状況（南より）
PL. 6　(1)　第2号墳石室遺存状況（南より）
　　(2)　第2号墳玄室奥壁（玄門より）
PL. 7　(1)　第3号墳墳丘遺存状況（南より）
　　(2)　第3号墳石室遺存状況（南より）
PL. 8　(1)　第3号墳玄室奥壁（玄門より）
　　(2)　第3号墳石室俯瞰（北より）
PL. 9　(1)　第4・30号墳全景（東南より）
　　(2)　第4号墳石室遺存状況（南より）
　　(3)　第30号墳石室遺存状況（南より）
PL. 10　(1)　第5号墳石室遺存状況（閉塞除去前・南から）
　　(2)　第5号墳石室遺存状況（閉塞除去後・南から）
PL. 11　(1)　第5号墳墳丘遺存状況（南から）
　　(2)　第6号墳石室遺存状況（西から）
PL. 12　(1)　第6号墳石室遺存状況（北より）
　　(2)　第6号墳閉塞状況（玄室側より）
PL. 13　(1)　第6号墳玄室奥壁構築状況（玄門より）
　　(2)　第6号墳南側壁部供献坏類出土状況（西より）
PL. 14　(1)　第6号墳墳丘遺存状況俯瞰（南より）
PL. 15　(1)　第7号墳墳丘遺存状況（東南より）
　　(2)　第7号墳玄室北側壁構築状況（南より）

PL. 16 (1) 第7号墳石室全景（奥壁より）
PL. 17 (1) 第7号墳玄室奥壁構築状況（玄門より）
(2) 第7号墳石室およびSX01石棺検出状況（南西より）
PL. 18 (1) 第7号墳閉塞状況（玄室より）
(2) 第7号墳閉塞状況（羨道より）
PL. 19 (1) 第8号墳墳丘調査区全景（東より）
(2) 第8号墳玄塞奥壁（玄門より）
PL. 20 (1) 第8号墳玄室後室（前室より）
(2) 第8号墳玄室前室（後室より）
PL. 21 (1) 第8号墳墳丘調査区全景（西より）
(2) 第8号墳墳丘葺石構築状況（南より）
PL. 22 (1) 第8号墳玄室前室内遺物出土状況（坏類）
(2) 第8号墳前室内遺物出土状況（坏類および鉄器）
PL. 23 (1) 第27・28号墳遺存状況遠景（南より）
(2) 第27号墳羨道閉塞状況（南より）
PL. 24 (1) 第28号墳玄室奥壁（玄門より）
(2) 第28号墳玄室前室および閉塞部
PL. 25 (1) 第28号墳石室遺存状況（閉塞除去後）
(2) 第28号墳墳丘遺存状況（南より）
PL. 26 (1) 第28号墳西側墳丘遺存状況（南より）
(2) 第28号墳墳丘補強石材構築状況（西から）
PL. 27 (1) 第28号墳墳丘遺存状況（西より）
(2) 第28号墳墳丘遺存状況（北より）
PL. 28 (1) SX01石棺墓検出状況（西より）
(2) SX02石棺墓検出状況（南より）
PL. 29 (1) SK01土壙検出状況（南より）
(2) SK02土壙検出状況（西より）
PL. 30 (1) SK02土壙検出状況（東より）
(2) SK02土壙東西土層断面（南壁）
PL. 31 (1) SK04土壙検出状況（南より）
(2) SK06土壙検出状況（北より）
PL. 32 (1) 遺跡遠景（西から）
(2) 遺跡遠景（東から）

PL. 33 (1) Ⅰa区完掘状況全景（西から）
(2) SD05・07・08完掘状況（西から）
(3) SD06完掘状況（南から）
(4) SX01完掘状況（西から）
PL. 34 (1) Ⅰb区完掘状況（西から）
(2) 掘立柱建物分布状況
(3) SC01完掘状況（南東から）
(4) SC02完掘状況（南東から）
PL. 35 (1) SD02完掘状況（西から）
(2) SD10土層断面状況（北東から）
(3) SD11・12・13完掘状況（南から）
(4) SD10遺物出土状況（南から）
PL. 36 (1) SD14完掘状況（北から）
(2) SP121柱痕跡断面（西から）
(3) SP128柱痕跡断面（西から）
(4) SP133柱痕跡断面（西から）
(5) SP76柱痕内遺物出土状況
(6) SX02完掘状況（南から）
(7) SX03完掘状況（南東から）
PL. 37 Ⅰc区遺構出土状況全景（東から）
PL. 38 Ⅰc区SC10・11・13検出状況（東から）
PL. 39 (1) SC10完掘状況（東から）
(2) SC10床面土器出土状況（高坏）
(3) SC10床面土器出土状況（甕）
PL. 40 (1) SC07完掘状況（東南から）
(2) SX05完掘状況（北西から）
PL. 41 (1) SX11・12完掘状況（南東から）
(2) SX15・SC07完掘状況（南東から）
PL. 42 (1) SC06完掘状況（西から）
(2) SB03完掘状況（南から）
PL. 43 Ⅰd区遺構出土状況全景（東から）
PL. 44 Ⅰd区SC07・SB05完掘状況（南から）
(2) SB04完掘状況（南から）

PL. 45　第１号墳出土土器(1)（00001～00017）
PL. 46　第１号墳出土土器(2)（00015～00033）
PL. 47　第１号墳出土土器(3)（00033～00052）
PL. 48　第１号墳出土土器(4)（00053～00059）
PL. 49　第１号墳出土土器(5)（00060～00073）
PL. 50　第１号墳出土土器(6)（00074～00085）
PL. 51　第１号墳出土土器(7)（00086～00100）
PL. 52　第２号墳出土土器(1)（00201～00220）
PL. 53　第２号墳出土土器(2)（00221～00232）
PL. 54　第２号墳出土土器(3)（00233～00245）
PL. 55　第２・３・４号墳出土土器（00246～04020）
PL. 56　第５・６号墳出土土器（00501～00602）
PL. 57　第６号墳出土土器(2)（00606～00612）
PL. 58　第６号墳出土土器(3)（00615～00627）
PL. 59　第６・７号墳出土土器（00631～00709）
PL. 60　第７号墳出土土器(2)（00710～00721）
PL. 61　第８号墳出土土器(1)（00851～00872）
PL. 62　第８号墳出土土器(2)（00878～00880）
PL. 63　第８号墳出土土器(3)（00882～00891）
PL. 64　第８・27号墳出土土器（00900～01009）
PL. 65　第27号墳出土土器(2)（01014～01023）
PL. 66　第28号墳・SK06土壙および第30号墳出土土器（01101～01303）
PL. 67　第Ⅰa・b区出土遺物（1/3）
PL. 68　第Ⅰb区出土遺物（1/3）
PL. 69　第Ⅰc区出土遺物(1)
PL. 70　第Ⅰc区出土遺物(2)

挿図目次

Fig. 1　遺跡位置図（1/2.5万）……4
Fig. 2　遺跡分布図（1/4000）……5
Fig. 3　羽根戸古墳群N群現況測量図（1/300）（折込み）
Fig. 4　N群第1号墳現況測量図（1/100）……9
Fig. 5　N群第1号墳墳丘遺存図（1/100）（折込み）
Fig. 6　N群第1号墳地山整形図（1/100）（折込み）
Fig. 7　N群第1号墳墳丘土層断面図（1/50）……11
Fig. 8　N群第1号墳石室実測図(1)（1/50）（折込み）
Fig. 9　N群第1号墳石室実測図(2)（1/50）……13
Fig. 10　N群第1号墳石室実測図(3)（1/50）……15
Fig. 11　N群第1号墳遺物出土状況実測図（1/20）……16
Fig. 12　N群第1号墳閉塞施設実測図(1/50)……17
Fig. 13　N群第1号墳出土遺物実測図(1)（1/3）……19
Fig. 14　N群第1号墳出土遺物実測図(2)（1/3）……20
Fig. 15　N群第1号墳出土遺物実測図(3)（1/3）……22
Fig. 16　N群第1号墳出土遺物実測図(4)（1/3）……23
Fig. 17　N群第1号墳出土遺物実測図(5)（1/1）……24
Fig. 18　N群第2号墳現況測量図（1/100）……26
Fig. 19　N群第2号墳墳丘遺存図（1/100）……27
Fig. 20　N群第2号墳墳丘土層断面図（1/50）……28
Fig. 21　N群第2号墳石室実測図(1)（1/50）（折込み）
Fig. 22　N群第2号墳石室実測図(2)（1/50）……31
Fig. 23　N群第2号墳石室実測図(3)（1/50）……32
Fig. 24　N群第2号墳閉塞施設実測図（1/50）……33
Fig. 25　N群第2号墳出土遺物実測図(1)（1/3）……35
Fig. 26　N群第2号墳出土遺物実測図(2)（1/3）……36
Fig. 27　N群第2号墳出土遺物実測図(3)（1/3）……37
Fig. 28　N群第3号墳墳丘遺存図（1/100）……40
Fig. 29　N群第3号墳墳丘土層断面図（1/50）……41
Fig. 30　N群第3号墳石室実測図(1)（1/50）……42
Fig. 31　N群第3号墳石室実測図(2)（1/50）……43

Fig. 32　N群第3号墳出土遺物実測図（1/3）……44
Fig. 33　N群第4・30号墳墳丘遺存図（1/100）……46
Fig. 34　N群第4号墳墳丘土層断面図（1/50）……47
Fig. 35　N群第4号墳石室実測図(1)（1/50）……48
Fig. 36　N群第4号墳出土遺物実測図（1/3・2/3）……50
Fig. 37　N群第5号墳墳丘遺存図（1/100）……51
Fig. 38　N群第5号墳墳丘土層断面図（1/50）……52
Fig. 39　N群第5号墳石室実測図（1/50）……54
Fig. 40　N群第5号墳閉塞施設実測図（1/50）……55
Fig. 41　N群第5号墳出土遺物実測図(1)（1/3）……56
Fig. 42　N群第5号墳出土遺物実測図(2)……57
Fig. 43　N群第6・7号墳現況測量図（1/100）……59
Fig. 44　N群第6・7号墳墳丘遺存図（1/100）……60
Fig. 45　N群第6号墳石室実測図（1/50）……61
Fig. 46　N群第6号墳出土遺物実測図(1)（1/3）……64
Fig. 47　N群第6号墳出土遺物実測図(2)（1/3）……65
Fig. 48　N群第6号墳出土遺物実測図(3)（1/3）……66
Fig. 49　N群第6号墳出土遺物実測図(4)（1/3）……68
Fig. 50　N群第6号墳出土遺物実測図(5)（1/2）……69
Fig. 51　N群第7号墳墳丘土層断面図（1/50）……71
Fig. 52　N群第7号墳石室実測図（1/50）……72
Fig. 53　N群第7号墳閉塞施設実測図（1/50）……73
Fig. 54　N群第7号墳出土遺物実測図(1)（1/3）……75
Fig. 55　N群第7号墳出土遺物実測図(2)（1/3）……76
Fig. 56　N群第7号墳出土遺物実測図(3)（1/3）（折込み）
Fig. 57　N群第8号墳墳丘測量図（1/150）（折込み）
Fig. 58　N群第8号墳石室実測図(1)（1/50）（折込み）
Fig. 59　N群第8号墳石室実測図(2)（1/50）……79
Fig. 60　N群第8号墳出土遺物実測図(1)（1/3）……81
Fig. 61　N群第8号墳出土遺物実測図(2)（1/3）……83
Fig. 62　N群第8号墳出土遺物実測図(3)（1/3）……85
Fig. 63　N群第8号墳出土遺物実測図(4)（1/4）（折込み）
Fig. 64　N群第8号墳出土遺物実測図(5)（1/4・1/6）（折込み）

Fig. 65　N群第８号墳出土遺物実測図(6)（1/3）……87
Fig. 66　N群第27・28号墳墳丘遺存図（1/100）……90
Fig. 67　N群第27号墳墳丘土層断面図（1/50）……91
Fig. 68　N群第27号墳石室実測図(1)（1/50）……93
Fig. 69　N群第27号墳石室実測図(2)（1/50）……94
Fig. 70　N群第27号墳石室実測図(3)（1/50）……95
Fig. 71　N群第27号墳閉塞施設実測図（1/50）……96
Fig. 72　N群第27号墳出土遺物実測図(1)（1/3）……97
Fig. 73　N群第27号墳出土遺物実測図(2)（1/3）……99
Fig. 74　N群第28号墳石室実測図(1)（1/50）（折込み）
Fig. 75　N群第28号墳石室実測図(2)（1/50）……101
Fig. 76　N群第28号墳出土遺物実測図（1/3）……103
Fig. 77　N群第30号墳墳丘土層断面図（1/50）……105
Fig. 78　N群第30号墳石室実測図（1/50）……106
Fig. 79　N群第30号墳出土遺物実測図（1/3）……106
Fig. 80　N群ＳＫ01土壙出土状況実測図（1/40）……107
Fig. 81　N群ＳＫ02土壙出土状況実測図（1/20）……108
Fig. 82　N群ＳＫ03土壙出土状況実測図（1/20）……109
Fig. 83　N群ＳＫ04土壙出土状況実測図（1/20）……110
Fig. 84　N群ＳＫ05土壙出土状況実測図（1/20）……111
Fig. 85　N群ＳＫ06土壙出土遺物実測図（1/3）……112
Fig. 86　N群ＳＫ06土壙出土状況実測図（1/40）……113
Fig. 87　N群ＳＸ01石棺墓出土状況実測図（1/40）……114
Fig. 88　N群ＳＸ01土壙出土遺物実測図（1/3）……115
Fig. 89　N群ＳＸ02石棺墓出土状況実測図（1/20）……116
Fig. 90　N群第７号墳周辺出土土器実測図（1/3）……118
Fig. 91　調査区区割図（1/5000）……119
Fig. 92　Ia ～Ie 調査区全体図（1/300）（折込み）
Fig. 93　Ia 区ＡＢライン断面図（1/80）……121
Fig. 94　ＳＸ01平面及び土層断面図（1/40）……122
Fig. 95　ＳＤ02～04・06・07、ＳＸ01出土土器実測図（1/3）……123
Fig. 96　第 Ib 区西端部遺構分布状況図（1/80）……124
Fig. 97　第 Ib 区北壁西端部土層断面図（1/60）……125

Fig. 98　ＳＣ01平面および断面見透し図（1/50）……126
Fig. 99　ＳＣ01出土土器実測図(2)（1/3）……127
Fig. 100　ＳＣ01・02出土土器実測図（1/3）……128
Fig. 101　ＳＣ02平面および断面見透し図（1/50）……129
Fig. 102　ＳＤ10土層断面図（1/60）……130
Fig. 103　SD14遺物出土状況および断面図（1/40）……131
Fig. 104　ＳＤ10・13出土土器実測図（1/3）……132
Fig. 105　ＳＤ14出土土器実測図（1/3）……133
Fig. 106　ＳＤ14出土土器実測図その２（1/3）……134
Fig. 107　ＳＸ02平面および土層断面図（1/40）……135
Fig. 108　ＳＸ03平面及び土層断面図（1/40）……136
Fig. 109　ＳＸ02・03出土土器実測図（1/3）……136
Fig. 110　掘立柱建物（ＳＢ01～04）平面および断面図（1/80）……138
Fig. 111　柱穴出土土器実測図（1/3）……139
Fig. 112　Ib区出土石器実測図（1/3）……140
Fig. 113　SC 10・11・13住居址出土状況図（1/60）……142
Fig. 114　SC03住居址出土遺物実測図（1/3）……144
Fig. 115　SC04・05・06・07住居址出土遺物実測図（1/3）……145
Fig. 116　SC07・10住居址出土遺物実測図（1/3）……148
Fig. 117　SC10住居址出土遺物実測図（1/3）……149
Fig. 118　SC10・11・12住居址出土遺物実測図（1/3）……151
Fig. 119　SX05・15土壙出土遺物実測図（1/3）……152
Fig. 120　SX16・17・25土壙出土遺物実測図（1/3）……153
Fig. 121　SD25・28出土遺物実測図（1/3）……154
Fig. 122　SB06建物出土状況図（1/60）……156
Fig. 123　調査古墳平面図（1/100）……161

Ⅰ．はじめに

昭和60年、西区大字羽根戸に計画された「西部墓園」建設が具体化し、当該局である都市計画局公園建設課（当時）より事業計画とともに事業地内における埋蔵文化財の有無および工事による遺跡への影響について調査依頼が埋蔵文化財課に出された。

事業は、墓園本体とこれに接続する進入道路拡幅工事が主要なものであったが、本体部分で区域内に分布する「羽根戸古墳群」が影響を蒙ることから建設区域から除外するよう協議がなされた。また進入道路部分は、拡幅にともない、予定された防災措置および構造物の埋設などの工事のため現状の保持については協議が困難に状態にあった。

道路拡幅で遺跡に影響を与えるのは大きく２地区であった。１は羽根戸原Ｃ遺跡群（Fig.１．第Ⅰ区）を中心とする地区であり、他は拡幅による法面調整（防災）の影響を受ける羽根戸古墳群Ｎ群12基である（Fig.１．第Ⅱ区）。

埋蔵文化財課では、この第Ⅰ・Ⅱ区の２地点について試掘調査（1985年３月14～15日）および踏査を実施した。この結果第Ⅰ区では弥生時代後期末～鎌倉時代に亘る生活遺構が密に遺存していることが判った。また第Ⅱ区では羽根戸古墳群Ｎ群のうち、第２～８・27・28・30号墳が対象と考えられたが、協議の進行につれ同群第１号墳もまた保存が困難となった。

以上の調査成果と協議内容をもととして本調査を1985年５月より開始し、第Ⅱ区を含めると1986年６月18日まで断続的に実施した。

なお第Ⅱ区（羽根戸古墳群Ｎ群）では同群のうち第６・８号墳が墳丘裾部を削平したにとどまり、石室本体はほぼ現状のまま保存された。

また、発掘調査にあたっては、地主である石橋久明氏をはじめ、地元三苫義続、井上修一両氏他多数の方々の御協力を得た。更に担当課である公園建設課山口・鴨原両氏および工事施行の林土木株式会社林英機・同社村上輝昭氏には調査進行上で種々の御協力を戴いた。記して感謝する次第である。

調査組織

事業主体　福岡市都市計画局（現都市整備局）公園建設課

調査期間　第Ⅰ区（羽根戸原Ｃ遺跡群）－1985年７月１日～同年９月27日

第Ⅱ区（羽根戸古墳群Ｎ群）－1985年10月19日（伐開開始）～1986年３月11日（Ｎ群第２～８・27・28・30号墳）・1986年５月12日～６月18日（Ｎ群第Ⅰ号

墳)

調査主体　福岡市教育委員会

教育長　佐藤善郎

埋蔵文化財課長　柳田純孝

埋蔵文化財第Ⅰ係長　折尾学

庶務担当　岸田隆

調査担当　田中寿夫・荒牧宏行（Ⅰａ～ｂ地区)、瀧本正志・横山邦継（Ⅰｃ～ｅおよび第Ⅱ地区)

また発掘調査およびこれに続く資料整理作業においては以下の方々の御協力を戴いた。(敬称略)

調査補助　田中稿二（明治大学)、高橋健二・棚田昭仁（別府大学)

発掘調査　辻茂一郎、藤木誠、田中栄、吉岡勝美、吉岡文利、平田勇夫、脇坂武実、西嶋和子、倉光三保、新町ナツ子、山下アヤ子、松本育子、原ハナエ、掘美久美子、田中カヨ子、森山早苗、脇山喜代子、横田松乃、山田トキエ、川口シゲノ、平田千鶴子、藤本フミエ、西嶋洋子、西嶋みね子、高松カヲル、増田タツ子、原征子、西嶋ミチ子、相川タツエ、吉岡トク

整理作業　小森佐和子、尾崎育子、土斐崎つや子、嶋田明子、中村真由美・長家伸（九州大学)

Ⅱ．遺跡の立地と環境

福岡平野の西端域を占める早良平野は、東を油山山塊より派生して北に伸びる低丘陵に、また西側を金山－飯盛山－叶岳－長垂に至る山塊で区切られ、この間を室見川が貫いて北流している。室見川はまた流域に扇状地および流路に自然堤防を形成しているが、同川の特に左岸地域を中心とする地域は、これに注ぎ込む支流の活動に起因する広大な扇状地が形成され、各時代の生産舞台として活用され、多くの遺跡群が展開している地域である。

ここで遺跡の所在する羽根戸地区を中心として周辺の遺跡群を時代毎に辿ってみる。

羽根戸地区での居住は先土器時代に遡り、表採資料乍ら尖頭器、細石刃、細石核が羽根戸原遺跡群を中心に発見されている。また南東１kmにあたる圃場整備事業に伴う吉武遺跡群第４次調査（1985年）では縦長剝片類とともにナイフ型石器の包含層が検出されている。

縄文時代では同様に羽根戸原遺跡群を中心に早～前期を主とする押型文土器、黒曜石製石鏃・スクレイパーなどが数多く採集されている。現在までの調査では遺構をともなった同時期遺跡の発見はないが、古墳時代群集墳調査中に墳丘土中より出土する例が多く、古墳群が数多く形成された山麓線に沿って集落址が分布するものと考えられる。また後～晩期にかけては比較的に生活遺構をともなった調査例が知られている。その主なものは圃場整備に伴う吉武遺跡群第２次調査（1982年）－貯蔵穴群、公団住宅建設に伴って調査された四箇遺跡群－住居址・埋甕遺構・特殊泥炭層、田村遺跡群－埋甕遺構などがあり、特に1987年度調査例では前の四箇遺跡群と四箇東遺跡群にわたり、入部地区圃場整備事業にともなう第１次調査で後期後半～末を中心とする竪穴住居址および貯蔵穴群が検出された。特に竪穴住居址は、直径３ｍ程の円形をなし、中央に埋甕炉を切り、生活土器類の一括組成とともに、土製紡錘車・尖頭蛤刃石斧・打製石器類、敲打器類などの石器組成を明らかに示すものであった。これらは室見川右岸地域を中心とするものである。

続く弥生時代では、早良平野全域に遺跡数が増大してくる。併し乍ら弥生時代前期前半代では室見川およびその支流を含めた博多湾沿岸部に集中し、平野奥部への展開は前期後半代になると考えられる。

この前期後半代では圃場整備事業に伴って1981年より1988年まで調査された吉武遺跡群が特記される。同遺跡群は室見川左岸の標高25～30ｍ程の扇状地に立地し、東西約850ｍ、南北1200ｍ程の広大な規模であるが、この調査で主に前期末～中期初頭より始まる甕棺墓・木棺墓でなる墓地群が確認され、墓壙上に標石を有する木棺墓・大形の甕を使用した金海式甕棺墓から豊富

な種類と量の朝鮮製青銅器類が出土した（吉武高木・大石地区）。この前期末より始まる朝鮮製青銅器の副葬は殆どが他で単独出土例が多く、吉武遺跡群のように木棺墓に複数で、集中的に副葬するものは他に無く、被葬された集団の特殊性を指し示すものであろうか。

これに続く中期でも同遺跡群では墓地の形成は着実に行なわれ、中期後半～末を主として甕棺墓1000墓以上が調査され、扇状地の縁辺部の南西から北東方向をベルト状に埋めている。中期後半～末の段階では、共同体内の階層分化はかなり進行したと考えられ、樋渡地区では「墳丘墓」に結実し、一般共同体成員墓とは明らかな区別がなされ、鉄製武器・重圏文星雲鏡など

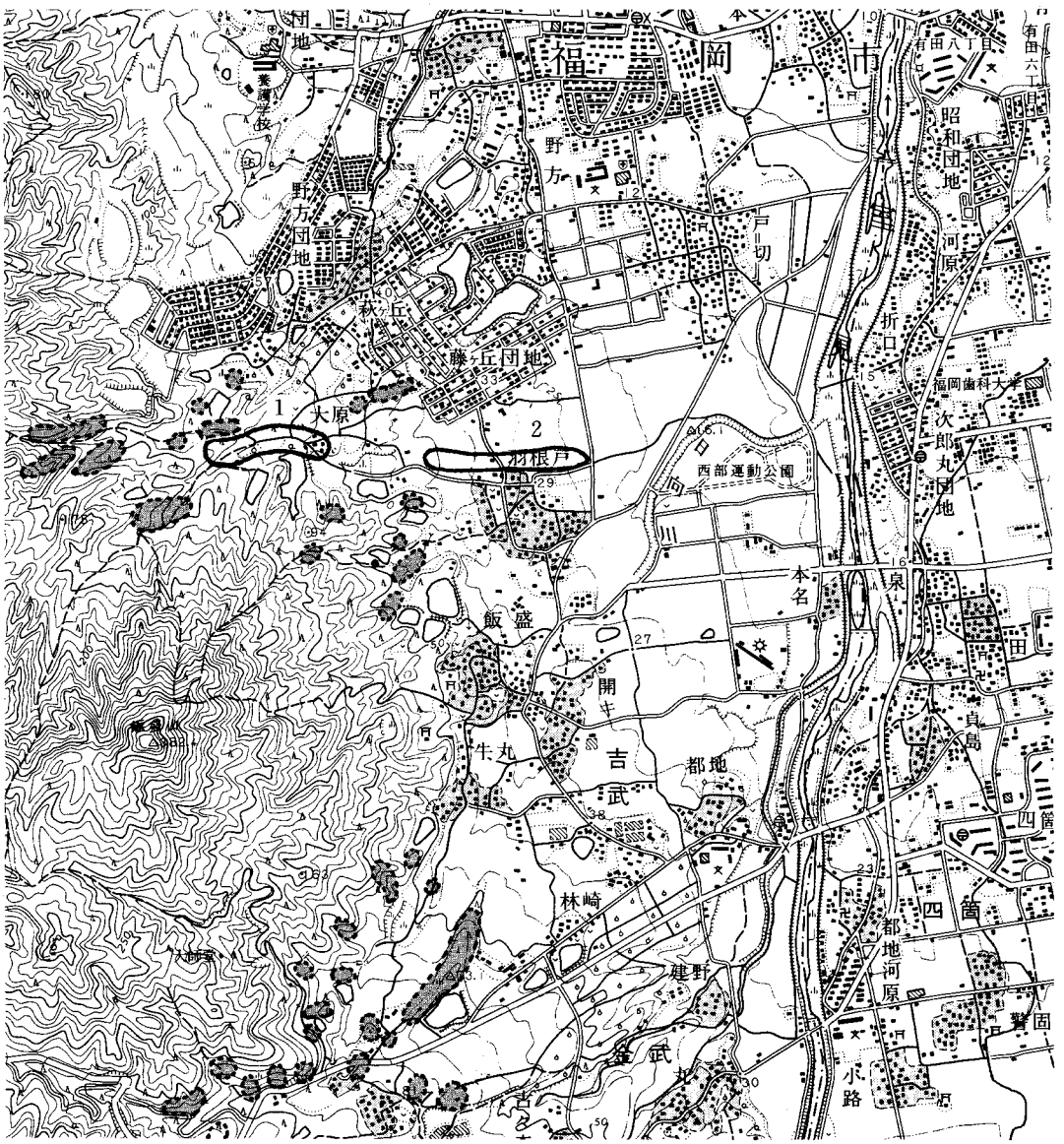


Fig. 1　遺跡位置図（1/2.5万）

1;羽根戸古墳群N群　※アミは古墳群
2;羽根戸原C遺跡群

の前漢鏡が副葬されている。続く後期も同様に生活遺構については明らかではないが墳墓群は、方形同溝遺構から石釧が出土した飯盛谷遺跡群のように更に山麓線に近い地域に墓域が移動する可能性がある。

古墳時代に至ると、早良平野では吉武樋渡・重留灰塚古墳などの様に埴輪円筒・形象埴輪列を有する大形墳を初源として数多くの古墳群の形成がなされる。特に東部の油山西・北麓および金武－長垂に至る山麓線に特徴的である。初源的古墳である吉武樋渡古墳は内部主体が竪穴系横口式石室である可能性が高く、出土埴輪から５世紀前半代の造営と考えられるが、これに

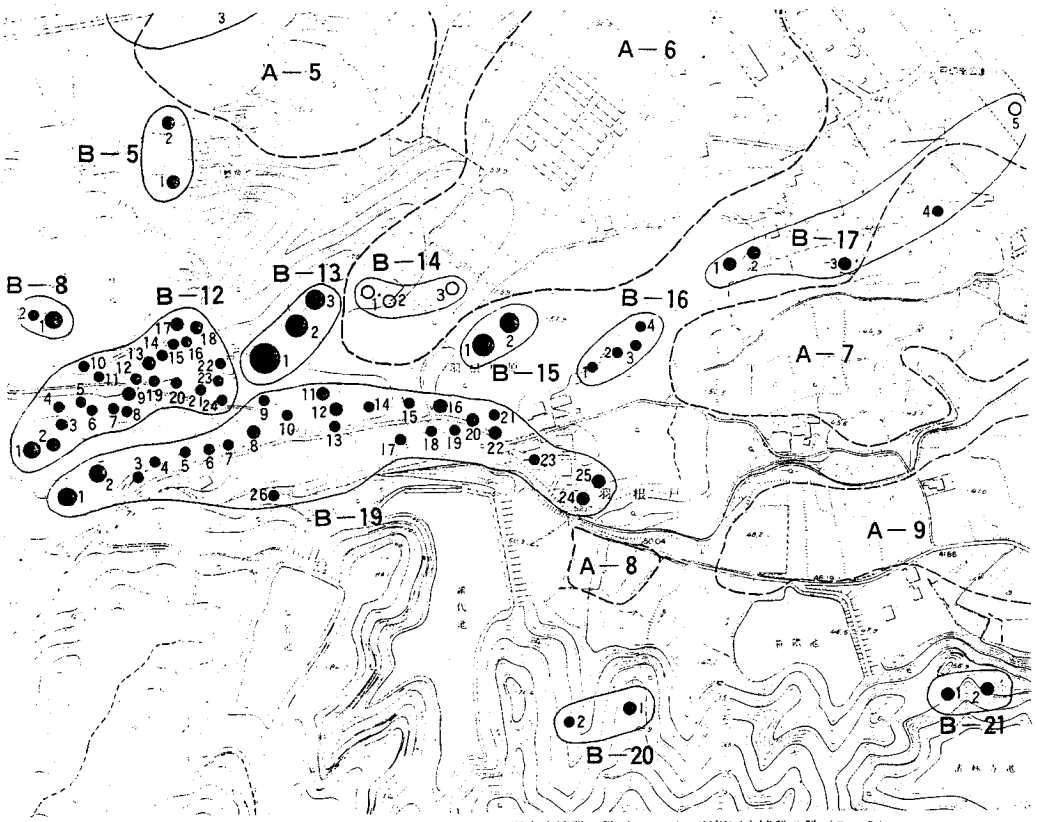


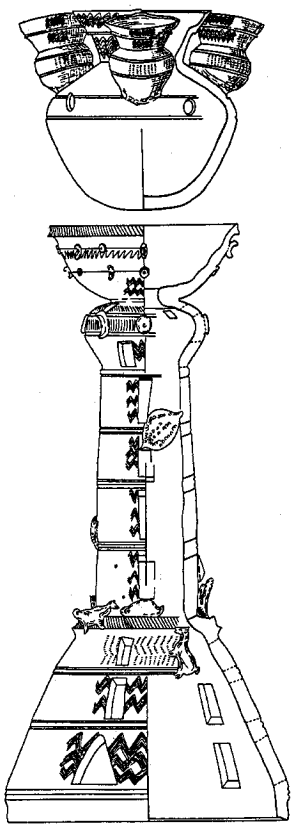
Fig. 2　遺跡分布図（1/4000）

野方古墳群Ｃ群（Ｂ－５）、羽根戸古墳群Ｃ群（Ｂ－８）
同Ｇ群（Ｂ－12）、同Ｈ群（Ｂ－13）、同Ｉ群（Ｂ－14）、同Ｊ群（Ｂ－15）
同Ｋ群（Ｂ－16）、同Ｌ群（Ｂ－17）、**羽根戸古墳群Ｎ群（Ｂ－19）**
同Ｏ群（Ｂ－20）、同Ｐ群（Ｂ－21）
羽根戸原Ｃ遺跡群（Ａ－９）、同池ノ下遺跡（Ａ－８）、同Ｂ遺跡群（Ａ－７）

続く古墳群は吉武遺跡群での円墳群（21基）や羽根戸および羽根戸南古墳群中に点々と見出される。何れにもせよ時期的に下るに従って扇状地先端部から山麓部へ群が移動する傾向にある。また古墳群の大半を占めるのは6世紀後半代以降の築造と考えられているものが多く、飯盛山の麓でも南から金武古墳群（147基）、羽根戸南古墳群（20基）、羽根戸古墳群（143基）、野方古墳群（18基）などが主要なものである。更に生活址では5世紀中頃を主要な時期として多くの掘立柱倉庫群・竪穴住居址が吉武遺跡群第2～4次調査で検出されたが、これらに伴って陶質土器・初期須恵器が数多く出土しており、他地域との文物の交換の激しさが窺える。また6世紀を前後する頃には重留地区で須恵器窯の操業が短期間行なわれている。

更に平野に面する6世紀後半以降の群集積では鉄精錬に伴う滓供献の事例が多くあり、鉄生産をめぐる集団の実態の追求が課題となっている。

歴史時代では吉武遺跡群第4～5次調査（圃場整備）で8世紀後半代～9世紀にかけての溝で区画された掘立柱建物群が確認され、関係土壙などより越州青磁、円面硯、八稜鏡などとともに瓦当類も多く出土し、寺院址と考えられている。また条里遺構と関連すると考えられる道路状遺構も周辺で確認され、怡土国への交通の要衝として地域的に整備されたものであろう。



羽根戸古墳群出土の装飾付器台
（伊勢神宮徴古館蔵）

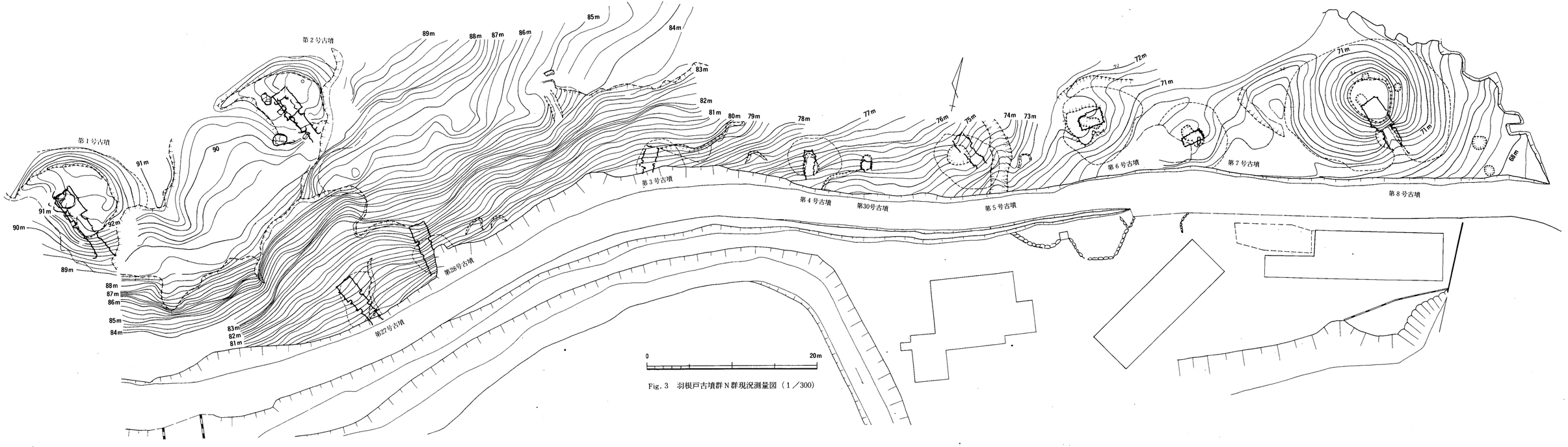


Fig. 3　羽根戸古墳群N群現況測量図（1／300）

Ⅲ．調査の記録

1．羽根戸古墳群Ｎ群の調査

概要　羽根戸古墳群は、叶ヶ岳山塊に連なる飯盛山北麓の谷野に位置する古墳群であり、本地域では南部の金武古墳群、北部の野方古墳群とともに群集積としては一大地域をなしている。

本群は、十郎川に注ぐ狭隘な渓谷群にはさまれた小丘稜に占地し、総数138基を数え、更にこれらはＡ～Ｐ群よりなる小支群に区別できる。支群は谷の奥まった部分からＡ群～５基、Ｂ群、４基、Ｃ群－２基、Ｄ群－12基、Ｅ群－14基、Ｆ群－４基、Ｇ群－24基、Ｈ群－３基、Ｉ群－３基、Ｊ群－２基、Ｋ群－４基、Ｌ群－５基、Ｍ群－22基、Ｎ群－29基、Ｏ群－２基、Ｐ群－２基の構成である。この中で墳丘・石室規模か他の群を抜いて大きいのはＨ群（３基）であり、本古墳群での盟主的位置を占めるものと考えられ、三重県伊勢神宮徴古館所蔵の子持碌と装飾付器台も当支群中いずれかの出土と考えられる。

ところで今回調査したＮ群は、福岡市文化財分布地図（西部Ⅰ）では26基となっているが、調査ではこのうち法面切土で影響を受ける第１～８号墳までの８基が最終的に対象となった。併し調査の進行につれて第２号墳の南裾部に２基（第27・28号墳）および第４号墳東側に１基（第30号墳）が新たに見付かり、Ｎ群の総数は現在のところ29基となったのである。以下では11基の各古墳について略述したあと、個別の成果について詳述することとする。

調査された11基の古墳は、標高が70～90ｍ程度の西から東へ伸びる細長い丘稜の南面に全てが営まれる。石室は第６・７号墳が他に比較して西側に開口するのに対して、殆どが南面する谷側に開口し、墓道もまた渓流の流路に沿ったものであったと思われる。」

第１号墳は、Ｎ群の最西端・頂上部に位置し、墳丘径約15ｍ、石室全長9.5ｍをはかる複室構造の横穴式石室を有し、羨門部に閉塞施設が残る。前庭部で供献精錬滓・土器類が出土した。

第２号墳は、１号墳の北東約30ｍに位置し、石室規模７ｍ以上の複式横穴石室を有する。前室玄門前部に閉塞施設を残す。

第３号墳は、２号墳の東側45ｍの丘稜裾部に位置する複室状横穴石室墳である。石室はいびつで、墳丘東裾で焼壁土壙を検出した。

第４号古墳は、第３号墳の東側18ｍの斜面に位置し、石室もかなりいびつである。羨部で耳環１個が出土した。

第５号墳は、第４号墳の東側約18ｍに位置する。正方形に近い石室プランと長い羨道を有す

る。石室全長4.6m程である。

第6号墳は、第5号墳の東側20m程に位置し、西南に開口する。石室プランは奥壁部がややひろくバチ形に開き、羨道の短い形式である。石室内からは原位置を保たないが多くの須恵器類が出土した。石室全長約2.8mである。

第7号墳は、6号墳の南東側15mに位置する。石室は、長さ2.5m程で、奥壁に向って緩くバチ形にひろく。本墳も第6号墳と同様の石室構造を有すると考えられる。

第8号墳は、第7号墳の東側20mに位置し、また複室構造の横穴式石室を有する。前室で馬具が比較的良好な状態で出土した。

第27号墳は、第2号墳の南側27mの斜面に位置する。石室は、プランが正方形に近い複室構造となる。

また第28号墳は、27号墳北東10mに位置し、同様の複室横穴石室である。

最後に第30号墳は、4号墳の8m東側に位置し、石室が他のものと比較して、一辺が1m程度の小型のものである。

(1) 第1号古墳

① 位置と現況（Fig. 3・4）

丘陵部延長160mの調査区のうち、海抜標高92mをはかる尾根最高部に位置する。北東部に隣接する第2号墳とともに墳丘部周辺は平坦で、人工的工作が顕著である。

石室は南面する谷側に開口するが、墳丘も南斜面に向かって大きく流出しているものと考えられ、南東側も崩壊が著しい。また北側は同様の斜面ながら墳裾部の残存が良好である。墳頂部は人為的工作によると思われる削平によって平坦となり、玄室天井石が露出していた。羨門部右腰石も若干露出しており、開塞施設は羨道部天井石との間数十cm程抜取られており、玄室への侵入は可能な状態であった。

② 墳丘（Fig. 5～7、PL. 4）

地山整形（Fig. 6）　古墳は、丘陵稜線の軸に直交する様に石室の構築がなされている。このため地山整形は、北・南側の急斜面より、稜線背部の東・西側に整形を加えることにより、石室掘方が用意となる平坦面を現出することに力が注がれている。掘方の施された平坦面の規模は南北14m、東西10m程であり、東側は緩い段をなす。

墳丘（Fig. 5・7）　墳丘は、北へ北東部分を除いて各部の遺存が非常に悪い。西側は殆ど墳丘盛土を残さず、岩盤が露出した状態となっている。

墳丘の構築はまず石室腰石裏側の掘り方部を行ない、次いで石室天井部を覆う盛土の順でな

されている。

掘方内の埋め方は、北側、東側で若干の違いはあるが基本的には基盤土とそれ以外のものを交互に投入してつき固める方法をとっている。北側では腰石下端と掘り方周壁とが接する部分に平石を投入し、次には掘り方上端部まで地山土である灰白色花崗岩バイラン土と灰褐色土とを交互にいれる。層厚はそれぞれ15～25cm程度である。また掘り方東側では、その上端部におかれた角礫の内面側を埋めつくす。墓壙掘り方は北側に比較して緩く、皿状となる。埋積は、

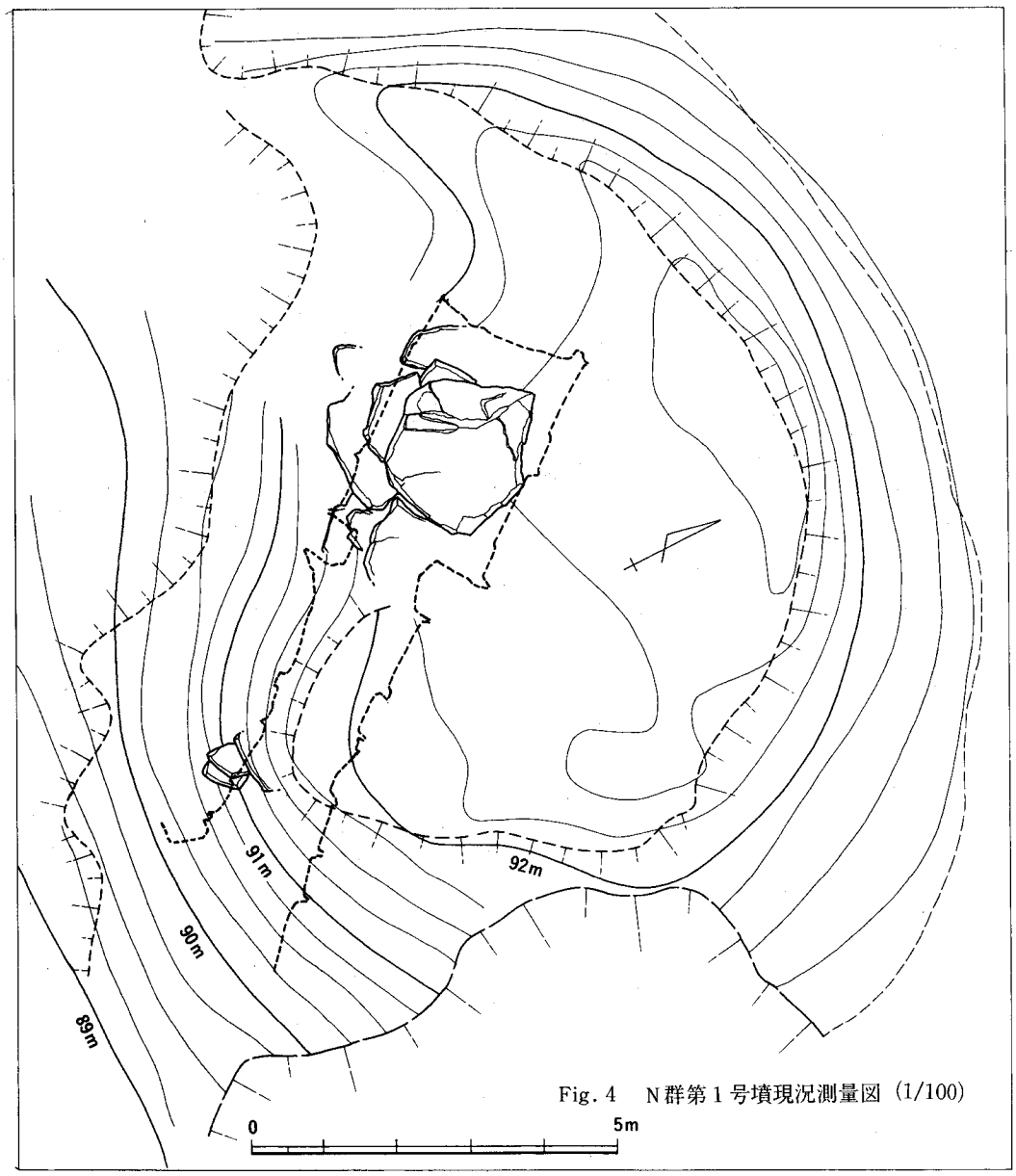


Fig. 4　N群第1号墳現況測量図（1/100）

順序が区別できるものの全体にしまりが認め難い。埋積土は最下層から暗赤褐色土・黄褐色土・黄灰白色土（地山バイラン土混）・暗褐色土・暗黄灰色土・赤褐色土・暗赤褐色土・灰褐色土・暗褐色土・黄灰色土・褐色土と続き上端部に至る。

続く墳丘部の築成であるが、前の墓壙埋積作業は、Fig. 7 にみるように東・北側では若干のちがいがみとめられる。東側では前の墓壙上縁部上端の角礫内側まで積まれた埋土上に暗褐色土（黄灰色土混）をのせ、更にこれに黄灰色土（灰白色バイラン土混）を積んでおり、石室天井石を覆うものと考えられる。またこれ以降は被覆された墓壙の外側に下面よりやや外手に傾斜気味に暗褐色土・暗灰褐色土の順に積む。またこれから墳裾にかけては地山整形面から直接に地山土（灰白色バイラン土）混赤褐色土・暗褐色土・炭化物混灰褐色土・暗灰褐色土・灰褐色土の順につみあげる。これは東側が地山整形によってできた有効な平坦面があることではじめて可能である築成法であろうか。

次に北側では地山面の非常な傾斜のために全体に埋積土は流下しているものと考えることができる。他山上には、暗褐色土・炭化物混暗褐色土・暗褐色土混暗褐色土・地山土（灰白色バイラン土）混色褐色土・暗黄褐色土・灰褐色土の順で積まれているが、墳丘の築成は墓壙内面の埋積以降、墳頂部から墳裾部を連続的に被覆する方法をとっている。

墳丘築成の上では特に墓壙上端面より以上の盛土は全体に亘ってしまりがなく、尾根上での築成とあわせて流出の容易な原因であろうか。

墳丘は、墳頂部の削平がみられるが、石室正面からの墳高 2 ～2.2m 程をはかる。また墳丘盛土は前記のように南西部の封土が殆ど流失しており、他にも東側でも崩壊のため遺存部分が少ないが、特に北側および南東部では特徴的である。北側では頂上部の削平されるが、現存部の墳頂部変換線から1.4m 程の落差をもって下端線が観察され、更に 1 m 程の平坦面をもって次の変換線へと移り、下降する。

また南東側では地山面の傾斜が急激なためか石室羨道部に移行するに従って等高線がつまってはいるが、北側と同様に二段構造をなす墳丘形が観察される。

墳丘形状は円形であるが、規模的には南北で16m 以上、東西長13m 以上と推定され、石室長軸線方向に比較的長いものであろう。

ところで墳丘盛土とは直接に関連をもつことは少ないが、墳丘築成の初段階である石室掘方内の埋積土には花崗岩バイラン土を基本とする埋土中に青灰色域は黄灰色粘土（八女粘土類似）が混入する場合がある。これは主に石室石材間の目詰め材として用意されたものであろう。

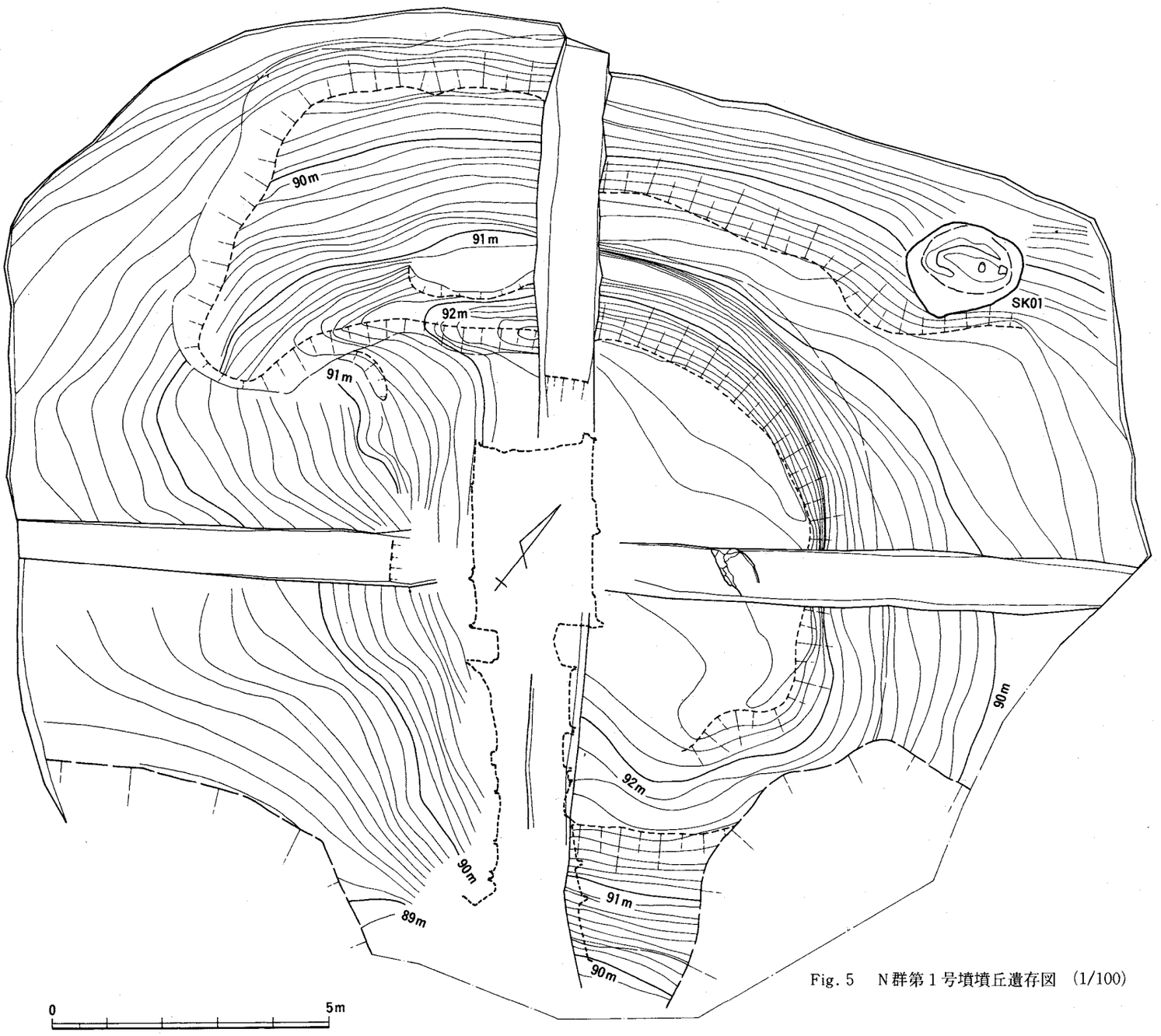


Fig. 5　N群第1号墳墳丘遺存図　(1/100)

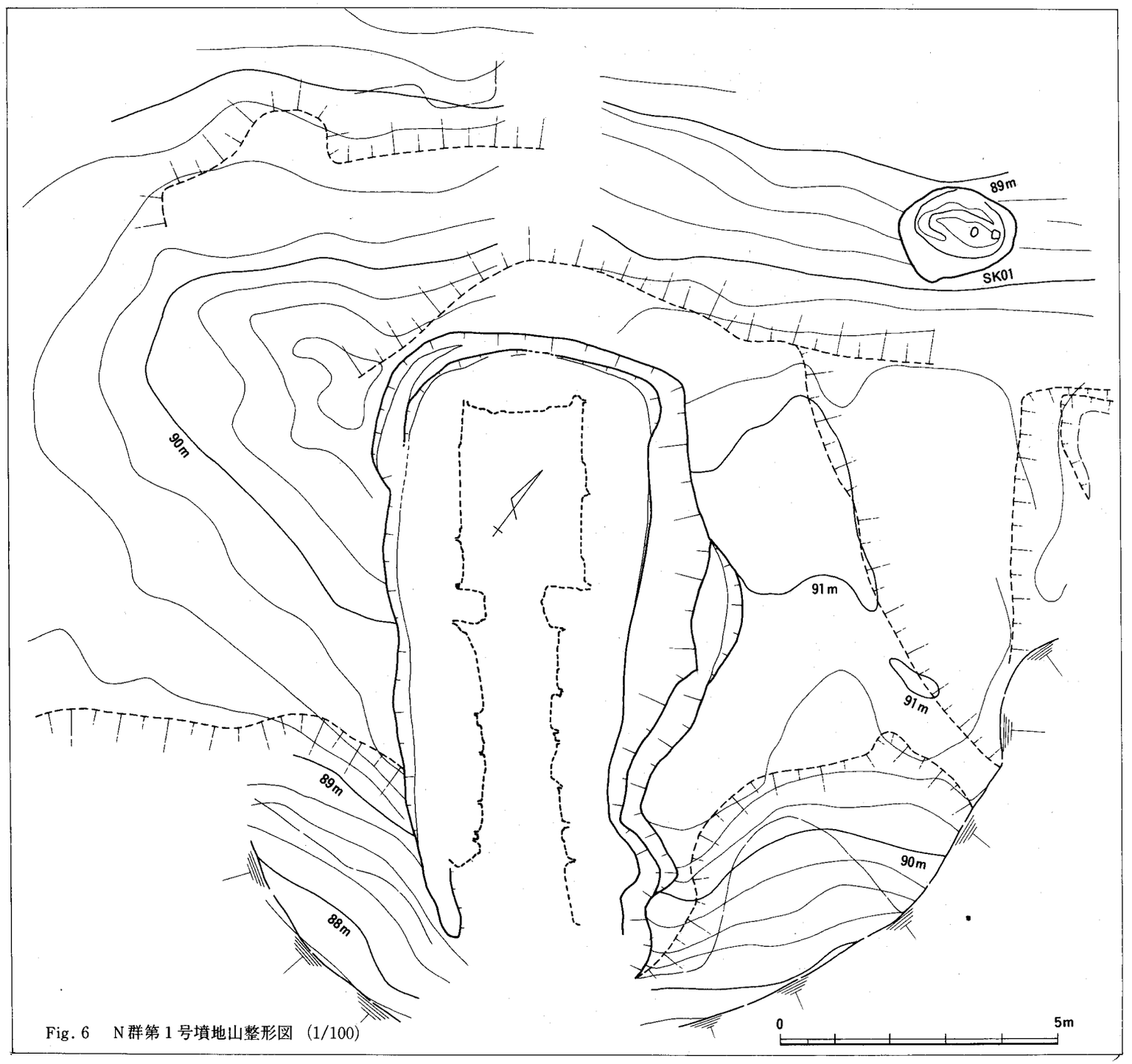


Fig. 6　N群第1号墳地山整形図 (1/100)

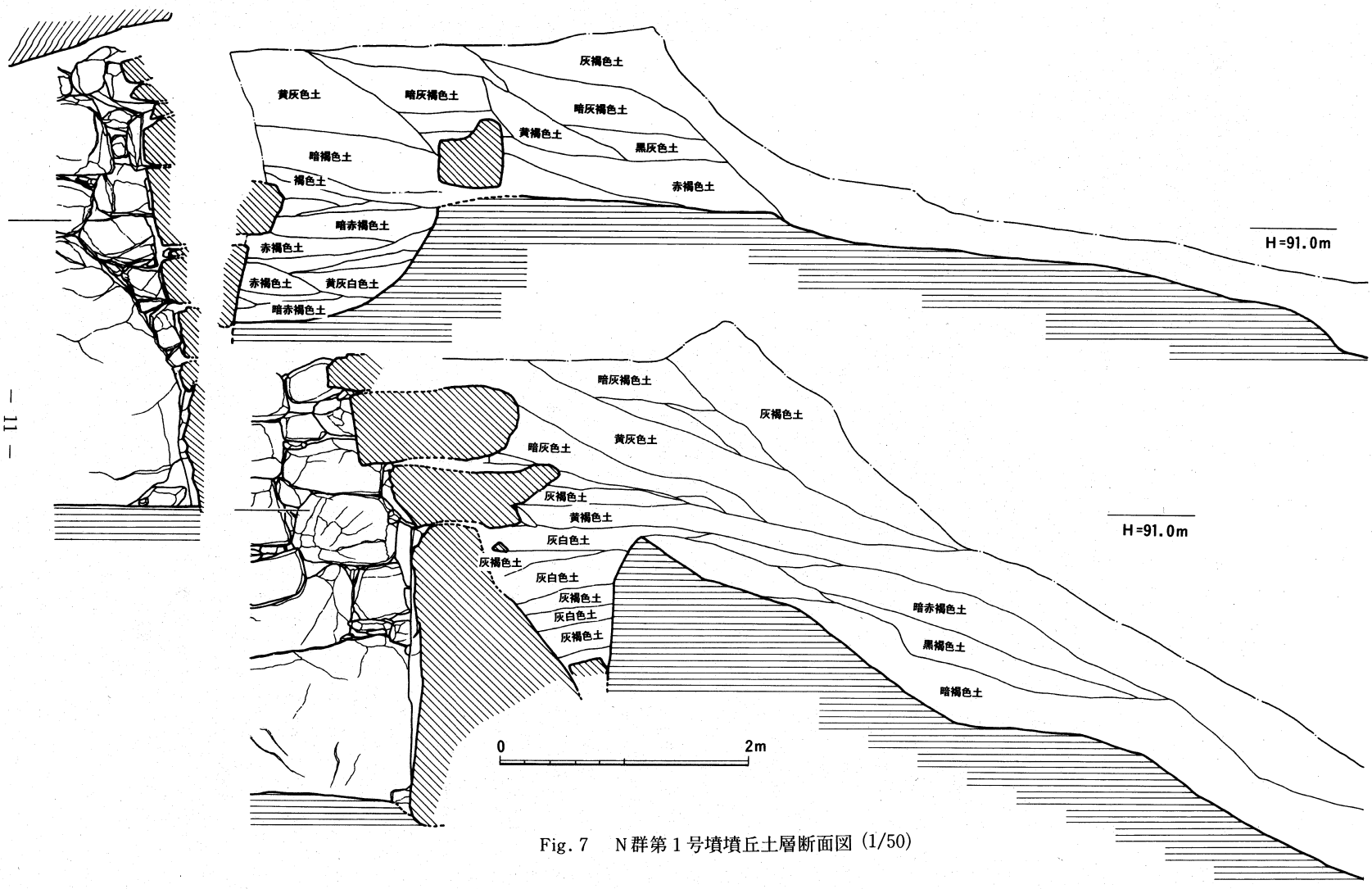


Fig. 7　N群第1号墳墳丘土層断面図 (1/50)

③　横穴式石室（Fig. 8～10、PL. 2～4）

第1号墳の埋葬施設は、主軸をN－38°－Wにとり、南東に開口する単室の両袖式横穴式石室である。天井部は玄室および羨道部の中位まで現存する。羨道部は天井石の現在部下に最終時の閉塞施設があり、天井石はほぼ旧状であると考えられる。

石室は、羨道部側がややすぼまる深い墓壙内に構築される。石室長は右側壁9.4m、左側壁で8.3mをはかる。玄室は平面形が整った短形をなし、狭長な羨道へと続いて、全体にシンメトリカルな構造である。

石室掘方　石室を収納する掘方は、石室石材がほぼ完全な状態で遺存しており、しかも大型で、移動には困難な点が多く、従って石材を撤去して石室構築の観察することはできなかった。また石室は奥壁部・側壁部とともに掘方の規模いっぱいに築かれているためここでは掘方の平面的観察にとどまるざるを得なかった。

石室掘方は、長方形をなし、奥壁部幅5.2m、羨度部幅3.5mとすぼまる。また全長は現在部で11.6mをはかる。

掘方作業は現存する石室部を全て収納する規模でなされているが、壁面の状態は必ずしも均一な形状とならない。掘方の北西～北側部分のコーナーでも壁は垂直な構造をとらず、数段をなして下降する。また東側の長辺部は不整備な段をなし、最も内側の掘方上端との比高が80cmを越えるものとなっており、これは、掘方後の石室構築石材の搬入作業と関連した結果である可能性もある。

また掘方は地山整形面からの深さが石室奥壁部で10m程であって、羨道部に向ってはやや上昇気味にその底面が整えられている。

玄室　玄室規模は、奥壁幅2.15m、左側壁長3.3m、右側壁長3.2m、天井高3.5mを測り、非常に整った平面形をなしている。

玄室内部は、過去の盗掘により床面の徹底した攪乱が行なわれ、本来石敷き床面であった事が壁側につみあげられた礫の集積から明らかであり、玄門部の梱石も失なわれていた。また左側壁部では、壁面より中央寄りに幅50cm、右側壁部で幅15cm、奥壁部で幅10cm程の溝状遺構上端線が各部に平行に見出されており、何れも腰石埋置の布掘りと考えられる。

石室構築は、腰石として奥壁が1枚、左・右の側壁が2枚づつの組み合せで、これに左・右でサイズの異なる柱状の転礫をたてて袖石をしている。

奥壁は、腰石に最大幅2m、高さ2.1m以上、厚さ90cm程の巨大なおむすび形をした石材を

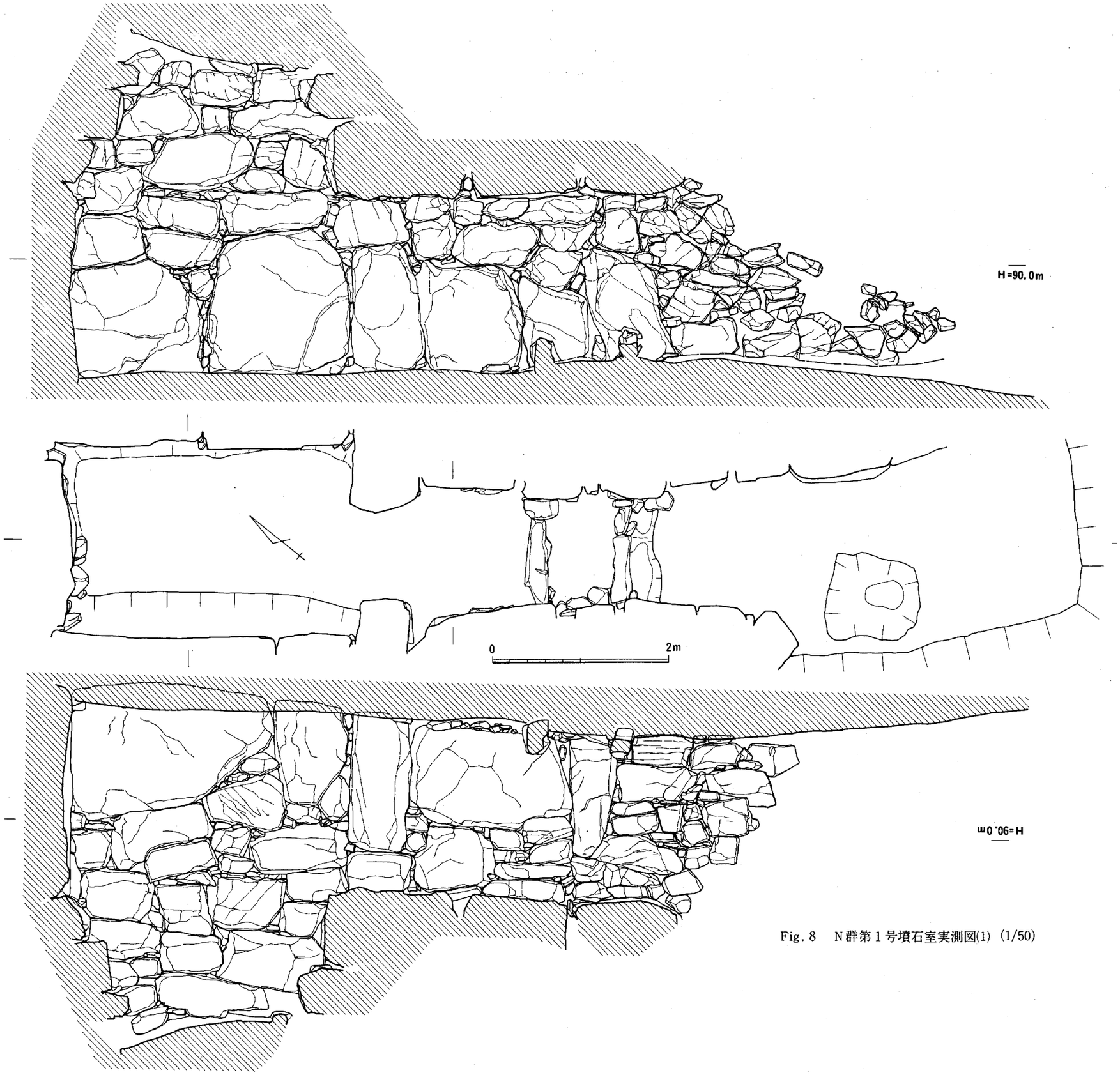


Fig. 8　N群第1号墳石室実測図(1)（1/50）

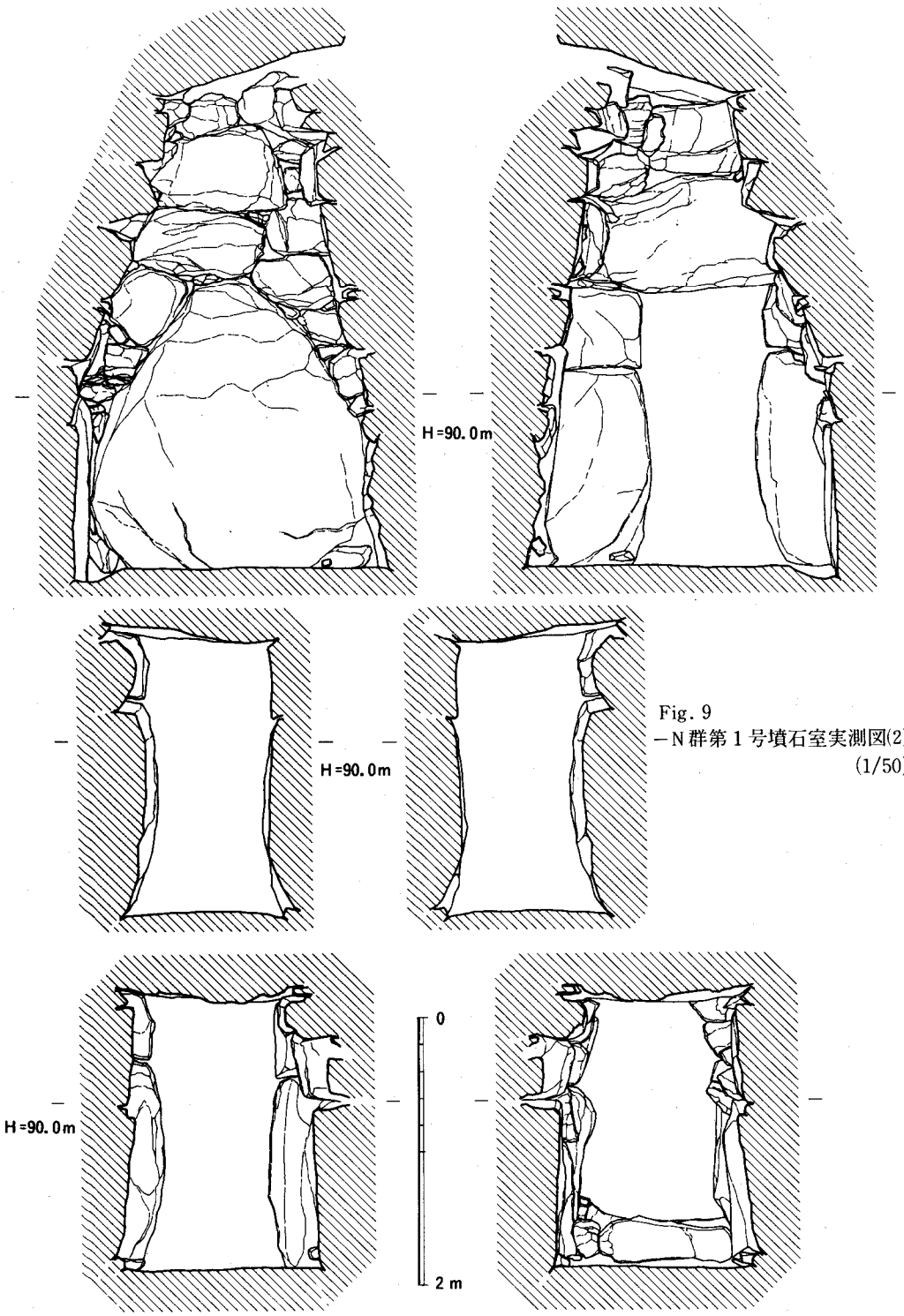


Fig. 9
－N群第1号墳石室実測図(2)
(1/50)

使用し、頂上部までの左右空間を埋めた後に三段程小口部をせりもたせに積み天井部に至っている。

次に左側壁は、腰石２枚である。奥壁側より第１石は最大幅2.3m以上、高さ1.6mの石材を据え、これに接して幅8.5cm、高さ1.15m程の比較的小型の転礫を使用する。これ以上の壁構成は長さ70～130cm、幅40～50cm程の石材をせりもたせに積みあげる。石材の積み方は横方向に目筋の通る所謂煉瓦積みに近いものである。

右側壁もまた腰石２枚である。奥壁に近いものは最大幅1.6m以上、高さ1.35m以上厚さ1.1m程度の転礫最大面を内面に向けて据える。また玄門に近い腰石は幅1.8m、高さ1.7m、厚さ90cm程の大型扁平礫を使用している。壁面は左側壁の腰石上面とほぼ同一のレベルから小口をせりもたせ積みにする。腰石より上部の使用石材は、長さ1.3～0.8m、幅0.4～0.5m程の花崗岩角礫であり、積み方は横に目筋の通る所謂煉瓦積みの方法に近い。

また玄門では、左袖石が幅0.7m、高さ1.6m、石袖石で幅0.8m、高さ1.45m、厚さ1.5m程の石材を使用している。玄門部天井は左右袖とも更に一石を積み、この上に長さ1.5m、幅２m、厚さ0.9m以上の石材を積む天井石としている。なお玄門部の天井高は2.1m前後をはかる。

次に玄室内では、副葬遺物が原位置を保って出土したものは殆どなかった。出土した遺物は須恵器・土師器・耳環・鉄鏃・馬具などであり、図示したものが全てに近い（Fig.15～17）。須恵器は、坏蓋６点（Fig.15、00058・00031・00042・00041・00045・00043）、および坏身３点（Fig.16、00090・00046・00048）である。また土師器は、甕１点（Fig.16、00091）である。耳環１点（Fig.17）の他は図示に耐えなかった。

羨道　左側壁の一部を除いて、殆ど全てが遺存すると考えられる。側壁は右側で６石、左側で５石の腰石遺存し、玄門端よりほぼ６m程の延長と考えられる。左・右壁ともに玄室の場合のように腰石石材の面が直線的に揃わず、粗雑な感じを受ける。

床面は玄門部より羨道に従って上昇し、最も羨門寄りの梱石（第１梱石）の外側で段をなす。梱石は、失なわれたであろう玄門部のものを加えると羨門側より第１・２・３と三ヶ所におかれる。

また側壁部では左・右壁とも腰石以上は長さ0.5～１m、高さ0.3～0.5m程の石材を横に目筋が通る様に積みあげる方法を取るが、左側壁では羨門部に近い第１梱石を第２梱石との間に幅50cm、高さ1.4m以上の石材を恰も袖石の如く立てて使用している。このことは右側壁には顕著でないが、単純な石材使用例とは理解し難いものである。

羨道部では第３梱石を根石として前部に閉塞施設があり、第２梱石および第１梱石と考えられる玄門部までには、それぞれ須恵器・土師器・鉄器類の副葬が認められた。また閉塞施設の外側部分の前庭部は、緩かに南に傾斜するが、この部分のやや西偏りに長・短が１×0.9m、

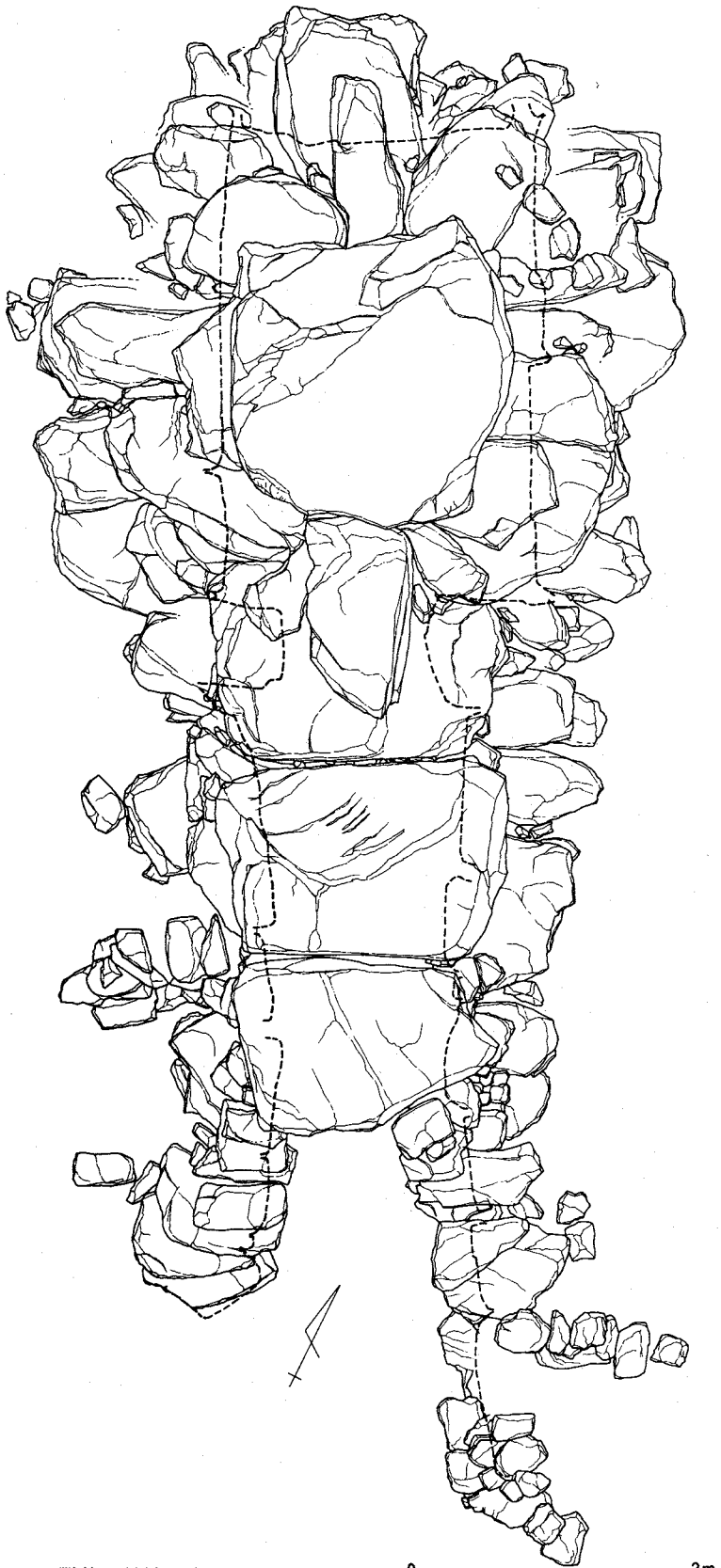


Fig.10　N群第1号墳石室実測図(3)　(1/50)

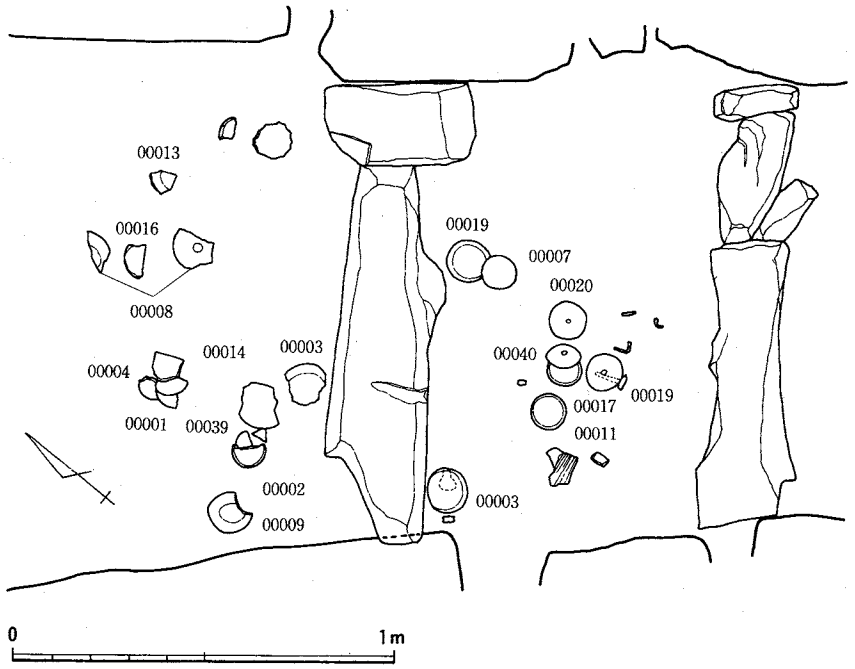


Fig.11　N群第1号墳遺物出土状況実測図 (1/20)

深さ10cm程の浅い土壙が掘られていた。土壙中からは、精錬滓と考えられる小鉄滓と土師器ミニチュアが出土した。

第2梱石・第3梱石間で原位置を保ったものは須恵器坏蓋（00003、00018、00020、00040)、同坏身（00007、00011、00017、00019）および馬具細片数点、鉄鏃茎片などである。

また第2梱石より玄門間では、須恵器坏蓋（00002、00004、00005、00006、00008、00013)、同坏身（00001、00009、00014、000016、00039）である。(Fig.11)

他には原位置より遊離した遺物のうち特に須恵器蓋坏類の出土が目立っている。羨道で出土した鉄器類は細片で銹化が著しい。また玄室・羨道とともに土師器の出土量は極めて少量にとどまっている。

墓道　羨道部より続く墓道は、羨道延長上が急激な斜面となり南側の谷部へ下降するため、正常な方向には認め難い。羨部部端は前述の様に床面が北から南へ緩く傾斜する。これは直線距離3mで約40cm程下降するもので、而も傾斜方向は右室軸線に対して西偏する点で墓道は西側斜面に折れるものと考えられる。

閉塞施設（Fig.12）　墓道よりの第1梱石を根石としてこの外側に設けている。現存で床面より1.3mを残し、残存する頂上部は平坦面をなしている。羨道部でのこの部分の天井高は1.9m

程であるのでほぼ60cm程破壊されているものである。

位置は羨置側が石室奥壁より6.1m、墓道側が同点から7.8mのところにあたり、延長は1.7mにおよぶ。また幅は当然に同位置の羨道部床面幅員を最大とし、羨道側で1.1m、墓道側で1.3mをはかる。

閉塞施設の構築は、羨道側が第3梱石を根石として下部に比較的大形の角・転礫を使用し整然と積むのに対して、墓道側は比較的小形の転・角礫を弱い傾斜で乱雑に積みあげているといえる。

羨道側石材の積み方は横に目筋の通る整然としたもので、上部に従って材小口部を引込め、強い斜面でなされる。

なお、根石となった第3梱石の墓道側40cm程の部分が段状をなし、床面が上昇するがこのことが閉塞施設の位置関係と何か関連する可能性がある。また閉塞施設は実測図作成の折に積み変えなどの再度の利用の状態が無いか精査したか、これは認められなかった。

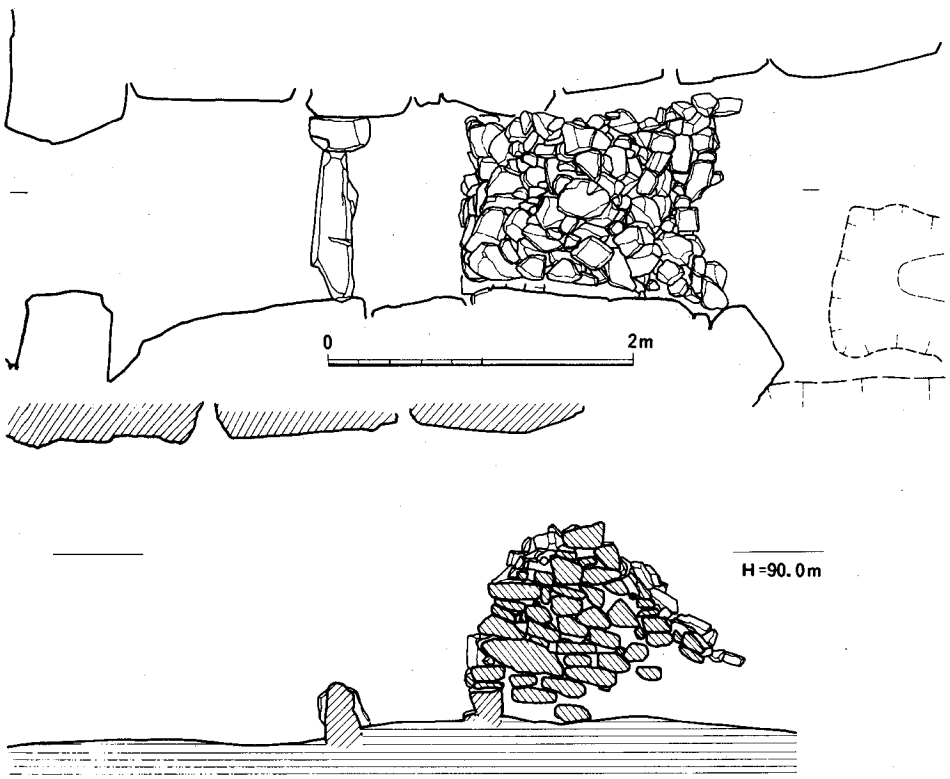


Fig.12　N群第1号墳閉塞施設実測図 (1/50)

④　出土遺物（Fig.13～17、PL.45～51）

出土遺物のうち玄室（Fig.15－00058・00031・00042・00041・00045・00043、Fig.16－00090・00046・00048・00091、Fig.17）、前庭部（Fig.16－00089・00094・00093・00085・00096・00050・00055～00057・00086・00103）および墳丘北側裾部（Fig.16－00095）を除く他は全て羨道部出土の土器類である。

以下では紙面の制約上、図示した遺物類に十分な説明を加えることは困難であるが、可能な限り個別について触れることにしたい。

墳丘部出土遺物（Fig.16）

甕（00095）　胴部を欠失するが、緩く外開する口縁は端部が肥厚する。胴部は外面格子タタキ後に横ナデで、内面に僅かにあて具痕が残る。器色暗赤灰色を呈し、口径16cm（復原値）を計る。

前庭部出土遺物（Fig.16）

a. 須恵器（同図00089・00094・00093・00085）

壺（00094）　口縁部のみの小破片である。外方に開く口縁端部に２条の鋭い三角状突帯を廻らし、この下部に櫛歯状工具による刺突文を施す。器色灰白色を呈し、口径10.8cm（復原値）を計る。

高坏（00093・00085）　00093は脚端部のみの破片である。00085は無蓋高坏で、浅い坏部に細い中空の脚を付す。脚部および坏部には各々２・３本の沈線を施し、坏部底付近はカキ目となる。器色灰白色を呈し、口径9.5cm を計る。

脚台（00089）　上部は不明であるが脚裾部が広く接地する。器色は淡い赤褐色を呈し、脚端径7.2cm を計る。

b. 土師器（同図00096・00050・00055・00056・00057・00086・00103）　土師器は何れも実用品と考え難い小型のものばかりであるが、これらは高坏形（00096・00086・00103）と丸底壺に脚台を付したもの（(00050・00055・00056・00057）とに区別される。器色は何れも赤褐色を呈し、脚部は縦のヘラ削りが加えられる。尚00054の脚台付丸底壺には黒色顔料が塗布されている。

玄室出土遺物（Fig.15～17）

a. 須恵器（00058・00031・00042・00041・00045・00043・00090・00046・00048）

坏蓋　蓋は口縁内面にかえりのないもの（Ⅰ類）とかえりを有するもの（Ⅱ類）とに区別できる。

Ⅰａ類（00058）　中央がやや窪む天井部にやや外開きの口縁を有する。天井部の調整はナ

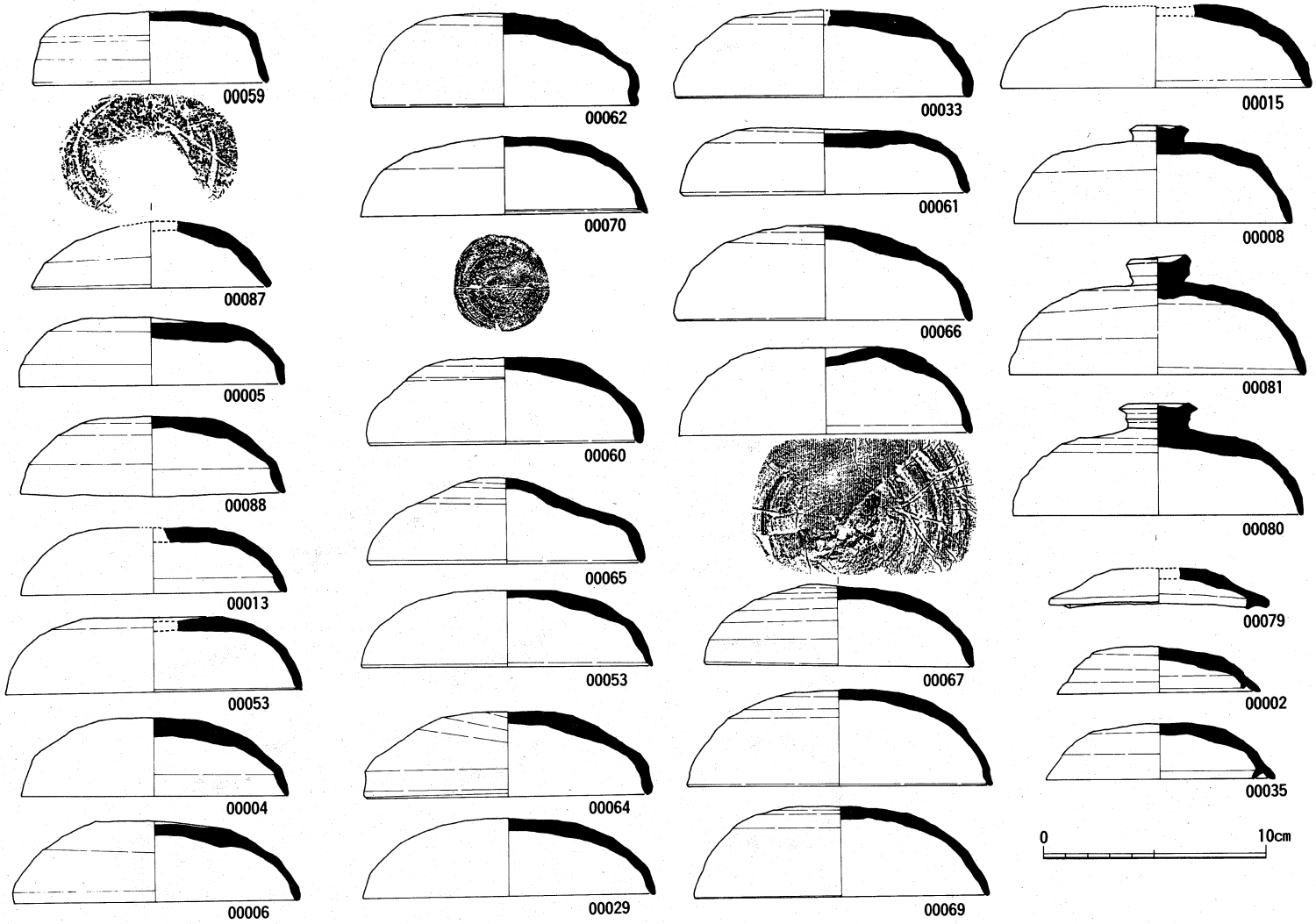


Fig.13　N群第１号墳出土遺物実測図(3)（1/3）

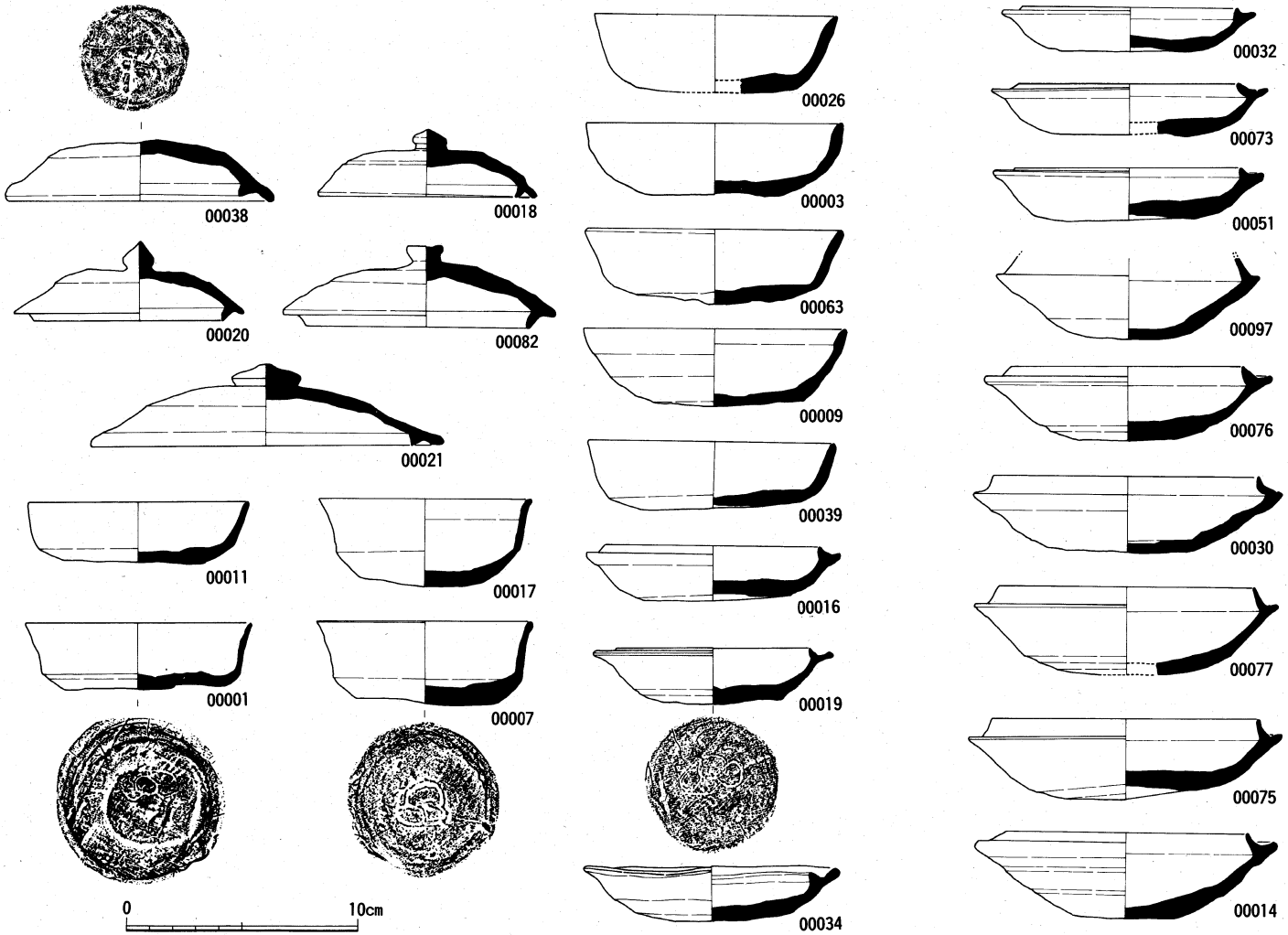


Fig.14　N群第１号墳出土遺物実測図(2) (1/3)

デ程度で粗い。暗灰色を呈し、口径10.3cm、高さ2.7cm を計る。

Ⅰb類（00031・00042・00041）　天井部がやや平らであり、ヘラ削りの面は小さく、口縁端部をほぼ丸くおさめるものである。口径12.4～13.6cm、高さ3.6～3.8cm を計る。

Ⅱ類（00045・00043）　器高は低く、口縁部内面のかえりは、端部よりやや低い位置にある。各々口径8.2・9.6cm、高さ2・2.2cm を計る小型品である。

坏身（00090・00046・00048）　00090を除けば2点の坏身がある。00046は受部が斜上方に伸び、立あがりは内傾化がいちじるしく、器高も低い。体部外面の½程ヘラ削りを加え、他は横ナデである。口径10.6cm、器高3.3cm をはかる。00048は薄手造りで、低い立あがりは内傾度が弱い。底部外面の½程にヘラ削りを加え、他は横ナデである。器色暗灰色を呈し、口径11.6cm（復原値）を計る。

b. 土師器（00091）

甕　直立気味に外方に開く口縁を有し、器面調整は主に内外面ともに横位のヘラ研磨である。器色赤褐色を呈し、口径16.4cm を計る。

c. 装身具（Fig.17）

耳環　器外面に金箔の痕跡を残す。突き合せ部がひずみ、内径で0.85～1.05cm を計る。また断面径は2.5～3mm である。銅胎。

羨道部出土遺物（Fig.13～15）

羨道部出土遺物は須恵器蓋坏類を主としているが原位置を保つものは全く無かった。

a. 須恵器

坏蓋（Fig.13、Fig.14－00038・00020・00018・00082・00021）　蓋は口縁部内面にかえりをもたない通常のタイプ（Ⅰ類）とⅠ類の天井部につまみを付するもの（Ⅱ類）、及び内面にかえりをもつもの（Ⅲ類）が区別される。Ⅰ類は更に形態から4類に細分できると考えられる（Ⅰa～Ⅰd類）。またⅢ類はつまみの有無で2類に区別される（Ⅲa～Ⅲb類）。

Ⅰa類（00059）　玄室内出土のⅠa類蓋と同一である。口縁部が外方に開き、全面横ナデである。暗灰色を呈し、口径10.4cm、高さ3.3cm を計る。

Ⅰb類（00087・00053・00061・00069・00015）　天井部より口縁端部まで殆ど変化なく移行するもので、天井部の削りは小さく、口縁端部を丸くおさめる。口径10.8～14cm、高さ3～4.1cm をはかる。

Ⅰc類（00005・00088・00013・00004・00062・00060・00065・00064・00029・00033・00067）　蓋類では最も多いタイプで全体的に天井部が分厚く、口縁部が肥厚し、端部で屈曲して断面がくちばし状となる。法量的には口径12～13.5cm、高さ3.5～4cm を計る。

Ⅰd類（00006・00070・00053・00066・00027・00068）　全体に薄手造りのものが多く、

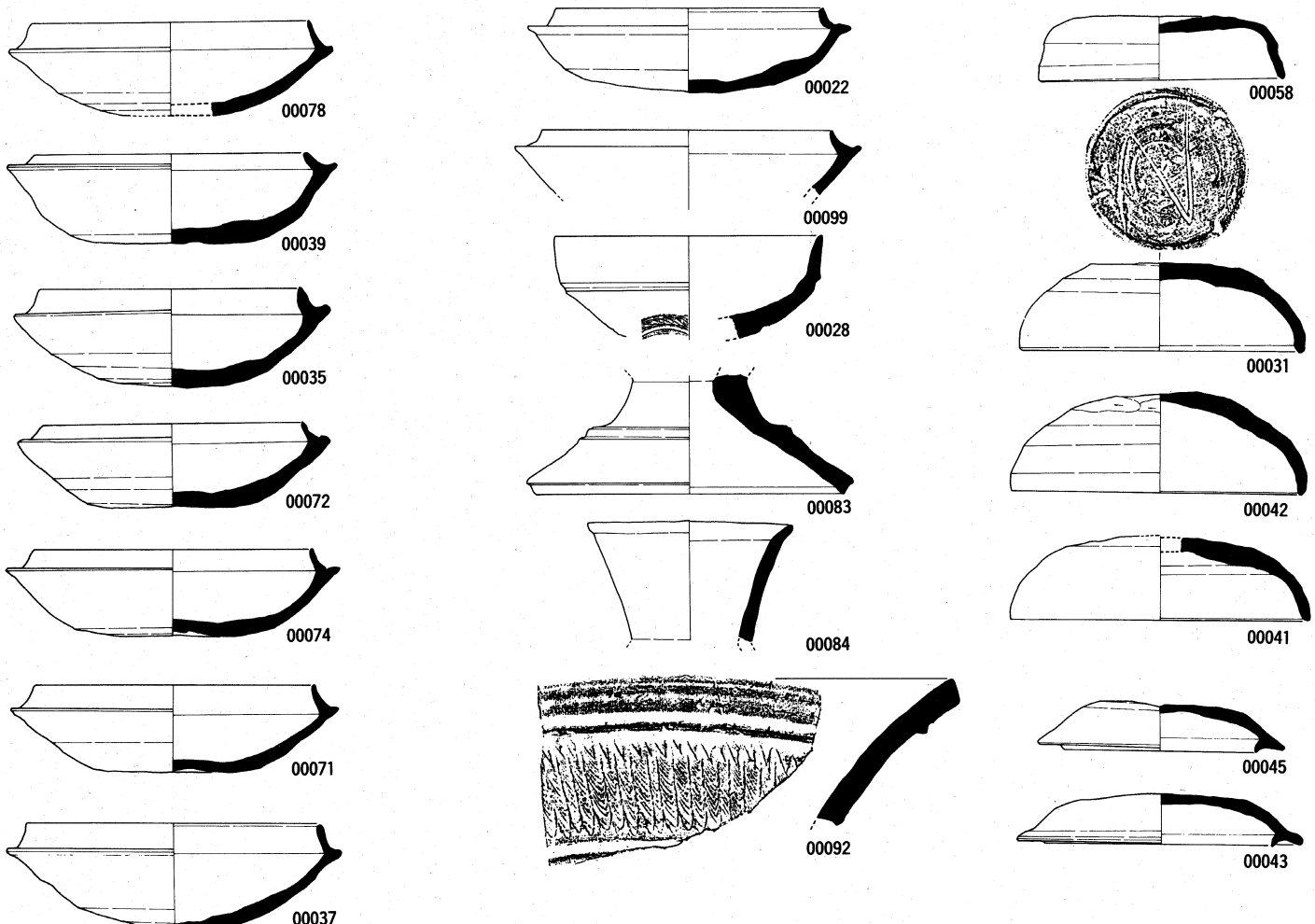


Fig.15　N群第１号墳出土遺物実測図(3)（1/3）

丸味をもった天井部からシャープな口縁端部へと移行する。口縁端部は内面を斜めに調整し、稜を持たせている。口径13～13.8cm、高さ3.5～4.3cm の範囲にある。

Ⅱ類（00008・00080・00081）　蓋Ⅰｂ類の天井部に低い擬宝珠つまみを付す蓋である。つまみ内面は窪み・端部が尖る。天井部の½程に回転ヘラ削りを加える。口径13cm 強である。

Ⅲａ類（00079・00002・00035・00038）　口縁内面にかえりを有し、天井部につまみを持たない。何れも小型品で口径９～11.6cm、高さ1.6～2.6cm の範囲にある。

Ⅲｂ類（00081・00020・00082・00021）　所謂つまみの断面が菱形をなす宝珠つまみを持つものとやや退化して低い擬宝珠つまみを付すものとがある。また口縁端部よりかえりが低い位置にあるものとほぼ同一レベルに位置するものとがあって、つまみの形とは符号しない。

坏身（Fig.14・15）　身はその形態から立あがりを持たない坏類（Ⅰ類）と立あがりを持つ通常の坏類（Ⅱ類）とに区別できる。Ⅰ類は口縁部の形態により更に２類が区別される（Ⅰａ・

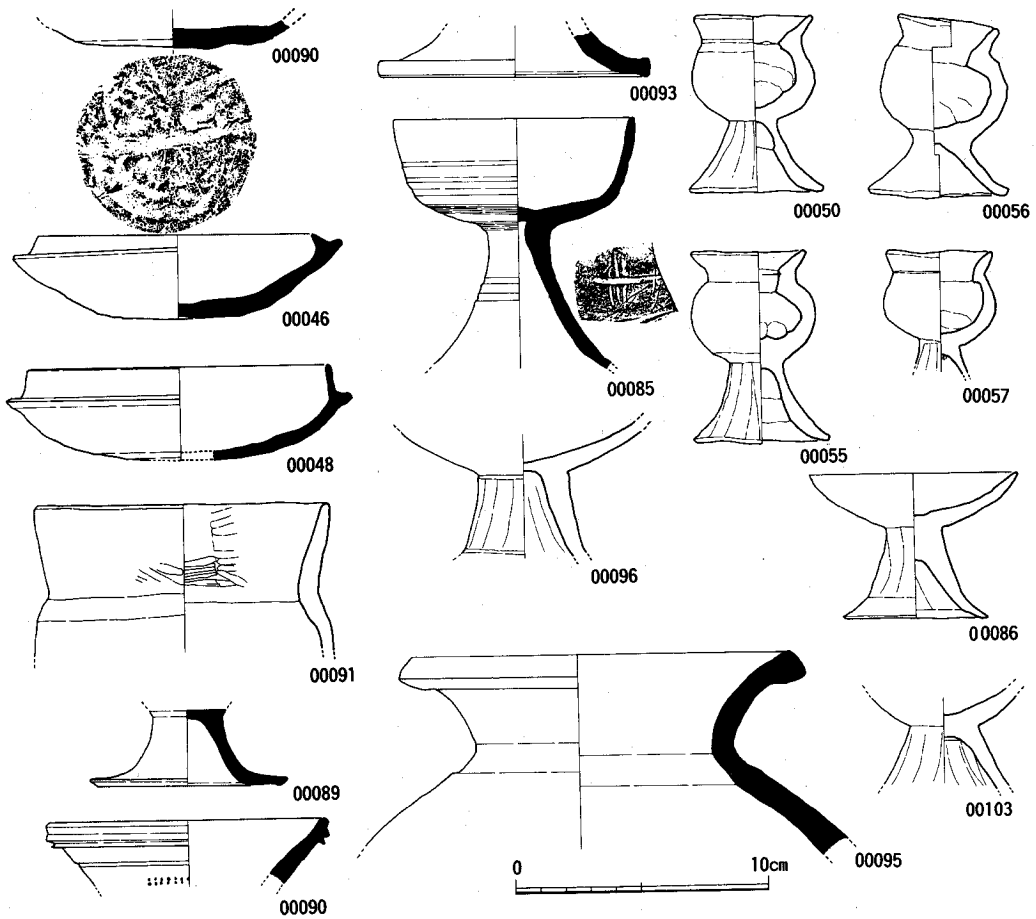


Fig.16　Ｎ群第１号墳出土遺物実測図(4)（1/3）

Ⅰb類)。またⅡ類は立あがり・受部の形態から4類に細分が可能と考えられる。

Ⅰa類（00001・00017・00007）　底部外端にヘラ削りを加え直線的になし、口縁端部を外方に引出す。外底部に類似のヘラ記号をもつ。

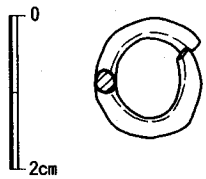


Fig.17　N群第1号墳出土遺物実測図(5)（1/1）

Ⅰb類（00011・00026・00003・00063・00009・00039）　体部が丸味をもち、口縁は緩く外方に開く。

Ⅱa類（00016・00032・00051・00076・00014）　全体に器高が低く，受部に比較して立あがりが殆ど痕跡的である。

Ⅱb類（00019・00034・00073）　器高が非常に低く、受部が斜上方に伸びて立あがりが逆に低い位置にあるもので、立あがりの形態はⅡa類と類似する。

Ⅱc類（00030・00022）　器高が低く、内傾度の強い立あがりが中途で折れるものである。

Ⅱd（00097・00077・00078・00039・00035・00072・00074・00071・00037・00099）　坏類の中では器高が最も高く、立あがりも低く、内傾度も強いが、よく整えられ、坏本来の形態をとどめるものである。

高坏（00028）　坏部のみの破片である。器色暗灰色を呈し、口縁部および胴部中位に沈線を廻らし、外面下半部は回転ヘラ削りを残し、工具端部の接触痕がみられる。他は横ナデである。暗灰色を呈し、口径11.4cmを計る。

脚台（00083）　直口壺の脚台か。脚部中位に低い段をもつ。脚端部径13.2cmを計る。

壺（00084）　器色黒灰色を呈し，内外面ともに横ナデである。口縁端部を僅かに外方に引出す。口径8.6cmを計る。

不明土器（00092）　外面に2条の三角状突帯を廻らし、この間を振幅の小さい波状文で埋める。内面横ナデである。器色灰白色を呈し、口径55cm（復原値）となる。

(2) 第2号古墳 (Fig.18～27)

① 位置と現状 (Fig.18)

第2号墳は、N群西端部に近い尾根線上に位置する。第1号墳とは現状の墳丘裾部で約15mの距離をなし、この北東部にあたる。

墳丘部周辺は、第1号墳と同様に平坦化され、北側部分の一部を除いて墳丘部は壊滅的破壊を受けている。

また石室天井部もまた露出、玄門部の二個の天井石を除いて、原位置を移動するか或は石室西側斜面に散在していた。現墳丘との高さはほぼ2mをはかる。

更に、前室部袖右付近にある閉塞施設は天井近くまで遺存するが、第2号墳の明らかな破壊は昭和43年頃に行なわれた石材採取によるところが大きい。

② 墳丘 (Fig.19・20、PL.5)

第2号墳もまた著しい破壊によって墳丘構築の地面面の整形作業については詳細を知り得なかったが、立地上第1号墳と類似する地山整形、つまり石室構築に必要な最低の平坦面の確保に力点のおかれたものであったと考えられる。

整形基底面は、固くしまった花崗岩バイラン土であり、かなりの凹凸がみられる。

墳丘は各部で削平・流出が大きいと考えられ、原墳丘の現存値は東西裾部で約11m、南北では、北側墳丘裾部から羨道部まで11mをはかる。

墳丘築成は、大きく二段階に区別される。

第1段階は右室掘方内の埋積である。東西墳丘セクション（北壁）および北側墳丘セクション（Fig.20）によって観察すれば、何れも掘方上端面までの丁寧な埋積作業である。

東側では、緩（下降する掘方の底面に淡灰褐色土を約20cmの厚さにいれ、更にこれ以上は淡赤褐色土（灰褐色土混）・淡灰褐色土・淡赤褐色土・淡灰褐色土と交互に投入しており、よくしまっている。特に上端部近くは層厚5cm程度で水平な縞状構造をなす。

また西側では比較的垂直に近い掘方底部には腰石と壁面間に幅40cm程の平石が投入れさ、これを基底として淡赤褐色土を基調とする埋積が掘方上端までなされる。埋積層はほぼ水平構造をなし、下半部は層厚20cm程度で、上半部は10cm程度の薄層であり、石室裏面を意識した丁寧な作業である。

北側墳丘では同様に掘方上端面まで淡赤褐色土を基調とする層厚10cm程の水平な埋積層が確認できる。

続く第2段階の墳丘築成は、盛土作業の裾部が伸び、工程を重ねるに従って現墳丘裾部に近

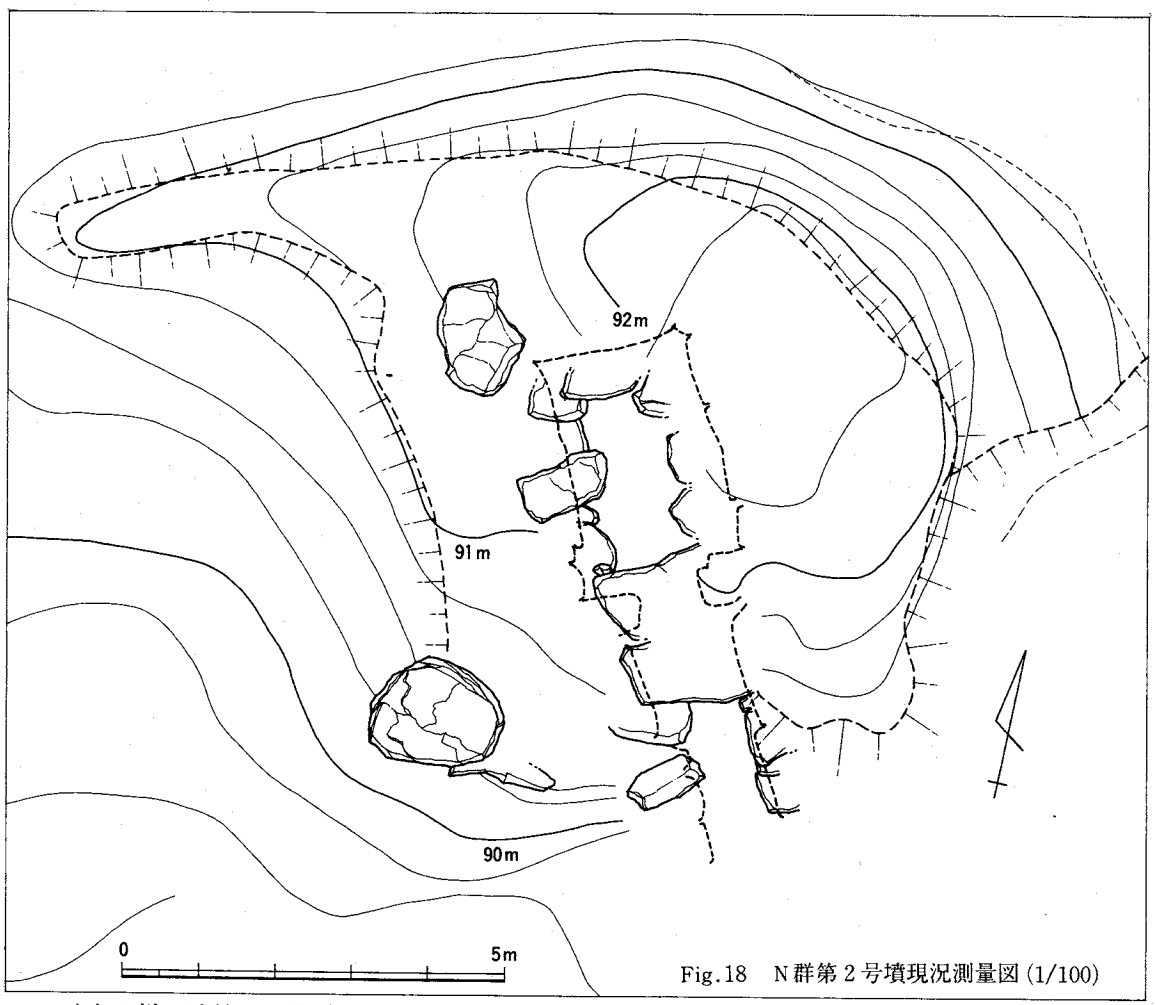


Fig.18　N群第2号墳現況測量図(1/100)

くなる様に連続して被覆がおこなわれている。

ここでも石室外面部は何れの工程でも意識的に十分な手が加えられていて、特に上部には層厚5㎝程のよくしまった部位がみられる。

墳丘東側では石室外面部を除いて盛土の積み方は緩やかで、しまりがなく、淡赤褐色土を基調として、基盤土である白色バイラン土との互層となっている。

また墳丘北側でも同様な築成方法であり、基調となる埋土も花崗岩風化土である淡赤褐色土である。

以上の様に第2号墳々丘は遺存状況から明らかな原墳丘規模は知り得ないが、第1号墳規模を越えることはないと考えられる。

また墳丘築成の盛土には基本的に基盤土（白色バイラン土および淡赤褐色粘質土）が採用されており、第1号墳とも共通する方法である。

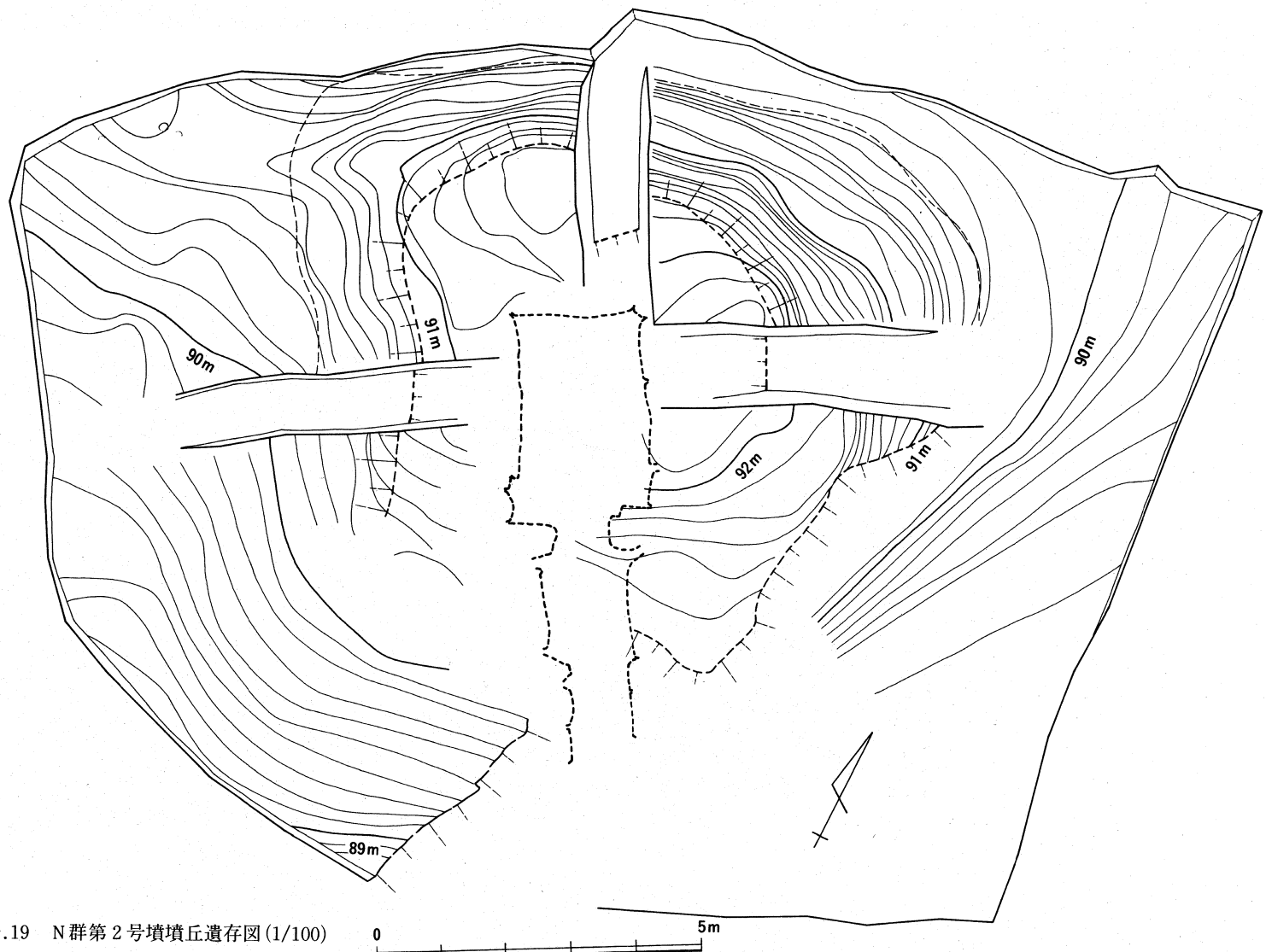


Fig.19　N群第2号墳墳丘遺存図(1/100)

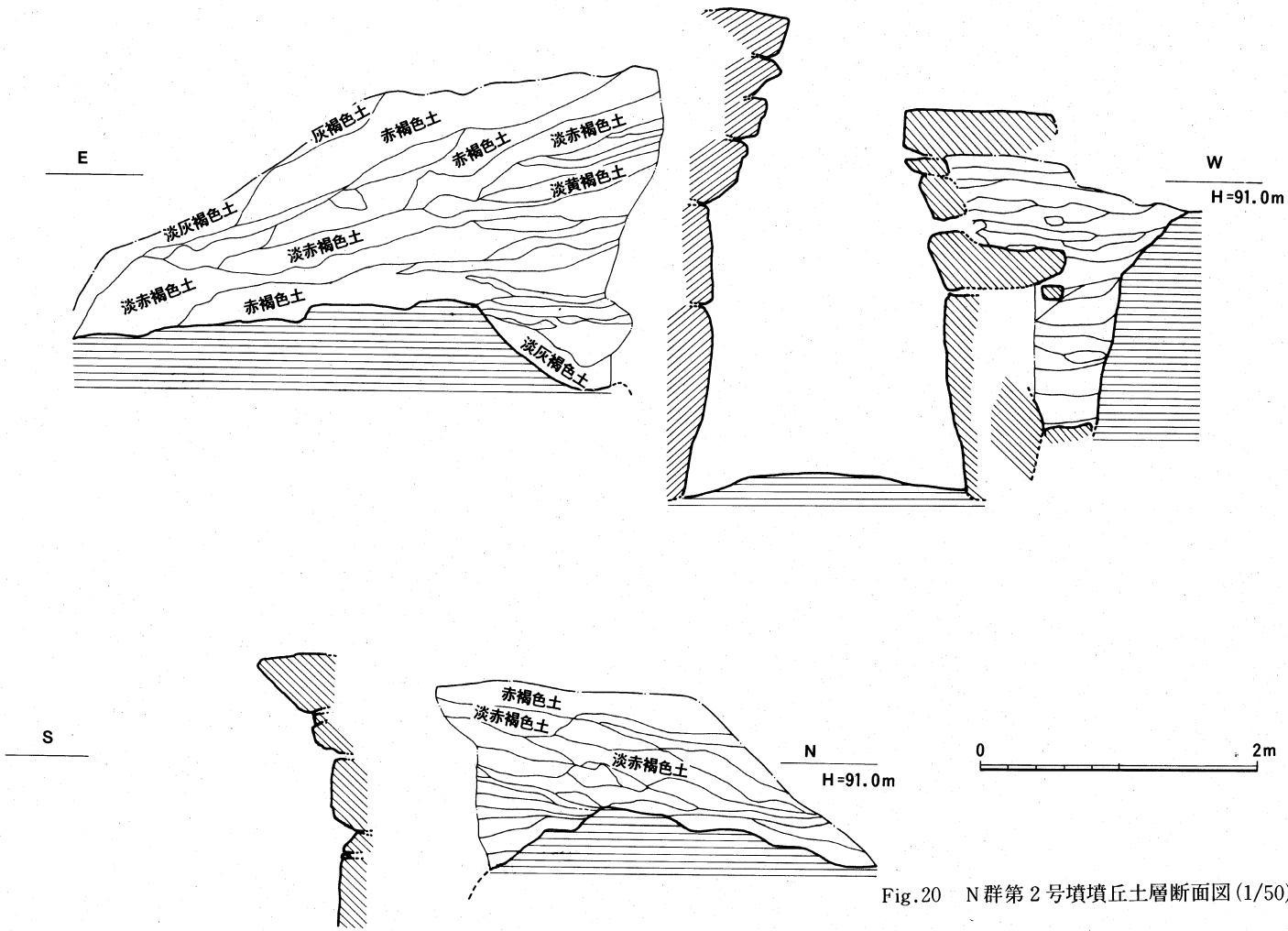


Fig.20　N群第2号墳墳丘土層断面図(1/50)

③　横穴式石室（Fig.21～23、PL.５・６）

第２号墳の埋葬施設は、石室主軸がＮ－26.5°－Ｗをとり、ほぼ南側に開口した複室の両袖型横穴式石室である。

後室および羨道部天井は石材採取のため既に原位置を移動していた。

後室は左側壁長3.2ｍ、右側壁長３ｍ程の短形をなす。また前室は左側壁で1.7ｍ、右側壁1.75ｍをはかり、中位より羨道側に閉塞施設があり、天井石も現存する。これに1.5ｍ程の短かい羨道がつく。

石室は全体に大型の石材を使用しているにも拘らず、よく整えられており、シンメトリカルな構造をなしている。

石室掘方　石室を収納する掘方は、丘陵長軸線に直交し、地山整形面より掘り下げられている。

規模は、北西－南東の残存長約10ｍであり、長短辺の隅部がいびつで両辺部の不揃いな長方形をなす。

奥壁部では上端部長５ｍ、左辺長9.3ｍ、右辺長９ｍをはかるが、各辺ともに壁は単純な一段構造をなさず、複数の段をなしている。

また長辺部では右辺部がよく直線的に掘られているのに対して、左辺部は縁辺部の出這りが多く、羨道部に従っていびつである。このことは掘方の重点が第２号墳の場合も玄室側によりかけられていると考えられようが、第１号墳に比較すると作業に粗雑さが感じられる。なお石室掘方の深さは、奥壁部で約1.7ｍ程度であり、羨道部に従ってこれを減じる。

玄室　本墳石室は閉塞施設のある延長1.7ｍ程度の部分の側壁部が袖石構造をなし、羨道部と明確に区別できる点でこれを前室として他の奥壁部のものを後室と考える。

まず後室は、前述のように左側壁長3.2ｍ、右側壁長３ｍで、奥壁幅1.9ｍ・玄門部幅2.05ｍとやや羨道部側にひらき、袖石が不揃いな点はあるが、大型の石材をよく腰石として揃えている。

床面は、玄門部に多く積みあげられた礫と奥壁・左側壁の隅に残る礫群から敷石を全面に施していたものと考えられる。また玄門部に長幅が75×35㎝程の梱石を据えている。

後室の構成は奥壁に１枚、左側壁２枚、右側壁３枚の大型転石を立て、腰石となしており、天井はすでに無いが、床面敷石より2.7ｍ以上あると考えられる。

以下では各壁面の構成について個別に触れることにする。

後室奥壁は、腰石に幅1.9m以上、高さ1.4m以上の大型転礫を使用する。これをほぼ垂直に据え、更に面を揃えなおかつ水平に目筋が通る様に一段を積んだ後に持ち送り様に三段程を積みあげて天井部を構成している。また主要な石材間には多く割石が使用されている。

次に後室左側壁は、２枚の転石を腰石として使用するが、奥壁側のものは長さ2.5m以上・高さ1.5m程の礫をやや内傾気味に立て、羨道側では幅0.5m、高さ1.2m程の柱状礫を立てている。腰石の凹部や間隙には小型の転礫を多く使用する。両腰石間の高さのちがいは羨道側のものに幅40cm、高さ13cm程の扁平礫を積むことによりほぼ均しくなる。これより一段目に４石を積むが、これらの下端部ラインは前室腰石より第１段目石材上端部レベルとほぼ等しく、これ以降天井部の高さのちがいはあるが後室左側壁奥壁側から前室袖石まで一貫した壁面形成がなされているものと考えられる。続く第２、３段目も扁平性の強い転礫を持ち送りに積んでいる。壁面は全体に横に目筋の通る所謂煉瓦積みの手法を感じさせる。

後室右側壁は、石材の使用法としては左側壁と同様に奥壁に幅2.4m、高さ1.5m程の大型転礫を据え、羨道側は幅0.5m以上、高さ1.1m以上の柱状転礫を立てて腰石としている。

腰石以上は、ほぼ５段程の石積みが残り、大略３石を単位として縦に目筋の通る所謂重箱積みの手法が窺える。

壁面は床面より1.9m程（腰石と一段目石積み）までほぼ垂直気味に積み、これ以上は持ち送りとなり、天井部に向って急激に幅員を減じる。右側壁もまた使用石材には比較的扁平な転礫が多く、これは壁上部に従って顕著にみられる。

後室玄門部は、左・右袖石とも大型の角柱状転石を使用し、左側壁袖石が若干羨道側にずれる。左袖石は幅0.7m・高さ1.55m以上で、右袖石は幅0.75m・高さ1.3m以上の規模である。天井部までには、右袖で幅1.1m・高さ0.65m、左袖で幅0.9m・高さ0.35mの石材他１石を積み、この上部に長さ1.85m・幅1.2m・厚さ0.75m程の礫を架構している。

また前室は前述の様に羨道側袖石と後室玄門梱石との中間に閉塞施設を有し、石室そのものの機能は殆ど皆無に等しいといわねばならない。

前室床面は玄門部で約10cm程の段をなして羨道へと移行する。左・右壁面ともに腰石は１枚で、玄門部の袖石は左・右が不揃いで、特に右袖石などは僅かに突出するのみで羨道部への移行が不分明である。

左側壁は、幅1.5m・高さ1.5m程の腰石上に３段階の石積みが残る。袖石は幅0.4m・高さ１m以上の柱状転礫を使用する。

また右側壁は、幅1.8m・高さ1.3m程の腰石上に３段の石積みが残るが、腰石上のものは２段目までは３石を横に積み、この上に同じ位のサイズの礫を積みあげているため、縦横に目筋の通るものとなっている。

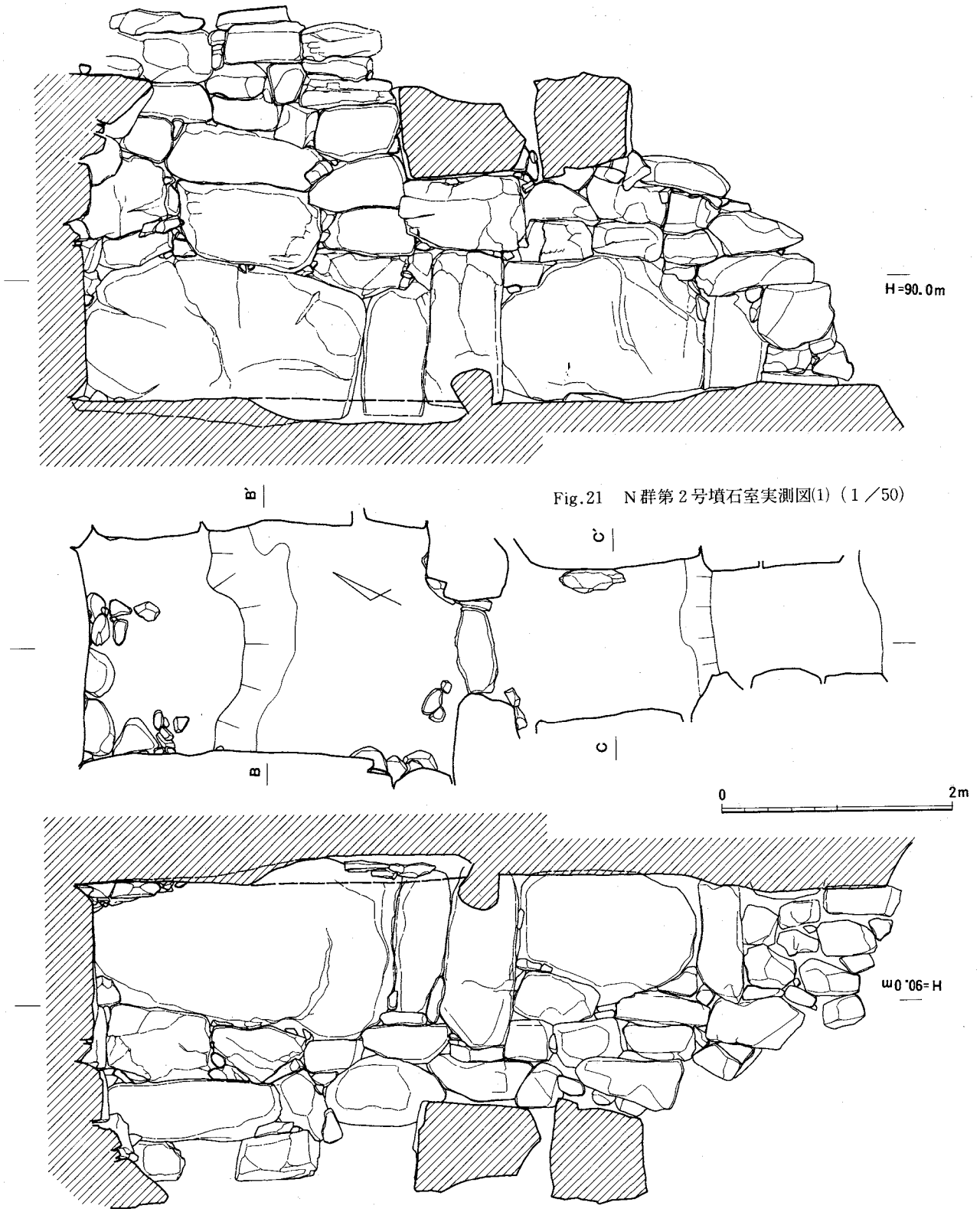


Fig.21　N群第2号墳石室実測図(1)（1／50）

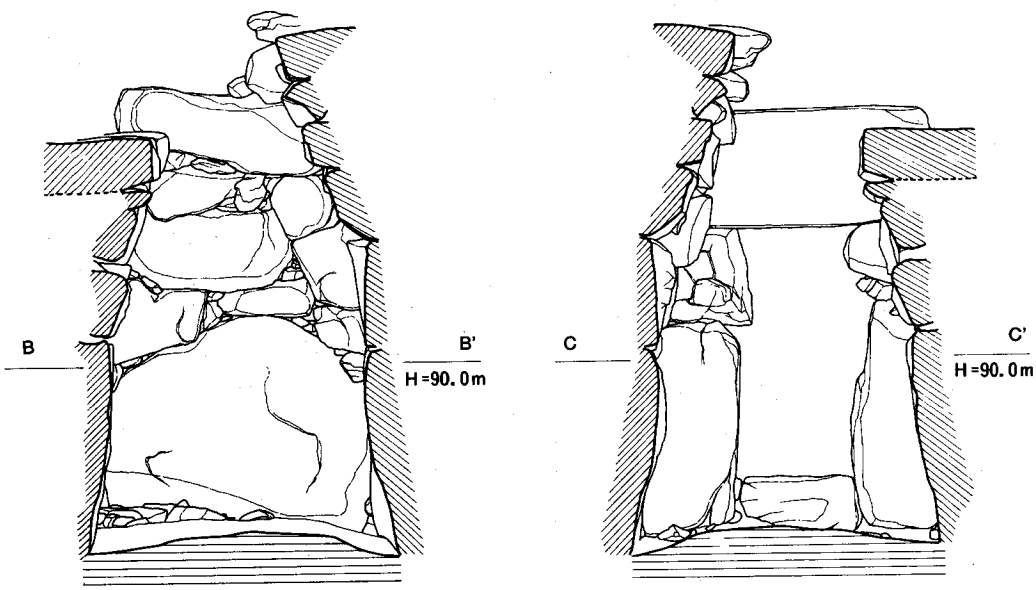


Fig.22　N群第2号墳石室実測図(2)
(1/50)

0　2m

前室天井部は、後室玄門部天井に接して、長さ1.9m・幅0.9m・厚さ0.8m程の長転礫を架構している。

羨道部　玄室より続く羨道部は全体に残りが悪く、左側壁で前室袖石の奥壁側より1.9m、右側壁では同位置で1.3mをはかるが、地形上で延長部は急激な斜面となって落ちるためこれ以上大きく伸びることはないと考えられる。

羨道部は前述した玄室部に比較すると壁面の構築の上で非常な差がみられる。前室袖石を境として腰石となる壁最下部の石材は極端に小ぶりとなり、これより上部には同程度かあるいは小型の転礫を積んでいるが、左・右壁ともに粗雑で、玄室部にみられた工法上の規則性を感じさせないものとなっている。

壁高は左側壁で1.4m、右側壁で1.5m程が残存するが、天井部は無かったものと考えられる。

墓道　2号墳墓道は、石室羨道端部が急激な斜面となり、現況からは延長上にその存在を考えにくい。

また第2号墳周辺では墳丘西側から第1号墳にかけての削平が著しく、地形旧状を知るとこ

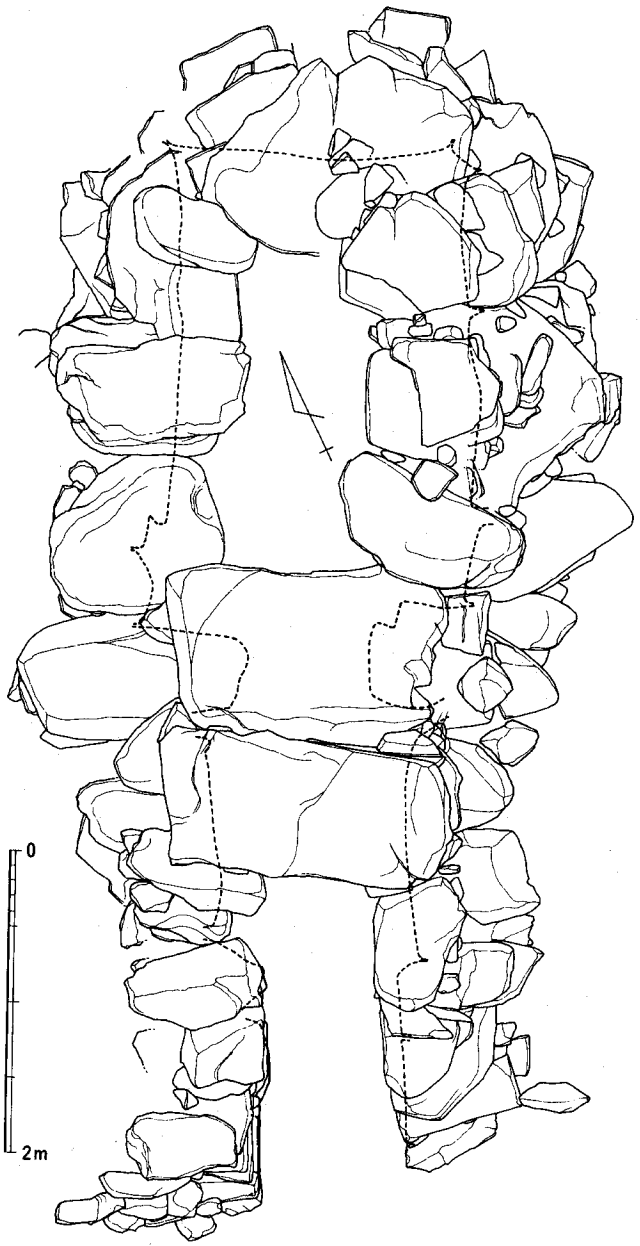


Fig.23　N群第2号墳石室実測図(3)　(1/50)

ろが困難であるが、現況では大きくみて羨道部付近が傾斜変換線にあたり、而もこのうち東側では特に等高線が混み、急激に落下する点で墓道は、羨道より西側に迂回するものと想定される。

閉塞施設（Fig.24）　前室中央部から羨道部の一部にかけて閉塞施設が遺存する。

現存するのは、延長1.6m、高さ1.3m程であるが、前室残存天井高から考えると、更に70cm程はあったものと考えられる。

閉塞は前室側壁の中位一杯に板状石材を立て、この前面つまり羨道側に角礫を積むことによってなされている。

最奥部の板状石材は、幅1.3m・高さ1.2m・厚さ0.3m程のもので、下端には長・短が30×20cmの転礫が根石様に配置されている。そして平面的に左側壁側が後室方向にずれている。

それからこれより前面の閉塞石積み法は、最も羨道側で大型角礫から小型のものへ緩い角度で積みあげる他は特にこの間での特別なものはなく、最奥部の板石を支えとして乱雑に長径15～30cm程の角礫が積まれている。

閉塞部の開閉は、最も奥部の板状石材がサイズの上で羨道部をきわめて通過し難いものである点と、基本的に遺体搬入時も取り払われないと考えられる根石があり、羨道部幅員がほぼ0.9m程である程である事から、般入時は前面の礫石を取り除き、板状石材を右側壁に沿って移動し押し付けるか或は現存しない空隙部のみが取払われ、修復された方法であるか判断できない。

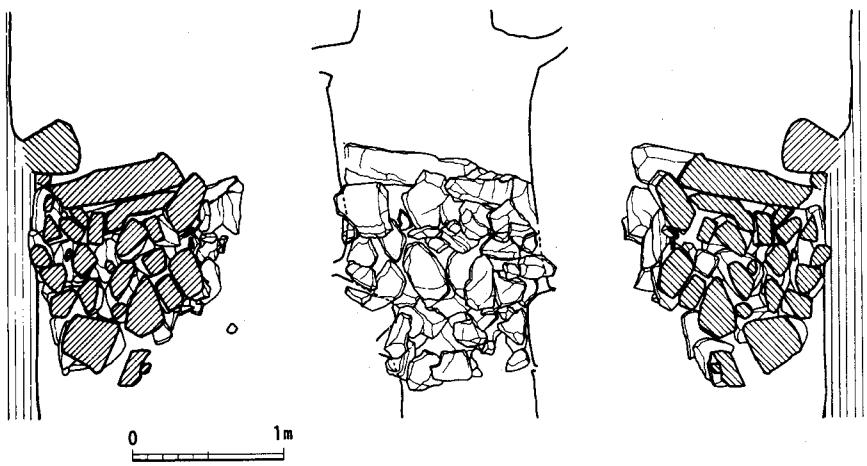


Fig.24　N群第2号墳閉塞施設実測図（1/50）

④　出土遺物（Fig.25～27、PL.52～54）

第２号墳出土遺物は須恵器蓋坏・瑕・高坏・壺および土師器高坏・盤・埦などであり、これらは全て後室出土のものである。

蓋坏（Fig.25・27）

坏蓋(00212・00213・00201・00239・00237・00227・00238・00202・00203・00209・00241・00204・00206～00208・00210・00205・00220・00211・00224・00216・00221・00223・00228・00222・00214)　蓋は形態的特徴から内面にかえりをもたない通常のタイプ（Ⅰ類)、平板な体部に擬宝珠つまみを付すタイプ（Ⅱ類)、内面にかえりを有するタイプ（Ⅲ類）に区別することができる。Ⅰ類は更に主として口縁部形態から４類に細分可能と考えられる（Ⅰａ～Ⅰｄ類)。またⅢ類も大きくつまみの有無から２類に分類する（Ⅲａ、Ⅲｂ類)。

Ⅰａ類（00227・00238・00209・00204・00210)　器高が比較的高く、天井部が丸味をもち、ヘラ削りも½程度に及ぶもので、本墳出土蓋類では最も古式のものであろう。口径13～14cm、高さ3.8～4.8cm を計る。

Ⅰｂ類（00212・00206・00208・00205)　天井部の回転ヘラ削りはⅠａと大きく変わらないが、全体に口縁部との境を意識することなく、器壁も変化に乏しい。法量は口径10.4～13.3cm、高さ3.3～4.4cm の範囲にある。

Ⅰｃ類（00201・00239・00202・00203・00207・00211)　丸味をもった天井部を有し、口縁部との境が肥厚して、くちばし状の断面形となる。法量は口径12.4～13cm、高さ3.5～４.5cm の範にある。

Ⅰｄ類（00213・00241)　ヘラ削りにより天頂部は平坦面をなし、口縁端部の仕あげは薄く、端部が鋭く尖る。法量では口径10.8～14.1cm、高さ3.2～４cm を計る。

Ⅱ類（00220・00224)　何れも天井部中央に低い、扁平な擬宝珠状つまみを付すもので器面は天井部付近を回転ヘラ削りした後ナデを加える。口径16.5・16cm、高さ3.4～2.9cm を計り、ともにひずみの大きい製品である。

Ⅲａ類（00216)　小型で、天井部ヘラ切りの後全体に横ナデ調整を加える。天井部につまみを持たず、かえりは口縁端部とほぼ同一レベルにある。口径10.2cm、高さ3.1cm を計る。

Ⅲｂ類（00223・00222・00221)　Ⅲａと同様に小型で、天井部に断面が菱形の宝珠つまみを付す。全体に器高は低く、かえりが口縁端より低いもの（00221）も含む。口径8.5～10.3cm、高さ3.2～3.5cm を計る。

坏身(00228・00214・00226・00229・00248・00230・00215・00232・00233・00235・00234・00231・00217・00240)　身は立あがりを持つもの（Ⅰ類）と持たないもの（Ⅱ類）とに区別

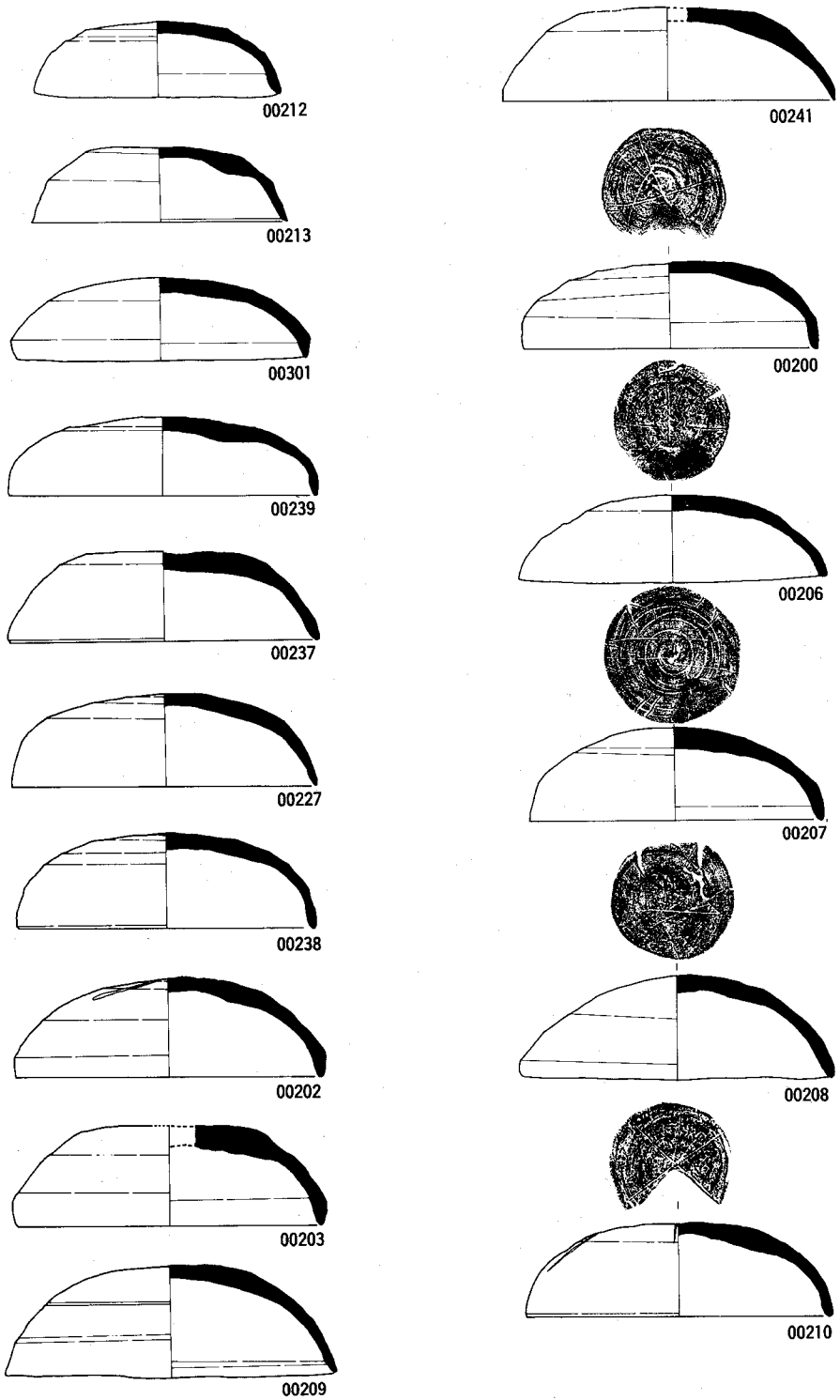


Fig.25　N群第２号墳出土遺物実測図(1)（1/3）

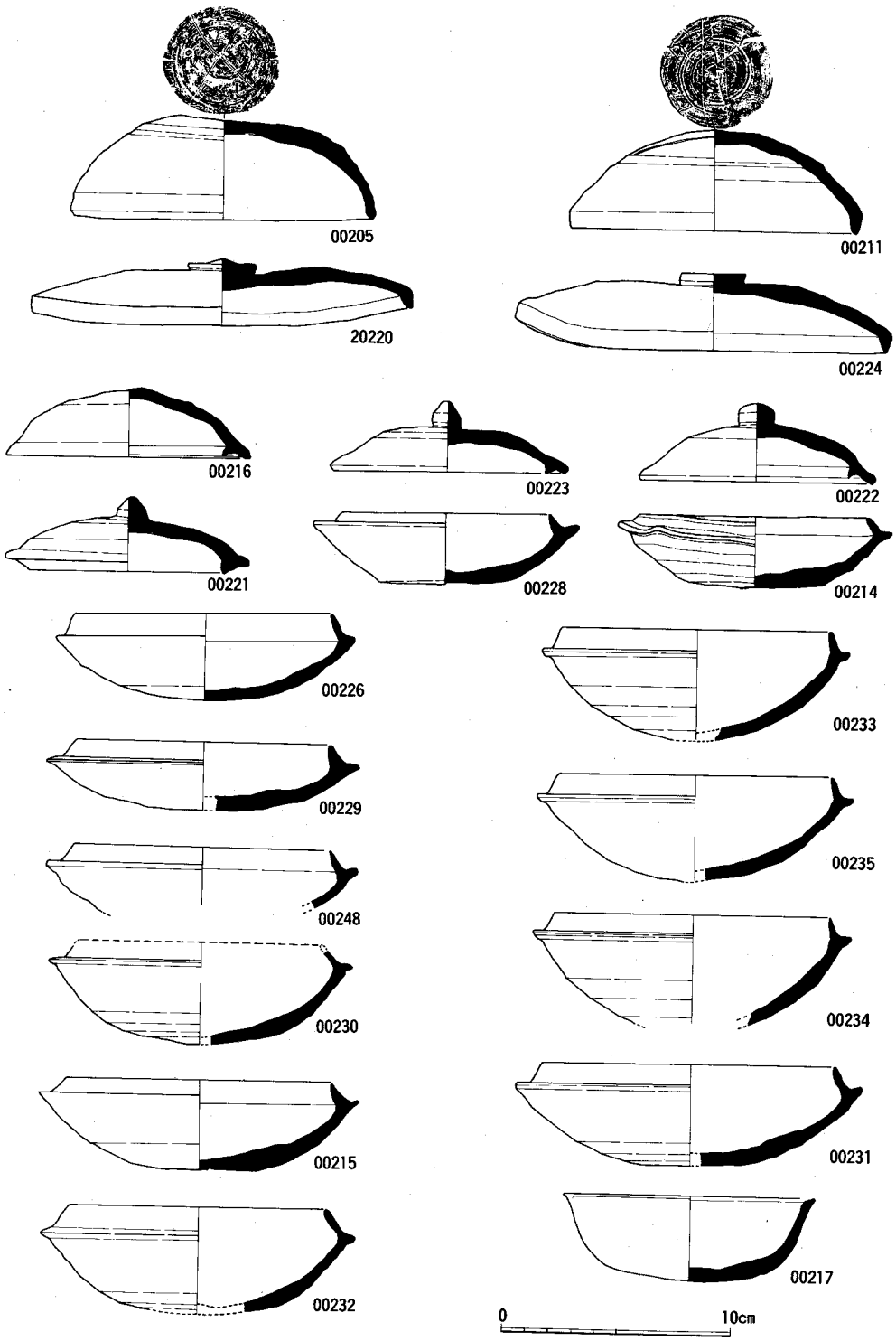


Fig.26　N群第２号墳出土遺物実測図(2)　(1/3)

され、更にⅠ類は３類に細分されよう（Ⅰａ～Ⅰｃ類)。またⅡ類は所謂丸底坏（Ⅱａ類）と平底坏（Ⅱｂ類）とに区別される。

Ⅰａ類（00232・00233・00235・00234・00231）　比較的底部が深く、体部の回転ヘラ削りも広い。立あがり部はそれほど高くはないが、受部は短くほぼ水平に伸びる。法量的に口径11.3～13cm、高さ4.5～4.8cm を計る。

Ⅰｂ類（00226・00230・00215）　底部は深いものを含むが、立あがり部の内傾化が著しい。法量的には口径10.8～11.5cm、高さ3.8～4.6cm を計る。

Ⅰｃ類（00229・00248・00228・00214）　立あがり部はⅠｂ類と変化があまりみられないが、全体に器高が低い。00228・00214の様に平底をなす一群は他と区別が可能であろう。口径9.2～10.2cm、高さ３cm 程を計る。

Ⅱａ類（00217）　体部が丸味をもち、口縁端部は小さく引出される。器色灰色を呈し、焼

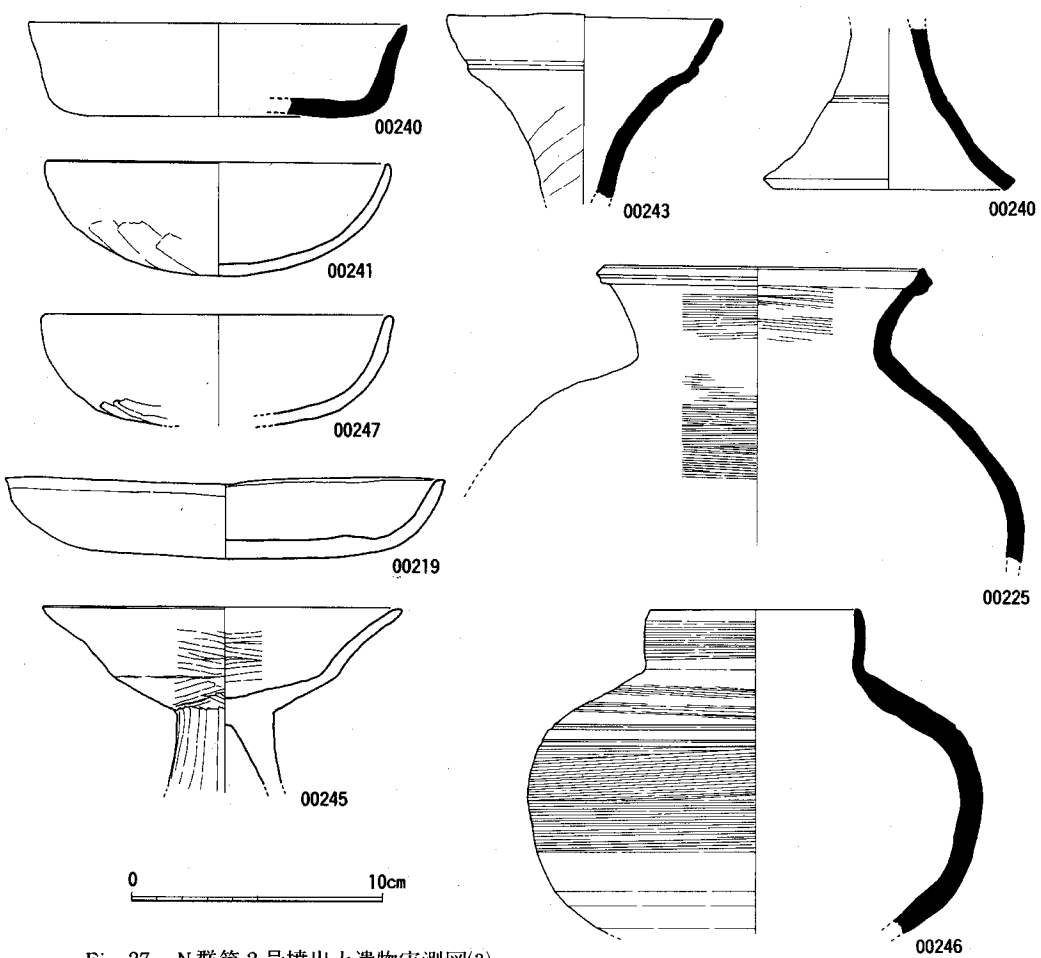


Fig.27　N群第２号墳出土遺物実測図(3)

成は堅緻である。口径11cm、高さ3.7cm（復原値）をはかる。

Ⅱb類（00240）　外底端部が丸く、緩く外方に伸びる口縁をもつ。内底部ナデで他は横ナデ調整である。器色暗灰色を呈する。口径15cm を計る。

鼎（00243）　口縁反転部に沈線1条を廻らし、頸部がよくしまった製品である。器面は内外とも横ナデで、頸部の内外にしぼりがみられる。器色暗灰色を呈し、口径11cm を計る。

高坏（00244）　脚部のみの破片である。脚中位に沈線1条を廻らし、直線的に開く。脚内面上部はヘラ削りか。他は全て横ナデである。器色暗灰色を呈し、口径10cm をはかる。

甕（00225）　肩部の張らない甕で口縁は緩く外方に開く。口縁端部外面は肥厚する。器面は胴部外面および口縁部内外面にカキ目が残り、他は横ナデ調整となる。器色は暗い赤灰色を呈し、口径22cm をはかる。

直口壺（00246）　内湾気味に立つ口縁を有し、肩部に2条の沈線を施す。胴部の⅓程に回転ヘラ削りを残すが他はカキ目で、頸部外面および内面は全て横ナデである。器色は暗灰色を呈し、口径8.4cm を計る。

b. 土師器（Fig.27）

土師器は通常の如く量的には少なく、図示可能なものは4点にすぎない。高坏・盤・埦である。

高坏（00245）　坏部に比較して脚付根の径が大きいものであり、坏も浅い。坏部は内外面ともにヘラ研磨が顕著で、内底部はナデである。また脚部は縦のヘラ削りを加える。器色赤褐色を呈し、口径14～15cm を計る。

盤（00219）　外底端部からゆるく立あがる口縁を有する。外底部はヘラ削り後ナデか。他は全て横ナデである。器色赤褐色を呈し、口径16.8cm、高さ3.2cm を計る。

埦（00241・00247）　何れも胴部下半に斜めのヘラ削りを加え、口縁外面は横ナデ、他はナデ調整である。器色は赤褐色を呈し、口径13.8・13.6cm、高さ4.5cm を計る。

(3) 第3号古墳 (Fig.28～32)

① 位置と現況

第3号墳は、N群の分布する丘陵裾部に位置し、第4号墳の西側20mに接して営まれている。

裾部は海抜79～80m程の急斜面であり、墳丘を想定させる地形変化は認められなかったが、石室は既に開口し、羨道部石材の流失も著しかった。

また本墳より第29号墳に至る丘陵裾部は過去の林道開削によって高さ4～5mの崖面となっており、羨道部施設や墳丘裾部、墓道などもこの掘削によって殆ど破壊され尽くしている。

② 墳丘 (Fig.28・29、PL.7)

地山整形 本墳は前述のように丘陵部南面裾部に営まれるが、現況での地形傾斜は約25°で墳丘は肉眼では全く識別できなかった。

石室の構築はこの傾斜面に対してほぼ直角になされており、従って地山整形は石室北側の傾斜面上部を掘削し平坦面を現出することに主眼がおかれている。

地山整形は、玄室中心部から約4m程北側の斜面をほぼ45°の角度でいびつな円形に切りとる。調査区東側では作業上危険がともなうため十分な拡張が行なえなかったが、現存で東西幅13mをはかる。また掘削崖面は中央部で幅・高さともに2mを測り、西側では円弧をなさず外側に開いていく。

掘削崖面の下端線は、後の墳丘形状を反映するもので石室を中心として円弧状をなすが裾部の羨道側は上端線とともに林道掘削により消失している。

墳丘 墳丘は非常な傾斜地に築成されているため、特に盛土の流失が著しかったと考えられる (Fig.29)

墳丘部断面では、原墳丘の遺存は殆ど石室天井石上から数10cm程がみとめられるだけであり、それも羨道側（南）および右側壁側（東）へ大きく傾斜している。

石室主軸に沿う南北ラインでは南側羨部では全く流失し、北側の裾野に頂部をみとめることができる。

東西側では東に墳丘が流れる傾向にあり、緩やかな墳丘裾部には掘方内面に粘土を貼った焼壁土壙が付設されている。

墳丘はその規模が東西6m、南北4.5m以上でやや東西に長い円形をなすものとなろう。墳

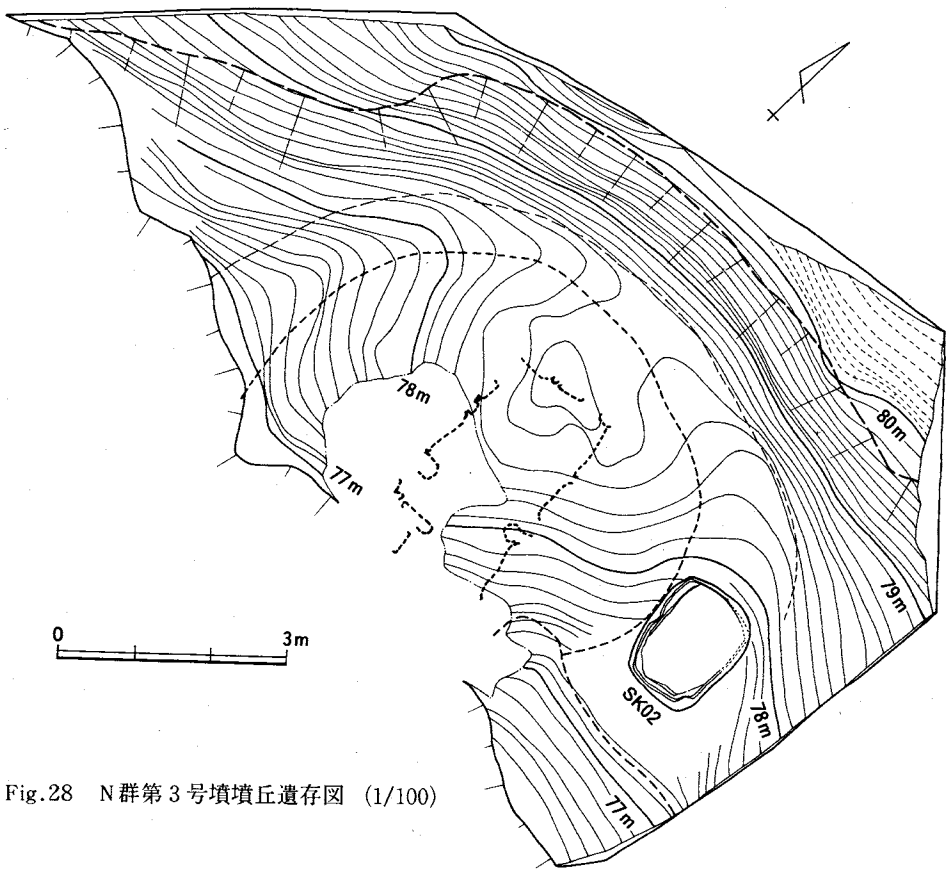


Fig.28　N群第3号墳墳丘遺存図（1/100）

高は羨側よりみると1.5m程の高さが考えられるが、墳丘が傾斜している点や旧羨道部端よりみれば視覚的には更に大規模にみせる効果はあったであろう。

墳丘裾部と地山掘削崖面裾部との間は溝状となり、北側裾野では幅60cm、深さ15cm程をはかる。また墳裾に沿って弧を描き羨道部付近に近くなると溝は1.2m程に幅広くなり、底面高は前の北裾部を最高点として約1.5m程下降する。

墳丘盛土は黄褐色土（赤褐色粘質土混）を基本にしたものであるが、築成前の石室掘方内の埋積は、同一の埋土を使用し、非常にしまっており、丁寧な工程を踏んでいる。

墳丘は築成後流失した部位が大きいと考えられるが、現地表までは北側で約1.6m、西側で2.2m程の埋没がみられる。原墳丘上にはまず10～20cm程の旧表土（黒灰～漆黒色砂質土）があり、この上に赤橙色砂質土、暗黄褐色砂質土（何れもバイラン土）が互層をなして推積しており、急傾斜地で比較的急激に墳丘平面観が失われた事を感じさせる。

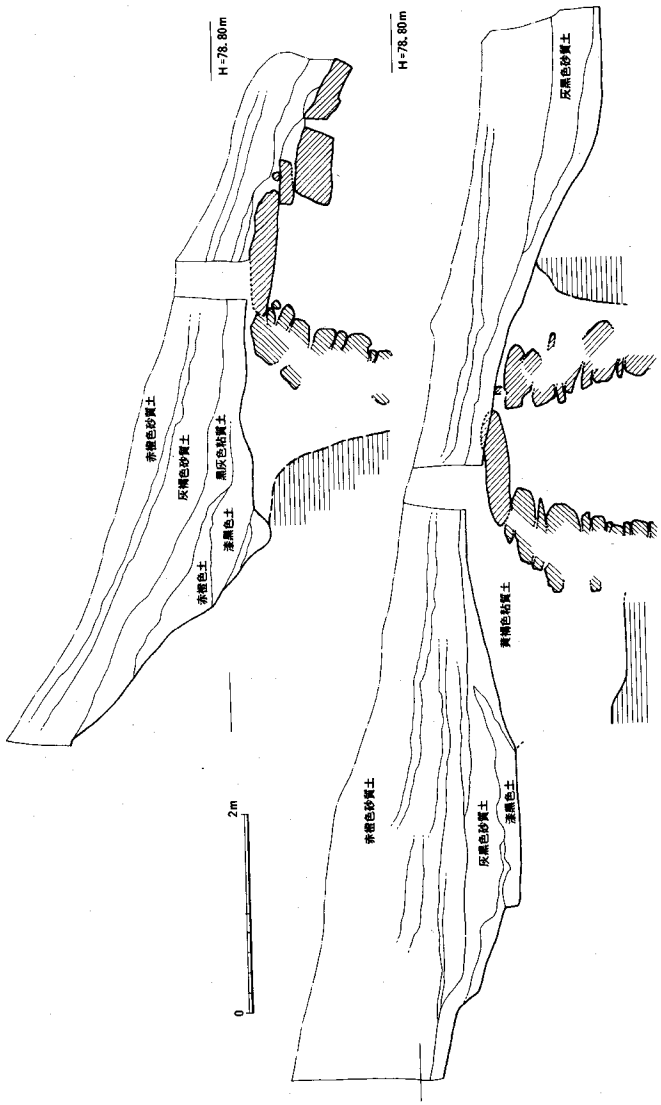


Fig.29　N群第３号墳墳丘土層断面図

③　横穴式石室（Fig.30・31、PL.７・８）

本墳の埋葬施設は石室主軸をN－18.5°－Wにとり、南側に開口する単室の両袖式横穴石室である。石室は崩壊によって羨道部左・右側壁の一部を失っている。また石室内は徹底した盗掘のため副葬品は見当らない。

横穴式石室は全体にゆがみが大きく、玄室は長方形をなす。また玄門部の梱石は失なわれているが羨道側の左側壁に袖石をおき、これに複数よりなる梱石をおき、一見複室を意識した構造をなす。またこれより羨門側第１腰石付近には閉塞施設の残骸とみられる石積みが残る。

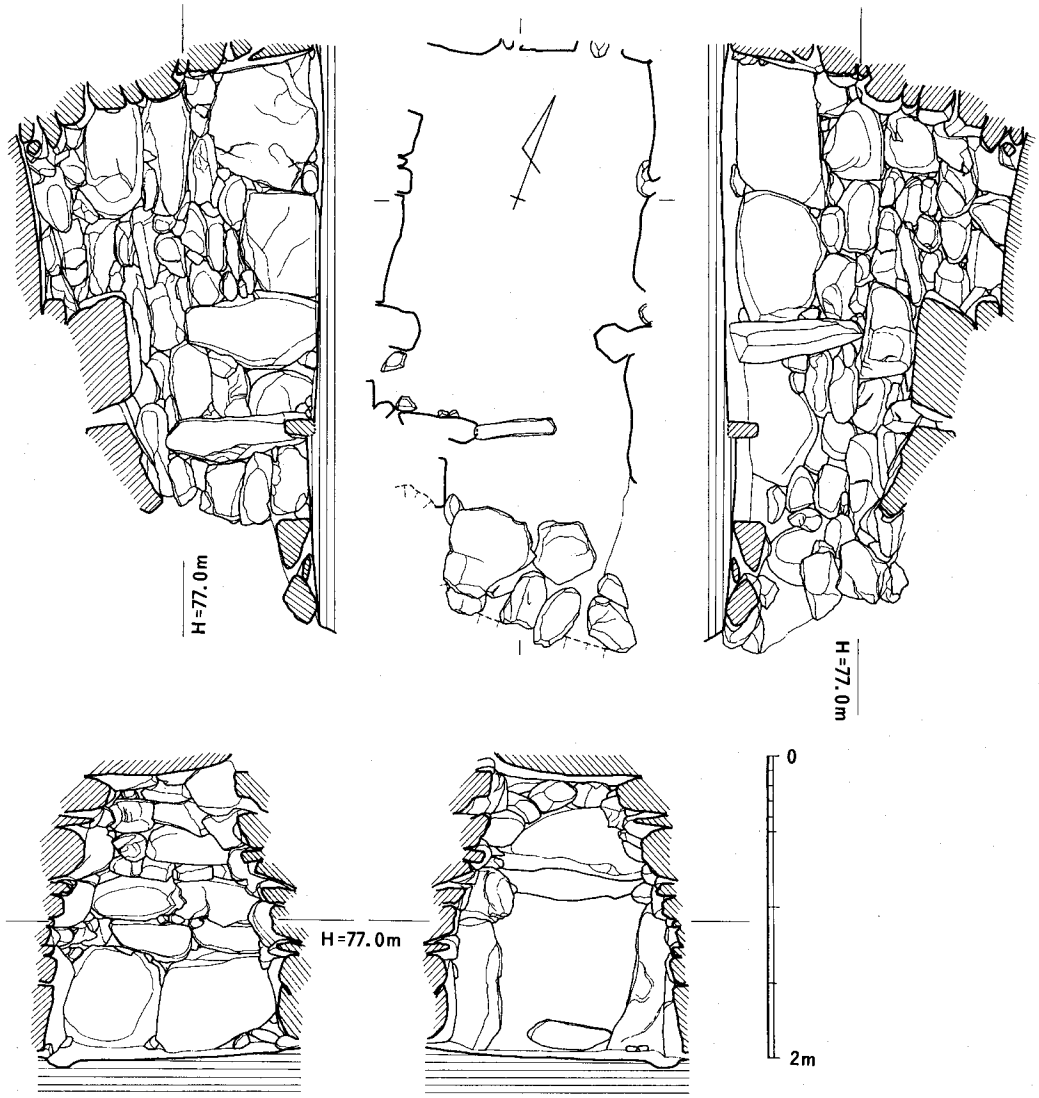


Fig.30　N群第3号墳石室実測図(1)（1/50）

石室掘方　石室を収納する掘方は、石室奥壁側で幅4.40m・深さ1.4m以上の規模でコ字形をなす。左側壁側は延長2.1mを残し羨道側に従って壁高を減じる。またコーナー部分では段をなす。

また右側壁側では延長2.9mをはかり、左側と同様に羨道側に従って浅くなるが、比較的に垂直に近い立あがりをみせている。

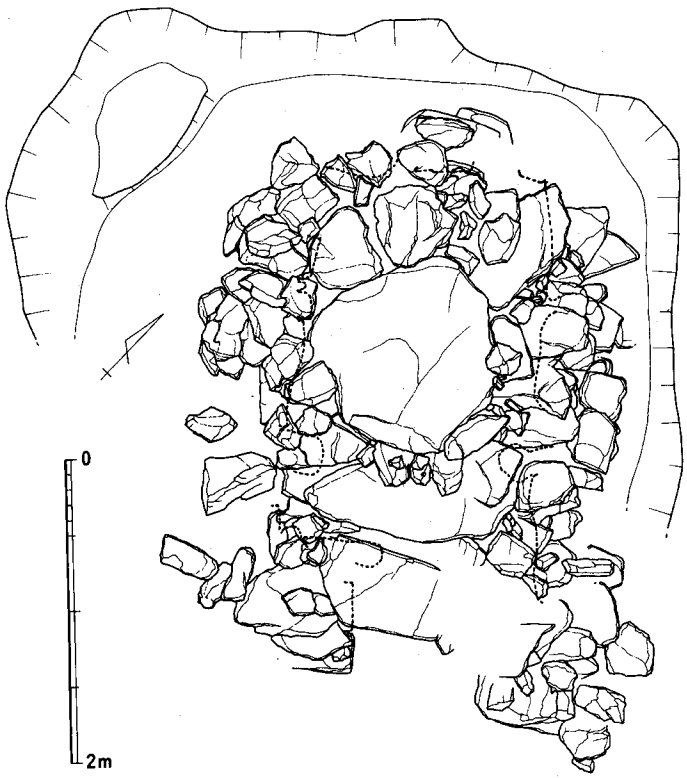


Fig.31　N群第3号墳石室実測図(2)（1/50）

玄室　玄室は奥壁部幅1.45m・玄門部幅1.7m、左側壁長1.75m・右側壁長1.75mをはかり、両側壁は主軸に対してゆがみが顕著である。

各壁面の構成は、奥壁・両側壁ともに各2枚の腰石を使用し、腰石以上は持ち送り手法によってなされている。

奥壁は高さ70cm程の転礫を腰石として基本的に4段積みをなしている。左側壁も天井部までに4段の石積みを行なう。一段目は腰石の高さのギャップを埋め、更に左袖石の頂上部に近いレベルまでであり、以降も小型転礫を使用し乍ら横に目筋の通る煉瓦積みの仕上げとなっている。右側壁も腰石以上は基本的に4段積みであり、大小の転礫（長径60～25cm）を使用する。

玄門袖石は、左・右の袖石とも幅25cmでかなりの小型のものである。また玄門部天井は左玄門で2石、右玄門で1石をそれぞれ袖石上に積み、天井石を積せる。天井高1.2をはかる。また玄室天井高は中央部で1.9mをはかる。

石室は掘方内の右隅部に片寄って構築されるが、壁面および天井部に使用された石材以外の石材は墓壙内に充填するものは少なく、寧ろ石材の外面端部に折重ねる様にして配置し壁面使用材の安定をはかるとともに、小型のものは黄灰色粘質土（八女粘土に類似）とともに目張りとしておかれたものと考えられよう。

羨道　玄門部からほぼ1m程の延長があるが前述のように左側壁側で玄門より50cmにあたる位置に長・幅が1×0.3m程の長円礫を立て袖石状に内側に突出させている。またこれに扁平

礫を梱石として接続させており、これの延長上は右玄門に接する様に段をなすことから本来梱石としておかれた石材があったものと推定できる。羨道部壁のうち右側は玄室側よりの一貫した石積みを想定できる構成となっている。

墓道　全く痕跡を残さないが、下刻の未発達であった現渓流の下流方向に伸びるか。

閉塞施設　現存する羨道部左壁腰石付近を境としての２個程の扁平な転礫を２段に積んでいる。奥壁端から閉塞玄室側までは3.1ｍ程をはかる。

閉塞に使用された石材は全て花崗岩である。

④　出土遺物（Fig.32、PL.55）

第３号墳の出土品は僅少でこの２点にすぎない。平瓶口縁部（00301）、土師器甕（00302）などである。

須恵器平瓶00301は、北側墳丘裾部出土である。外方に開く口縁部は端部で直立し、内側が窪む。器色はやや白みを帯びた黄色を呈し、焼成は軟質で全体に器面の剝落が多い。口縁部径8.4cm を計る。

土師器甕00302は底部および口縁部を欠失する。北側墳丘裾馬蹄形溝内出土である。器色は暗赤褐色を呈し、全体に器面の磨滅がいちじるしい。内面に横ヘラ削り痕が一部残る。胎土粗で、焼成はやや軟質である。

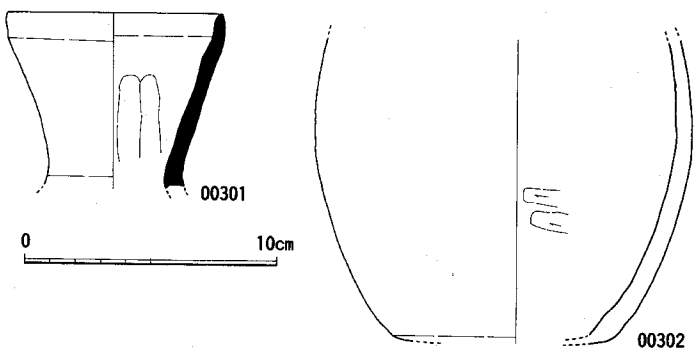


Fig.32　N群第３号墳出土遺物実測図　(1/3)

(4) 第4号古墳 (Fig.33～36)

① 位置と現況

4号墳は第3号墳の東側20mにあたる丘陵裾部に位置し、海抜75m付近にある。調査前は長・短が2.5×2m程の陥没坑が認められ、腰石の一部も露出していた。

墳丘と考えられるものは径6m程の低い高まりであり、羨道部付近には転礫が多くみられた。

② 墳丘 (Fig.33・34、PL.9)

地山整形 調査区の範囲外に当る斜面上部で掘削を加えているものと考えられ、この下方に石室掘方を行っている。

墳丘 墳丘盛土は南側に傾斜する地山上にあるため羨道側が殆ど流出している。

墳丘規模は東西で6m、南北で4.5m以上であり、不整な円形を呈する。

墳丘裾部は盛土の流出のためか北側が不明瞭で、東・西側は比較的明らかなものであったが、墳高は低く、最も遺存の良好な東側壁でも0.65mにすぎない。

墳丘構築の第1段階は石室を収納する掘方内空間の埋積である。北側の奥壁部では緩い立あがりの墓壙内を下層より淡黄褐色砂室粘土－暗黄褐色砂室粘土の順に埋積しているがあまりしまりがみられない。また東・西側でも墓壙上面まで黄褐色砂粘土を充填するが、地山整形面上に直接盛土した第2段階の封土とは明らかな区別がし難い。

続く墳丘構築の段階では、地山整形面（赤橙～黄橙色花崗岩風化土）上に淡黄色粘質砂土を積み、この上に暗黄褐色水質土を薄くかける。更にこの上部に粗砂を多く含む黄褐色砂質粘土を盛り仕あげとしている。何れもしまりが感じられず、石室壁石の上面付近までの墳丘上の流失は築城後比較的短期間になったと考えられる。

③ 横穴式石室 (Fig.35、PL.9)

本墳の埋葬施設は石室主軸をN－12°－Wにとり、南側に開口する両軸型横穴式石室である。石室はすでに天井部を失ない、内部は壁石材の崩落と周辺土砂の流入によって殆ど埋没していた。

石室は全体に非常にいびつで、玄室－羨道部をわける玄門袖石あるいは梱石などの遺存が悪く、内部は徹底した盗掘によって副葬遺物は少量で須恵器・全環が出土したにとどまった。

石室の現存長は、左側壁で奥壁中央より3.3m、左側壁で2.7mをはかるが、左側壁の腰石は

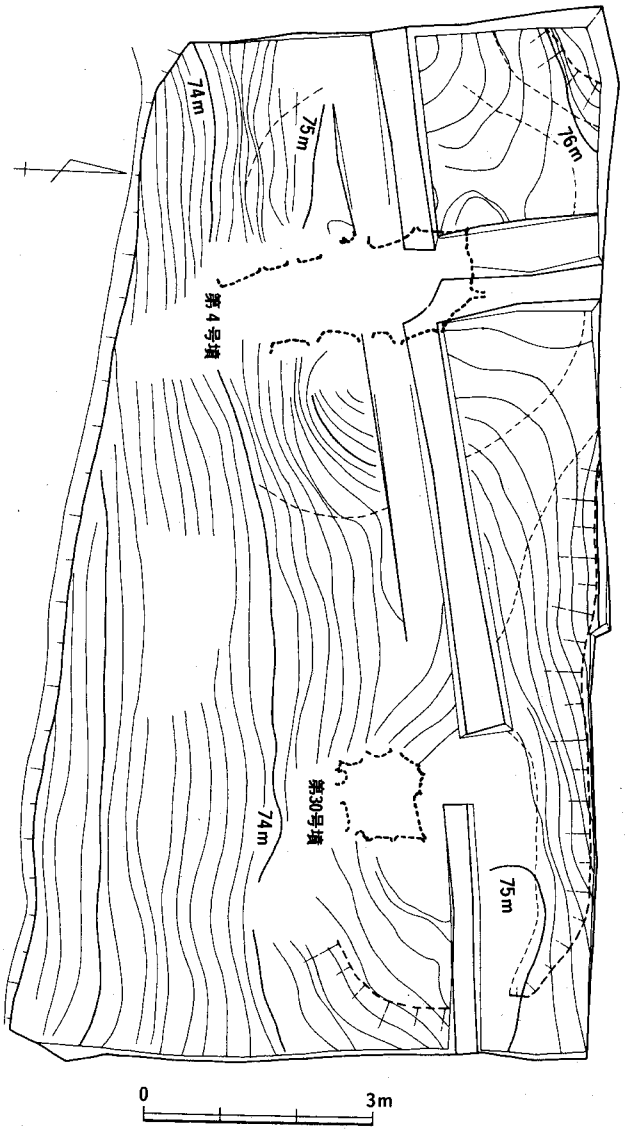


Fig.33　N群第4・30号墳墳丘遺存図（1/100）

一石が失なわれており、右側壁の奥壁側より第3石目の腰石付近か玄門部である可能性が高い。

石室の構築には殆ど花崗岩転礫が使用されているが、全体に小型であり、腰石に使用された

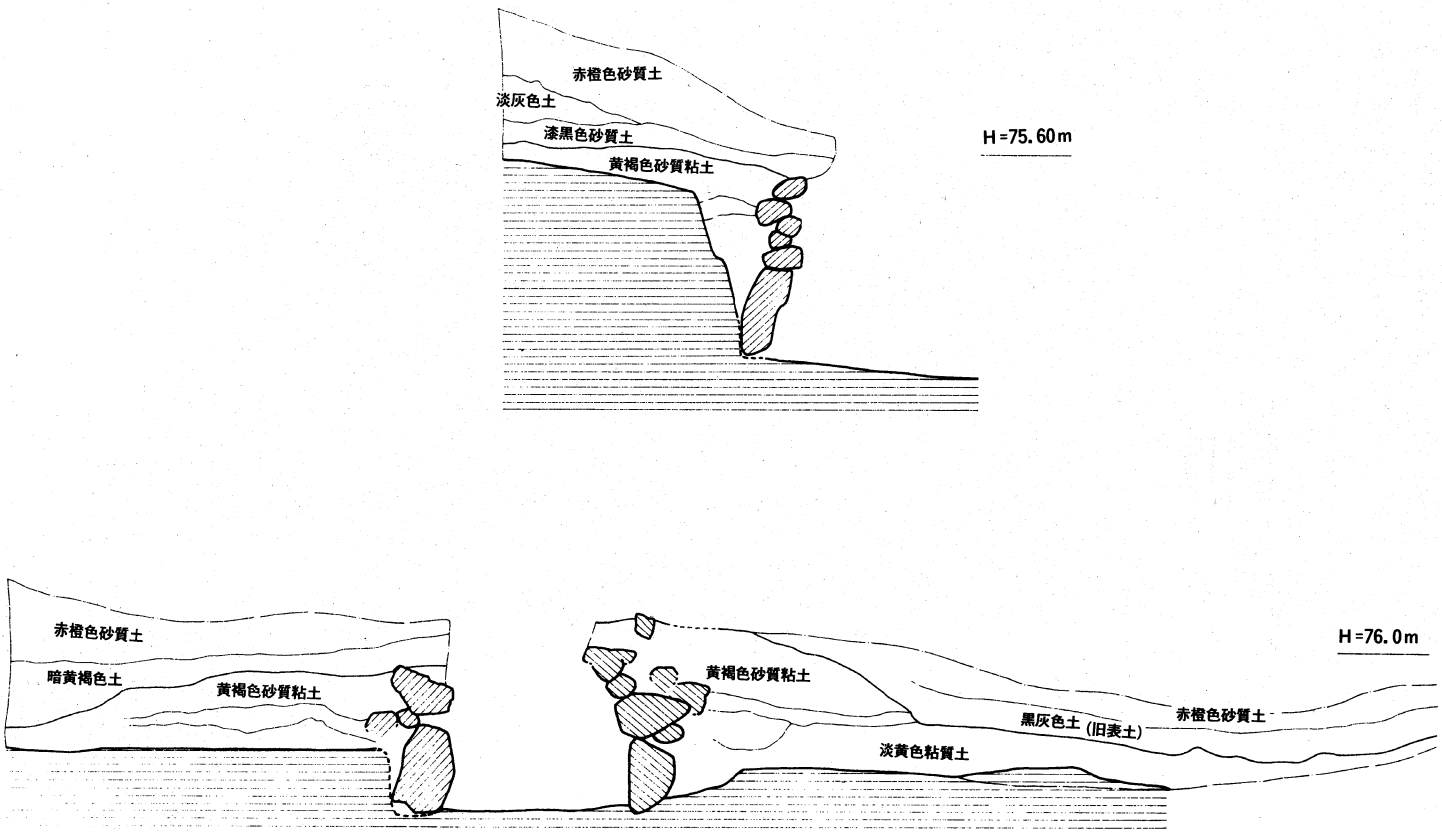


Fig.34　N群第4号墳墳丘土層断面図（1/50）

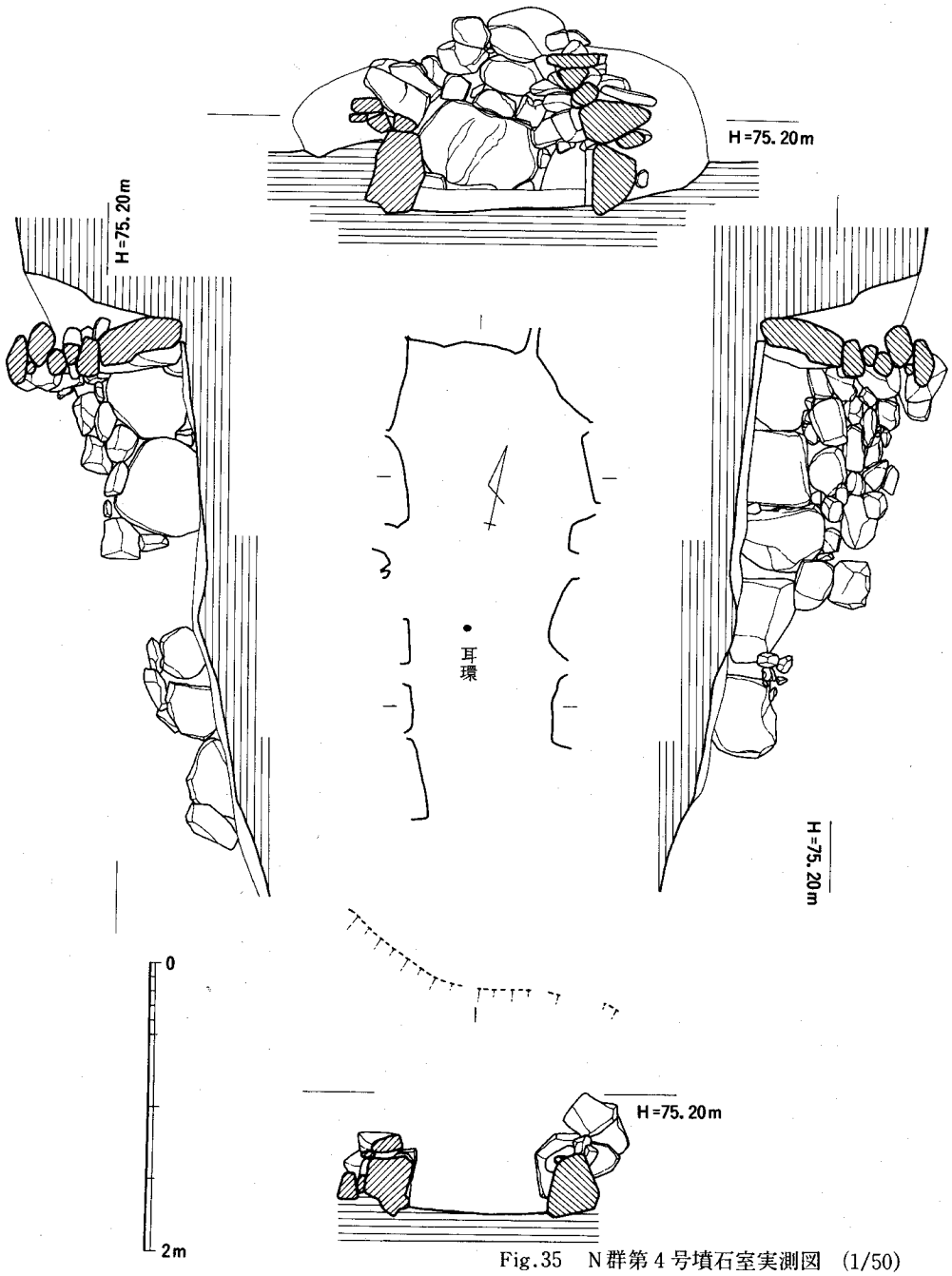


Fig.35　N群第4号墳石室実測図　(1/50)

石材も石室規模に応じたものである。

石室掘方　掘方は奥壁部で高さ1.1m・幅2.9m、左側壁部2.4m、右側壁部3.9m程の隅角の

緩いコ字形のもので床面は羨道側に向って下降する。

玄室　玄室は前述の様に石室各部が全体に特徴的形態をとらず、現存する羨道部も奥壁側よりもややすぼまる程度であって相当部分を確認し難いところである。

ところで右側壁部では奥壁部より第３石にあたる腰石がそれまでの２石よのも高くしかも羨道側の床面がやや窪み、梱石を配置した可能性がある点などから袖石と推定される。また左側壁では失なわれているが、腰石配置の通例として玄門を境として羨道側はより小型で粗雑化することからこれと符号すると考えられる。

これらからすると玄奥壁長は0.9ｍ、左側壁長は1.2～1.5ｍ、右側壁長もまた同様であると考えられる。

奥壁は腰石が高さ60㎝、幅90㎝、厚さ20㎝の扁平な転礫１枚を据える。壁体は約1.2ｍの高さを残す。腰石上は５段に小転礫を持ち送りに積むが、ひかえ積みの補強はなく、脆弱な状況にある。

左側壁も奥壁と同様に小型の転礫を２枚腰石として使用し、上部には更に小型の扁平な転礫を積む。

また右側は部分的ながら床面からの残存壁高1.2ｍをはかり、腰石上に左壁と同じ一の小型転礫を持ち送り積みにしている。

羨道　羨道は玄門部に比較すると腰石も小振りであり、左側壁で３石、右側壁で２石が残っているにすぎない。

また羨道相当部は、床面降下の変換線ともなっており、奥壁側床面で金環一個が出土した。天井部の存否については不詳である。

墓道　羨道に続く墓道は延長上地山面がほぼ15°程の角度で降下するのみで溝状を呈するなどの特別の施設を残していないが、傾斜面の状態から丘陵裾部より、現渓流の流下方向に伸びるものと考えられよう。

閉塞施設　玄室奥壁端よりほぼ2.7ｍのところに転礫を積み閉塞したものと考えられる。石積みは玄室側より羨道側へ0.7ｍ程が残存している。

石積みは左側壁腰石に寄せて長径が30㎝程の扁平な転礫を２段程積んでおり、羨道側は比較的に小型である。右側壁側も左側壁玄室側と同規模の石材が残り、下段石材のサイズが大きく、上部に従って小型となる通有の閉塞になると思われる。

④　出土遺物（Fig.36、PL.55）

第４号墳出土遺物は非常に少量で図に示したものが全てである。

羨道埋土で坏蓋（00402）、閉塞石積み下で坏身（00401）、それに羨道床面上で金環が出土した。

須恵器坏蓋00402は、器色淡灰褐色を呈し、断面が低い菱形をなす宝珠様のつまみを有する。天井部はカキ目調整で他はナデである。

坏身00401は、器色外面暗褐色、内面淡褐色を呈する土師器様土器である。外底部回転ヘラ削り、他は横ナデで、口径13.6cm をはかる。

金環は、内径1.15～1.3cm 程の銅胎に金箔をおいたものである。環の突合せ部は広く、３mm 程をはかる。断面径は短辺で3.5mm、長辺部で4.5～５mm となる。内面部分に若干金箔が遺存する。

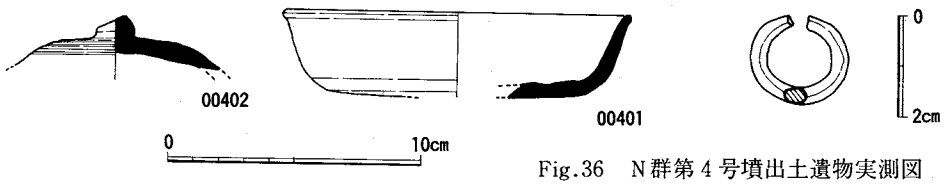


Fig.36　N群第４号墳出土遺物実測図
(1/3・2/3)

(5)　第５号墳（Fig.37～42）

①　位置と現況

第５号墳は、N群の南面する丘陵裾部近くに営まれ、第４号墳の東側20ｍに位置する。

本墳の位置する丘陵部は東側部分に向って緩傾斜となり、墳丘部と考えられるのは調査時では東西８ｍ、南北６ｍの長円形となる高まりであった。

また墳丘中央部は、径2.5ｍ程の陥没凹地として残り、石室が崩落しているものと考えられ、凹地の南側にあたる墳裾部にも大型の転礫が散乱し、石室・墳丘ともに破損が著しい。

②　墳丘（Fig.37・38、PL.11）

地山整形　本壙は丘陵東南側裾部にあって南～東方向の等高線に直交するように石室を構築している。このため地山整形面掘削は石室軸方向と直交する位置にあるが、調査区範囲の制約からその一部しか検出できなかった。

地山掘削は僅かに調査区北西隅に窺うことができ、その延長は1.6m程にすぎないが半円形をなすものと考えられる。それも丘陵裾部であるためか掘削面の角度はきわめて緩いものである。

墳丘　墳丘は南東に傾斜する斜面にあるためこの方向への崩壊・流出が著しいと考えられるが、現存する墳丘は石室主軸線に沿って長い円形を呈する。規模は、北西－南東の主軸方向で直径7m、北東・南西部で直径6m程である。

墳丘構築は地山整形を加えた地山面粗砂の混入多い赤橙色粘質土上に直接盛土して行なっている。

墳丘構築の第1段階は、石室掘方内の埋積である。境丘断面の東西、北側方向の盛土では何れの場合でも石室掘方部分と同質の黄褐色粘質土を掘方上端面から以上も積んでいるためこれらとの境界は明確ではないが工作順序は明らかである。

Fig.37　N群第5号墳墳丘遺存図（1/100）

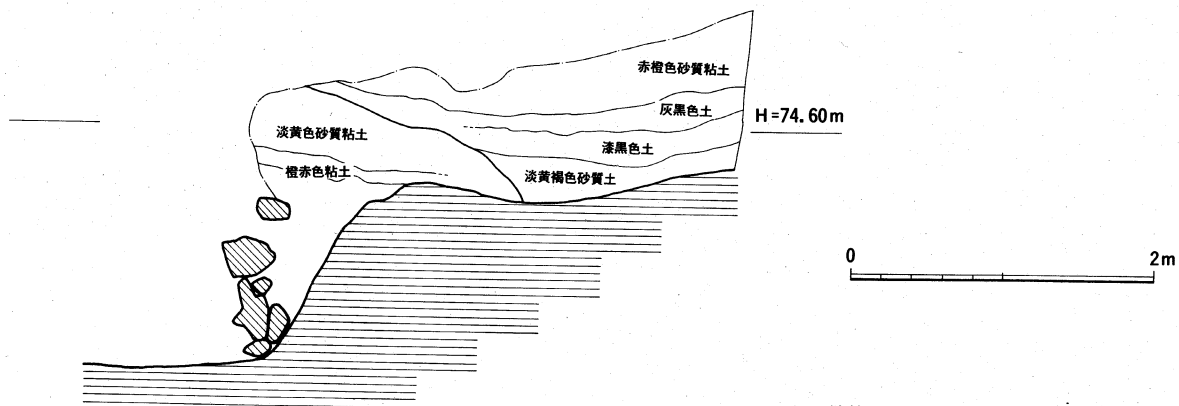
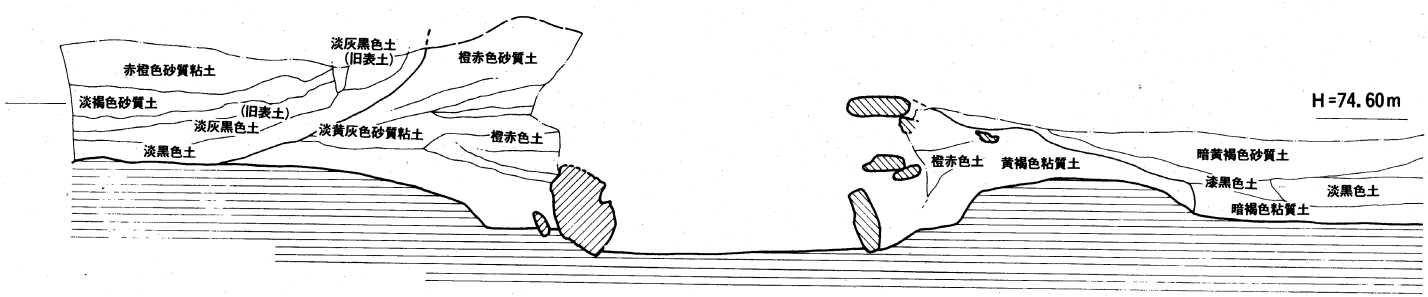


Fig.38　N群第5号墳墳丘土層断面図 (1/50)



これより以上の墳丘部では東側では東側で石室構築石材に片寄せて下層より、淡黄灰色砂質粘土ー橙赤色砂質粘土が互層となり積まれ、現存する墳頂部は橙赤色砂質粘土が大部分を占める。

また西側では整形面上での黄褐色粘質土の上部に橙赤色砂質粘土を積んでいるが、流出のためか墳高は僅かである。

北側では丘陵上部からの土砂の流入が1m程あり、墳丘部の奥壁部分までの残りは良好である。盛土は矢張り淡黄色砂質粘土と橙赤色粘土との互層となっている。

築成後の墳丘は封土上面の各位置でも緩やかに埋没していったと考えられ、漆黒色土が共通して被覆する。そしてこれより上層には同様に砂質で差々色調の淡い土層の堆積がみられる。

また墳丘を被覆する最上層は、東側・北側では赤橙色砂質粘土であり、本層が殆ど地山と考えられる事から、これらが本墳の地山整形に関連する崩壊土である可能性が高い。

③　横穴式石室（Fig.39・40、PL.10・11）

本墳の埋葬施設は、石室主軸をN－48.5°－Wにとり、東南側に開口する単室の両袖型横穴式石室である。石室は天井部が既に無く、左側壁袖石も失なわれている。石室は正方形に近い玄室に細長い羨道がつく。

羨道は羨道部近くがいびつで、左側壁部で全長4.2m、右側壁部全長4.5mをはかる。そして石室の現存部は石室掘方内に全て収納されるものである。

石室掘方　掘方は地山整形掘削面上端線より東へ3m程のところで掘削している。

石室奥壁部では幅員が3.35mであるが、次第に狭くなり羨道部中位の位置でもっともすぼまり、これから羨道部へと開いていく。また掘方左辺部長は4.1m、同右辺部長では3.7mを残し、奥壁側高50cmをはかっており東側端部で10cm足らずと浅くなる。

石室はこの掘方内のほぼ中央に配置構築され、左側壁および右側壁部腰石の位置も同じ様に掘方端部に近く、これより墳丘裾部をめぐる列石がはしる。

玄室　本墳玄室は奥壁幅1.5m・玄門側幅1.65m、左側壁長1.6m・右側壁長1.65mをはかりほぼ正方形プランを示す。

玄室内床面は非常な盗掘を受けた結果、腰石下端面が露出して、配置した石材が不揃いの感じをあたえている。

また玄門袖石はかつて本墳が受けた石材採取時期に持去られている。

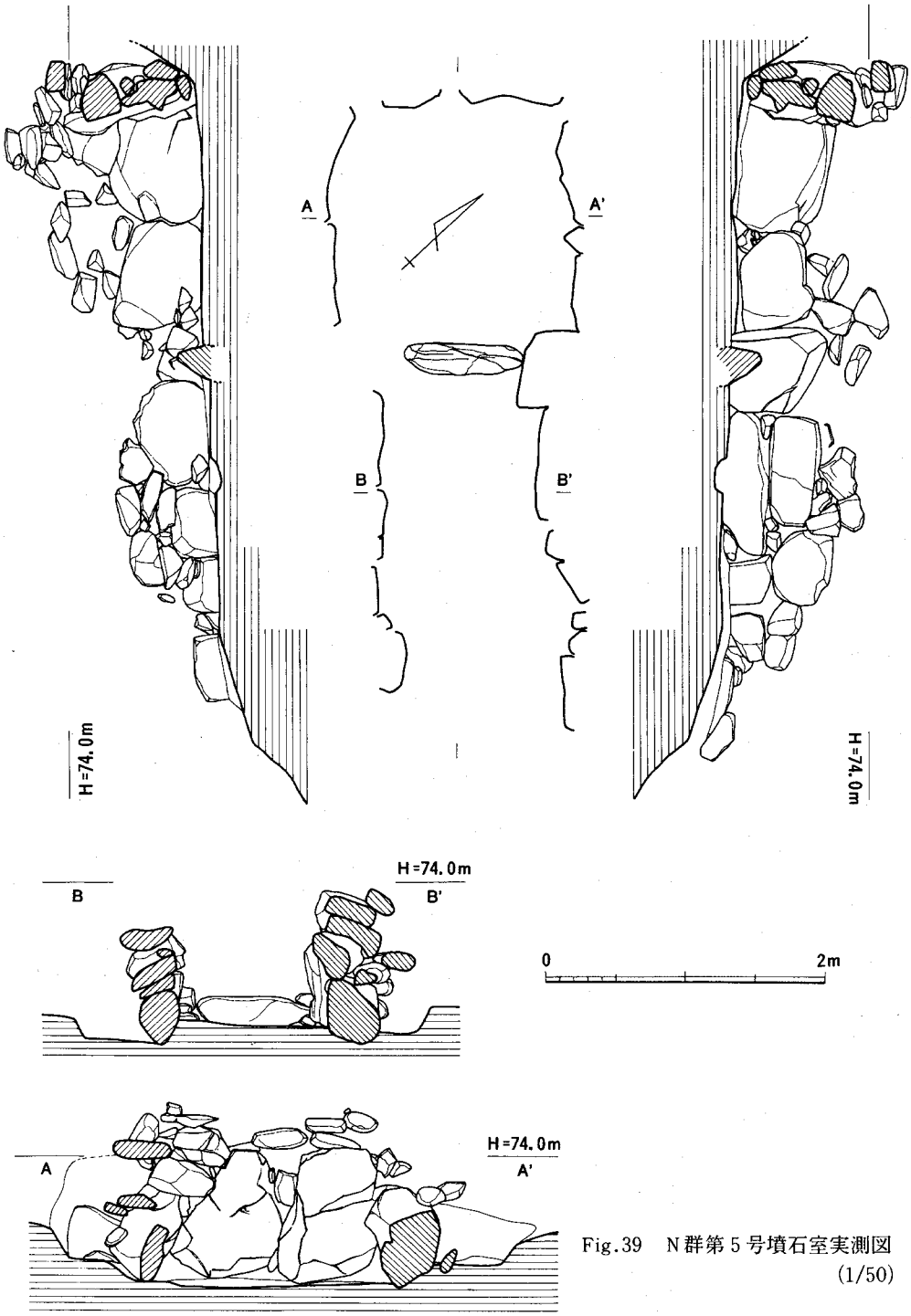


Fig.39　N群第5号墳石室実測図
(1/50)

玄室の各壁は各々２枚の腰石を開いている。奥壁部は高さ１ｍ程の角礫を差々内傾気味に使用し、これ以上は幅15cmほどの転礫を２段程積んでいる。原位置に残る石材があまりにも少なく技法的にも積み方を観察できない。

左側壁部は腰石高が床面より60～65cm程であり、奥壁と同様にこれ以上には小型の扁平転礫を使用して、床面より1.4ｍの高さにつみあげている。壁体は断面が内傾化しないところから更に上部から持ち送りによる石積みへと変化していくものと考えられる。

右側壁腰石も床面より70cm程の転礫を使用し、この上部には小型の扁平な転礫を３段程積んでいる。これらは床面よりほぼ１ｍに達するが、各礫間は割石の他に淡黄褐色土を充填し安定を計っている。

天井高は、壁体の遺存状況から少くとも1.5ｍ以上と考えられる。

羨道　羨道部は玄門部の梱石を羨道端から3.60cmの部分に配する。玄門部での幅1.07ｍ、羨門部でもほぼ同様の規模を計るが、奥壁部より2.6ｍ程にあたる両側壁部で幅員が1.4ｍとなって開き気味であり、左右不対称となる。

床面は梱石を境にして墓道側は下降し、羨門部腰石付近から急激に傾斜して段をなし墓道へ連絡するものと考えられる。腰石上の壁面は玄門側の遺存が良好である。

墓道　羨道部延長上は腰石にほぼ接する部分が半円状に段をなし、南東部に向って下降する。等高線の膨みの方向から墓道は東側に流れる渓流の流下方向にのびているものと考えられる。

閉塞施設　羨道部中央からやや玄室寄りに梱石を根石とした閉塞施設がみられる。

閉塞施設の位置は、玄室奥壁中央から羨道側へ2.6ｍを内側とし、同奥壁中央から羨道側へ3.9ｍを外側とする延長1.3ｍ程の規模である。

閉塞は床面からの高さ60cm程が残る。構築法は先ず梱石の外側に接して高さ

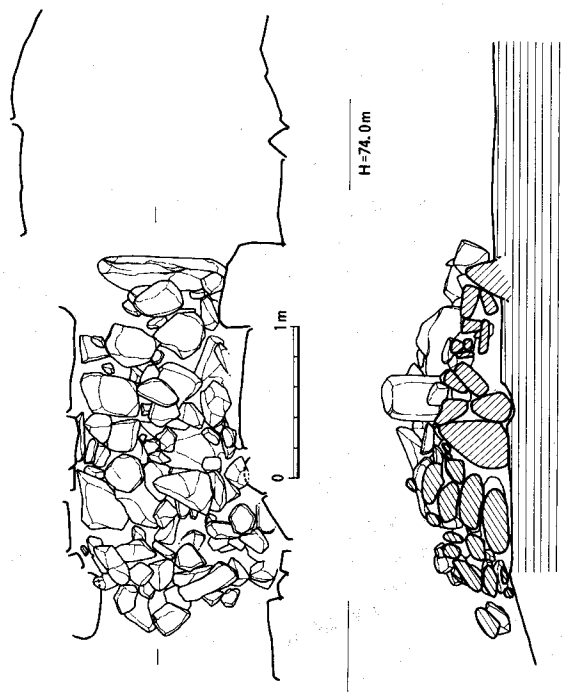


Fig.40　N群第５号墳閉塞施設実測図 (1/50)

45cm、厚さ30cm程の上部が尖り、底面の安定した転礫を据える。次にこの外側に大型の扁平な円礫を4段程積んでいる。石材は上部に従ってより小型となる。

またこれより更に外側では小型の円礫を無造作に積みあげている。

④　出土遺物（Fig.41・42、PL.56）

第5号墳出土の遺物はきわめて少量である。

玄室内（床面）では坏蓋（00503・00506）、墓道埋土では坏蓋（00507）、坏身（00501）がある。墳丘内では、坏身（00502・00504）が出土し、羨道埋土では坏蓋（00505）が見付かった。

坏蓋　蓋はかえりが無く、天井頂部付近にのみヘラ削りを加えるもの（Ⅰ類－00505・00506）、口縁部が長く外方に開き天井部との境に沈線を施すもの（Ⅱ類－00505）および器高が低く、内面にかえり、天井部に擬宝珠のつまみを付すもの（Ⅲ類－00507）とがある。

Ⅰ類―天井部外面以外は全て横ナデで、口径11.2～11.4cm、器高3.5～3.6cmである。天井部に同様のヘラ記号を有する。

Ⅱ類―天井部の殆どを回転ヘラ削り、他は横ナデで口径9.6cm、器高4cmをはかる。

Ⅲ類―低い器高で、口縁部内面のかえりは断面「コ」字形で端部より上部にある。中位に回

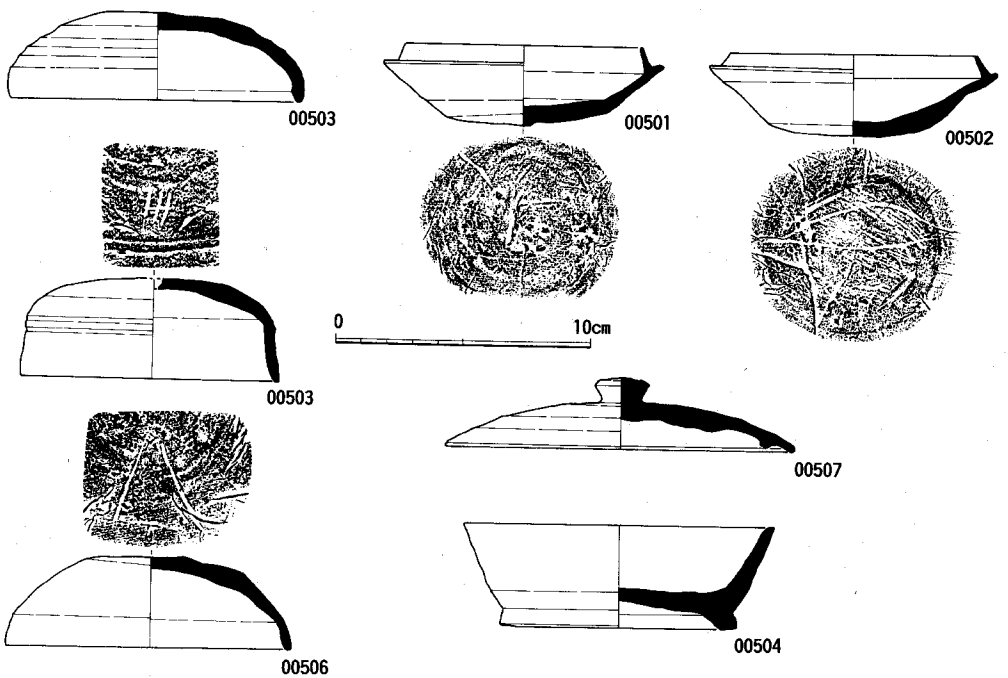


Fig.41　N群第5号墳出土遺物実測図(1)（1/3）

転ヘラ削りを残す。口径13.5cm、器高2.8cm をはかる。器色は暗灰色を呈する。

坏身　身は低い立あがりと短い受部を有する通常のタイプ（Ⅰ類、00501・00502）と高台坏（Ⅱ類、00504）とがある。

Ⅰ類―何れも立あがり部の長さは同規模で法量的区別は殆どみられない。外底部には同種類のヘラ描きによる記号がみられる。外底部はヘラ削り後に工具による荒いナデが施される。口径9.2～9.6cm、器高3.2cm をはかる。

Ⅱ類―肉厚な坏部に低い高台がつく。外底部がナデである以外は全て横ナデである。器色灰白色を呈し、焼成堅緻である。口径12.2cm、器高4.1cm をはかる。

副葬品では更に若干の鉄器類が出土している。刀装具（1）、不明鉄器（2）、刀（3）である。

刀装具（1）　扁平な円形をなし、ほぼ半分程が遺存し、内面に若干木質が残る。現存幅3.6cm、厚さ２～３mm を計る。玄室床面出土。

不明鉄器（2）　断面は厚い楔形をなし、直線的な背部が残る。現存長13.9cm、幅4.4cm を計る。刃器あるいは鋤先の可能性もある。羨道の閉塞と梱石間で出土した。

鉄刀（3）　刃部破片である。刀身部の剝落がいちじるしく、長さ7.7cm、幅3.3cm、最大厚0.6cm を計る。玄室床面出土。

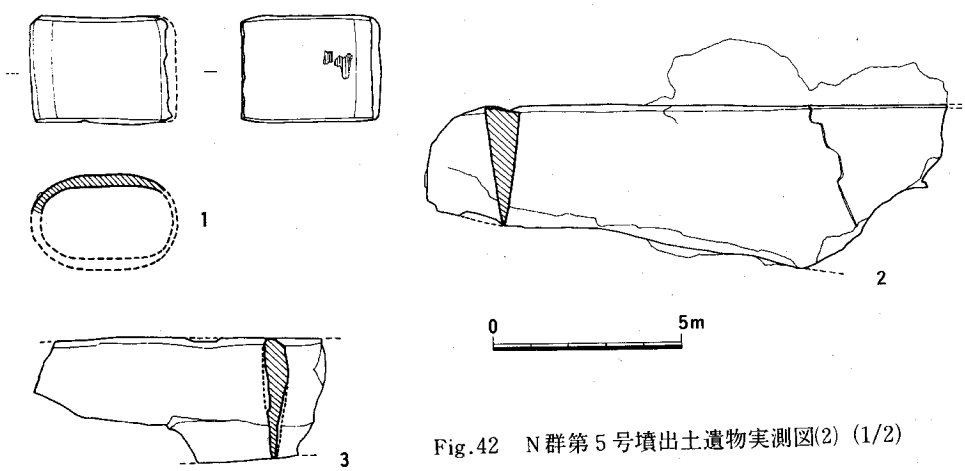


Fig.42　N群第５号墳出土遺物実測図(2)（1/2）

(6) 第6号古墳 (Fig.43～45)

① 位置と現況

第6号墳はN群のこれまでの各古墳が丘陵頂上部或は急斜面に位置するのに対し、裾部端の緩傾斜面の一角を占める。

調査前は石室部が大きく陥没して凹地となし人頭大の転礫が散乱していた。墳丘と考えられるのは東西ほぼ径10m、南北9mで、墳高は1.7m程の高まりで、全体に東側に流れていると考えられた。

本古墳の東側に隣接して石室構造の相似た第7号墳がある。

② 墳丘 (Fig.44、PL.14)

第6号墳は進入路の法面工事によって影響を受けるが南側墳丘裾部であるので石室の清掃の他に現況の道路に沿う延長10m、幅3m程の部分の原墳丘の露出を行なった。

地山整形 調査範囲が狭少なため地山整形を直接観察できる材料はなかったが、石室の開口部が南西側であり、同方行に丘陵部が上昇する点で整形のため掘削面は石室の西・西南側にあると考えられる。

墳丘 墳丘は明確な裾部が見出せず、南側への崩壊・流出があったものと考えられる。
また南側は等高線が東西方向に平行に走り、東側では隅部をつくってまがる。西側端部では緩い傾斜のため等高線が膨む。墳丘盛土は黄褐色粘質土を積む。

③ 横穴式石室 (Fig.45、PL.11・12)

本墳の埋葬主体は、石室主軸をN－56°－Eにとり、西南に開口する単室の横穴式石室である。石室はすでに天井石を失ない、石室左側壁は石材の崩落がいちじるしい。

石室は平面形が奥壁の差々幅広いバチ形を呈し、左右の側壁長はほぼ4.4m程であり、羨道相当部の石積みは床面よりやや浮いている。石室内は著しい攪乱にも拘らず須恵器類が左側壁付近を中心に出土した。

石室掘方 墳丘部以下の調査をおこなっていないので明らかでないが羨道相当部床面と玄室内床面との間にはほぼ50cm程の比高差があり、玄室収納部におさまる規模の掘方である可能性

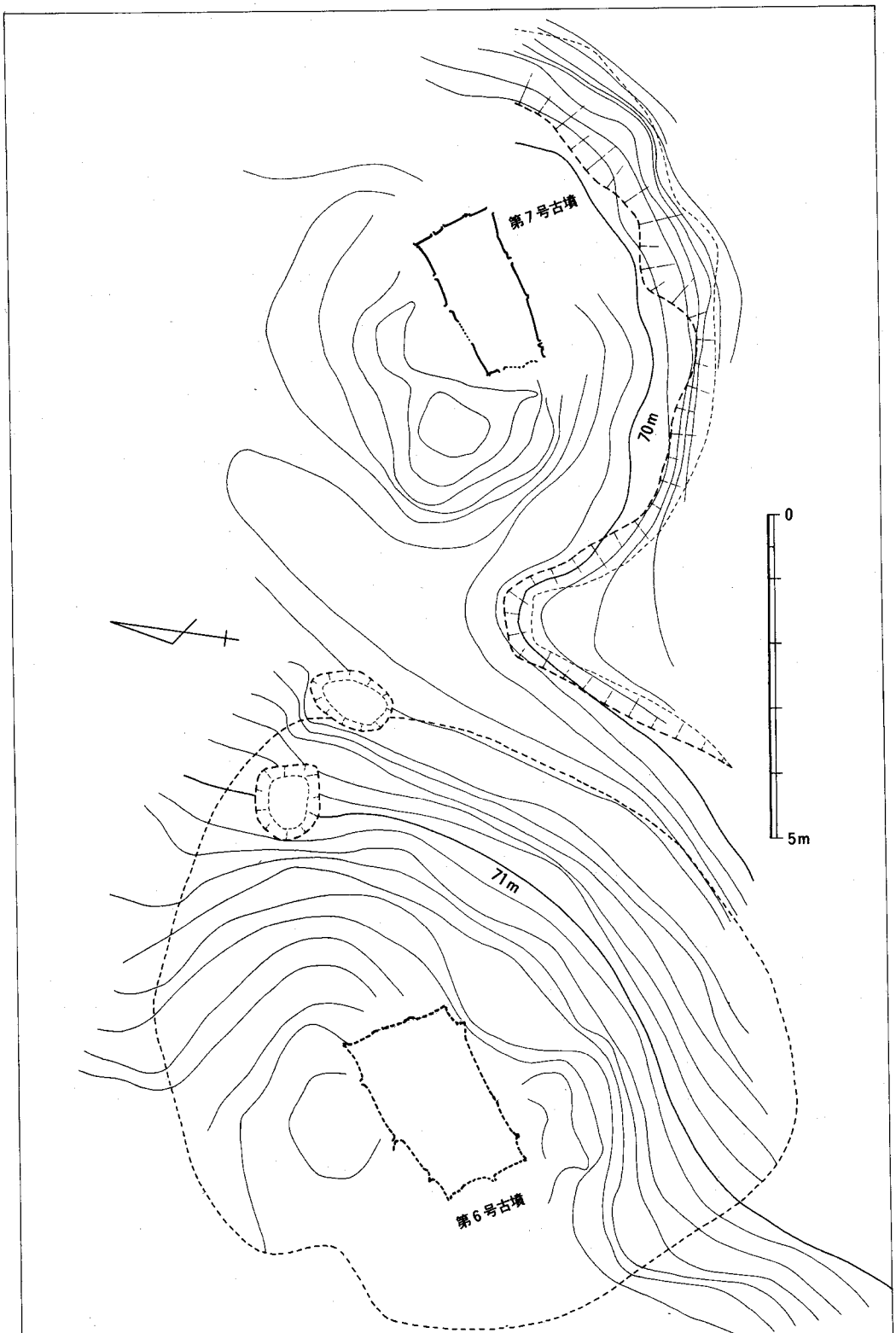


Fig.43　N群第6・7号墳現況測量図 (1/100)

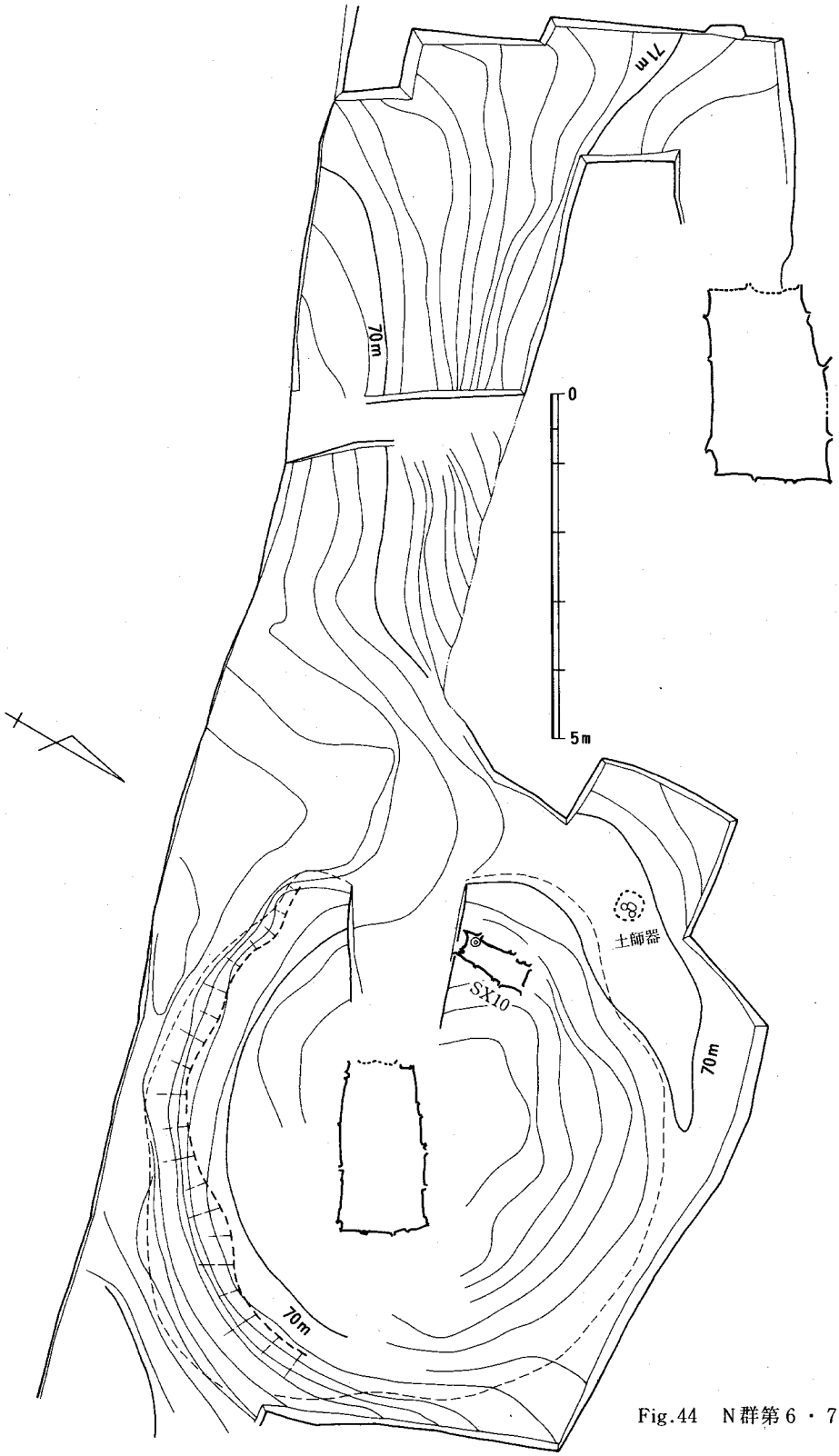


Fig.44　N群第6・7号墳丘遺存図
(1/100)

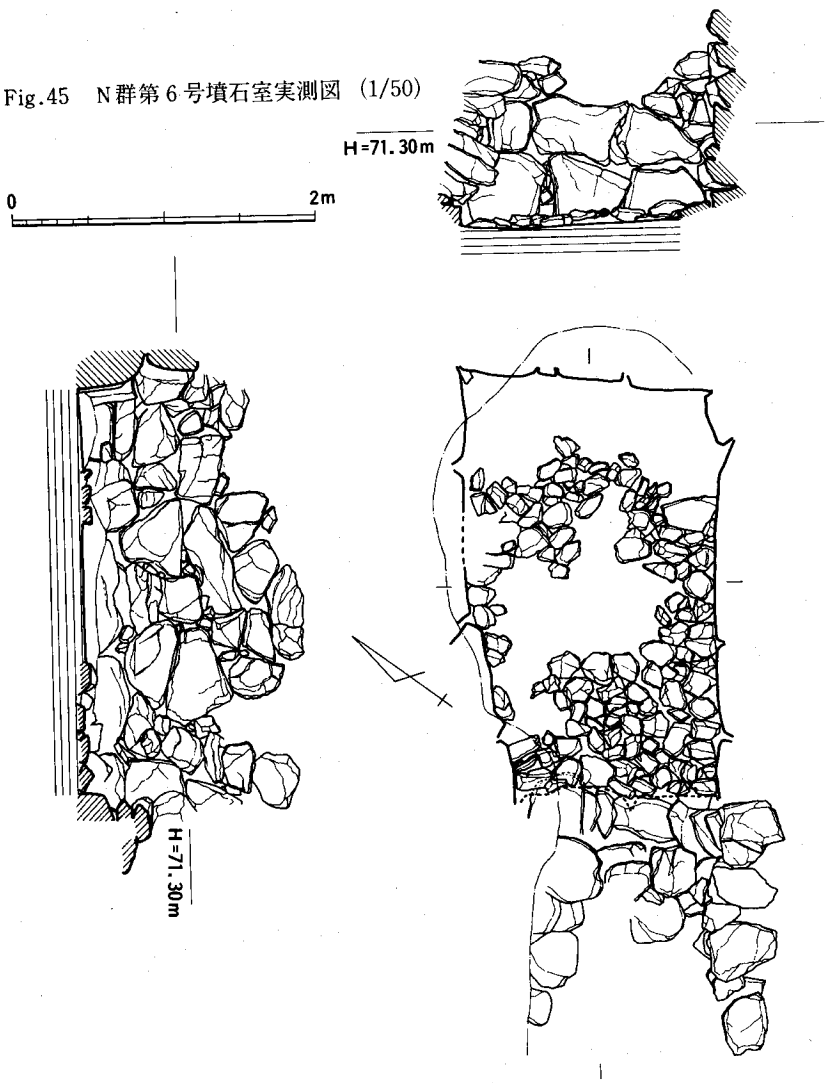
もある。

玄室　奥壁幅1.6m、羨道側壁幅1.35m、左側壁2.85m、右側壁2.65mを計る。

平面的プランは周壁各辺が不揃いで全体にいびつな長方形を呈する。また床面は全面石敷きで径が15～20cm程の扁平転礫を充塡しており、左側壁の羨道側では一部に丹痕跡がみられる。使用した石材は殆どが花崗岩礫であるが、他に少数緑色変成岩も用いている。

両側壁および奥壁の構成は、側壁で4枚、奥壁で3枚の腰石を使用し、羨道側の壁は両側壁

Fig.45　N群第6号墳石室実測図（1/50）



間に２石をおいて腰石としている。

奥壁は幅50㎝、高さ40～60㎝以上の比較的小型の転石を腰石とし、同様の石材を更に一段積み、隙間を小型の割石で埋める。これ以上では小型の割石で壁体を構築するものと考えられる、現壁高は床面より1.1ｍをはかる。

また右側壁では高さ30㎝強程の横長の花崗岩転礫を使用し腰石としているが、これ以上の壁体構築に際しても腰石と同一サイズの転礫が基本的に用いられる。壁面は残存の良好な壁中央部付近で床面よりの高さ1.4ｍを計るが、この壁面最高部においても壁面は所謂持送りによる石積みと異なり、垂直に近く仕あげられている。

右壁面の構成は、奥壁部と共通する手法をとり、基本的には目筋が横に通る煉瓦積みと考えられるが、部分的には小型転礫を集合させて積む箇所もあって全体的に粗雑な感じを受ける。

天井部高は周壁の立上りでは推定困難である。天井付近は急激な持送り積みとなろう。

羨道　玄室に続く羨道部は玄室側壁の延長上にあり、右側壁で1.7ｍを計る。

また左側壁は完掘していないので規模を知り難いが右壁と同様であろう。

羨道部の中央床面は、玄室内床面に比較するとほぼ50㎝程の比高で高くなり、墓道側に従って緩く傾斜する。

右側壁は長・幅が40×30㎝程の扁平礫を小口積みにして４段程積んでいるが、壁はほぼ垂直で最下部の腰石は羨道部床面よりやや浮いて積まれる。

墓道　羨道に続く墓道相当部は溝状に窪むなどの明らかな特徴はなく、地山面が緩く傾斜するにすぎない。

墓道相当部は調査区西端部付近で南側に折れ曲るものと考えられ、コンター図（Fig.44）によれば上端から調査区南側端まで比高差が1.4ｍで緩く窪んでおり、屈曲後は更に東側へまわり込む状況となっている。

閉塞施設　玄室羨道側腰石を根石とする閉塞施設がある。

閉塞は玄室側が奥壁より2.75ｍ、羨道側が同3.35ｍにあたり、延長60㎝が残るにすぎない。

また玄室腰石上に一列、これに接して羨道側に一列の計二列の石積みが残り、施設をなしている。羨道側では右側壁の現壁高に近いほぼ１ｍが確認できる。

閉塞に使用される石材は長径が30～40㎝、厚さ15～20㎝程の扁平転礫であり、何れも石材は花崗岩である。

④　出土遺物（Fig.46～50、PL.56～58）

第6号墳では比較的多くの土器類が玄室内より出土したのであるが、後世の石材採取による攪乱のために原位置をとどめたものは僅かであった。この中には蓋坏類がセットで3組（玄室右側壁上）であるとか玄室側壁に集中する一群を大まかに把え得たのみであった。

出土位置では玄室左側壁部（羨道寄り）で坏蓋（00608）、坏身（00620）、中型壺（00608）、提瓶（00606・00607）がある。

また前述の玄室右側壁の壁石上に積み重ねられていた蓋坏3セットは本来の原位置を留めるものか或は後世の石材採取に際して玄室内で目についたものを集めたものであるのか判断が困難であるが、何れにせよ開けられた形跡はないので組み合せとして考えて良かろう（00628－00614・00622－00615・00621－00618）。

他には玄室内で位置不明な土器類が多い。坏蓋（00623・00627・00626・00625・00609・00624）、坏身（00611・00612・00616・00619・00617・00613）があり、更に大小の𤮈（00631・00616）、中型甕（00632）および土師器甕（00601）がある。

次に墳丘北側表土で坏身（00605）の出土があり、墳丘中央部表土で土師器糸切り皿（00630・00629）があった。

a. 須恵器（Fig.46～49）

坏蓋　図示可能なものは10個体あるが、身とセットになるものが3個体あるのでそれらも含めて本項で記す。

坏蓋は何れも器高が高く、口縁部内面に緩い段をなす特徴を有する。天井部も丸く、口径も比較的大型である。この中で坏類の類別が可能な特徴は口縁部および天井部の境をなす突起あるいは沈線状の段の有無である。

従って茲ではこれを有するものをⅠ類とし、消滅したものをⅡ類とする。

Ⅰ類（00623・00627・00626・00609・00622）　00623は灰褐色を呈し、天井部全面回転ヘラ削り、天井部内面にあて具痕が残る。口径13.6cm、高さ4.2cmを計る。焼成やや軟質である。00627も天井部内面にあて具痕を残し、境は沈線状となる。天井部削りはやや天井部にあがる。口径13cm、高さ4.6cmを計る。器色は灰色を呈する。00626はやや器高が低く、残い器形となる。外面天井部の回転ヘラ削りの範囲は不詳で、口縁との境は幅ひろい沈線状となる。口径15.0cm、高さ4cmをはかる。器色灰色を呈する。00608は口縁との境の段はゆるい。天井部は殆ど回転ヘラ削りを残し、他は横ナデである。器色灰白色を示し、焼成堅緻である。口径14.7cm、高さ4.5cmを計る。00609は器高がやや浅く、口縁端部がやや外側に踏んばる。口縁部と天井部との境は細い沈線をなす。天井部の半分程に回転ヘラ削りを施す。他は内外面とも

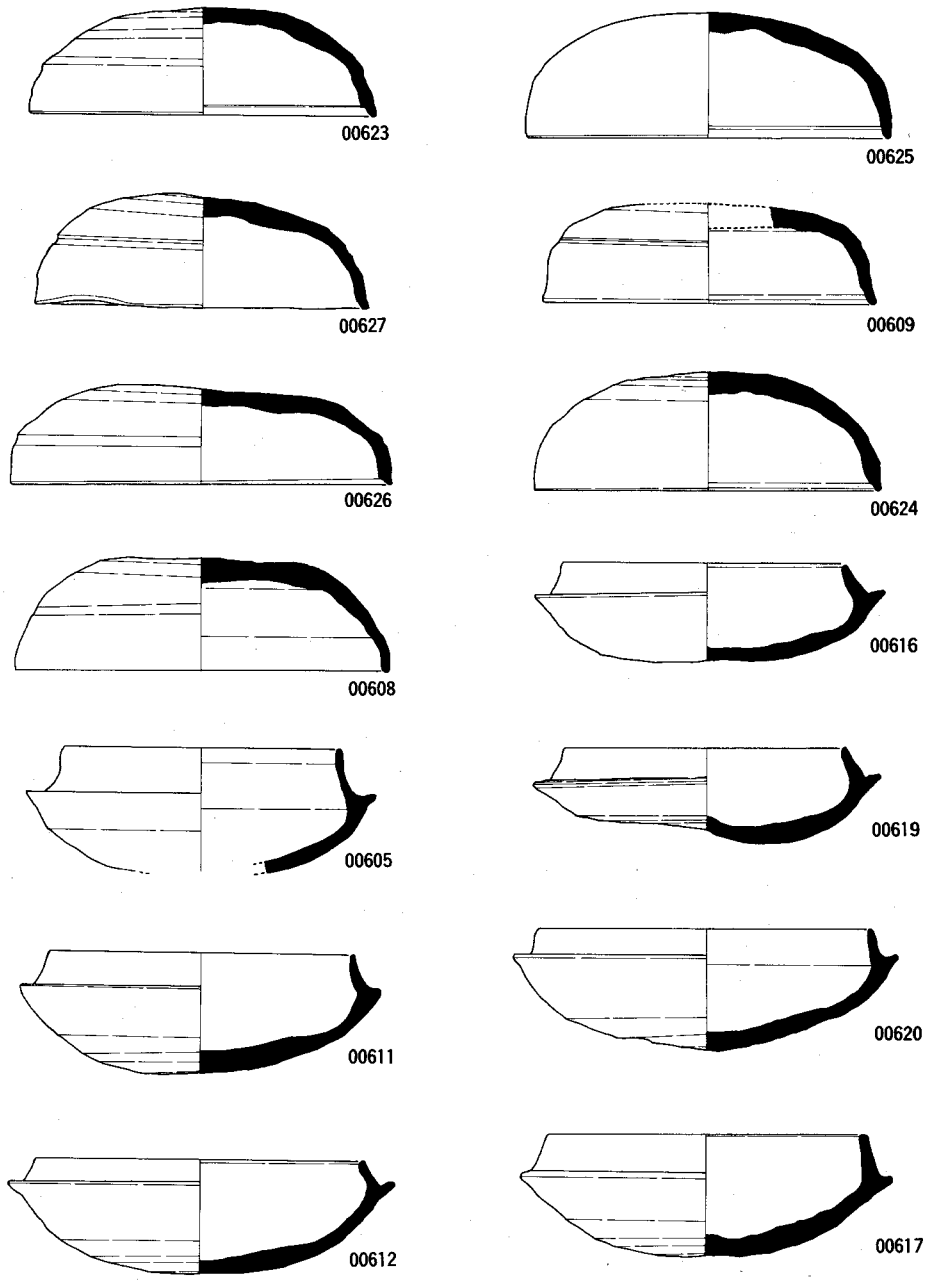


Fig.46　N群第6号墳出土遺物実測図(1)　(1/3)

0　10cm

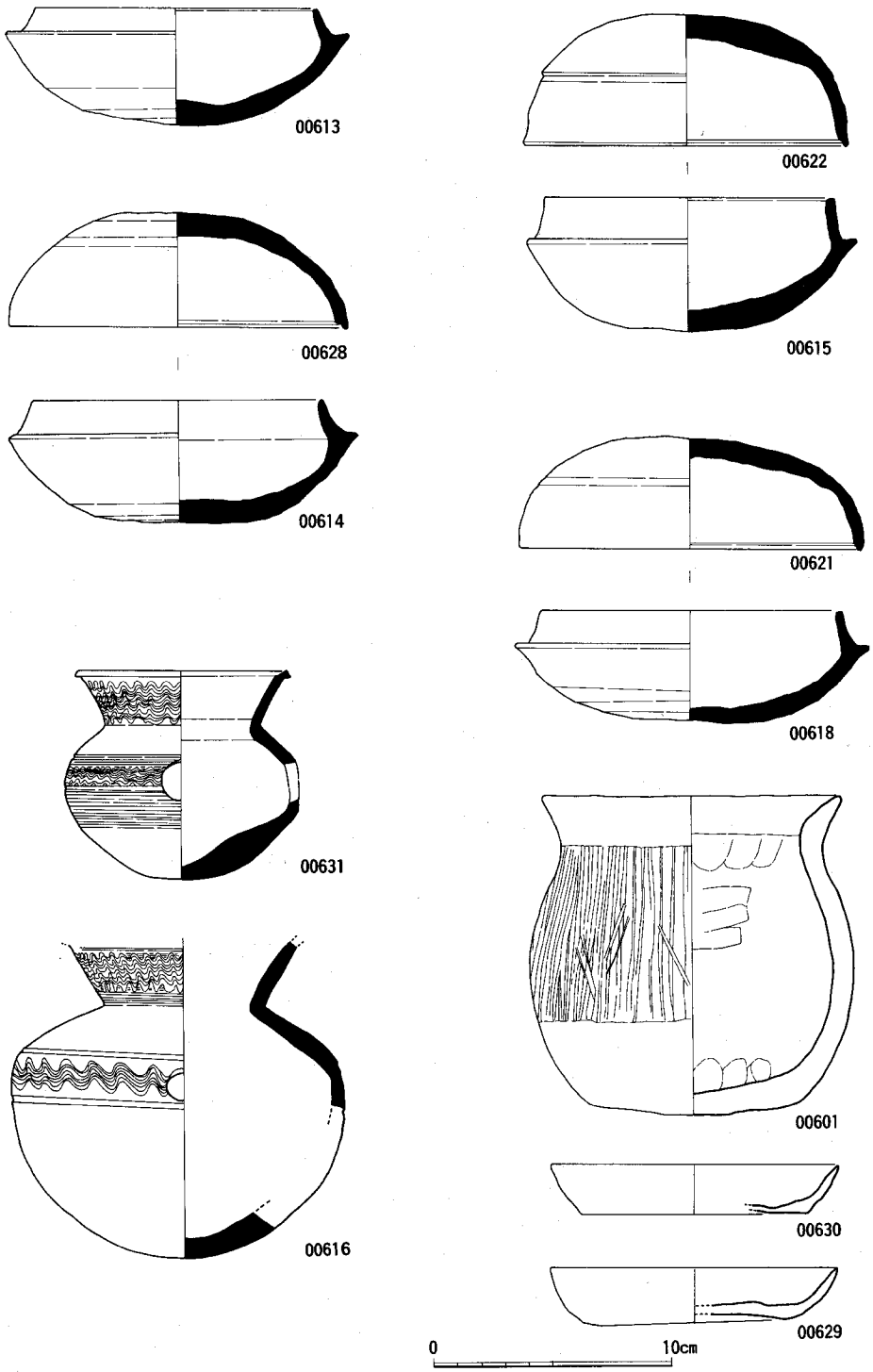


Fig.47　N群第6号墳出土遺物実測図(2)（1/3）

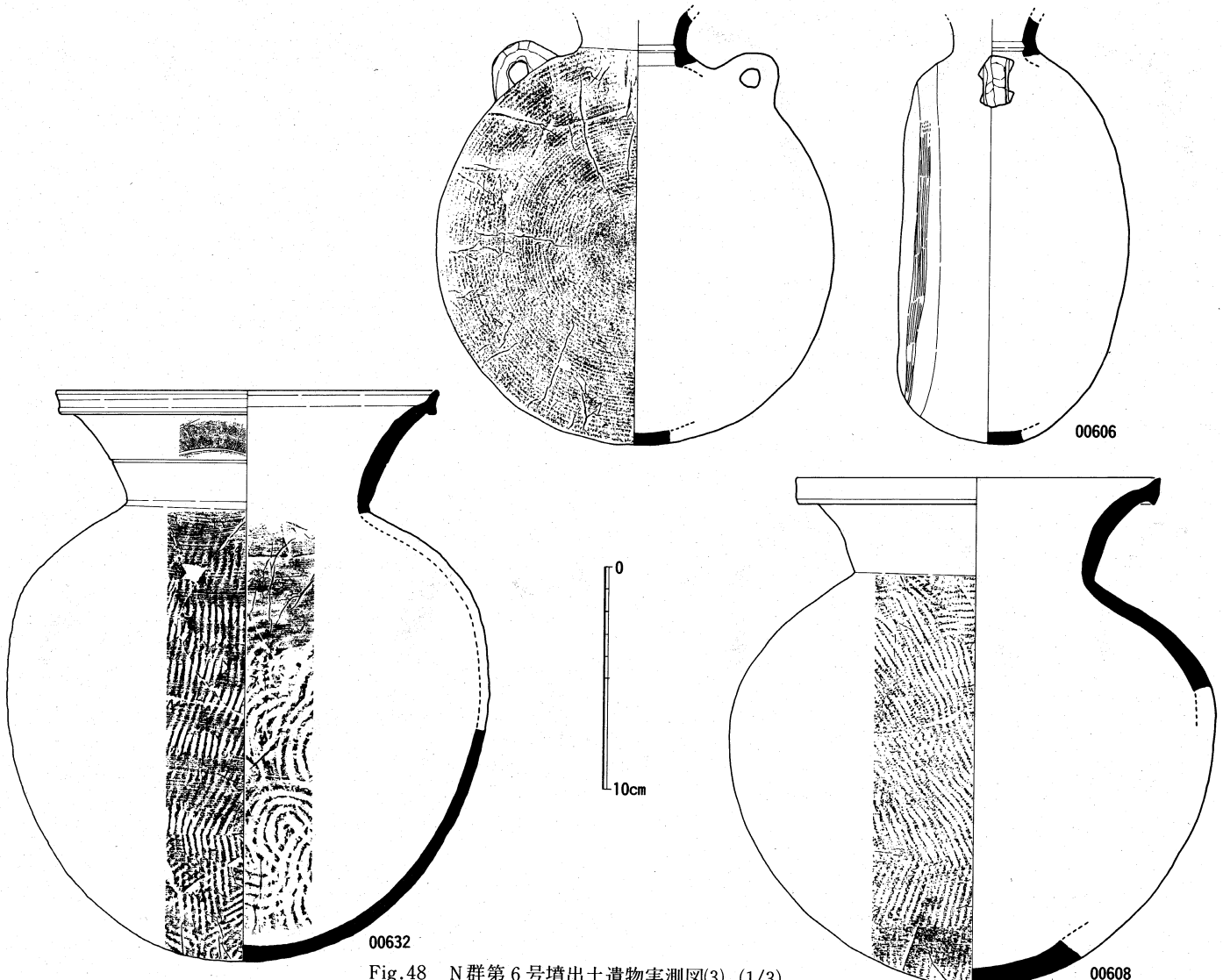


Fig.48　N群第6号墳出土遺物実測図(3)（1/3）

に横ナデである。器色は茶色味をおびた暗灰色を呈し、焼成堅緻である。口径13.1cm、高さ4cm程をはかる。00622は坏身00615とセットをなす。口縁端部内面は薄く、やや上部に段をなす。器中位が口縁部と天井部部の境となり、幅のある沈線を施す。天井部外面は全て回転ヘラ削りで後内外面ともに横ナデを施す。器色は淡褐色を呈し、焼成軟質である。口径13.6cm、高さ5.4cmをはかる。

Ⅱ類（00625・00624・00628・00621）

00625は口縁部と天井部とか顕著な境をもたない。器面は荒れが著しいが、天井部の全てを回転ヘラ削りし、他は内外面ともに横ナデである。器色は淡灰褐色を呈し、焼成は軟質である。口径14.4cm、高さ5cmをはかる。00624は器色暗い赤灰色を呈し、口縁端部付近が肥厚する。口縁端部はやや外方に開き、内面が小さい段をなす。天井部は丸味をもつがヘラ削りは約½程であり、他は横ナデである。口径13.6cm、高さ4.7cmをはかる。焼成は堅緻である。00628は器色淡い赤褐色を呈し、焼成は堅緻である。口縁部は器厚が均一に近く、内端部は低い沈線状の段をなす。天井部の回転ヘラ削りは⅗程である。他は全て横ナデである。口径14cm、高さ4.9cmを計る。00621はやや器高が低く、口縁端部内面には僅かな段が観察される。天井部の回転ヘラ削り痕は天井部にバンド状に集中している。他は全て横ナデである。器色淡褐色を呈し、焼成は軟質である。口径14.4cm、高さ4.8cmを計る。

坏蓋類は2類に分類できるが、それらは何れも天井部のヘラ削りは轆轤回転が時計回りであろう。

坏身　身は11個体がある。これらは法量的には類似するが、各部の特徴によって2類に区別できよう。器高が比較的高く、受部が斜上方に伸びて、口縁部立あがりの内面に段を有するもの（Ⅰ類）と比較的受部が短く、水平に伸び、口縁立あがり内面に段を有しないもの（Ⅱ類）が区別できる。

Ⅰ類（00612・00617・00613・00622）　00612は器色灰色を呈し、体部の½を回転ヘラ削りし、他は横ナデである。立あがりは短く内傾している。口径13cm、高さ4.6cmを計る。00617は立あがりが直立気味で高く、受部端が丸味をもっている。体部外面の⅔程に回転ヘラ削りを残し、この後内外面全体に横ナデを加える。口径12.8cm、高さ4.9cmを計る。器色淡灰色を呈し、焼成堅緻である。00613は器色暗い赤灰色を呈し、体部外面の⅔程に回転ヘラ削りを残す。他は内底部がナデのほか全体に横ナデ調整である。口径11.8cm、高さ4.8cmをはかる。00615は立あがりが直立に近く、全体に深い形態である。器色淡褐色を呈し、焼成は軟質である。体部外面の¾程に回転ヘラ削りを残し、内底部付近がナデである他は全て横ナデ調整である。口径12.2cm、高さ5.6cmをはかる。

Ⅱ類　00605はやや内傾気味の高い立あがりを有するが他に比較して特異である。器色灰白

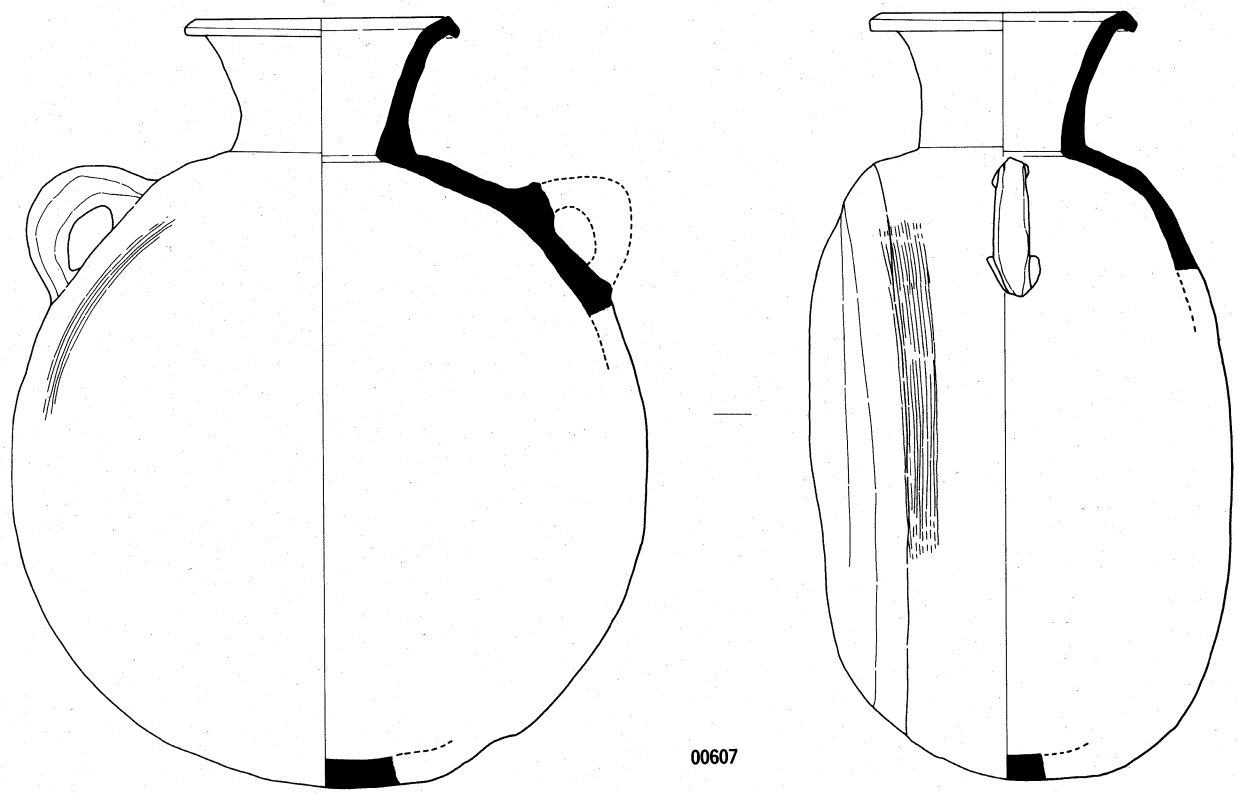


Fig.49　N群第6号墳出土遺物実測図(4)（1/3）

0　10cm

色を呈し、焼成堅緻である。体部外面の⅘程を回転ヘラ削りし、他は横ナデである。口径11cm を計る。00611は内傾する立あがりに短く、端部の丸い受部がつく。器色は外面淡赤灰色を呈し、体部外面の⅔程を回転ヘラ削りし、他は横ナデである。口径12cm、高さ4.8cm を計る。00616はやや口径が小さく、立あがり部は低い。器は外面に灰をかぶり、器色は淡灰色を呈する。体部外面の¾程を回転ヘラ削りする。また他は横ナデで、内面は特に強い調整のため段状をなす。口径11.2cm、高さ 4 cm を計る。00619は体部のひずみが非常に大きい。低い立あがり部は内傾し、受部との境は沈線状に窪む。体部外面は¾以上を回転ヘラ削りし、他は横ナデである。器色灰色を呈し、口径11.2cm、高さ3.8cm を計る。00620は立あがりが低く、受部は短く、水平に伸びる。器色は淡灰色を呈し、焼成は堅緻である。体部外面の⅔以上を回転ヘラ削りし、他は横ナデである。口径13cm、高さ4.8cm を計る。00614は短く薄手の受部にやや肥厚し高い立あがり部をもつ。立あがりは内傾度が強い。器色は暗い赤灰色を呈し、焼成軟質である。外底端部の一部に回転ヘラ削りを残し、他は全て横ナデである。口径12cm、高さ5.1cm を計る。00618は器色淡灰褐色を呈し、焼成はやや軟質である。器形は各部がよくまとまり、整美な感じを受ける。外底部中央部にナデを加え、その他の体部外面の½程に回転ヘラ削りを残す。他は全て横ナデである。口径12.6cm、高さ4.6cm を計る。

瑞（Fig.47－00631・00616）　何れも玄室内で出土したもので、大小に区別できる。

00631は外開する短い口縁部を有し、胴部は全体的に丸味に乏しい。口縁端部は完結し、このまま小さく三角形をなし、垂れ気味となる。また胴部の穿孔は器容量にしては大型である。器面は孔上部に一条の沈線を施し、口縁部全面および胴部中位も幅 1 cm 程の細かい波状文で埋める。胴部の施文は胴部中位に残るカキ目調整後である。また胴部下半は平行タタキを加えた後ナデ消す。器色は灰色を呈し、焼成堅緻である。口径8.6cm、高さ8.8cm をはかる。00610は口縁部を欠失する中型の瑞である。器面は胴部中位よりやや上った位置に上下 2 本の沈線を廻らし、この間を振幅の広い波状文を施し、頸部もカキ目調整後に振幅の狭い、細かい波状文で埋める。器色灰白色を呈し、焼成堅緻である。胴部最大径13.5cm、頸部径6.7cm、現存高13.3cm を計る。

甕（Fig.48－00632・00608）　00608が玄室左側壁部、他が玄室内の出土である。

00632は器色が淡灰～黒灰色を呈し、焼成は軟質な甕である。口縁部は外開し、端部は小さく伸びあがり、また下端部も垂れて、外面が窪む。胴部は半球状をなし、器壁も均一に整えられている。

器面は口縁部中位に一条の沈線文を廻らし、この上部に波長のゆるやかな細かい波

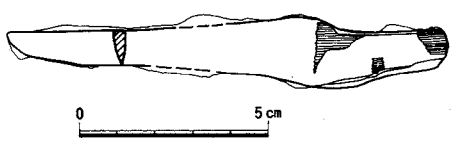


Fig.50　N群第 6 号墳出土遺物実測図(5)（1/2）

状文を施す。また胴部は上半部の⅔程度が縦方向の平行タタキ後に横ナデ調整を加えるが、特に間隔は不規則ながら1～1.5cmの間隔をもって幅5～8mm程の横ナデを加える様は恰も平行沈線を意識しているかの様である。またこれ以下の胴部は擬似格子状のタタキのまま放置される。内面は口縁部か横ナデで、胴部は荒いあて具痕を残し、上部の一部をナデ消す。また内底部にヘラ削りを加える。口径17.2cm、高さ25.5cmを計る。00602は00632と似た口縁部形態をなす甕である。外面は殆ど窪まず、直線的となる。胴部はゆるく肩部をなし、底部はやや尖り気味である。器色暗灰色を呈し、焼成堅緻である。器面は外面胴部はカキ目調整後平行タタキを加える。また口縁部内外面は横ナデで、胴部内面がナデとなる。口径16.4cm、高さ22.8cmをはかる。

提瓶（Fig.48－00606・Fig.49－00607）　何れも左側壁部の出土で、大小が区別できる。

00606は口縁端部を欠く小型提瓶である。頸部よりやや下った位置に円環状の把手一対を付す。器面調整は口縁部内外面がナデ調整で、胴部背面は同心円状のカキ目であり、一部がナデ消される。また胴前面は一部に幅6mm中に8本の条線を単位とするカキ目が残るが他は全て粗雑なナデによって消し去られる。胴部内面は全面にあて具痕が残る。器色暗灰色を呈し、焼成堅緻である。現存高19cm、胴部幅17.9cm、同前後幅10.3cmを計る。

00607は把手の一部を欠失するがほぼ完器である。外開する口縁部は端部が折れて下方に垂れるが、シャープなつくりである。器は胴部前面・背面ともに膨らみの少ないもので扁平な感を受ける。器面調整は一部にカキ目を残すが、他は全てナデによる調整がいき届いている。器色は灰白色を呈し、焼成堅緻である。口径10cm、高さ30.1cmをはかる。

b. 土師器（Fig.47）

土師器は古墳時代に属するものは甕1点のみ（00601）で他は鎌倉時代以降の土師皿である（00630・00629）。

甕（00601）　短い外方に開く口縁を有し、器壁が1cm程度と厚い。底部は平底をなす。器面調整は外面で、口縁部が横ナデ、胴部が荒い縦刷毛目後に底部付近をヘラ削りする。また内面は内底部に指おさえが残り、胴部は横方向のヘラ削りが残る。器色暗褐色を呈し、焼成堅緻である。口径12.4cm、高さ13.4cmを計る。玄室内出土。

皿　何れも底部糸切り離しの皿である。調整は内底部にナデが残る以外は全て横ナデである。00630は口径12.2cm、高さ2.1cmで、00629は口径12.1cm、高さ2.5cmを計る。墳丘表土出土。

c. 鉄器（Fig.50）

刀子　玄室左側壁部で鉄鏃破片とともに出土した。全長11.6cmを残し、ほぼ完形であるが銹化が進んでいる。刃部長6.5cmで、断面は楔形をなす。背部幅3mmを計る。茎には木質を残す。

(7) 第７号古墳 (Fig.51～55)

① 位置と現況

７号墳は６号墳の東側10ｍに位置し、北西から南東に傾斜する丘陵裾部の緩傾斜面に営まれている。

調査時は、墳丘部は南東側が大きく削平を受け、閉塞施設の板状石材の頭部が露出した状態であった。また玄室部は石室が大きく破壊を受け、墳裾部とともに現代の護美投棄の場所となっていたため内部はこれらで半ば埋没していた。

墳丘部は林道開設による影響が大きく、西側で最高点が71ｍを計るものであった。

② 墳丘 (Fig.44・51、PL.15)

地山整形 調査範囲の制限のために丘陵斜面部の掘削状況については知り得ないが、墳丘北側裾部に廻る半円形溝や丘陵傾斜面の方向から考えると北－北西側から掘削されたものであろう。また整形時の床面は必ずしも平坦面をなさず緩い傾斜をなしている (Fig.51)。

墳丘 墳丘は前の南側へ緩傾斜をなす整形面上に直接積まれる。

本墳では石室を収納する掘方の形態が十分明らかでないが、石室腰石に近く地山面（黄褐色砂質土）の浅く段をなす部位がありこれが上端部を考えられ、墳丘の構築はこの段落ちと腰石裏面側を含む周辺部の埋積が第１段階である。埋土は暗褐色粘質土で、南・北側ではほぼ10～15cm程の層厚となっているがあまりしまりが良くない。

次にこの上部には黄褐色粘質土を積せて墳丘を形づくっている。この盛土は他に比してしまりが良く、基底面から南側で70cm、北側でも60cm程の残存がある。

墳丘平面は、東西で径８ｍ、南北7.5ｍを計り、北側に緩く南側で屹立する形状でほぼ円形に近いものである。また左羨道部に連絡する墳丘西側裾線には小型の角礫を使用する列石が廻り、この東側に石棺基１基が検出され、更に墳丘西側の凹地で土師器埦の一括埋納があった。

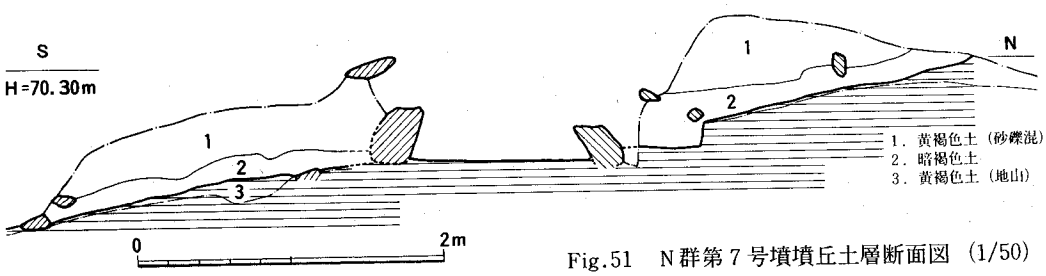


Fig.51 N群第７号墳墳丘土層断面図 (1/50)

③　横穴式石室（Fig.52・53、PL.15～18）

本墳の埋葬施設は、石室主軸をN－60°－Eにとり、西南に開口する単室の横穴式石室である。石室は左・右側壁とも3.6m程で、長方形の玄室に短い羨道を備えている。亦天井部は全て失われている。

玄室　奥壁幅1.2m、左側壁長2.3m、右側壁長2.4m、前壁幅0.95mを計る。

周壁の腰石には横長の転礫を使用し、奥壁3枚、左側壁4枚、右側壁3枚で構成する。

周壁は右側壁で高さ1mを残し、低い横長の腰石上にほぼ垂直に径30cm程の転礫を3～4段

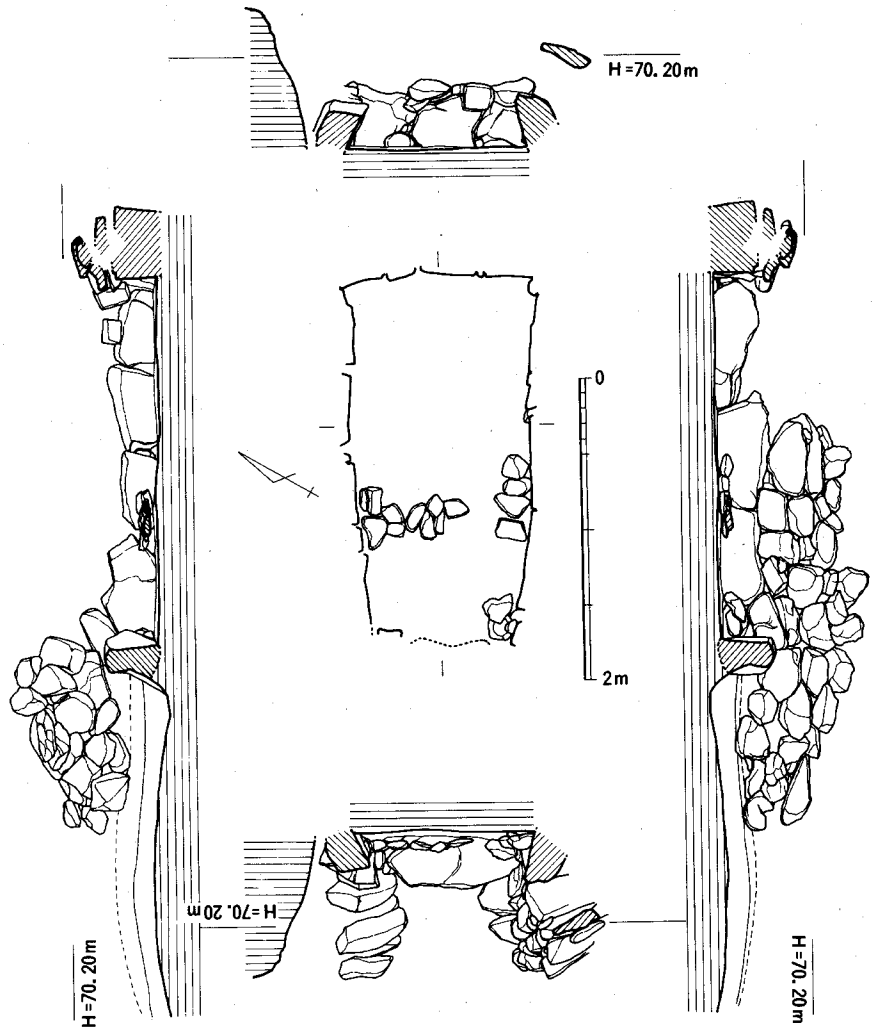


Fig.52　N群第7号墳石室実測図（1/50）

に積んでいる。腰石は両側壁で内傾気味に据えており、平面プランの上では第6号墳に近似するが、規模・石材ともにより小型である。また床面は扁平礫を使用した石敷きである。

羨道　前壁部腰石より左・右側壁とも全長1.2m程の短い規模であり、腰石下面は床面より20cm程浮いた位置におかれている。

また床面レベルは玄室前壁部が最も低く、羨道側に向って緩やかに上昇する。

羨道部側壁の構成は全体に粗雑であり、石材間の空隙が多く、玄室部ときわだった対照をなしている。

墓道　羨道部床面が側壁部西側で最も高く、これより墓道に至って緩やかに西に下降し、前壁より3m付近で南へ屈曲するものと観察される。

閉塞施設　前壁腰石を根石とする閉塞が存在する。

前壁腰石の羨道側に接して、幅70cm、高さ70cm、厚さ20cm程の扁平礫を玄室側に内傾気味に立て、この前面（羨道側）に幅50cmで径20cm以下の角礫を積む。

前面の角礫積みは前の扁平礫の頂上部付近に集中しており、下半部の空間は全て黄褐色粘質土で充塡している。従って閉塞施設はこの前壁部の板状石材に拠っていると考えて良かろう。

閉塞施設は玄室側壁部および天井部が欠失する中で現存部以上でも同程度の角礫を積みあげる形態をとるものと考えられる。

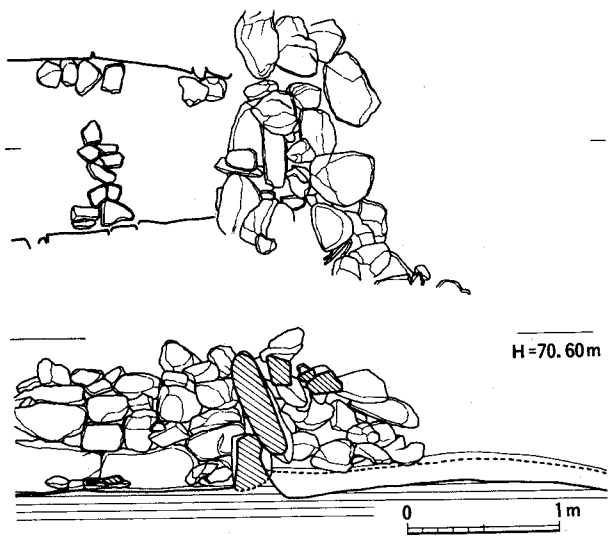


Fig.53　N群第7号墳閉塞施設実測図（1/50）

④　出土遺物（Fig.54～56、PL 59・60）

第７号墳の副葬遺物は主体部出土のものが殆ど皆無であり、墳丘および周溝部で出土したものが多い。

須恵器は玄室内１点（00714）、羨道部延長上墳裾部が５点（00702・00710・00707・00712・00711）、周溝西側２点（00722・00713）、墳丘西側裾部４点（00705・00718・00717・00721）などがある。また土師器は西側周溝内小ピットおよびその周辺で５点（00703・00704・00706・00708・00709）の埦類が出土し、墳丘表土および墳丘上で甕２点（00715・00701）がある。また墳丘封土内で高坏２点（00716・00719）が出土した。

a. 須恵器（Fig.54・56）

坏蓋（00702・00722・00714・00707・00705）　蓋は全て口縁端部内面が段状をなすか或は明らかな稜をなす形態をもつが、口縁部と天井部との境が突起状をなし、口縁部が直立気味のタイプ（Ⅰ類）と境が沈線状をなし、口縁部がやや外方に開くタイプ（Ⅱ類）とが区別できる。

Ⅰ類（00702・00707）　00702は口縁部と天井部との境が断面「コ」字形をなす。天井部外面の¾程を回転ヘラ削りする。他は横ナデである。器色淡灰色を呈し、焼成堅緻である。口径11.8cm、高さ4.5cm を計る。00707は突起部が断面三角形をなして尖り、天井部の⅔程に回転ヘラ削りを加える。他は内外面ともに横ナデである。器色は暗灰色を呈し、焼成堅緻である。口径13cm、高さ4.6cm をはかる。

Ⅱ類（00722・00714・00705）　00722は口縁部がやや外方に開き、天井部との境が低い段をなす。天井部外面削りはほぼ⅔に及び、他は横ナデである。器色暗灰色を呈し、焼成堅緻である。口径15cm をはかる。00714は全周の$\frac{1}{6}$程の小破片である。内湾気味に外方に開く口縁部は、内面が稜をなし、天井部との境は沈線となる。器色は灰色を呈し、口径14cm（復原値）を計る。00705は短い口縁部が外方にふんばり、天井部との境は痕跡的な突起が残り、この下が沈線状に窪む。天井部外面のヘラ削りは全体の¾程に及び、他は全て横ナデである。器色灰褐色を呈し、焼成堅緻である。口径14.4cm、高さ5.1cm を計る。

坏身（00710・00713・00712・00711）　身は立あがりの内傾度や受部・口縁端部の形態的特徴から２類に区別できる。

Ⅰ類（00710・00711・00713）　坏部が比較的深く、立あがりの内傾度が類似する。また受部が斜上方に伸び、口縁端部内面が段をもつ。00710は蓋00702とセットとなる。口縁部は坏内面に貼付けられる。器色淡灰色を呈し、焼成堅緻である。体部外面ケズリは⅔程に及び他は横ナデである。口径10.6cm、高さ5.2cm を計る。00713は器色暗灰色を呈し、焼成は堅緻である。

口縁部は坏内面に貼付けられる。体部外面の½程に回転ヘラ削りを施し、他は横ナデである。口径11cm（復原値）を計る。00711はやや小型であるが、器色暗灰色を呈し、力強い製品である。体部外面の⅔程に回転ヘラ削りを加え、他は全て横ナデである。口径10cm（復原値）、高さ4.3cm を計る。

Ⅱ類（00712）　器はⅠ類に比べて浅く、口縁端部は段をもたない。また受部は水平である。体部外面のケズリは殆ど全面に及び、この後に全体横ナデが施される。器色は灰色を呈し、口径10cm（復原値）、器高４cm を計る。

以上の蓋坏類はその殆どが轆轤回転は時計回りである。

甕（00718・00717・00721）　00718は口縁端部の小破片である。外開する口縁端部は丸く、直下に鈍い三角状の突帯を付す。また内面は低い段をなす。器色は赤灰色を呈し、焼成は堅緻

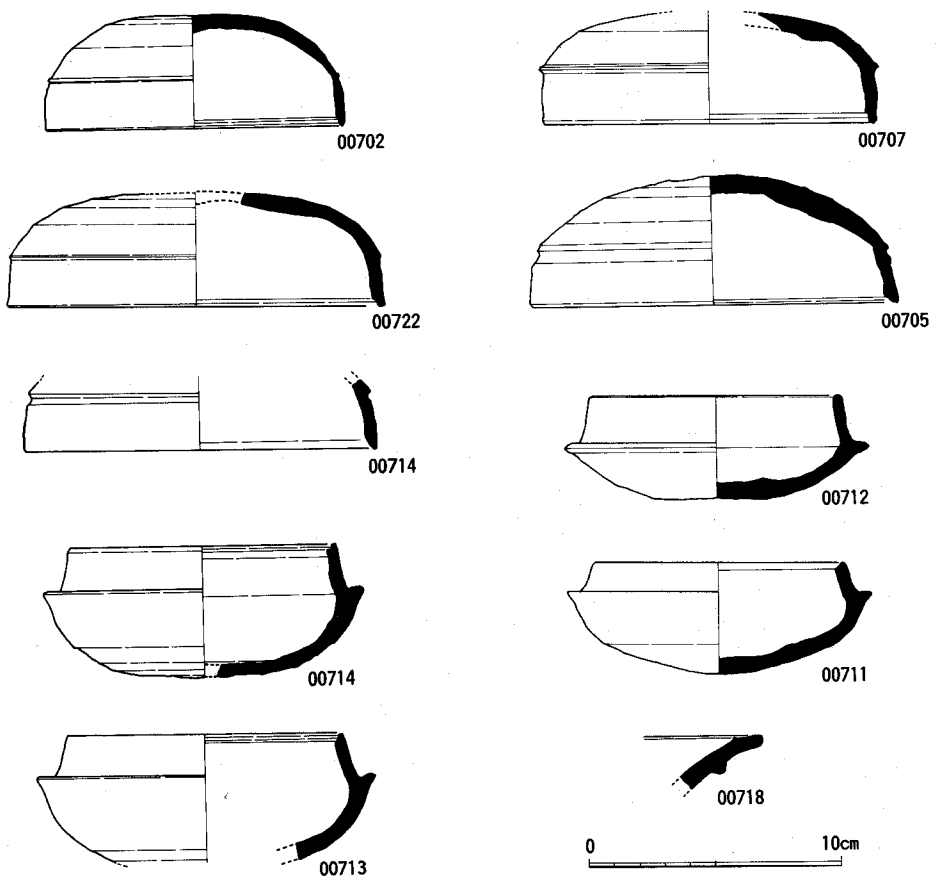


Fig.54　N群第７号墳出土遺物実測図(1)（1/3）

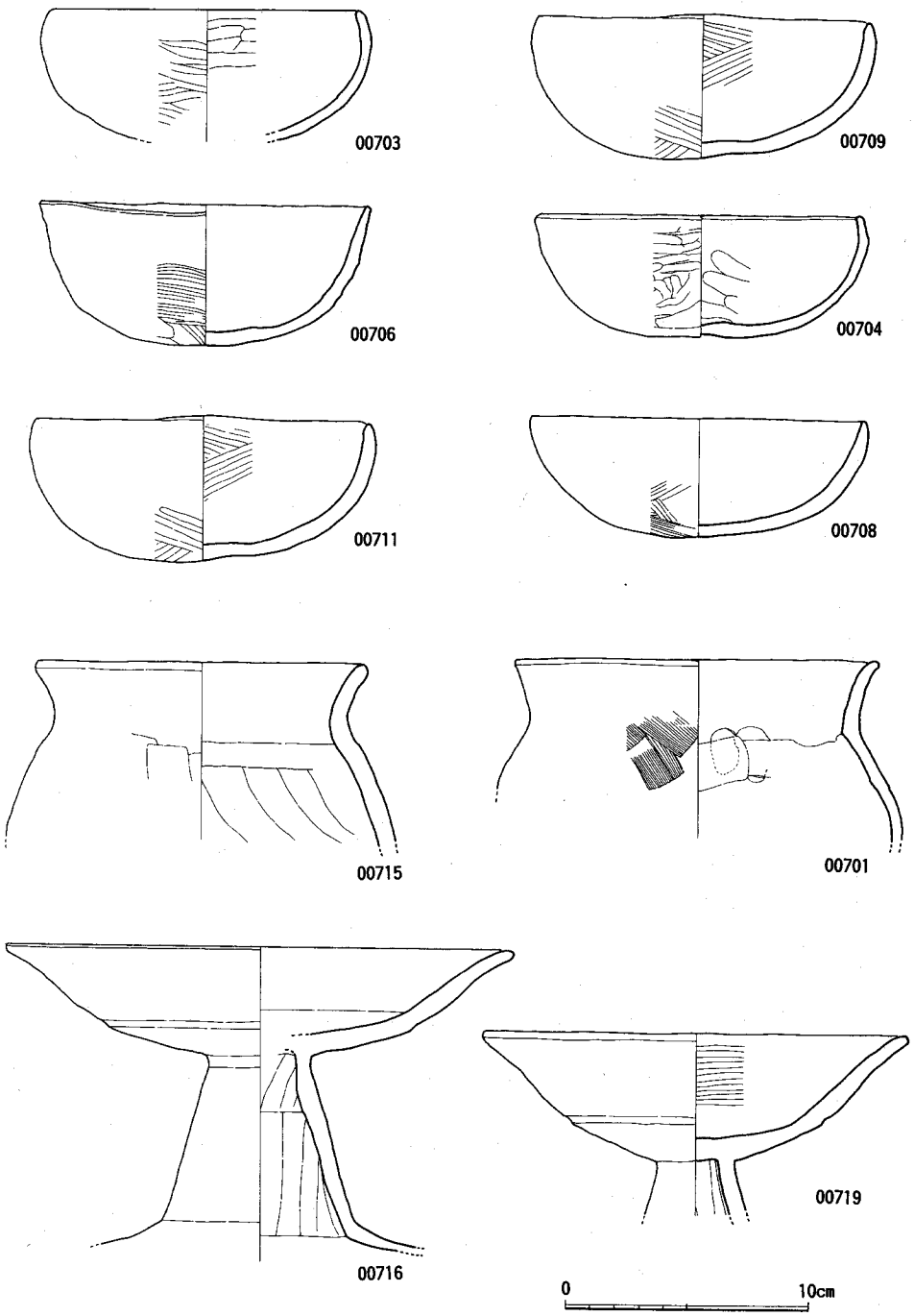


Fig.55　N群第7号墳出土遺物実測図(2) (1/3)

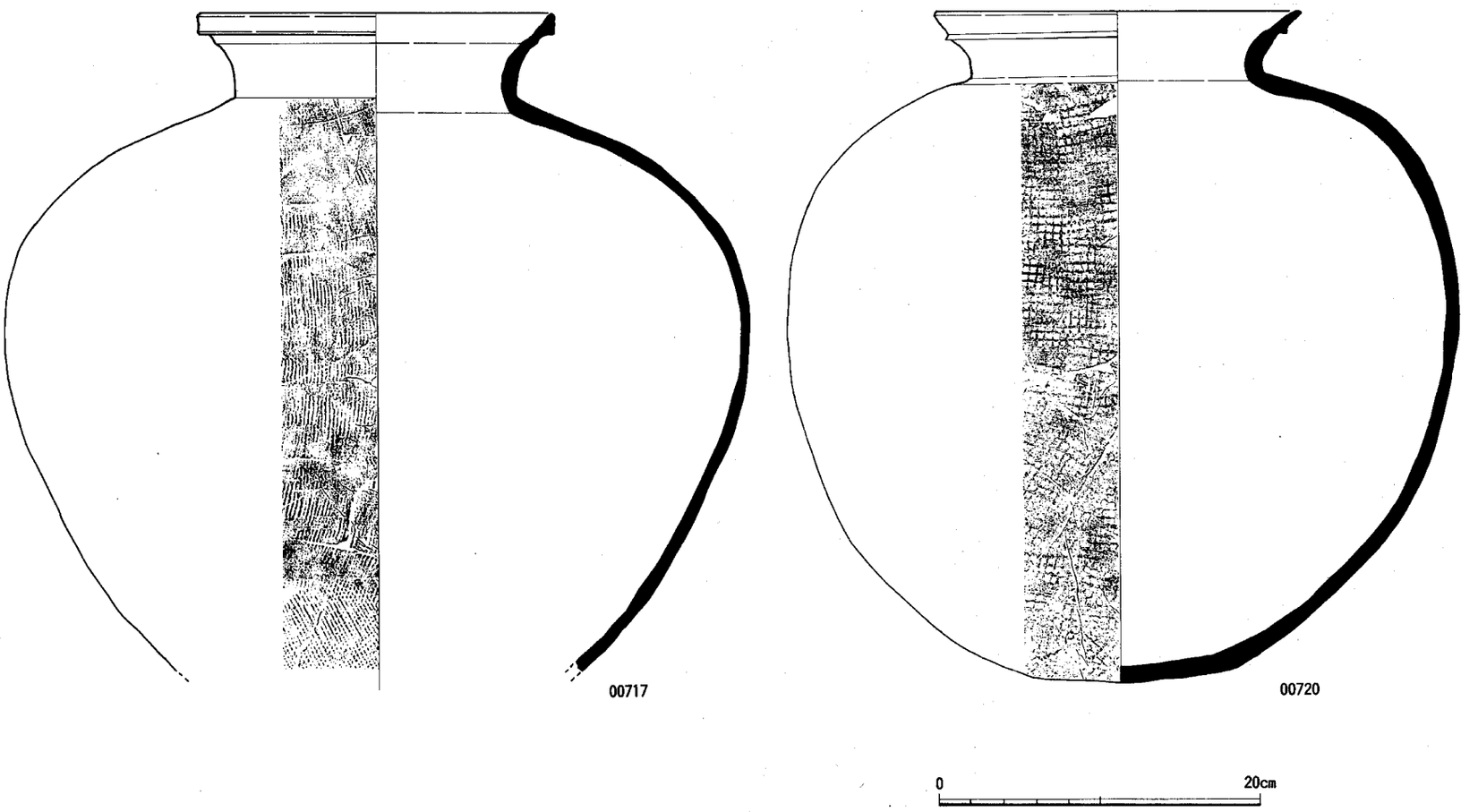


Fig.56　N群第７号墳出土遺物実測図(3)（1/4）

である。00717は胴部最大径が高い位置にある中型甕である。口縁部は低い直立部から外方に開き、上方にのびあがる。

器面調整は体部外面が平行タタキ後に不規則な横ナデを加え、恰も平行沈線の名残りの様に仕あげる。底部は擬似格子タタキのまま放置する。内面は細いあて具痕を残し、ヘラ削りを加える。器色淡灰色を呈し、口径22.4cm、頸部径18cm、胴部最大径46.5cm、現存高42.7cm をはかる。00721は頸部の短い半球状の胴部をもつ中型坏である。頸部端より外方に開く口縁部下に一条の鋭い三角状突帯を廻らし、二重口縁壺を想起させる。器面調整は外面体部が格子タタキを施し、他は全て横ナデを加え丁寧な仕あげとなっている。器色は暗い黄灰色を呈し、口径23cm、胴部最大径42cm、高さ42.4cm をはかる。

b. 土師器 (Fig.55)

土師器は器種として、埦・高坏・甕である。埦類は周溝西側に小竪穴をつくり一括埋納した可能性が高い。

甕 (00715・00701)　00715は膨らみの少ない胴部に外開する短い口縁がつく。外面は荒い縦刷毛目を施し、口縁内外面はナデ、胴部は指でつよくナデあげている。器色赤褐色を呈し、口径13.4cm をはかる。00701は薄手の甕で、外面に細い刷毛目調整を残すが、口縁内外面ともにナデで、胴部内面はヘラ削りが顕著である。器色暗褐色を呈し、口径14.9cm をはかる。

高坏 (00716・00719)　00716は浅い坏部と中空の脚を有する高坏である。脚端部を欠失する。器色は赤褐色を呈し、焼成は堅緻である。外面は丁寧なナデ調整で坏部と脚部との接点および坏部内面に一部横ナデがみられる。また脚部内面はヘラ削り後にナデを加える。坏部径20.8cm、現存高12.3cm を計る。00719はやや小型の高坏で脚部を殆ど失う。坏部は中位で弱い段をなす。器色は淡白色を呈し、口径17.4cm、現存高7.4cm を計る。坏部外面は上半が横ナデ、下半がナデ調整となる。また内面は内底部がナデ、これ以上は丁寧な横位のヘラ研磨となる。

埦 (00703・00704・00706・00708・00709)　埦は口縁部端の内傾度の弱い00706を除けば殆ど同形態・同規模のものである。

00703・00709・00704・00708は器面調整が内外面ともにヘラミガキ・ケズリを主とするもので口径も12.6～13.8cm、高さ4.9～6 cm の範囲にある。また00704は内外面ともに黒色顔料が塗布されている。00706は外面下半部に荒い横刷毛目を施し、他はナデによる調整を加える。淡赤褐色を呈し、口径13.4cm、器高5.9cm をはかる。

(8) 第8号墳 (Fig.57～65)

① 位置と現況

本墳は、N群の分布する丘陵部東端に位置し、これより以東では急激に高度を下げる。調査前は石室羨道部付近が半ば埋没した状態で開口し、閉塞施設と考えられる石材が多く露出していた。

また玄室内は盗掘による床面の掘りおこしが歴然としており、石敷き石材が散乱していた。

墳丘部は見かけ上東西20m、南北15m、墳高3.5m程を計り、頂部は平坦面となっている。墳丘南側は林道開設のために断ち切られる。

② 墳丘 (Fig.57、PL.19・21)

墳丘部の調査は墓園進入道路拡幅によって法面工事のため影響を受ける範囲についてのみ実施した。

部分的調査のため詳細には判別できないが墳丘は大型礫を含む黄白色砂質土地山上に直接盛土を行なっているものと推定される。

墳丘部は羨道部西側が最も保存が良好であり、羨道部東側に従って流失の度合いが大きい。

墳裾部は西側端に沿って幅2.5m程の浅い溝遺構が北西から南東方向に走り、東端部近くでも比高60cm程の段落ちが確認されている。このうち西側のものは溝内側線が現況での墳裾の若干内側に這入る点で原墳裾に近い位置の施設と考えて良かろう。またこの溝内側線上には小型の角礫を用いた列石が認められた。

墳丘斜面では多量の角礫が羨道部西側を中心に全面を被覆しており、葺石の可能性が高いと考えられたが、墳丘斜面上部にある一部を除き他は原位置を移動して転落堆積したものと判断された。

墳丘斜面の二次堆積礫群除去後に、羨道部西側では大型甕・高坏・壺・横瓶・短頸壺・蓋坏類がほぼ4群（埋甕Ⅰ～Ⅳ）に集合して出土した（Fig.57）。埋甕Ⅰ～Ⅳは大型の甕形土器を主に据え置き、この周辺および崩落した底部以外の各部破片に小型の複数器種を混じるものであるが、散乱のため必ずしも明確に埋甕各単位への帰属を把握できない。更に西側墳裾部溝遺構に接して石棺墓1基（ＳＸ02）、西側5mに土壙1基（ＳＫ04）を検出した。

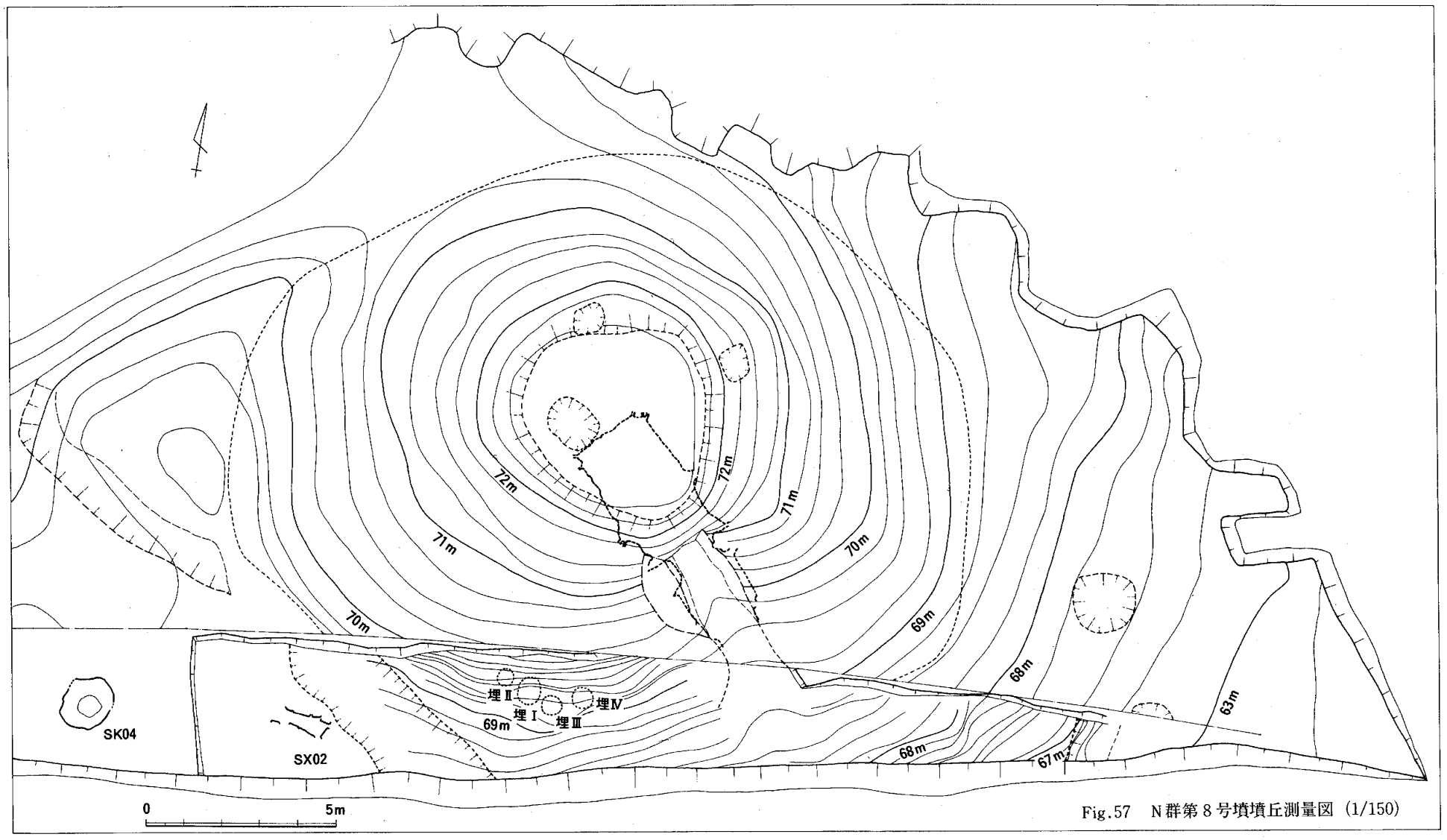


Fig.57　N群第8号墳墳丘測量図（1/150）

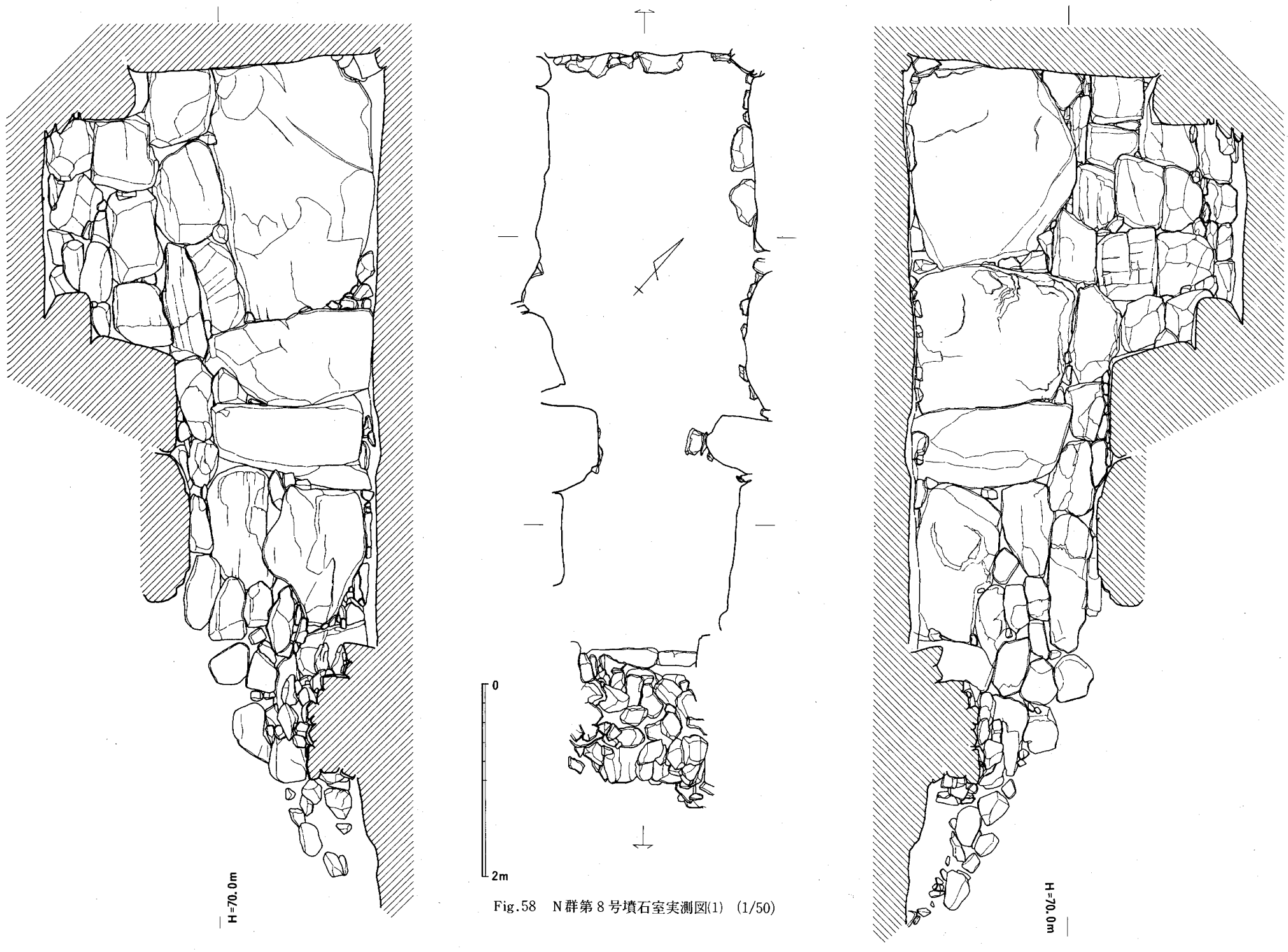


Fig.58　N群第8号墳石室実測図(1)　(1/50)

③　横穴式石室（Fig.58・59、PL.19～22）

本墳の埋葬施設は、主軸をN－43.5°－Wにとり、南東に開口する複室の両袖型横穴式石室である。

石室は左側壁部長8.5m、右側壁部長8.9mを計り、奥壁中心より6.5mの位置に閉塞施設を

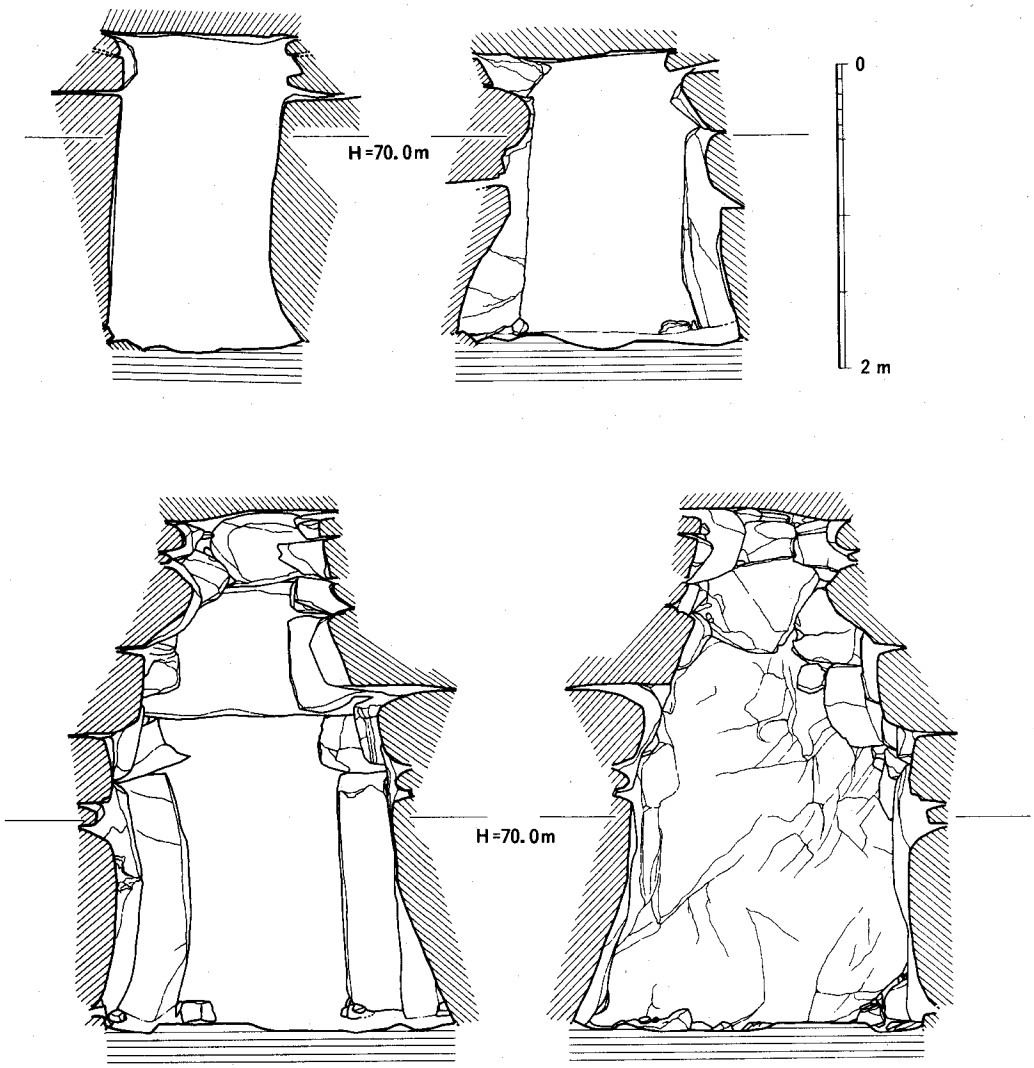


Fig.59　N群第8号墳石室実測図(2)（1/50）

残す。また天井石は閉塞部付近の一石が取り去られていると考えられ、他は完全に遺存している。

本墳石室は法面工事によって羨道側閉塞部以南を失なった。

玄室　盗掘により腰石下の根石までもが露出しており、これは後室に顕著である。

後室は奥壁幅2.1m、左側壁長3.55m、右側壁長3.75m、前壁幅2.1mを計る長方形プランとなる。腰石は奥壁1、左右両側壁ともに2枚で何れも巨大な花崗岩礫を使用し、奥壁のものを最大とする。尚天井高は床面より3.5mをはかる。腰石上では大型の角礫を横に目筋が通る様に持ち送り積みにして壁体を構成する。

前室は左側壁長1.5m、右側壁長1.6m程で腰石は大型転礫で腰石は大型転礫を1石据え、羨道側玄門に2石でなる梱石を配置する。

なお後室左側壁腰石および右側壁玄門側腰石にはノミによる石材表面の調整痕が観察できる。

前・後室を通して副葬遺物が原位置をとどめるものはきわめて少なく、僅かに前室左右側壁の腰石寄りで蓋坏類および鞍金具かと考えられる鉄器あわせて6点が出土したにとどまった。

閉塞施設　前室梱石を根石とする閉塞である。

玄室側は奥室中央から6.4m、羨道側は7.5mに位置し、延長1.1mを計る。羨道部床面は梱石より羨道側に向ってゆるく上昇するが、この地点で閉塞高は80cm程が遺存する。

施設は基部に近い部位のためか非常にしっかりした構築で比較的大型の角礫の使用がみとめられる。

④　出土遺物（Fig.60～65、PL.61～64）

第8号墳の出土遺物は主として玄室（前・後室）および羨道西側墳丘上で出土したもので占められ、内容は須恵器を主とし、土師器、馬具・鉄鏃などの鉄製品が少量混じる。

副葬品の出土位置は、後室のものが蓋坏類（Fig.60－000869・00873・00895・00872・00863・00871・00894・00870・00859・Fig.61－00865・00862・00900・00864・00858・00860・00855・00867・00866・00856・00861・00857）21点を占める。

また前室でも蓋坏類（Fig.60－00852・00903・00851・Fig.61－00902・00901）5点と鉄器類（Fig.65－1～4、馬器・武器類）が出土した。

更に最も大量に、しかも豊富な器種を出土したのは羨道部左側壁西側3～5mの墳丘上に埋

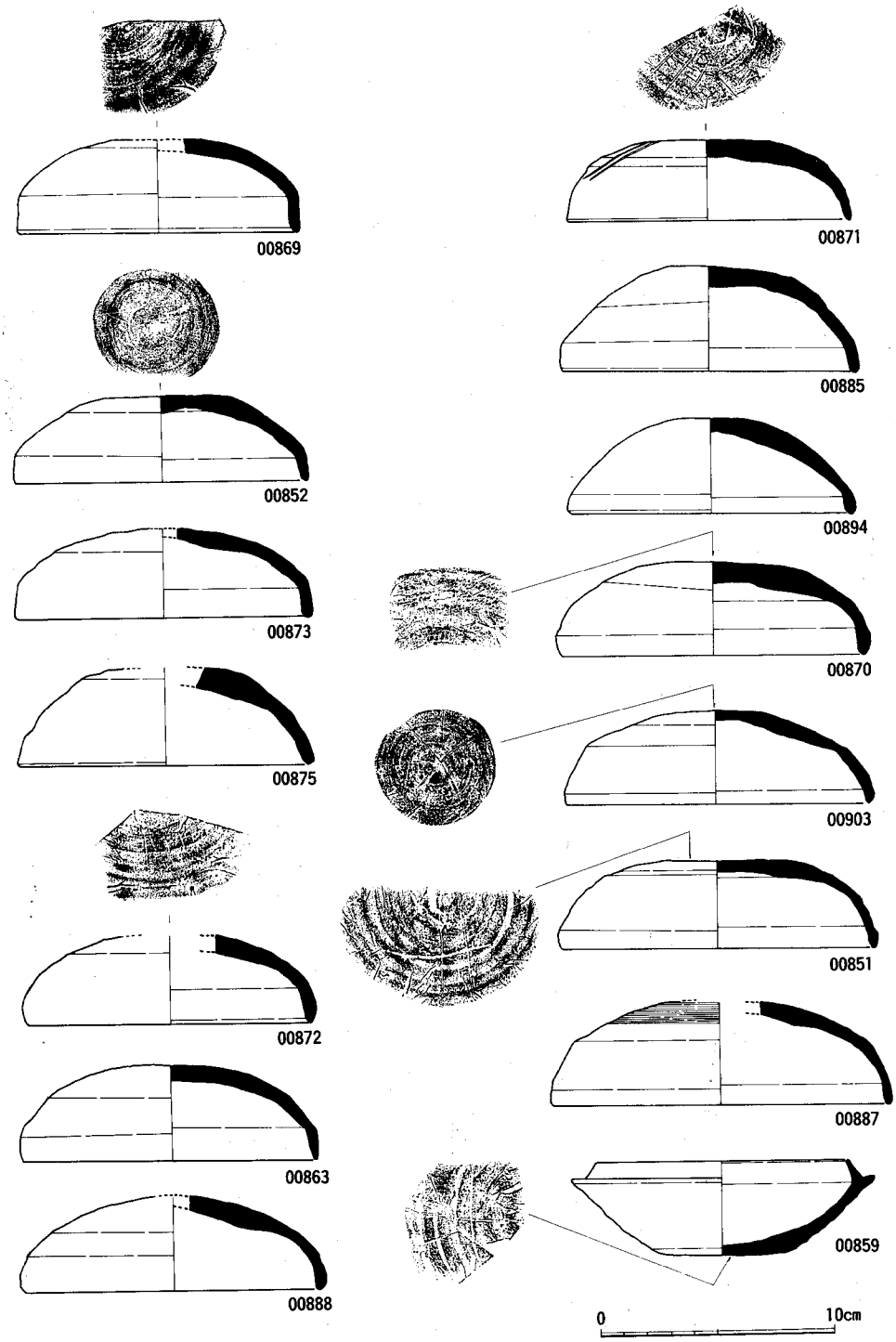


Fig.60　N群第８号墳出土遺物実測図(1)　(1/3)

置された一部土師器を含む須恵器の集積（埋甕と呼ぶ）である。これらは崩落した葺石群を取除いた後に露出したもので、当初は4群（埋甕Ⅰ～Ⅳ）あったが整理の際この群間では接合するものが多くあり、特に小型品では顕著であり、各群への個別的帰属を明らかにし得ないが、基本的には群の中心をなすものは大型甕と考えられる事から、現地での取あげ時の所属で考えておきたい。

埋甕Ⅰで確実なものは大甕00883（Fig.64）であり、埋甕Ⅰ～Ⅲと接合によって完器となった肩部にボタン状浮文を持つ大甕00914（同図）も同位置であった可能性がある。

次に埋甕Ⅱでは高坏00913・00910・壺00912（Fig.62）や大甕00878（Fig.68）などがある。

また埋甕Ⅲでは坏蓋00888・00885（Fig.60）、坏身00886・00884（Fig.61）、高坏00891・00909（Fig.62）・横瓶00880・小型甕00879・大型甕00882（Fig.63）などが知られ、他に平瓶00893・土師器高坏00906（Fig.65）が含まれている。

更に埋甕Ⅳでは坏蓋00887（Fig.60）、長脚二段透し有蓋高坏00889・長脚有蓋高坏00875（Fig.62）、また頸部に三角形様のヘラ記号を有する大甕00877（Fig.63）や大甕00881（Fig.64）などがあり、土師器では高坏00907・00908（Fig.65）がともなっている。

この他羨道部西側にあって埋甕遺構と関連すると考えられるものに長脚無蓋高坏00890（羨道西側葺石内）・小型鼎00853（Fig.62）や墳丘部出土の破片類の接合でなった大甕00905（Fig.64）などがある。

以下各出土位置に従って略述することとする。

後室出土遺物（Fig.60・61）

後室出土の副葬遺物は須恵器蓋坏類に限られる。

坏蓋（00869・00873・00872・00863・00871・00894・00870）　蓋はその形態から3類に区別される。（Ⅰ～Ⅲ類）

Ⅰ類（00869・00873）　器高が低く、口縁部が直立気味であり、施部を丸くおさめるものである。口径12.5cm前後・高さ4cm程を計る。

Ⅱ類（00895・00872・00863・00894・00870）　天井部があまり丸味を帯びず、口縁端部が肥厚して内部に巻き込む様な形態となる。口径12～13cm・高さ4cm強を計る。

Ⅲ類（00871）　天井部がやや分厚く、口縁端部に従って段を細くなる形態で、端部はやや尖る。口径12.2cm・高さ3.3cmをはかる。

坏身（00859・00865・00862・00900・00864・00858・00855・00867・00866・00856・00861・00857）　身は体部および立あがりの形態から3類に分類できよう（Ⅰ～Ⅲ類）。

Ⅰ類（00862・00855・00866）　不安定な底部から胴部は緩やかに伸び、低く内傾度の強い立あがりをもち、受部は斜上方に短く伸びる。口径11.5cm程、高さ4cm前後を計る。

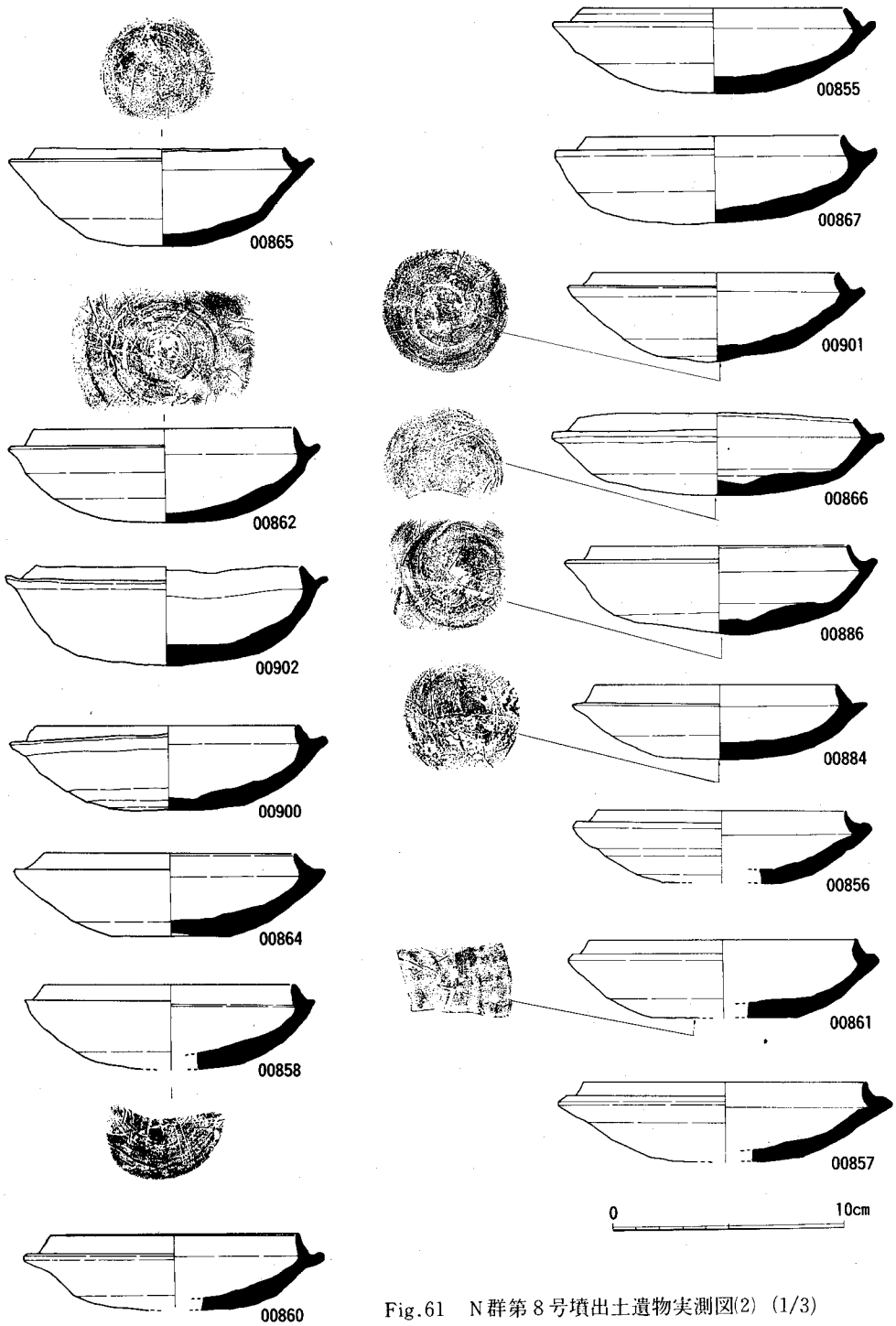


Fig.61　N群第８号墳出土遺物実測図(2)（1/3）

Ⅱ類（00859・00865・00900）　不安定な底部を有し、器高のほぼ中位から外方に直線的に伸び、立あがりは内径度が強く、受部は斜上方に伸びる。口径11cm・器高4cm前後を計る。

Ⅲ類（00864・00858・00860・00867・00856・00861・00857）　器高は非常に低く、立あがり部の矮小化と強い内傾化が顕著である。本類の中でも立あがり部が弯曲し、折れる形態（00856・00861・00857）かより後出のものであろう。

前室出土遺物（Fig.60・61・65）

前室出土遺物は前記した様に須恵器蓋坏および鉄器類であり、少量乍ら原位置をとどめるものが多かった。

坏蓋（00852・00903・00851）　00852は後室での蓋Ⅰ類に相当する。00903は同蓋Ⅱ類に、また00851は同蓋Ⅲ類にあたると考えられる。

坏身（00902・00901）　身は00902が後室坏Ⅱ類に当り、00901も同様である。また00901は蓋00851とセットをなす。

鉄器（Fig.65）

轡（1）　長径8.3cm、短径7.3cmの扁円形をなす円環と同径が7.7×7.3cmの円環を連結し、これに各々小円環をくぐらし、二連の引手をともなう。各部は何れも断面形か楕円形に近い。

引手金具（2・3）　何れも鞍金具か。3が保存が良好である。平面形が8葉の鉄板打抜き座金中央に頭部が円環状をなす引手金具を付ける。座金には径4～5mm程の孔4個を穿ち、座金中央の円環部の背部は扁平な頭部長方形となる金具で、2ヶ所に鋲留めがみられる。2も同一のもので現存長13.1cmをはかる。

鉄鏃（4）　2個体以上が固着したものである。鏃身は稜をもたず、基部は断面が扁平な平行四辺形をなす。両丸造箆被鑿箭式鉄鏃である。現存長4cm程を計る。

墳丘出土遺物（Fig.60～65）

墳丘では前記の様に埋甕遺構（Ⅰ～Ⅳ）とした土器集積部分が羨道西側にあり、出土遺物はこの遺構か或はこれに関連する地区で検出された。各遺物の発見時の所属については既に記したので茲では器種毎に説明を加える。

坏蓋（00888・00885・00887）　3点の出土であり、前二者が後室蓋Ⅱ類に属し、口径13.6cmを計る。また後者は同蓋Ⅲ類に相当し、口径14.4cmを計る。天井部にカキ目を施す。

坏身（00886・00884）　2個体が出土した。00886は立あがりが弯曲し、内傾度が著しい点で後室坏身Ⅲ類に相当するものであろう。また00884も立あがり部が矮小で、器高も低い点から同様にⅢ類に含めて良いと考えられる。口径は10.6・11.4cmをはかる。

高坏（00913・00890・00891・00910・00909・00875・00889）　出土高坏のうち前の5点は

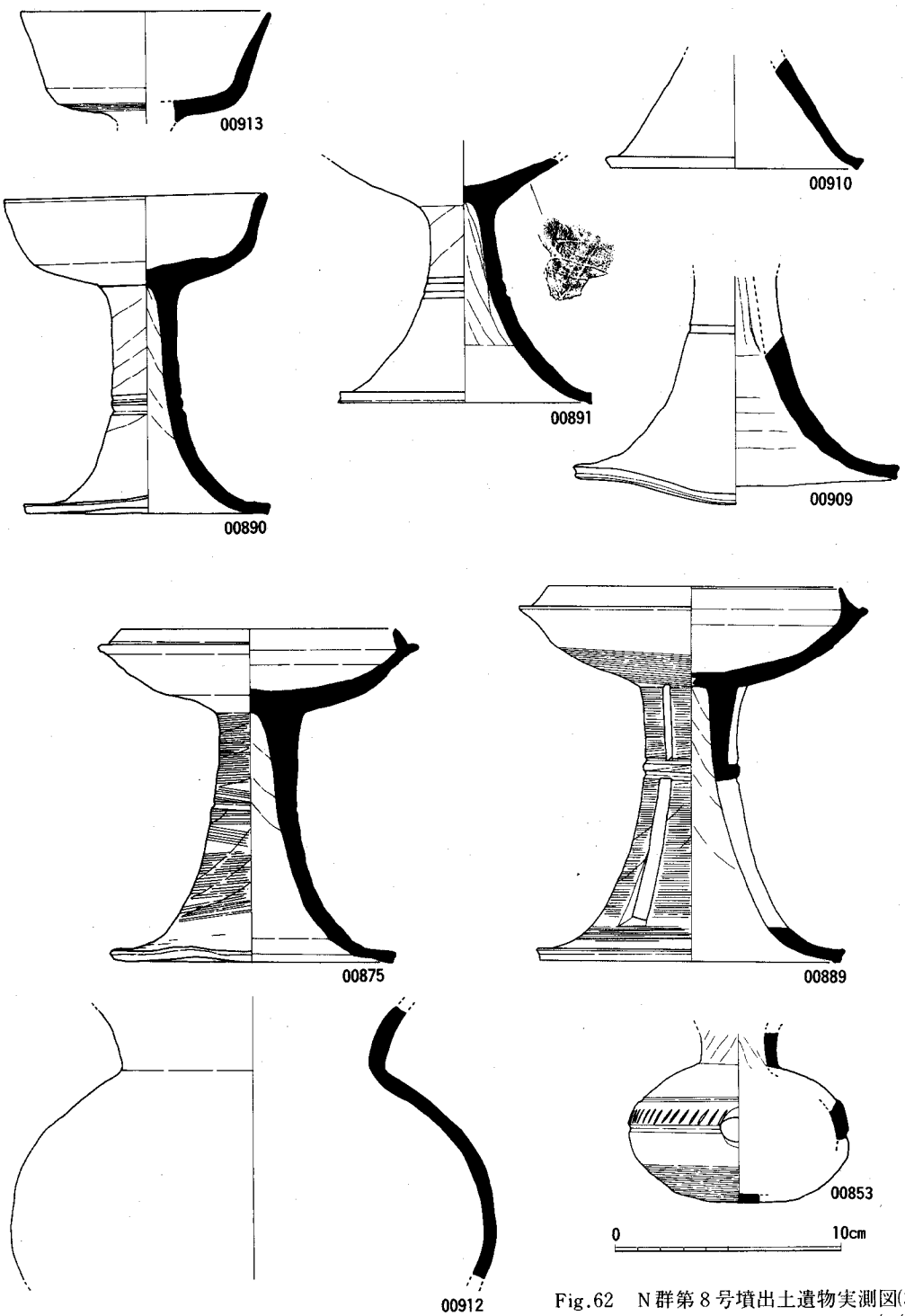


Fig.62　N群第8号墳出土遺物実測図(3)
(1/3)

無蓋無透しの長脚を有し、脚部中位に一条の沈線を施すもの３点ある。00913は坏底部にカキ目を施し、口径11cm をはかる。00890は灰白色を呈し、坏部外端に回転ヘラ削りを加える。他は横ナデである。口径111.4cm、高さ14.2cm を計る。

また後２点は長脚有蓋高坏であるが、00889は鈍い突帯をはさんだ上下に長方形透しを施す。併し上段のものは貫通しない。何れも坏部下端・脚部に荒いカキ目を施し、他は横ナデである。両者の法量は口径が12.2・12.9cm、高さ14.7・16.6cm を各々計る。

壺（00912）　口縁端部および胴部下半を欠失する。器面は内外面ともに横ナデを施し、器物灰褐色を呈する。復原頸部径11.6cm を計る。

䤈（00853）　器色が灰白色を呈する䤈である。器面は胴部中位とこの上部１cm 程の位置に沈線を施し、この間を篦描きの列線文で埋める。胴部下半は回転ヘラ削りを加え、底部付近はカキ目が残る。胴上部・頸部は横ナデである。胴最大幅9.6cm・現存高7.5cm を計る。

横瓶（00880）　口縁端部を欠失する。器色は暗灰色を呈し、焼成は堅緻である。頸部付近はナデ調整後に不定方向のカキ目を施す。また胴部は平行タタキ目を加えた後に縦方向のカキ目を施す。内面は荒いあて具痕を残す。頸部径11cm・胴部最大径（推定）35cm、現存器高28cm を計る。

平瓶（00893）　頸部以上を欠失する。器色灰色を呈し、焼成堅緻である。轆轤回転は時計回りである。頸部つけ根よりやや下った位置に円形浮文を２個貼付する。胴部のほぼ⅓の部分にカキ目を加え、他は荒い回転ヘラ削りである。内面は全て横ナデである。胴部最大径20.5cm・現存高13.7cm を計る。

甕（00879・00882・00878・00876・00877・00905・00881・00914・00883）　甕は小～大型までが揃っている。00879は器色淡黄灰色を呈する。胴は肩部がはり、外開する口縁は端部が肥厚して玉縁状となる小型甕である。外面は格子（？）タタキ後に横ナデを加える。肩部は丁寧であるが、他は粗雑である。内面は全てナデ消している。口径14.6cm、高さ20cm を計る。00882は半球状胴部に短い口縁を付し、端部は角張って尖る。胴部外面には平行タタキを加え、この後平行沈線状の横ナデを加える。内面は大型のあて具痕が残る。口径24.2cm、高さ44.8cm を計る。00878は肩部のあまり張らない中型の甕で、外開する口縁直下に一条の段状突帯をつける。外面は横カキ目後に平行にタタキ、内面は荒い大きなあて具痕を残す。口径21cm、現存高44cm を計る。00876は肩部の張る中型甕で、口縁端部はやや垂れる。外面は平行タタキ後に平行沈線状の横ナデを加える。内面のあて具は大きく、口縁近くはナデ消される。口径26cm、現存高30.4cm を計る。00877はあまり肩部の張らない甕で緩く外開する口縁部が00879の如く玉縁状となり肥厚する。頸部に三角形様のヘラ記号を付す。器面は外面平行タタキ後にカキ目を加える。また内面はあて具痕が上半部に残り、下半部はタタキとなる。口径25cm、

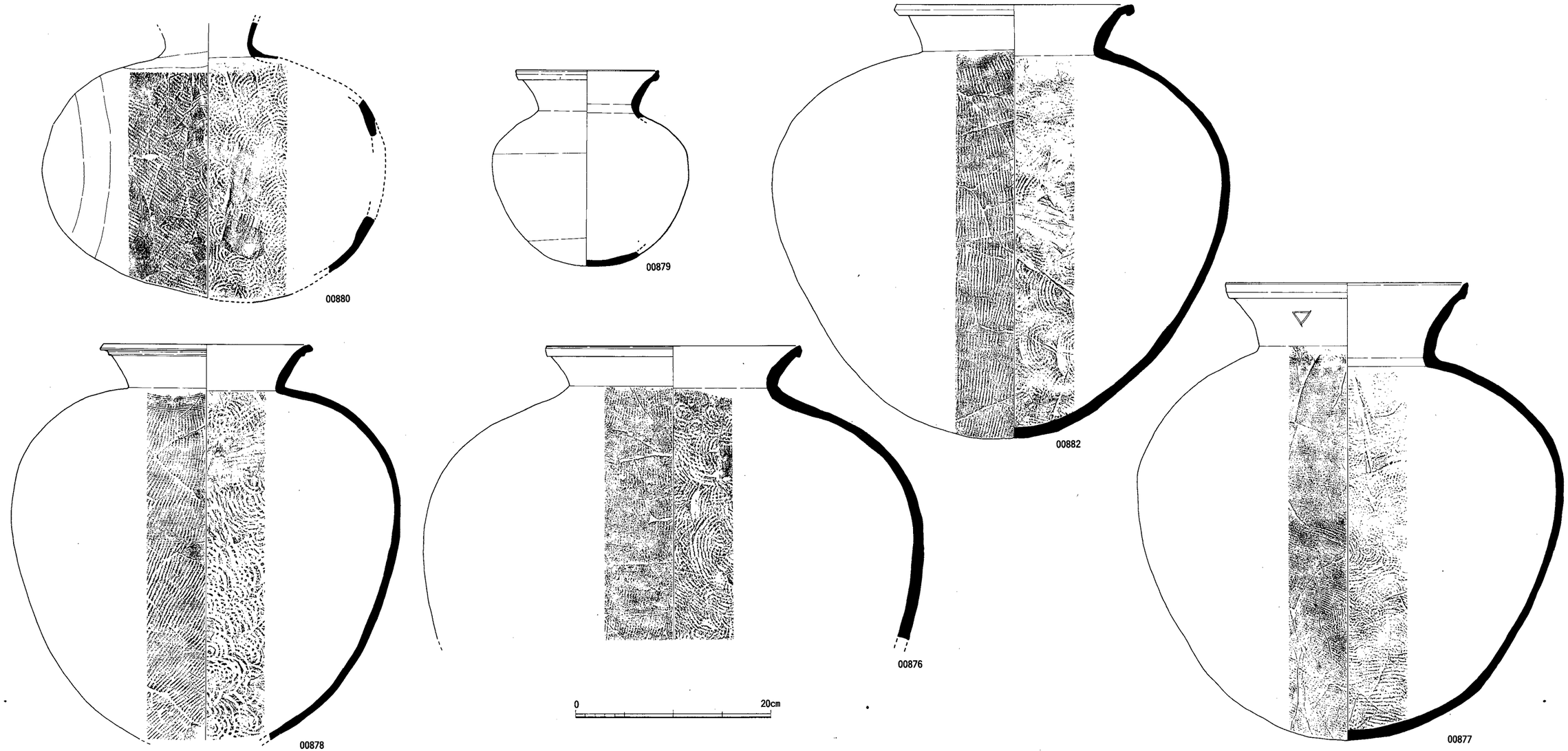


Fig.63　N群第８号墳出土遺物実測図(4)（1/4）

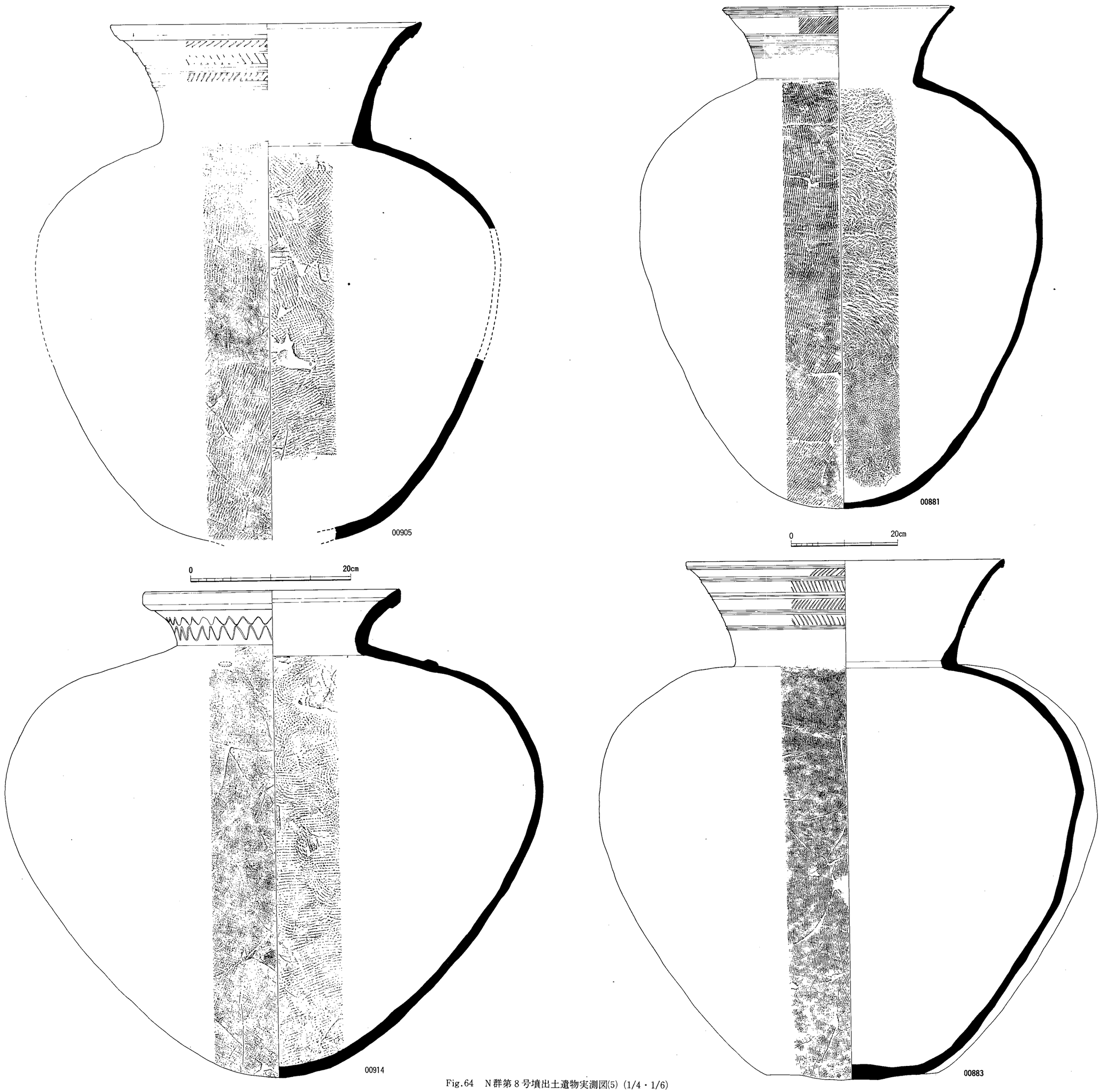


Fig.64　N群第８号墳出土遺物実測図(5)（1/4・1/6）

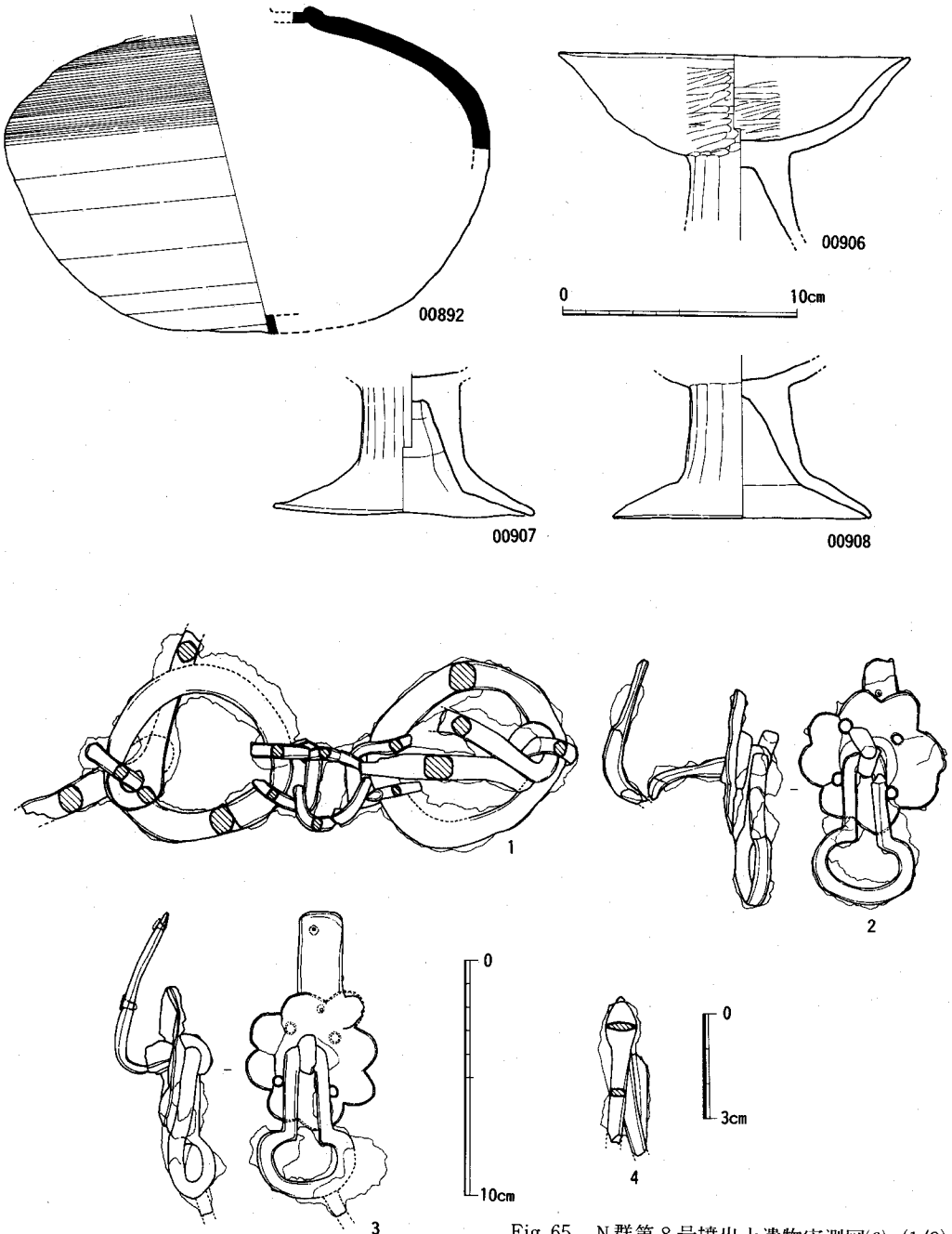


Fig.65　N群第８号墳出土遺物実測図(6)（1/3）

高さ14cm を計る。

00905は肩部の張る大形甕である。口縁部は素直に外開し、端部が玉縁状をなす。口縁上部にには凹線による突線三条を現出し、この間を綾杉状に篦描き斜線で埋める。器面は外面が平行タタキの後横カキ目を施す。また内面は平行タタキの叩板をあて具として使用する。他は全て横ナデである。口径39cm、高さ66cm（推定値）を計る。00914は房部が非常に張るパンプキン形をした甕である。短い口縁部は外開度が大きく、背部よりやや上った位置に円形浮文を3個程貼付する。口縁部には篦描きによる2条の波状文がある。器面は外面が平行タタキの後にカキ目を加え、内面胴部は上部にあて具痕（青海波文）を残し、他は平行文の叩き板をあて具としている。口径32cm、器高61.2cm を計る。

00881は体部の膨らみの小さい大形甕である。口縁は直立気味に外開し、口縁下に篦描きによる斜線文帯をつくる。器面調整は外面平行タタキ、内面は底部付近と胴部ではサイズの異なるあて具を使用している。他は丁寧な横ナデ調整である。口径44cm、高さ95cm を計る。

00883は口縁端部の形態を除けば大型甕00905と文様施文、器面調整において類似する。口径60cm、高さ97cm を計る。

土師器（Fig.65）

高坏（00906・00907・00908）　何れも埋甕遺構に伴うもので、00906は埋甕Ⅲに伴い、他は埋甕Ⅳより出土した。

00906は浅い坏部に脚筒形の大きい高坏で端部を失う。坏部は内外面ともに横ヘラ研磨で、脚部は縦のヘラ削りである。口径15cm を計る。

00907は坏部を欠き、短い円筒部から屈曲して外方に開く。脚筒部は縦ヘラミガキで他はナデ調整である。脚径11cm を計る。

00908は同様に屈折する脚部を有し、内面にヘラ削りがみられる。脚端部径11cm を計る。

(9) 第27号古墳 (Fig.66～73)

① 位置と現況

本墳は南面する丘陵裾部に位置する。墳丘は非常な傾斜地の末端部にあるため全く埋没しており、開口する石室が所在を示す唯一のものであった。

墳丘南側および石室羨道部は南側を東西に貫く林道の開設による掘削で高さ2m以上の崖をなしており、この崖線は東側の第5号墳まで連続する。

この林道掘削によって羨道部は数個の腰石を失なったものと考えられ、現況では法面の傾斜に沿って上部の石積みも失なわれていた。

また石室羨道部閉塞施設は天井部以下70cm程が取払われ、玄室内は盗掘によって敷石材と考えられる拳大以上のものが壁面腰石各所に積みあげられていた。

② 墳丘 (Fig.66・67、PL.23)

地山整形 本墳の石室は丘陵傾斜面の等高線に直交して営まれている。このため石室および墳丘築成に伴う地山整形は丘陵部斜面上部を半ば馬蹄形に掘削し、更に石室掘方を含む墳丘基底面の整形作業である。

調査では急斜面のために墳丘の埋没が予想以上にあり、また排土処理が困難であったため、斜面上部の地山掘削上端線の全てを露出することが出来なかった。

地山整形の上端線は調査区北西部に一端を窺うことができる。これは南東から北東方向へ僅かに弧を描いて延びる。これに伴う馬蹄形溝は墳丘西側で幅2m程を計り、溝底標高80m程を最高点として急激に南側へ迂回し、下降していく。

本墳の地山整形の上端線は東側に隣接する第28号墳調査区でも標高81m付近を上端部とし、しかも花崗岩々盤の掘削面の角度がともに類似しており、石室構造も近似しており、石室構造の近似性からも両墳の地山整形が同時になされた可能性も考えられる。

墳丘 墳丘は地山整形時の馬蹄形溝内側の整地面を基底にして盛土を行なっている。

墳丘の盛られる溝内側の整形面は、南北土層断面によると石室掘方上端までは平坦面となるが、東西土層断面では墳丘西側で溝内縁の整形面がほぼ40度の急傾斜で上昇し、この途中に列石をもった墳丘裾部がある。

墳丘築成の段階はまず石室掘方内の埋積である。これは本墳の石室掘方がほぼ半円の馬蹄形をなし、収納囲がほぼ玄室部分に相当する点で特に後室奥壁・両側壁部分を中心に行なわれ

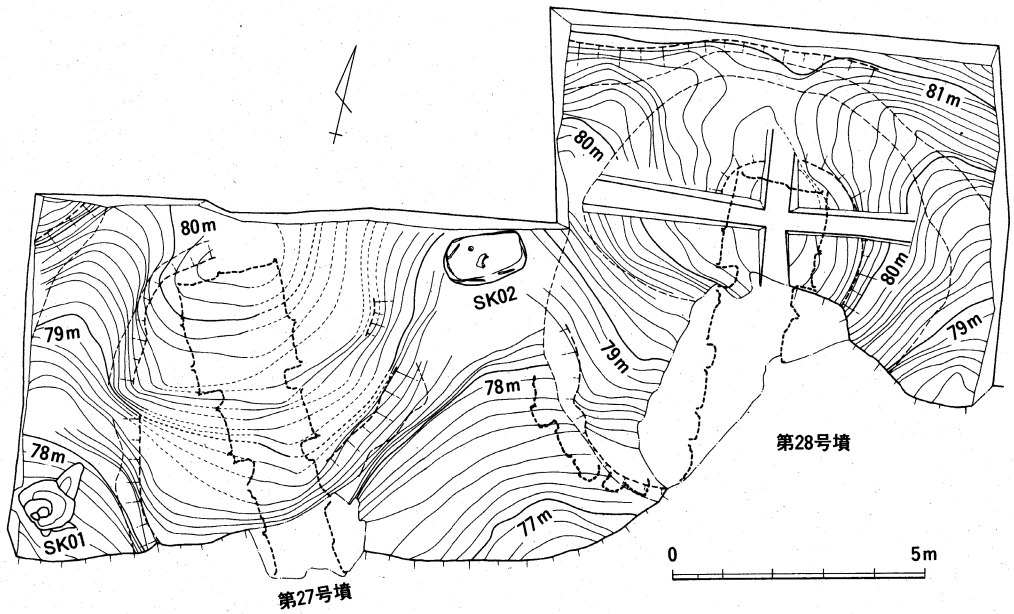


Fig.66　N群第27・28号墳丘遺存物（1/100）

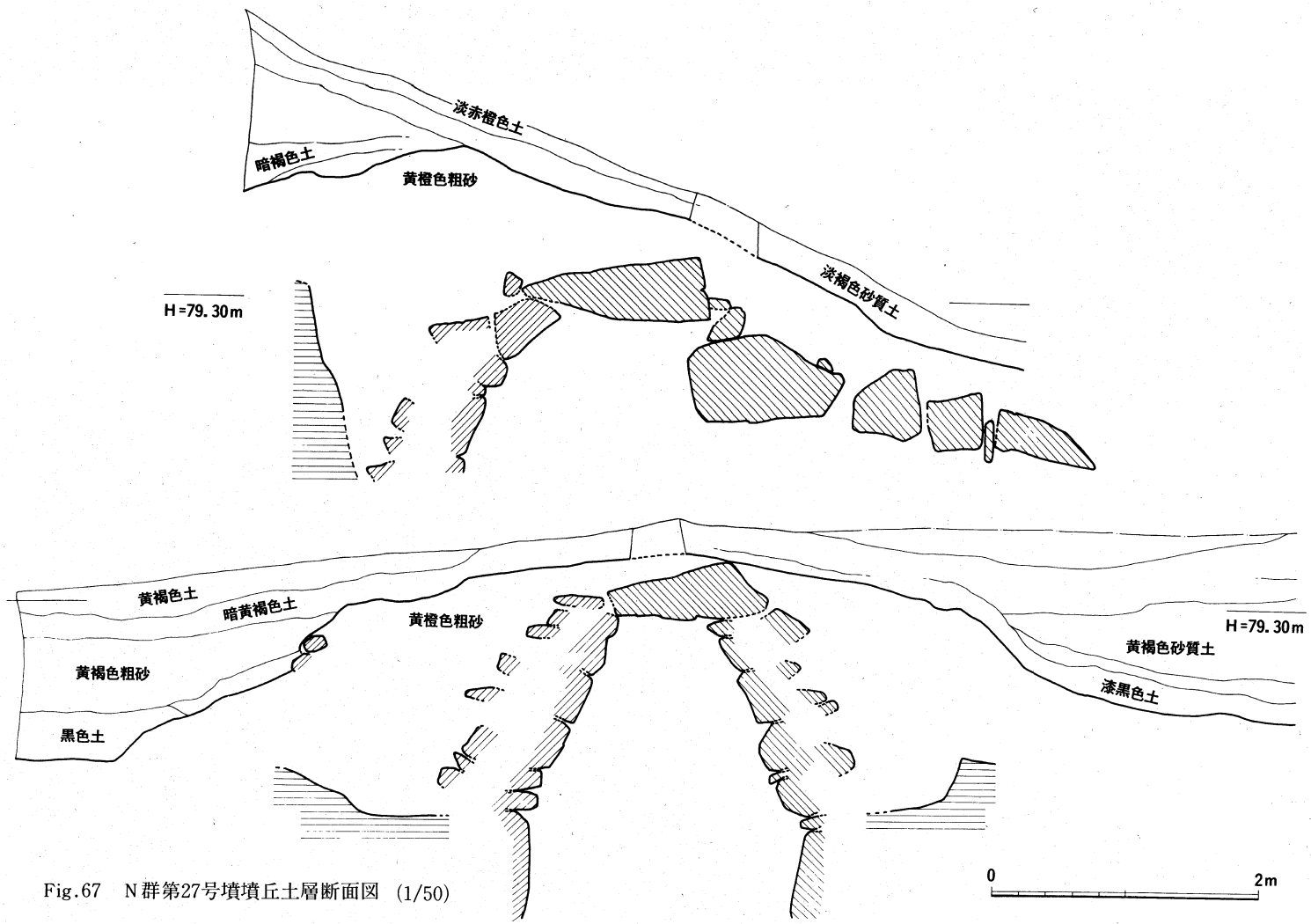


Fig.67　N群第27号墳墳丘土層断面図　(1/50)

る。

更に上部の墳丘盛土は石室の壁石に打掛ける様に強い傾斜でなされ、天井部の被覆に至っている。

墳丘盛土は粗砂を多く含む黄橙色砂質土に黄色味をおびた赤橙色粘質土ブロックを混じる。何れも花崗岩風化土を主体としたものである。

墳丘は北側より南側へ傾斜し、最高部が玄室奥壁上部にあり、標高80.3mをはかる。墳高は後室基底面より3.4m、羨道側からの見かけの高さ2m程である。

また墳丘規模は石室主軸方向で6.5m以上、直交方向で6mを計り、墳形は石室軸に沿って長い不整な円形となると考えられる。

③ 横穴式石室（Fig.68～71、PL.25～27）

本墳の埋葬施設は、主軸をN－26°－Wにとり、南東側に開口する複室の両袖型横穴式石室である。石室南側の林道開設時の掘削で羨道部出口付近が影響を受け側壁の崩壊が著しい状況にあった。

石室は非常に深い掘方内に構築され、平面形は非常に整った距形をなし、全体的にシンメトリカルな構造となる。現存する側壁長は左側壁が奥壁中央より5.9m、右側壁が同6.15mである。

また奥壁中央より羨道側へ3.7mの位置に前室梱石を根石とする閉塞施設が残る。

石室掘方　本墳の石室掘方は地山整形による馬蹄形溝内側のほぼ中央にあり、半円形の不整な形態をとり、石室奥壁側幅5.5m、西壁長約3m、東壁長4.3mを計る。

石室掘方は隅角部がまるく、小さな段を有する部位が壁面途中にみられ、石室はやや東寄り部分に構築される。

玄室　後室奥壁幅2m、左側壁2.10m、右側壁2m、玄門部幅2mでほぼ周壁長が均一に近い矩形プランとなる。玄門は石室規模に比べて幅広く最大で1.25mをはかり、ここに複数であったと考えられる梱石1個が石袖に残る。また床面は本来石敷きであったと考えられる。

周壁の腰石は奥壁で2枚、左側壁で3枚、右側壁で2枚の構成である。また各壁体の構築は腰石以上が安定した持送り積みをなし、整美な仕あげとなっている。

奥壁は腰石に高さの異なる転礫を使用し、この上部の第一段目の石積みで上端を揃え、後は基本的に横に目筋の通る所謂煉瓦積み様の構築法をとる。

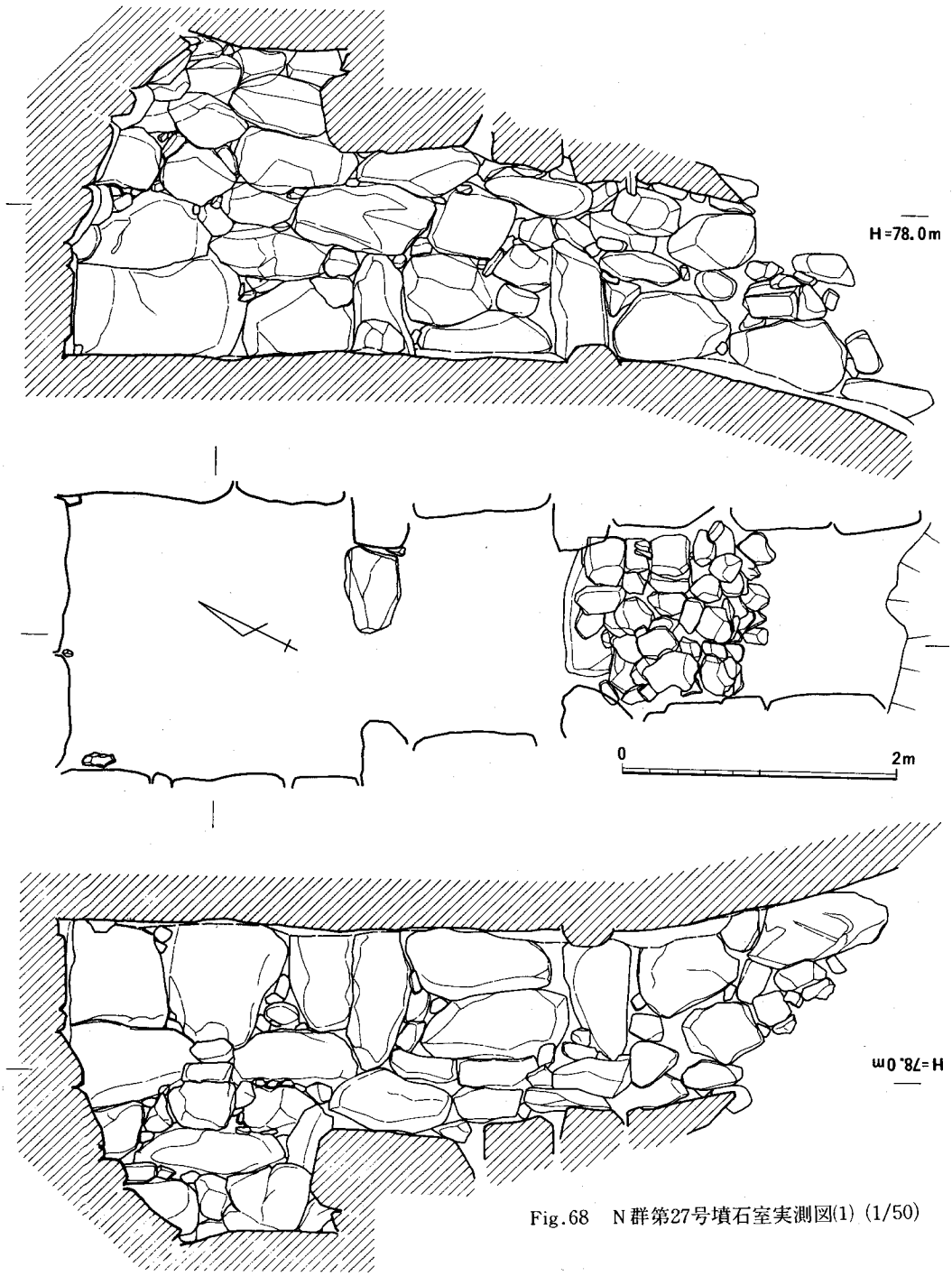


Fig.68　N群第27号墳石室実測図(1) (1/50)

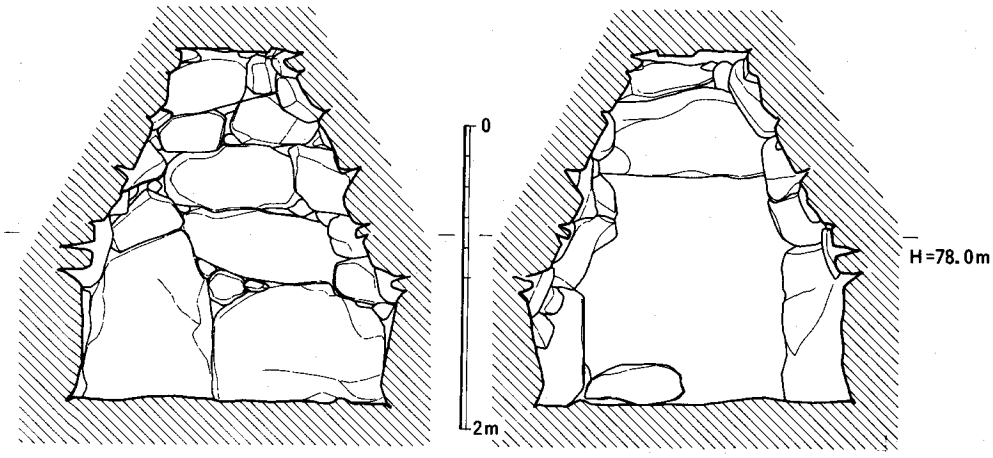


Fig.69　N群第27号墳石室実測図(2)（1/50）

左側壁はやや小振りな腰石上に4段程形状・規模の異なる転礫を持送り積みにしているがこれらの間隙には小型の割石・転礫が多用され、石材の安定が計られている。

また腰石以上の石積みはほぼ横に目筋が通り、これは前室玄門部まで至っている。

右側壁は2石の腰石が低いが、これ以上の構築は石材間に小型の転礫や割石を多く用い、安定した持送り積みとなっている。右袖石は比較的小型である。なお後室天井高は床面よりほぼ2.30mを計る。

玄門部は袖石上に大型の横長転礫を2個積んだ後に長さ2.0m、幅1.2m、厚さ60cmをはかる巨大な花崗岩材が架構され天井となる。玄門部の天井高は床面より1.5mを計ることができる。

次に前室は左側壁長1.15m、右側壁長1.10m、後室側玄門部で幅1.6mと横長のプランとなる。腰石は左右とも長径1m強の転礫を横位に据え壁体の構築を計っているが、後室側に比較すると石材間の間隙が多くみられ、造りは粗雑な感を受ける。また天井部も更に低くなり、玄門部でほぼ1.4mを計る。

また石室俯瞰図（Fig.70）によって石室構築の外面に観をみると、内部で見ることのできる壁石の他に外面では多くの転礫・割石が使用されている事が判る。その主なものは壁石の後面間に隙に詰めて安定を計るものと、天井石の間隙を青灰色粘土とともに埋め石室内部への水の流下を防ぐと思われる使用法である

羨道　墓道側は前半部は後世の掘削を受けており、完存状態ではないが、左側壁で全長1.80m、右側壁で2.26を計る。腰石は左壁で2枚、右壁で3枚が残るが、床面は前室玄門梱石を境に羨道に下降し、これに符号する様に腰石も積まれる。

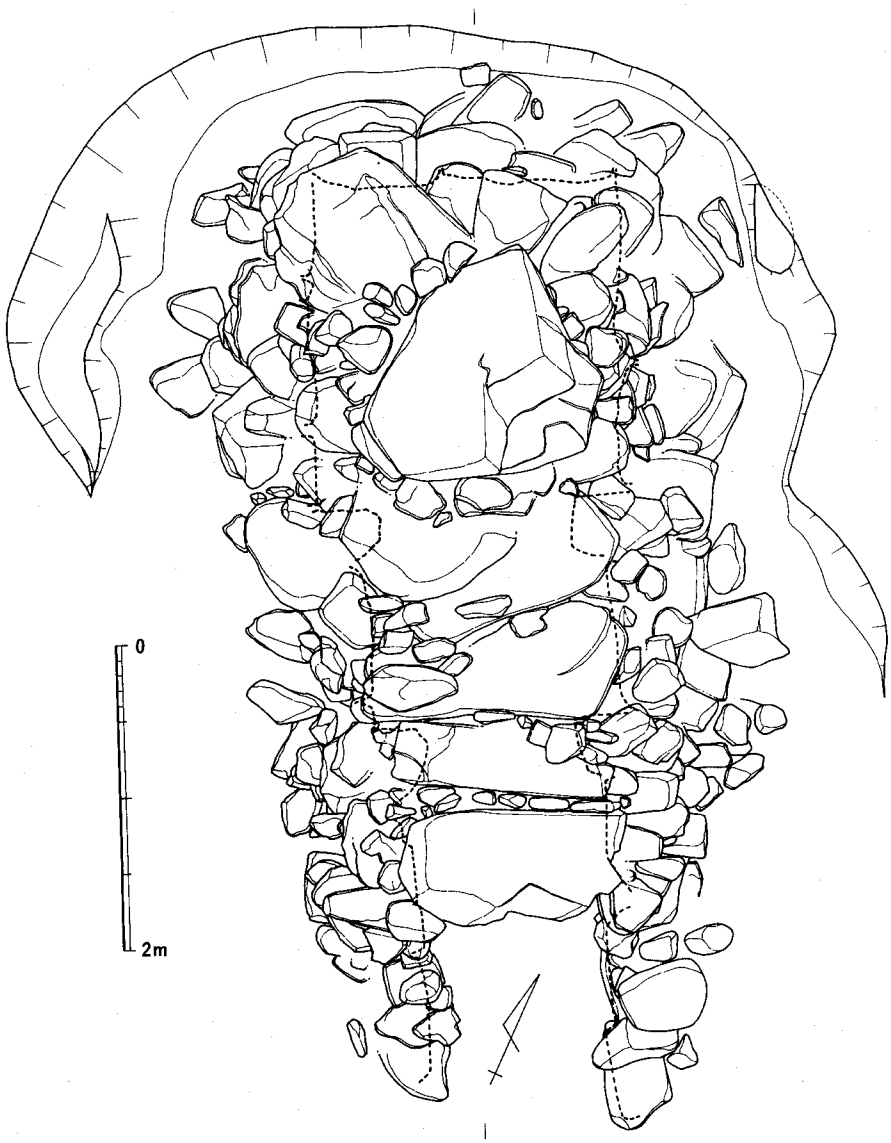


Fig.70　N群第27号墳石室実測図(3)（1/50）

また腰石以上は壁体石積みが非常に雑となり、石材間の空隙が大きい。更に羨道部天井は前室玄門より羨道側第１石の腰石上まで現存し、高さ1.3mを計ることができる。

墓道　羨道延長上が失なわれているので明らかにし得ない。緩い傾斜を辿るものとなろう。

閉塞施設　羨道後半部にあたる位置に施設を設ける。玄室側は前室玄門部梱石を根石とし、

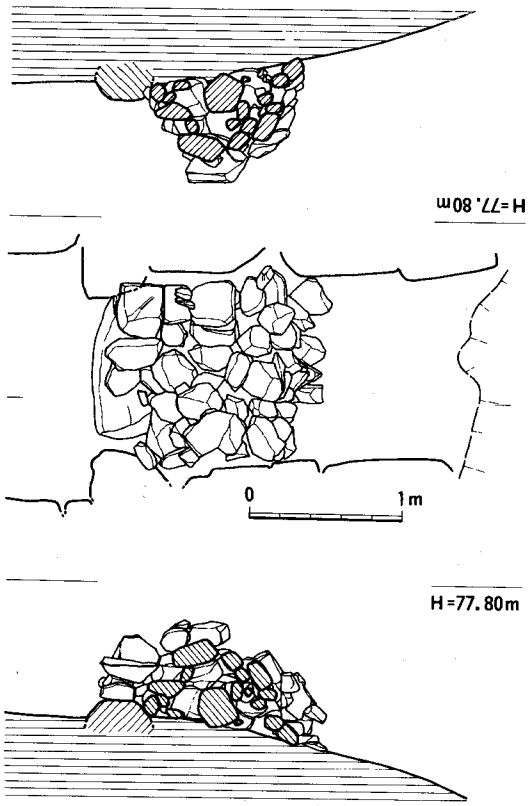


Fig.71　N群第27号墳閉塞施設実測図（1/50）

羨道側にほぼ1.4m程積んでいる。

石材の積み方は一見乱雑であるが、最上部では径20～30cmの転礫が横4列程に並べられている。現存高は玄門部近くでほぼ60cm程であり、羨道床面の降下に従って推移している。

石材は通例のように下部の石材が大きく、前後の面を呆えようとしているが内面（玄室側）と比較して羨道側は積み方角度が弱く、流れた状態となっている。

④　出土遺物（Fig.72・73、PL.64・65）

本古墳出土遺物では図示した土器類以外では鉄鏃細片があるのみである。

土器類は須恵器・土師器があり、後室・前室・閉塞施設内・羨道部外・墳丘旧表土などから出土した。

後室では坏蓋（01003～01009）、坏身（01001・01011・01017・01109）および高坏（01109）がある。また前室でさ坏身（01012）のみである。

次に羨道部閉塞施設内で坏蓋（01010）、坏身（01002）、無蓋高坏（01020）、平瓶（01021）および土師器埦（01013・01016）などが出土した。

他に羨道部で坏身（01014）、西側墳丘旧表土で坏身（01015）および土師器盤（01018）、墳丘北側旧表土から土師器甕（01022）がある。

a、須恵器

坏蓋　蓋は口縁部内面にかえりを有するもの（Ⅰ類）とこれを有しないもの（Ⅱ類）が区別

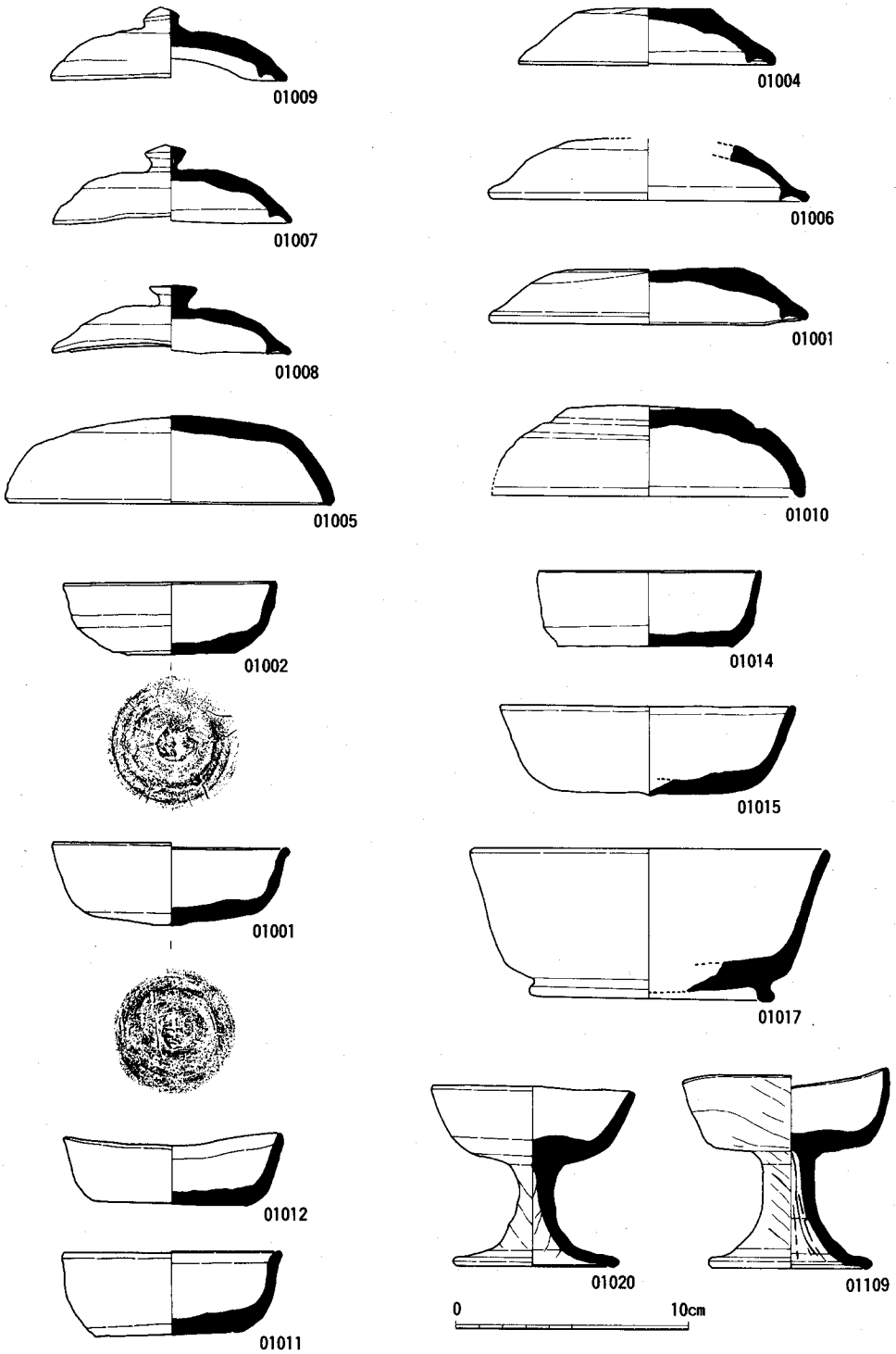


Fig.72　N群第27号墳出土遺物実測図(1)（1/3）

できる。Ⅰ類は更に天井部のつまみの有無がみられる。

Ⅰa類（01007～01009）　内面にかえりを有し、天井に部に断面が菱形となる宝珠様つまみを付ける。このうち01008ではつまみ頭部が尖らず平担化した擬宝珠様となり、口縁およびかえりの端部が同一レベルに近い。調整内外面ともに横ナデで、口径10.2cm を計る。

Ⅰb類（01003・01004・01006）　天井頂部は平担で、この部位のみ回転ヘラ削り、他は横ナデ調整である。内面のかえりは01006がやや異質であるが、口縁部よりやや高い位置にある。口径は10.9～13.6cm を計る。轆轤回転は時計回りである。

Ⅱ類（01010）　ほぼ天井部のみ回転ヘラ削りし、他は横ナデである。体部に段を有し、口縁端部内側は緩い段をなす。口径13cm を計る。

坏身　坏身は全て基本的に平底を持つものであり（Ⅰ類）、他に高台を有する坏身（Ⅱ類）がある。

Ⅰa類（01001）　不安定な平底をなす小型品で、丸味をおび口縁端部を小さく外方にひき出す。外底部のみヘラ削りで他は横ナデである。外座部に「井」字形のヘラ記号がある。口径10cm。

Ⅰb類（01002・01012・01011・01014）　安定した平底の小型品である。口縁部形態は直線的に外方に開き直口するものや端部を小さく外方に引出すものなどがあるが、全体に口径9cm 程度である。調整は外底から胴中位までを回転ヘラ削りとし、他を横ナデする手法で共通性がある。

Ⅱ類（01017）　口径15.1cm・器高6.4cm をはかる坏で、緩くのびやかに外方に開く坏部に低く端部がふんばる高台をつけている。

高台位置は坏部外底端部から僅かに這入って部位である。調整は内・外底部に回転ヘラ削りを加え、他は横ナデである。

高坏　高坏は2点が出土した。坏部が内弯気味に立あがり、脚部径の比較的大きいもの（01109）と坏口縁が外開し、脚部径の小さなもの（01020）がある。01019は器外面に回転ヘラ削りを加えた後横ナデ調整である。器色灰～暗灰色で、坏部口径8.7cm、高さ8.6cm、脚端部径6.9cm を計る。

01020は坏部外底に一部回転ヘラ削りを残す以外は横ナデ調整である。器色灰白色を呈し、坏部口径8.6cm、高さ7.7cm、脚端部径7.1cm を計る。

平瓶（01021）－体部⅕程を欠失するがほぼ完形品である。体部の膨らみが少なく、肩部の位置が低い。底部は不安定な平底である。直立気味に外方に開く口縁部は、端部付近で折れ、この境目に沈線一条を施す。器面調整は外底部に回転ヘラ削り痕が残る以外は胴部下半および口縁部が横ナデである。また頸部より肩部付近まではカキ目が残る。器色灰黒色を呈し、口径

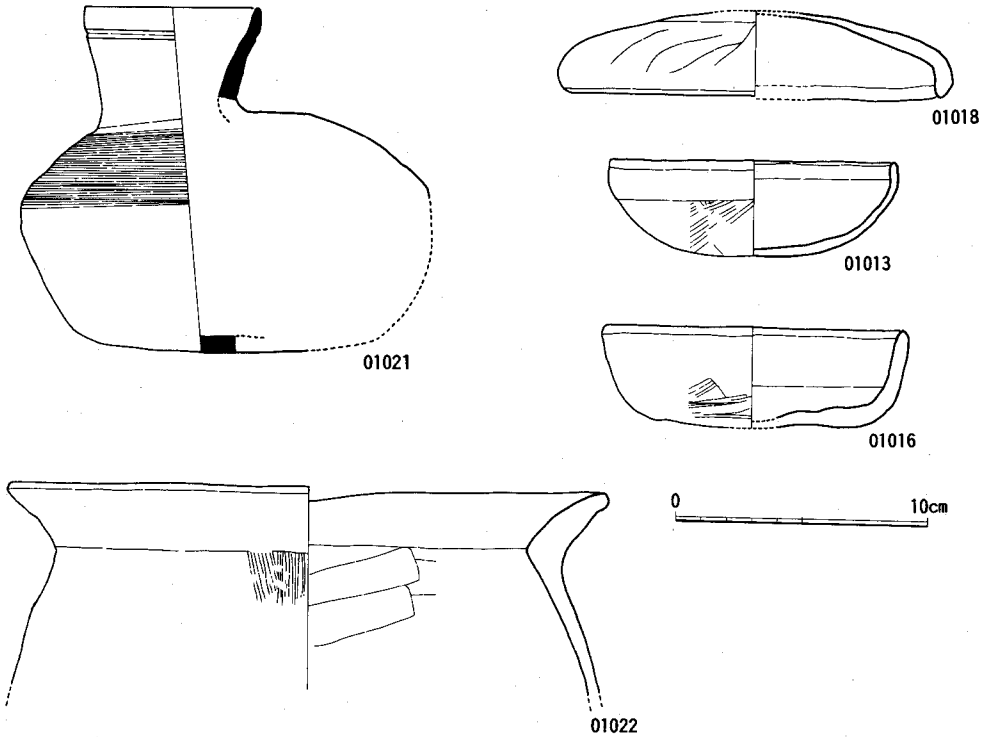


Fig.73　N群第27号墳出遺物実測図(2)（1/3）

6.8cm、高さ13.5cm を計る。

b.　土師器

坏（01005）・01013・01016）　01005は図が転倒している。体部外面の下半にヘラ削りを加え、他は横ナデである。器色外面黄褐色、内面明黄褐色を呈し、口径13.7cm、高さ3.7cm をはかる。

01013は丸味をもった整美な土器で、内外面ともヘラ削り後にナデ調整を施す。器色赤褐色を呈し、口径11.4cm、高さ3.7cm を計る。

01016は器色灰白色を呈し、外面上半部の横ナデ以外はヘラ削り調整である。口径15.1cm、高さ6.4cm を計る。

盤　01018も転倒している。器色暗褐色を呈し、内外面ともにヘラ削り、口径14.7cm、高さ3.7cm を計る。

甕　01022は「く」字に屈曲する口縁を有する甕で、口縁に比べて胴部の器壁が薄い。器色は淡い赤褐色でを呈し、口径23.2cm を計る。調整は外面荒いタテ刷毛目で、内面口縁横ナデ。同胴部ナナメのヘラ削りを加えている。

⑽　第28号古墳（Fig.74～76）

①　位置と現況

本墳は第27号墳と同様に丘陵裾部端に位置し、同墳とは墳丘裾で数m離れた東側に隣接して営まれている。

調査前は林道開設による掘削で羨道前半部の右側壁が大きく削り取られ崖面となし、半ば崩壊によって埋没していた。また墳丘は急傾斜のため埋没して形状をとどめなかった。

②　墳丘（Fig.66、PL.23・25～27）

地山整形　本墳石室は丘陵裾部の斜面方向に直交する位置に構築されているので、地山整形時の掘削は斜面の上方（北側）から半円形をもたらす馬蹄状になされ、この内側に石室掘方が行なわれる。整形は標高81mを上端として径が8m以上の馬蹄形溝を咋削しているが、溝は中央部で幅1m程で東・西側に廻るに従って幅1.5～2mと広がるとともに急激に底面レベルが下降する。

墳丘　墳丘は南端を失うが、南北8m、東西7mを計り、後室天井部付近を墳頂とする円墳である。羨道からの見掛け上の墳高2.6mで玄室基底面からは墳頂まで3.4mを計る。また墳丘盛土は横橙色砂質土で花崗岩風化土を主体とする。西側墳裾部に列石がめぐる。

③　横穴式石室（Fig.74・75、PL.23～25）

本墳の埋葬主体は、主軸をN－4°－Eにとり、南側に開口する複室の両袖型横穴式石室である。石室平面形は第27号墳をやや小型にした殆ど相似形をなし、壁面も良く整えられている。現存の石室長は左側壁で6m、右側壁で3.4mを計る。

石室掘方　地山整形時の馬蹄形溝のほぼ中央部に更に不整な段をなす半円状の掘削を行ない。この一部を北壁幅3.7m、西壁長1.8m、東壁長1.5mの規模で「コ」字形に掘削している。石室の構築はこの「コ」字形坑に奥壁部腰石を間隙のない程に接して据えている。

玄室　後室は奥壁幅2m、左側壁長2m、右側壁長1.9mを計り、ほぼ正方形に近いプランをなす。

石室壁体は奥壁が1枚、左側壁2枚、右側壁2枚の腰石を使用し、これ以上は各周壁とも急激な持ち送り積みで壁面構成する共通した手法がみられる。

奥壁腰石は底面が安定し、頂上部の尖る「おむすび」形の石材を使用し、頂部までの両側の間隙を大型円礫で埋め、更にこの上に二段の石積みを行なっている。

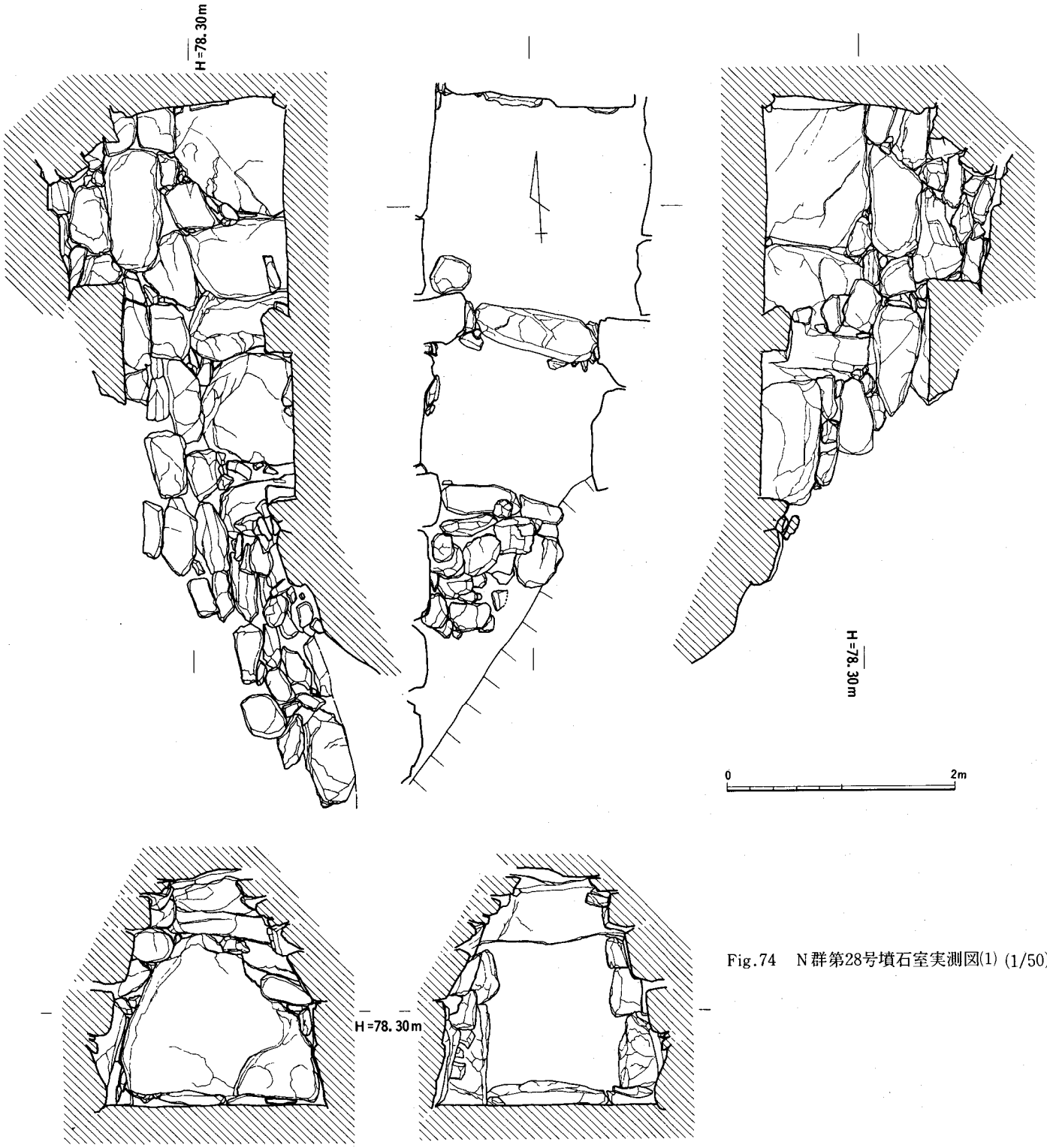


Fig.74　N群第28号墳石室実測図(1) (1/50)

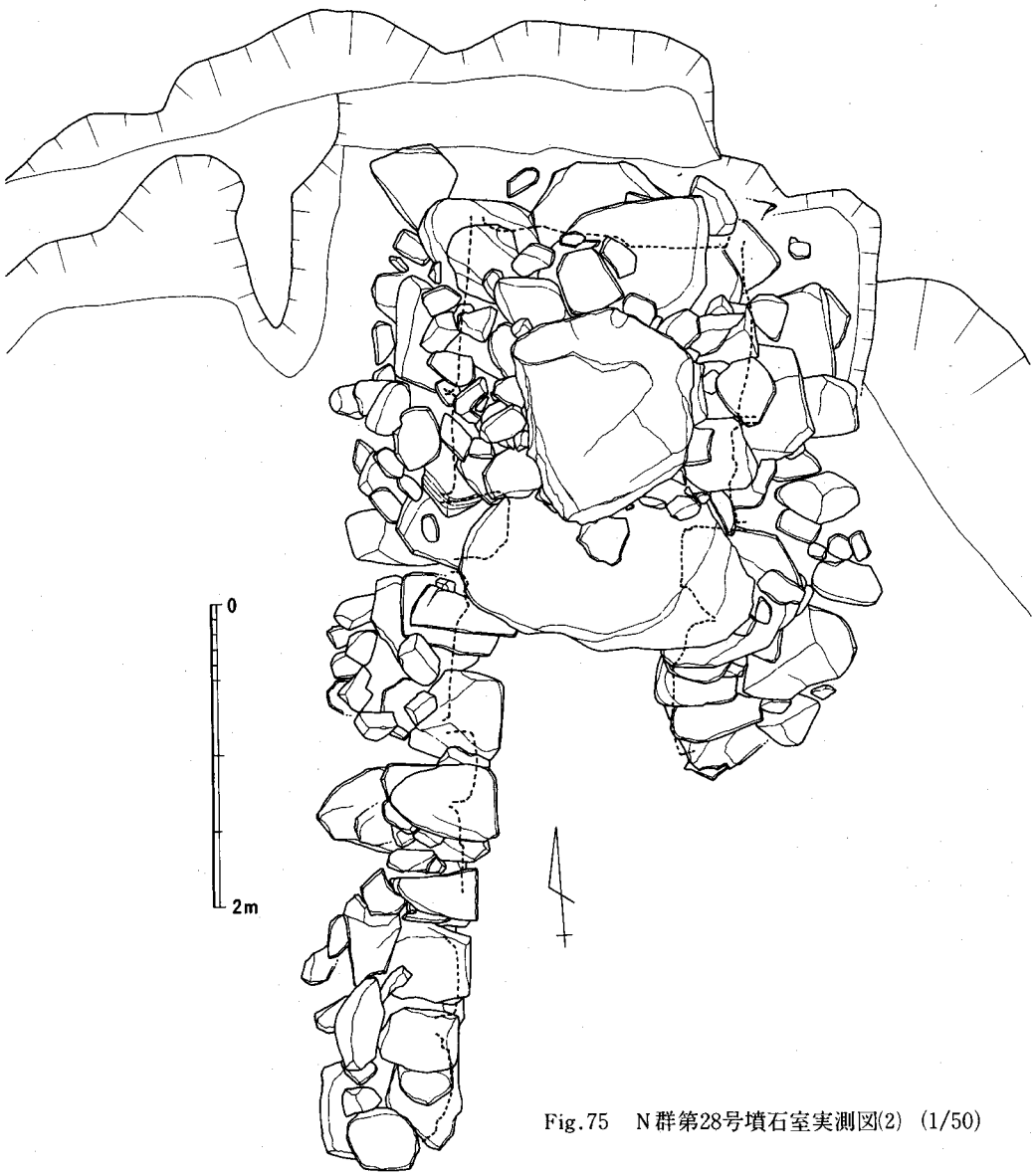


Fig.75　N群第28号墳石室実測図(2)（1/50）

左側壁は２枚の腰石の間隙を転礫・割石で埋め、横方向に目筋が通る様に積む工夫がこれ以上の壁面構成に感じられるが、全体に羨道方向に目筋が傾斜している。

右側壁も整った腰石上端にほぼ目筋が通る構成がとられ、空隙部に割石を多く使用している。

この壁面構成は前室部に及んでいる。

後室玄門部は通常の袖石で、この間に長径1.1m、幅0.4m程の梱石をおく。後室の天井高は床面より2mを計るが、床面は全て石敷きであろう。また玄門天井高は梱石上面より1.2mである。

次に前室は玄門部幅1.5m、左側壁長1.16m、右側壁長1.16mを計る。腰石は両側壁とも1石であり、左側壁に小型の袖石が残る。

壁面の構成は後室よりの連続した石積み工法が取られるが石材間の空隙も多いものとなっている。

羨道　前半部のうち右側壁部は掘削のため失なわれているが、左側壁部で前室梱石より2.4mが残る。

また腰石を含めた石積みは5段程がみられるが、床面の急激な下降に伴って転石・割石を横積みにしており、石材間の空隙の多い粗雑な構成となっている。

墓道　墓道は羨道部閉塞から前半部の現存腰石までの間に50cm程の比高さをもって床面が下降しており、かなり急激な傾斜となるものと考えられる。

また墓道は延長上が溪流となり、丘陵裾部も掘削されているため規模・方向は不明である。

閉塞施設　前室梱石（2石以上）を根石とする施設が残る。玄室側は奥壁中央より3.75mの位置で、羨道側に1.1mの規模をもつ。

石積みは1～2段で、下部に大型の扁平転礫を使用するが、上部構造は不明である。

④　出土遺物（Fig.76、PL.66）

第28号墳では石室各位置で出土した副葬品類の中で原位置を留める遺物類は無かった。

遺物は羨道部のものが3点（01107・01109・01113）、前室出土品が5点（01101・01102・01105・01106・01110）、後室では3点（01103・01111・01108）が図示可能な土器類である。更に墳丘裾部（01104）及び墳丘北側旧表土（01114）でも僅かに須恵器類が出土した。

須恵器（Fig.76、01101～01111、01113）

坏蓋　蓋は口縁部内面のかえりが端部より高いもの（Ⅰ類－01101・01102）と内面のかえりが口縁端部と同レベルの蓋（Ⅱ類－01103～01105）およびかえりの無い蓋（Ⅲ類－01111）とが区別される。

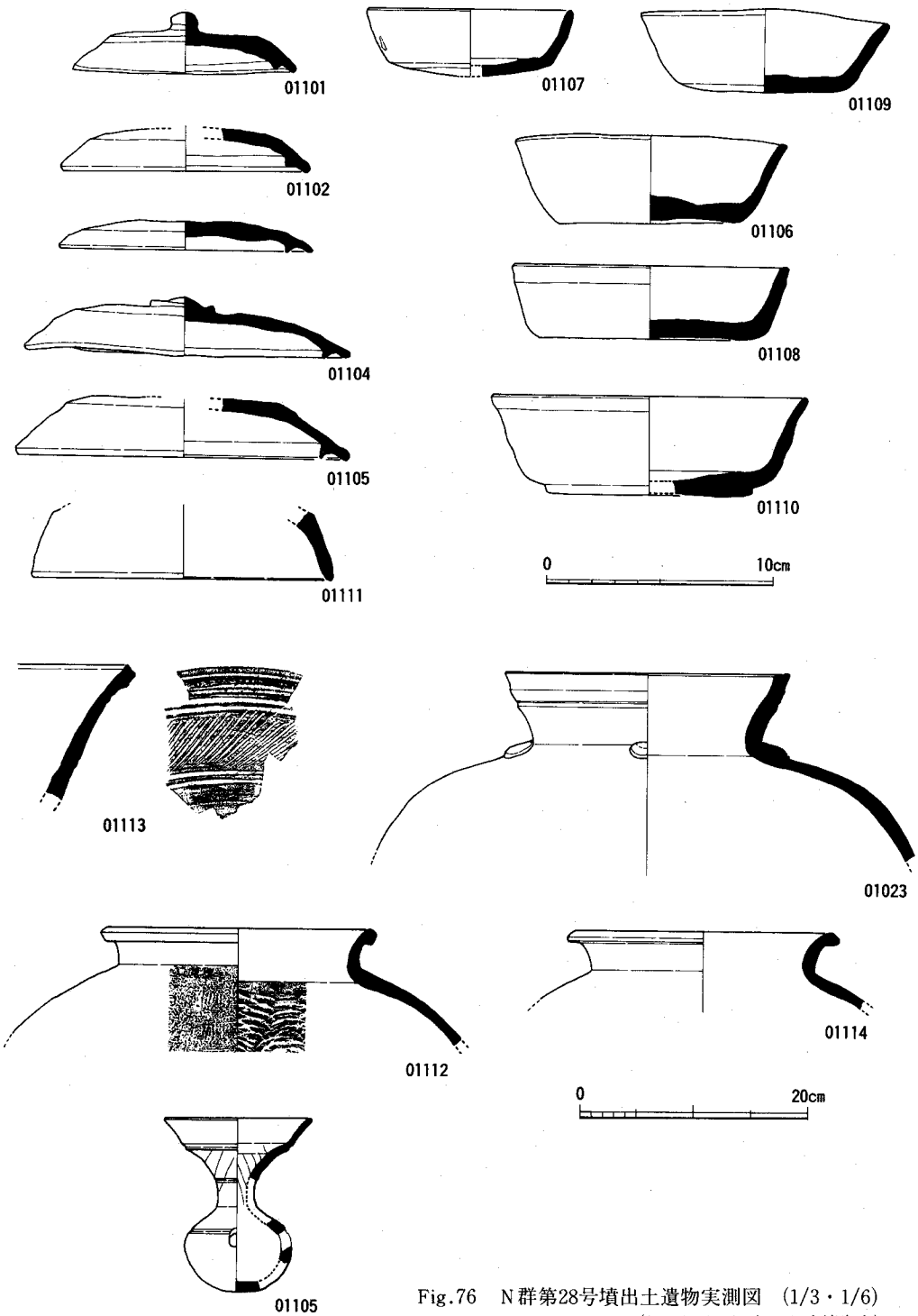


Fig.76　N群第28号墳出土遺物実測図　(1/3・1/6)
(01114・01105はSK06土壙出土)

Ⅰ類（01101・01102）　器高が低く、口径9.8・10.8cm・01101の如く頭部の丸い宝珠つまみがつく。天頂部のみに回転ヘラ削りが残る。

Ⅱａ類（01103）　器高は更に低く、扁平である。天井部に摘みをもたず、天井～口縁部近くまで粗いヘラ削りを施す。口径11.2cm。

Ⅱｂ類（01104）　口径14.3cmとやや大型である。天井中央に低い摘みを付す。外面上半発回転ヘラ削り、他は横ナデ調整である。

Ⅱｃ類（01105）　口径14.4cm。平担な天井部を有し、口縁部へ直線的にひらく、天井部のみ回転ヘラ削りを施し、他は横ナデである。

Ⅲ類（01111）－天井部を欠くが、口径13cmを計る。。低い天井部を持つ形態であろう。

坏身（01106～01110）　坏身は底部形態から不安定な平担をなすもの（Ⅰ類－01107）、平底で口縁が外方に開くもの（Ⅱ類－01106・01109）、安定した平底で口縁が直線的に立あがるもの（Ⅲ類）、大型で低い高台が付き、坏部が丸味をもち、口縁がのびやかに外方に開くをの（Ⅳ類－01110）とがある。口径は最小のⅠ類8.8cm、最大のⅣ類14cmをはかる。調整は何れも底部のみ回転ヘラ削りで他は横ナデである。

大型甕（01113・01114）　01113は外開する口縁部直下とやや下った位置に沈線２条を廻らし、この間を篦描きによる斜めの沈線で埋める。01114は短い頸部に外端部の肥厚して垂れる口縁がつく。頸部に櫛歯状工具による暗文が痕跡的に残る。器色灰白色を呈し、焼成堅緻である。口径22.5cmをはかる。

(11)　第30号古墳（Fig.33・77～79）

①　位置と現況　本墳は第４・５号墳の中間部にあたる丘陵斜面に位置している。調査前は周辺の伐開後腰石と考えられる転礫が一部のぞいており、他は全て埋没していた。

墳丘もまた同様に視覚的に確認できないものであった。

②　墳丘（Fig.33・77、PL.９）

地山整形　石室の北側2.2ｍの丘陵斜面に標高76ｍラインを上端線とする地山掘削部が調査区域で延長7.7ｍ程東西方向にみられる。この掘削面の東端部に裾部より幅2.5ｍ程の不整な平坦部があり、この部位に浅い石室掘方が石室後面に痕跡的に残る。

墳丘　墳裾西側は殆ど封土を残さないが、僅かに東側で地山（横橙～赤橙色砂質土）整形面を基底として暗黄褐色砂質土を積んでおり、高さ25cm程を残すにすぎない。

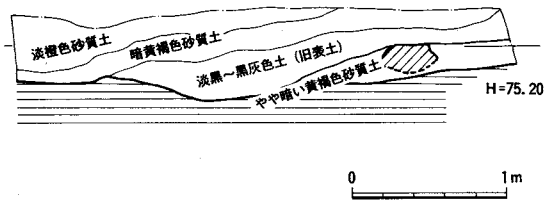


Fig.77　N群第30号墳墳丘土層断面図（1/50）

③　横穴式石室（Fig.78、PL.9）

本墳の埋葬施設は、主軸がN－10.5°－Wに向き、南側に開口する小型の横穴式石室である。

玄室は奥壁および両側壁が矩形をなすことなくいびつである。奥壁腰石は高さ60cm程のおむすび形石材1石を直立させる。

また右側壁は長さ90cmで小型の転礫を3石立てている。右側壁は小型の転礫を横積みにし貧弱な造りであり、壁面は大きく湾曲するものとみられる。壁長1m程である。

天井高は不明であるが、床面より80cm以上となる。

また羨道部と考えられる南側斜面には閉塞施設を考えられる礫群がみられる。

④　出土遺物（Fig.79、PL.66）

第30号墳出土の遺物は非常に少量で図示したものが全てである。01301・01303が墳丘北側旧表土中で、01302は羨道部墳丘東側攪乱坑出土のものである。

a．須恵器　01301は器高の底い坏蓋である。天井部に僅かに回転ヘラ削りを加え、他は横ナデである。口縁部内面は窪んで低い段をなす。器色は外面がやや赤味をおびた灰色、内面は青灰色を呈する。胎土には石英砂粒を多く含み、焼成は堅緻である。口径13.2cmを計る。

01302も坏蓋であるが、全体の1/5程が残る。器高は低く、平坦な天井部に外方に開く口縁部をもつ。天井部にのみヘラ削りを加え、他は横ナデである。器色は内外ともに淡赤褐色を呈し胎土に径1～2mmの程の石英粗砂の混入多く、焼成不良である。推定口径20.4cmを計る。

b．土師器　01303は口縁が「く」字形に屈曲する甕口縁である。

器は全体のほぼ1/6程度しか残らない。内面は屈曲部が鋭い稜をなすが、全体的に分厚くシャープさに欠ける土器である。

器面調整は外面が荒い縦刷手目調整で、口縁端を横ナデする。口縁部内面は横ヘラナデ、胴部は縦方向、篦削りである。

器色は内外面ともにあかるい赤褐色を呈し、胎土に2mm程の石英粗砂を混入する。焼成は堅緻である。口径23cm程をはかる。

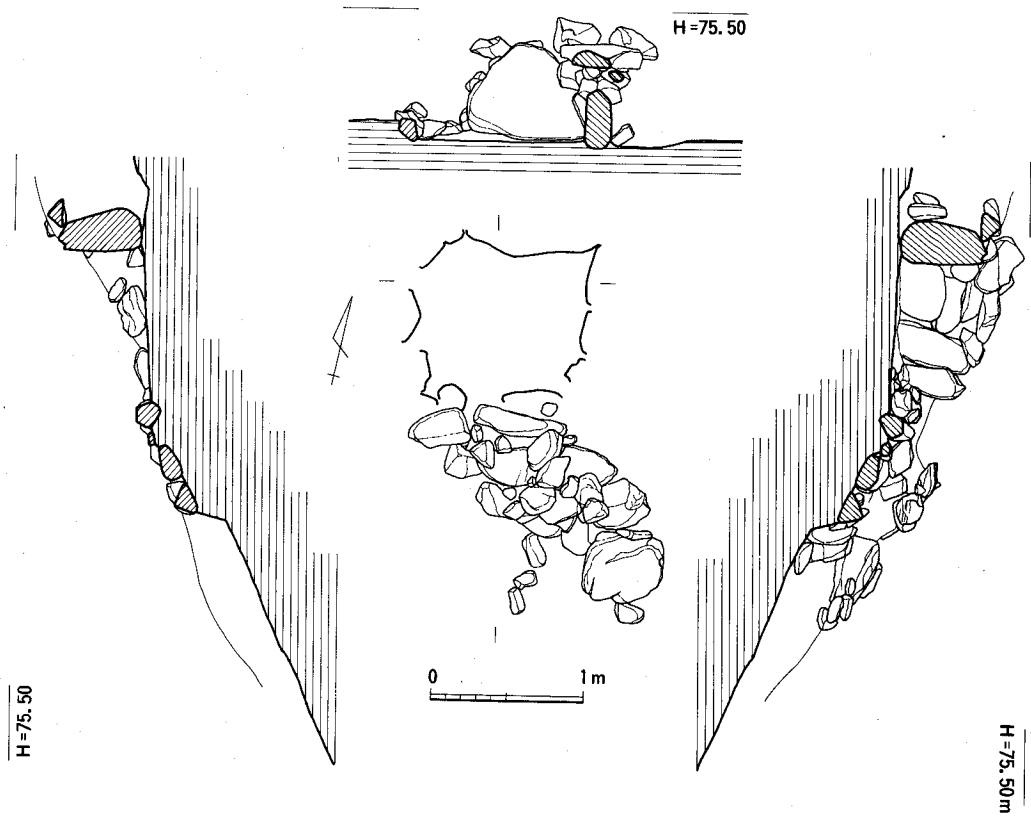


Fig.78　N群第30号墳石室実測図　(1/50)

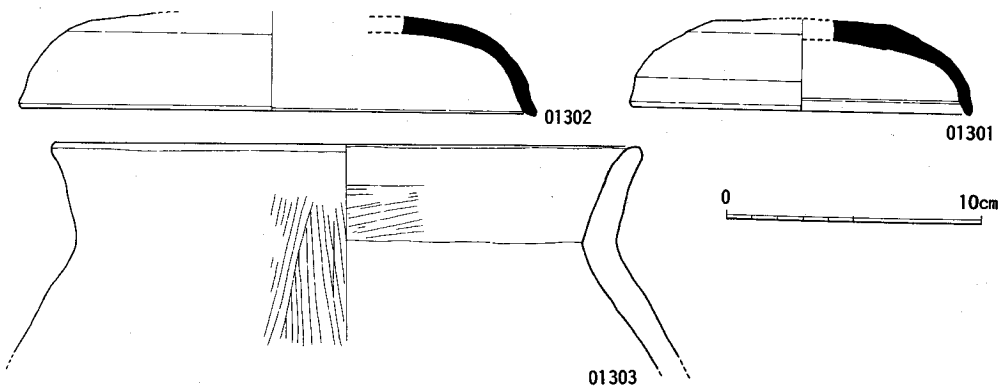


Fig.79　N群第30号墳出土遺物実測図　(1/3)

(12) 土壙 (Fig.80～86)

羽根戸古墳群N群の調査では6基の土壙が検出された（ＳＫ01～06)。

土壙は第1号墳々丘内（ＳＫ01)、第3号墳々丘東側（ＳＫ02)、第5号墳々丘北西側（ＳＫ03)、第7号墳々丘東側（ＳＫ04)、第27号墳々丘西側（ＳＫ05)、第28号墳々丘北西側（ＳＫ06)に各々位置している。

これらのうちＳＫ02・06土壙は掘方後に壁面には粘土を貼付して、火を内部で強く燃したと考えて良い、他ではＳＫ03・04・05土壙で若干の燃焼痕と炭化物がみとめられる。以下個別に説明を加えたい。

① ＳＫ01土壙 (Fig.80、PL.29)

ＳＫ01土壙は第1号墳北側墳裾で検出した。

土壙は原墳丘露出中に調査区北端に近い墳丘地形が少し湾入する部位よりやや下った斜面に見付かり、主軸がＮ－62°－Ｅとほぼ東西に向いている。

土壙は法量的に東西長軸が2.14ｍ、南北短軸が1.64ｍを計り、深さは南側斜面上で1.55ｍ、北側斜面下で66cmとなり傾面に応じたものとなっている。

また壁面は底面の立あがり部は垂直に近く、上縁に従って緩い傾斜となっており、底面も中央が低い段をなし、東寄りに径18cm程の小ピット1個がみられる。壙底東壁に密着して扁平な花崗岩角礫1個が出土した。

壙内埋土は地山の黄褐色砂質土と黒色有機質土との混在で均一であり、掘削後に人為的に埋積された痕跡は認められない。

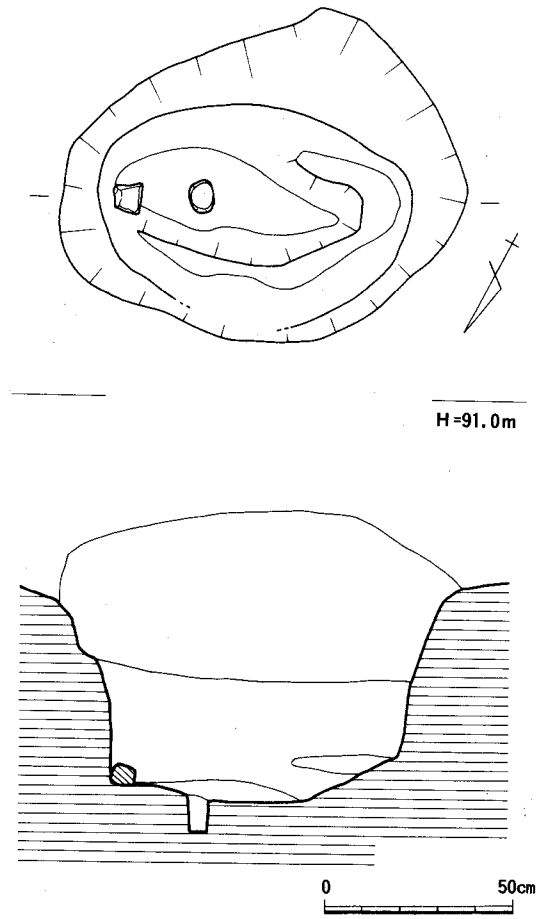


Fig.80 N群 SK01土壙出土状況実測図 (1/40)

② ＳＫ02土壙（Fig.81、PL.29）

本土壙は第３号墳々丘東裾部に主軸をＮ－15.5°－Ｅにとり、同墳石室主軸とほぼ平行する位置に検出された。

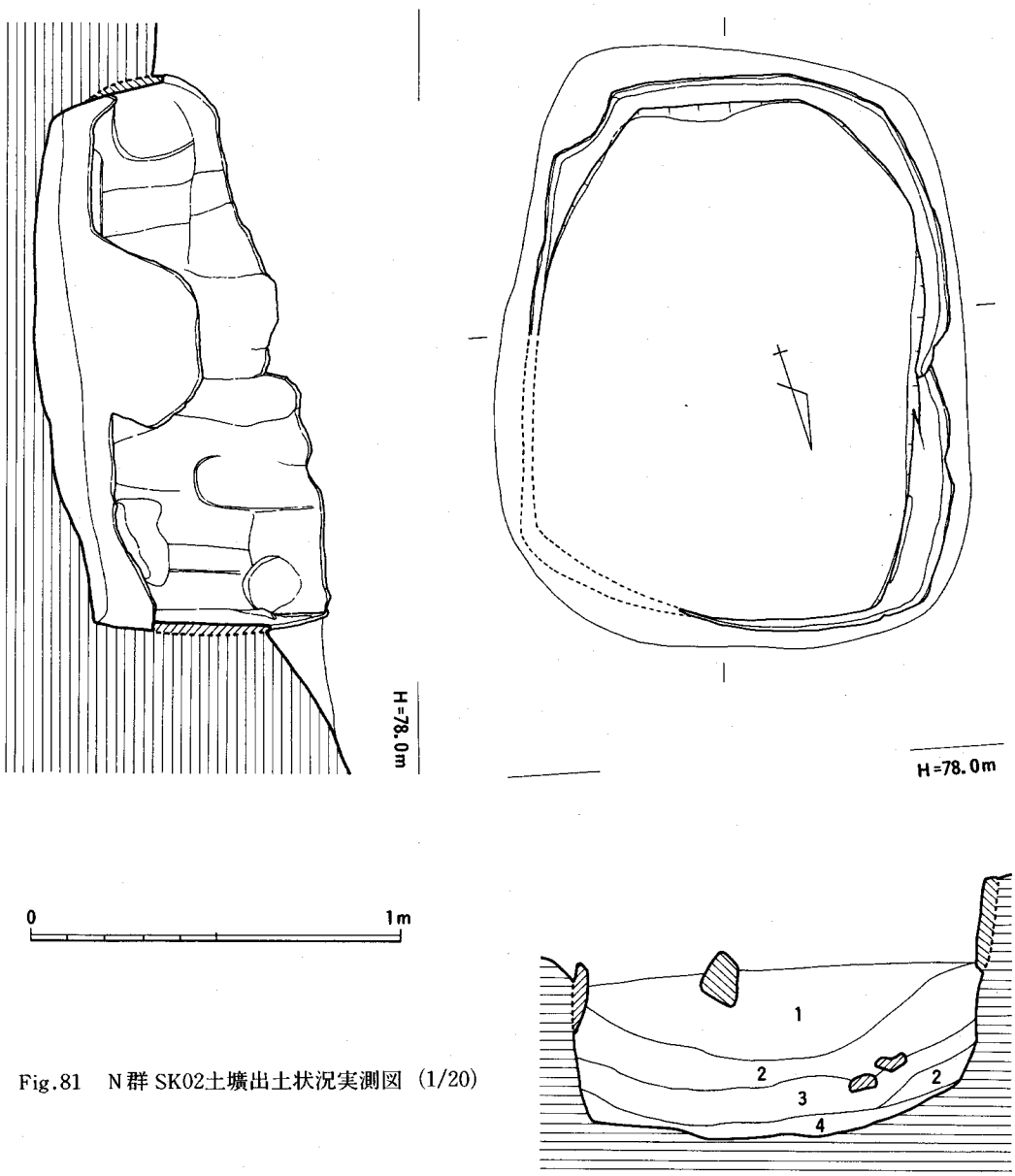


Fig.81　Ｎ群 SK02土壙出土状況実測図（1/20）

平面形は隅丸長方形を呈し、北側の短辺がやや大きく、バチ形をなしている。

法量は長辺が1.5m、北壁幅1.1m、南壁幅75cmであり、深さは斜面傾斜に沿ったもので北壁63cm、南壁30cmを計る。これらは斜面にあって全て後の流土によって埋没していたのでほぼ旧状を示すものであろう。

壙は前記規模の掘方後に底面を除く周壁にスサ入り粘土を厚く塗り付けている。これは上縁部より壁下端部近くまで及んでいたものと判断でき、壙内埋土に崩落した壁体が多く混じる。粘土壁の厚さは焼けしまった状態で8cm程あり、壁表面を調整した工具痕もみられる。この工具は端部がU字形をなし、側辺の幅が15cm程のもので西側壁に多くみられた。

壙内部からは出土遺物はなく、粘土壁は暗黄褐色に焼けしまり、背後の掘方壁も熱のため赤褐色に変化している。

壙の埋没は土層断面図（Fig.81）にみる限り人為的に埋積したものとは考えにくく、使用後放置したものである。底面直上にはよくしまった淡褐色砂層がのり、この上の第3層（灰黒色土層）および2層（淡い灰黒色土層）が燃焼時の堆積であって第2層にカーボンの混入多い。

③　SK03土壙
(Fig.82、PL.11)

本土壙は第5号古墳の墳丘北西裾部に営まれ、謂はば墳丘裏側に位置するといえる。またこれの北側は地山整形時の掘削線となっておりこの裾部にあたる。

壙は平面形が円形で周囲は熱のため地山面が赤変している。法量的には径85cm、深さは斜面のため、中央で20cmをはかる。

壙内は黄褐色砂質土

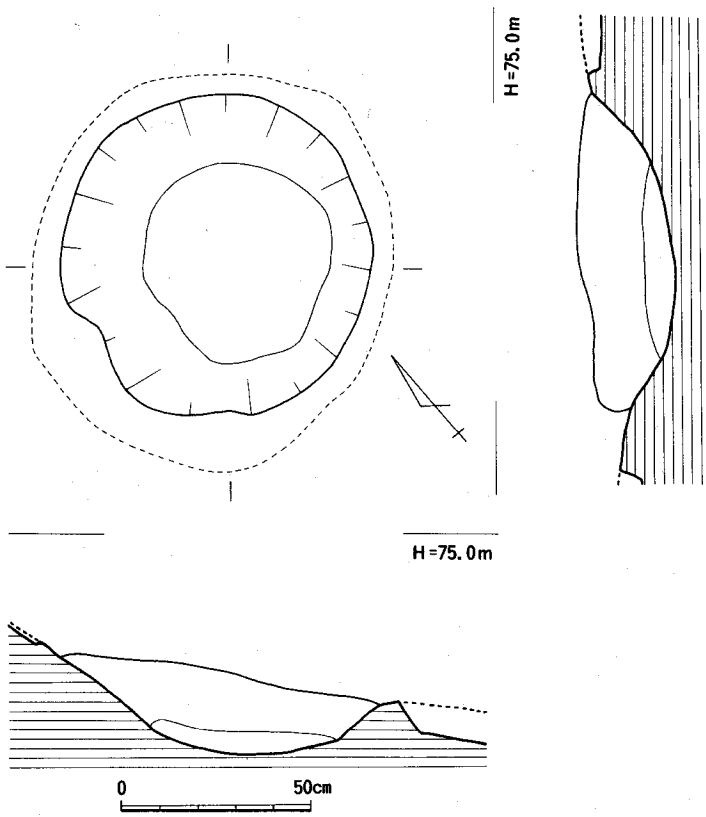


Fig.82　N群 SK03土壙出土状況実測図 (1/20)

を主とする埋土であるが、底部付近に少量のカーボン・焼土が残っていた。

出土遺物は全く無く、性格についても把え難いところであるが、本墳に伴うとすれば特異な位置にあるといえよう。

④　ＳＫ04土壙（Fig.83、PL.31）

本土壙は第７号墳東側墳丘裾部近くに検出され、第８号墳々丘裾部より西へ６ｍ程の緩傾斜面に位置する。

壙は主軸をＮ－31°－Ｅにとる。法量は長軸1.5ｍ、短軸1.2ｍ、深さ40cm程で、平面は不整な長円形となる。

掘方は３段程あって断面は皿状となる。また中央に長径18cm、深さ10cm程の小ピット１個がある。

検出時は壙上縁部は焼けて厚さ１cm程の焼壁となっていたが、これらは壁下端まで及ばず、しかも粘土貼付などの作業も観察できなかった。埋土は単一な黒色砂質土で、カーボンの混入はきわめて少量であった。

本壙では遺物の出土は無いが、第７号墳々丘盛土や東側遺構検出面で縄文時代早期押型文土器類や石鏃・剥片が少量出土しており、この時期の所産の可能性もある。

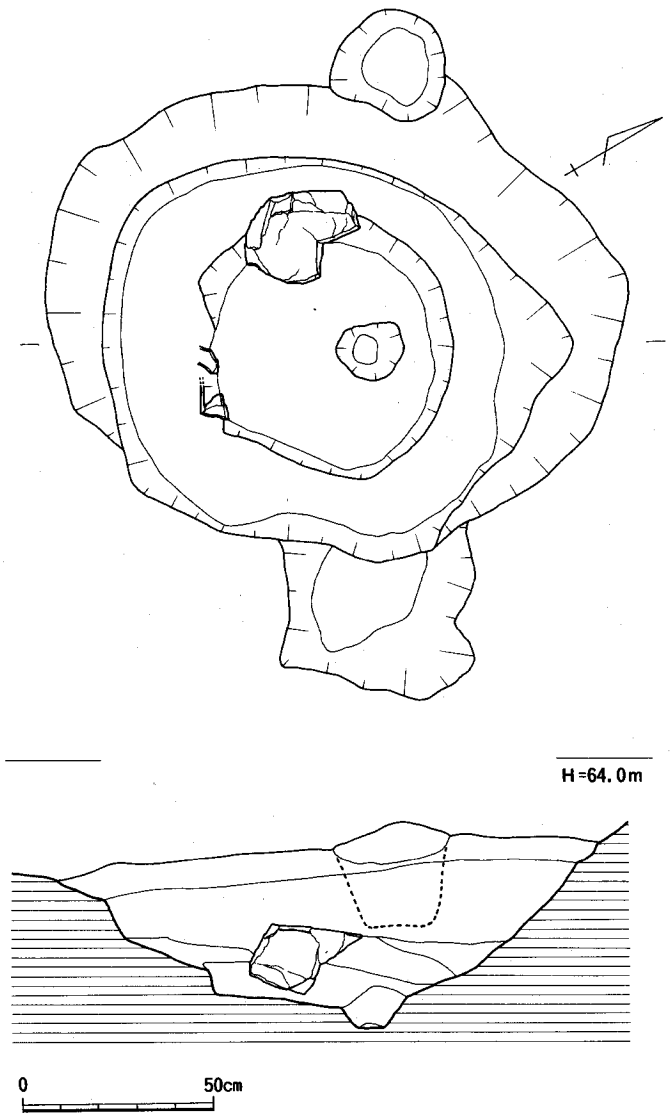


Fig.83　Ｎ群 SK04土壙出土状況実測図（1/20）

⑤　ＳＫ05土壙（Fig.84）

本土壙は第27号墳々丘西側で検出された。墳裾とは１ｍ程離れた位置にあたり、掘削面は地山整形時の急斜面をなす岩盤層（花崗岩）である。

壙は平面形が不定なもので長・幅が１×0.9ｍ程の隅丸長方形の土壙にピット状の窪みが接

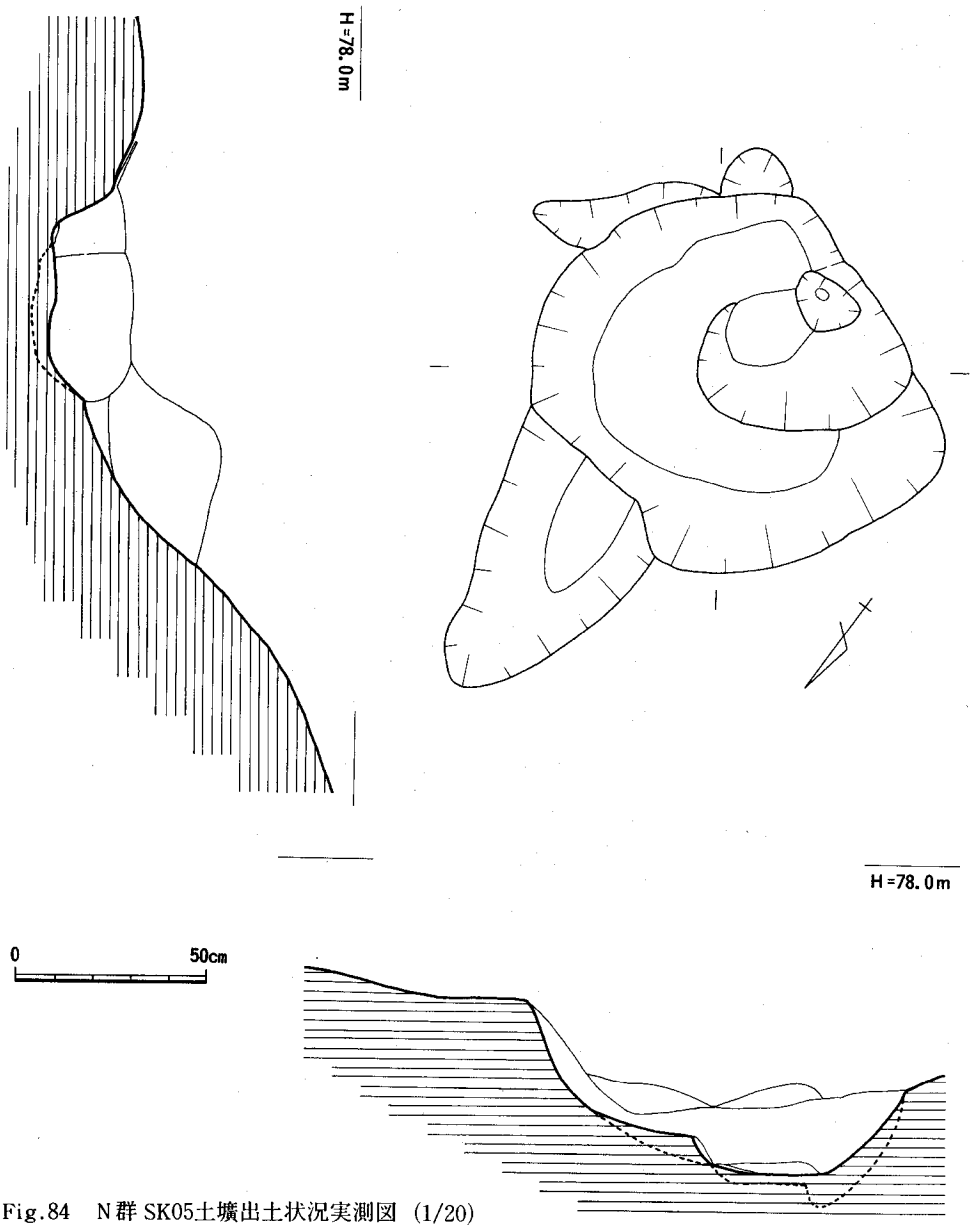


Fig.84　N群 SK05土壙出土状況実測図（1/20）

続する。深さは中央で20cm程をはかる。

内部より遺物の出土は全くなく、埋土は漆黒色土であり、自然埋積であろう。壙底には若干のカーボンと焼土塊が残っていた。

⑥　ＳＫ06土壙（Fig.86、PL.31）

本土壙は第27・28号墳の墳丘裾部間に位置し（Fig.66）、形態的には前のＳＫ02土壙と近似するものである。壙は主軸を両墳主軸と相似たＮ－80.5°－Ｅにとる。法量的には長・幅が1.65×0.95ｍ、深さは中央部で65cm程である。周壁は下端部よりやや上った位置まで厚さ３～10cm程の粘土が貼付されている。壙内埋土は第２層以下が燃焼時のものであり、壙底に接して須恵器瑞が、また第１層（流入土）より甕破片および鉄滓１個が出土した。

出土遺物（Fig.85）

甕　01112は短い口縁部が外反し、端部は小さく折れる。胴部は肩をもつと思われる。器口縁内外面および残存胴部には自然釉がかかり暗緑色を呈する。胴外面はタテの平行叩き後横カキ目、口縁内面は横ナデで、胴部は荒い青海波文を残す。口径23.2cm。胎土密・焼成堅緻である。

瑞　01115は半球状の胴部上位に幅広い沈線一条を廻す、よくしまった頸部から口縁はラッパ状に開く。口径12.9cm、器高15.3cmを計る。器色は内外面ともに灰白色を呈し、体部下半は丁寧な回転ヘラ削りを施す。胎土・焼成ともに良好である。

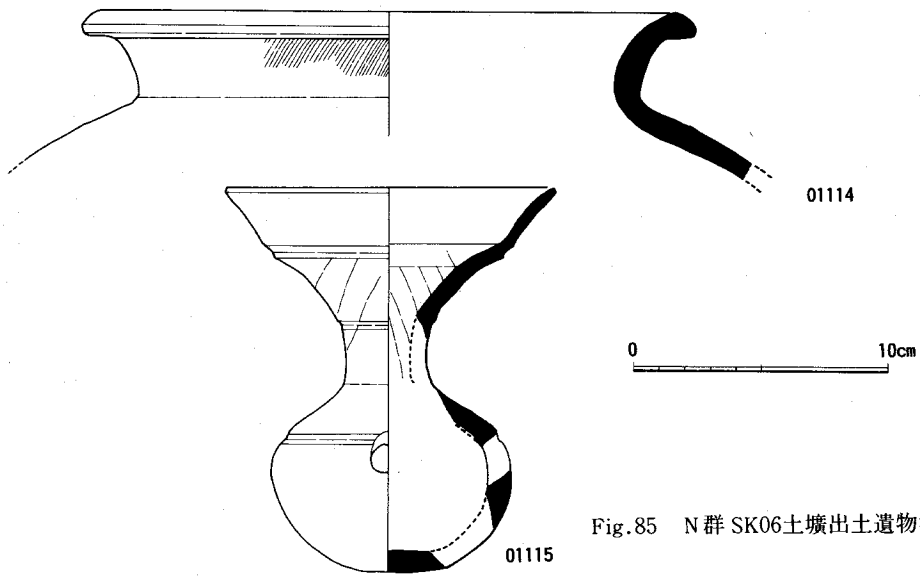


Fig.85　Ｎ群 SK06土壙出土遺物実測図（1/3）

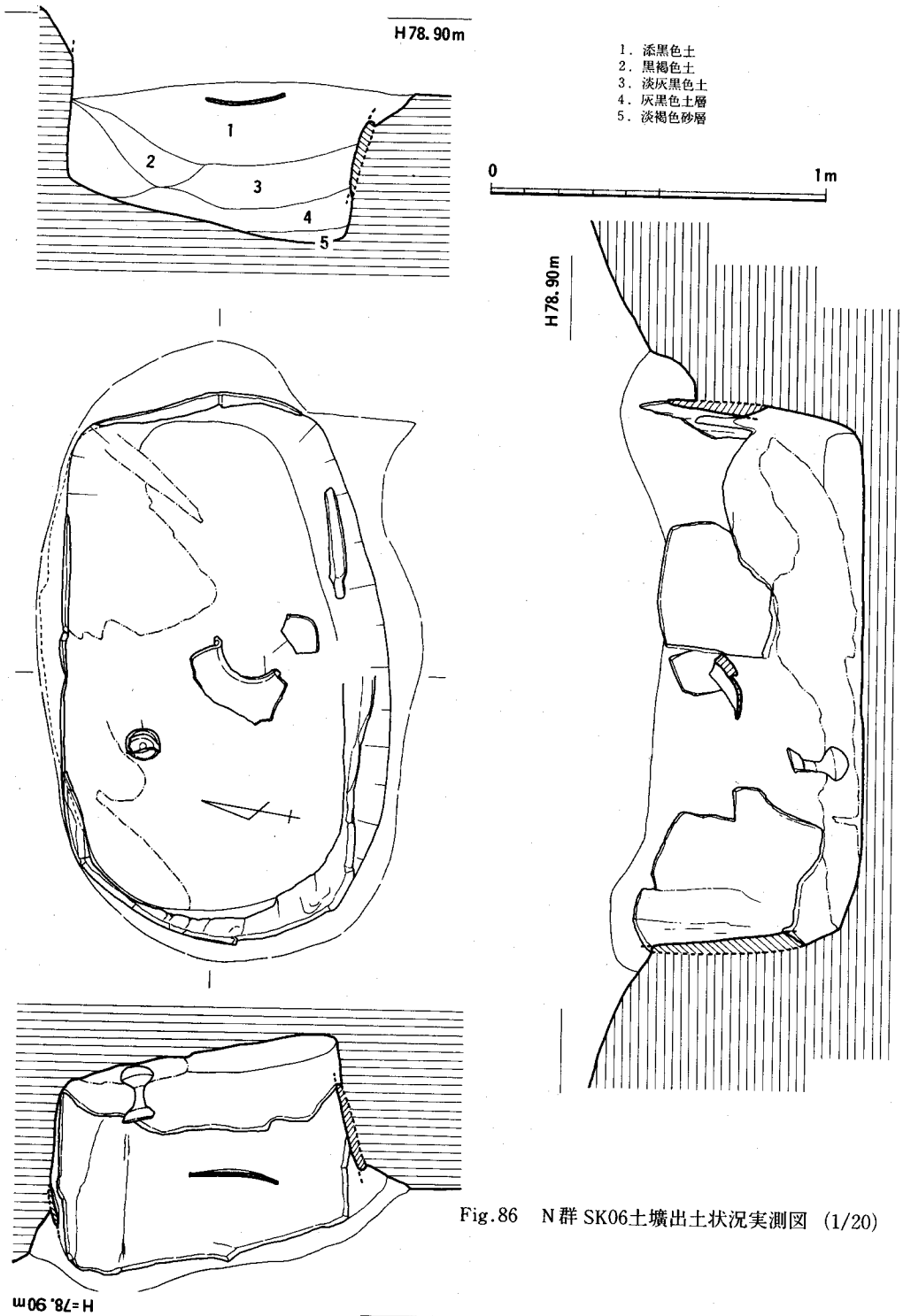


Fig.86　N群 SK06土壙出土状況実測図 (1/20)

⑬ 石棺墓 (Fig.87～89)

N群調査では２基の石棺墓が検出された。

１基は第７号墳西側墳丘内（ＳＸ01石棺墓）にあり、他は第８号墳々丘裾部（ＳＸ02石棺墓）に隣接して営まれている。

何れも蓋材を失なっており、ＳＸ01石棺墓の小口部で口縁部を失う須恵器小壺が出土した。

① ＳＸ01石棺墓 (Fig.87、PL.28)

本石棺は第７号墳左羨道部に主軸を南北に向けて配置される。

石棺墓は墳丘盛土内に営まれているために墓壙の平面形を検出することはできなかったが、調査前の地形現況図（Fig.43）では石棺墓の位置付近が最高点となり、ほぼ１ｍ程盛上っているのは石棺墓封土の旧状を反映したものか。

石棺墓の規模は、内法で主軸長１ｍ、西側壁長１ｍ、東側壁長95cmをはかり、小

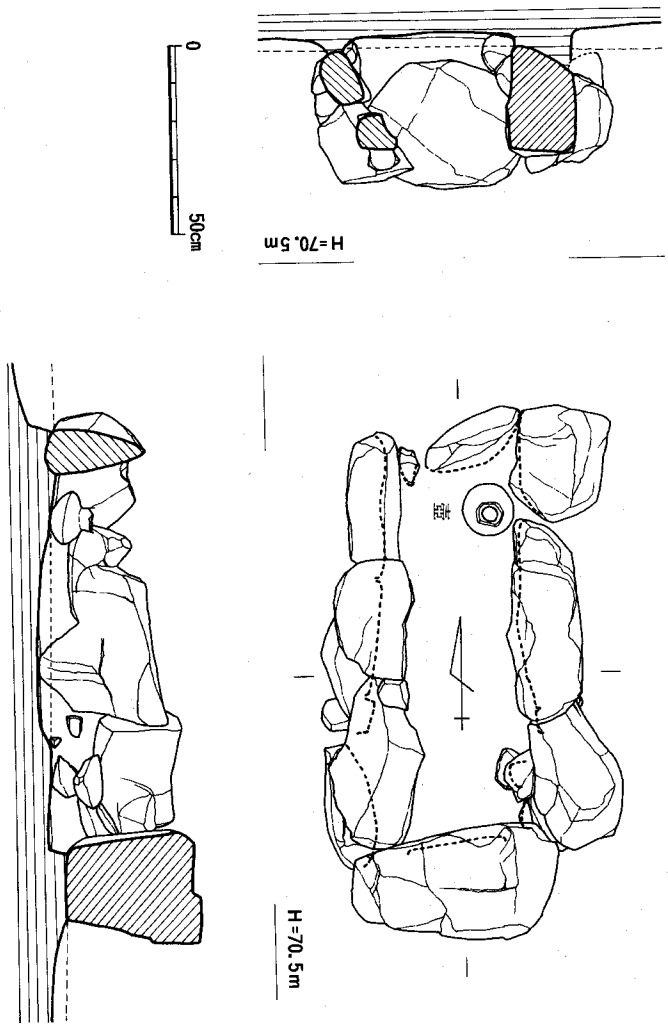


Fig.87 N群 SX01石棺墓出土状況実測図 (1/20)

口部では南側で38cm、北側で40cmとなる。

石棺材は小口部および側壁部ともに花崗岩転礫を使用し、北側小口で1石、南側小口で2石、また西側壁で3石、東側壁でも3石を立てて構成している。

棺の深さは北小口部で40cmを計り、中央部は調査時の掘下げすぎである。

棺内の南側小口部で口縁端部を打欠く須恵器小型壺が副葬されていた。正立の状態である。

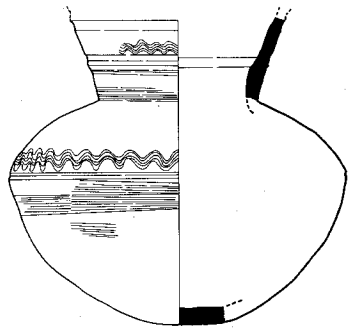


Fig.88　N群SX01石棺墓出土遺物実測図 (1/3)

副葬土器（Fig.88、PL.60）　半球形の胴部にほぼ直線的に外方に伸びる頸部を有する壺である。口縁部は人為的打欠きのために現存しない。

壺は胴部中位によりやや頸部に近い最大径部に沈線一条を廻し、この上に振幅長が1cm程の細かい波状文を施す。またこれより上部は全体に自然釉を覆っているため各部の特緻か不明瞭であるが、頸部下端より1.5cm程上った位置に低い三角突帯一条を施し、更に1.5cm程上部では多条の突帯状隆起がみられる。この突帯間には振幅の小さい波状の文し条が施される。器面は頸部下端外面はカキ目調整後横ナデで、胴部中位も同様である。また内面はナデ調整となる。器色は内面および外面上半が暗褐色、下半部は灰色となる。現存高12cm、頸部径6.3cmをはかる。

② ＳＸ02石棺墓（Fig.89、PL.28）

第8号墳々丘裾部を走る幅2m程の溝状遺構の外側に隣接し、主軸をN－78°－Eに向けて検出された。

本石棺もまた墓壙プランを明らかにできなかった。構築面は後世の削平を受け、石組遺構周辺の地山面（大礫を含む黄褐色砂質土）まで掘下げられている。

石棺は西側小口部石材を欠失し、側壁規模が明らかでないが、現存長で北側壁長1.23m、南側壁長1.35mである。また東側小口部は40cm程の規模である。

使用石材は全て花崗岩角礫で、比較的大型のものであり、側壁部石材は全体に内傾気味に立てており、床面幅42cmを計る。

石棺内面の床面には東側小口部近くで坂状の割石が残り、全面に敷石を施したものであった

と考えられる。また西側小口部は腰石材を欠失するが敷石材の一部があり、少くとも長辺は1.4m以上にはなるであろう。

棺内からは遺物の出土は全く無かったが、石棺内に敷石を付設する形態や第8号墳と近い位置にある点で古墳時代の所産であろう。

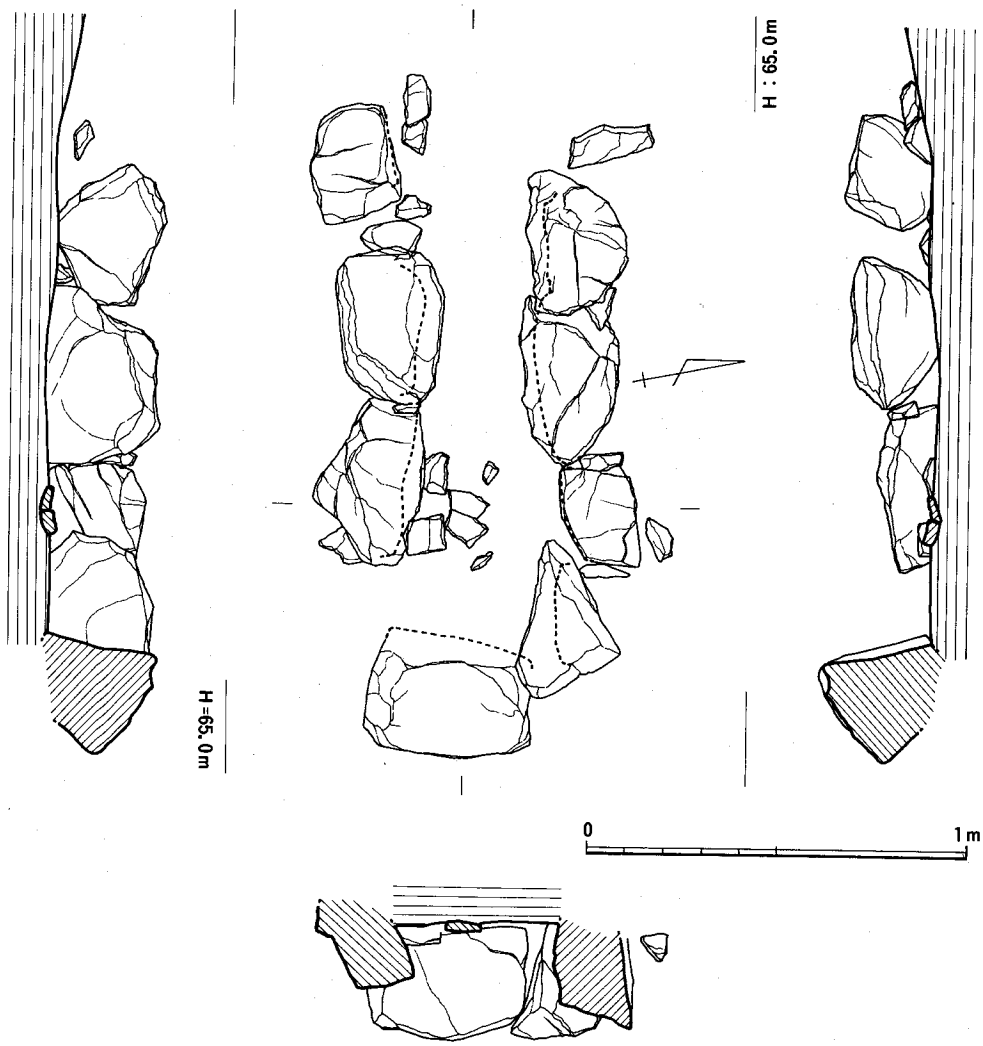


Fig.89　N群 SX02石棺墓出土状況実測図（1/20）

⑭　その他の出土遺物 (Fig.90)

羽根戸古墳群N群の調査では、第7号古墳墳丘およびその周辺を中心として縄文時代早期押型文土器破片、黒曜石およびサヌカイトを利用材とするフレイク、チップ、石鏃などが出土した。

遺物類は遊離し、原位置をとどめるものは無かったが、生活面が存在するものと考えて第7号墳東側を拡張し検出につとめた。

調査区では縄文時代に相当すると考えられる土壙（ＳＫ04）１基を確認したにとどまった。

またN群第1号墳々丘埋土からは小型の磨製石斧刃部破片1点が出土した。

以下出土々器の若干について説明を加えることにしたい。

第7号墳墳丘埋土　**1**は押型文土器深鉢の胴部破片である。器表に長・短径が8×5㎜程の楕円押型文を施文する。内面はナデ調整である。器色は内外面ともに暗赤褐色（スス付着）を呈する。胎土には雲母・石英・長石の混入多く、粗である。焼成は軟質である。

2も押型文深鉢胴部破片である。押型楕円は長幅が8×4.5～4.5～2㎜とかなり形も不揃いでまばらである。器色は外面赤褐色、内面淡黄灰色を呈する。器面調整はナデか。胎土に石英粗砂の混入多く、焼成軟質である。

3は深鉢胴部破片である。外面は斜位の撚糸施文で、内面は工具によるナデ調整である。器色は外面黄色味を帯びた黒褐色、内面暗黄褐色を呈する。胎土に粗砂の混入多く、焼成は軟質

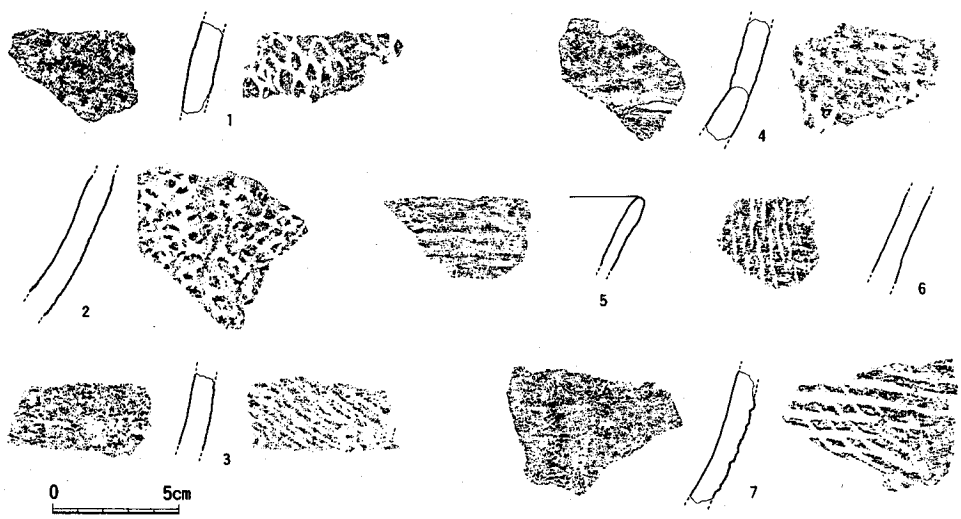


Fig.90　N群第7号墳周辺出土土器実測図 (1/3)

である。

4 は深鉢胴部破片で、底部に近いと考えられる。外面は粗雑な楕円押型文を施す。楕円文は長幅が８×4.5㎜程度である。器色は内外面ともに暗赤褐色を呈する。胎土には石英粗砂の混入多く粗で、焼成軟質である。

5 は直口する深鉢口縁部破片である。外面に横位の粗い条痕文を施し、内面はナデである。器色は外面淡黄褐色、内面黒灰色を呈する。胎土に粗砂の混入多くやや粗、焼成は堅緻である。

6 は深鉢胴部破片である。外面に縦位のあらい撚糸文を施し、内面はナデか、器色は外面が黄色味をおびた黒褐色を呈し、内面は赤褐色を呈する。胎土に石英粗砂の混入が多く、焼成は軟質である。

7 も深鉢胴部破片である。外面は太い条痕文様の平行沈線に細い５本単位の条読文を加える。器色は内外面ともに赤褐色を呈する。胎土には石英粗砂の混入多く粗で、焼成は軟質である。

Ｎ群出土の土器群は縄文時代早～前期を中心とするものであるが、既調査の羽根戸古墳群Ｄ・Ｅ群(註１)では楕円押型文土器・スクレイパー類が墳丘土から、また羽根戸原Ｃ遺跡群第１次調査(註２)では黒曜石を素材とする台形石器、ブレイド、使用痕のある剝片などの旧石器時代遺物や晩期組織痕文土器などが知られている。更に羽根戸古墳群の南・北に隣接する羽根戸南古墳群や野方古墳群地域でも表面採集によって多くの旧石器・縄文時代遺跡の分布が明らかになっている。

註)

(註１)　「羽根戸古墳群」『福岡県文化財調査報告書第57集』1980年、福岡県教育委員会

(註２)　「羽根戸遺跡」『福岡市埋蔵文化財調査報告書第134集』1986年、福岡市教育委員会

2．羽根戸原Ｃ遺跡群の調査

羽根戸原Ｃ遺跡群は飯盛山北麓の標高23～35m 程の中位扇状地に立地するが、今回の調査の契機となった西部墓園進入道路々線内の調査地区はこれを東西に貫いており、幅員８ｍ程の大トレンチが同群内を通過した形となっている。

調査は東側部分から開始し、現在の壱岐ヶ丘中学校西側を起点として調査区の総延長は340m、幅７～９ｍ程のものとなった（Fig.91）。

調査区のうちＩａ区が遺構の出土状況から比較的谷部に相当する以外はＩｂ～ｅ地区は全て東に緩く傾斜する丘陵上に立地する。ここで各調査区での検出遺構を列記することとする。

第Ｉａ区　溝状遺構９条（弥生以降～近世）、竪穴遺構１基（中世以降）などがあり、青磁・土師器擂鉢などが出土している。

第Ｉｂ区　溝状遺構５条（古墳～奈良時代以降）、竪穴住居址２軒（古墳時代－布留期）、掘立柱建物４棟（古墳時代～古代末）、竪穴遺構２基（奈良～平安時代）などがあって、弥生式土器から陶磁器まで幅広い時代の遺物が出土している。

Ｉｃ区　弥生時代終末期より６世紀後半代を中心とする竪穴住居址10軒、竪穴遺構20基、溝状遺構11条などが検出された。

Ｉｄ区　竪穴住居址１軒、掘立柱建物１棟（２×３間以上）および溝１条を検出した。

Ｉｅ区　不整形竪穴・柱穴群など若干を検出した。

以下各調査地区での個別の記述を行なうこととするが、羽根戸原Ｃ遺跡群では本調査を第３次調査としてこれまでに４次の調査がおこなわれているので以下では若干これについて触れ

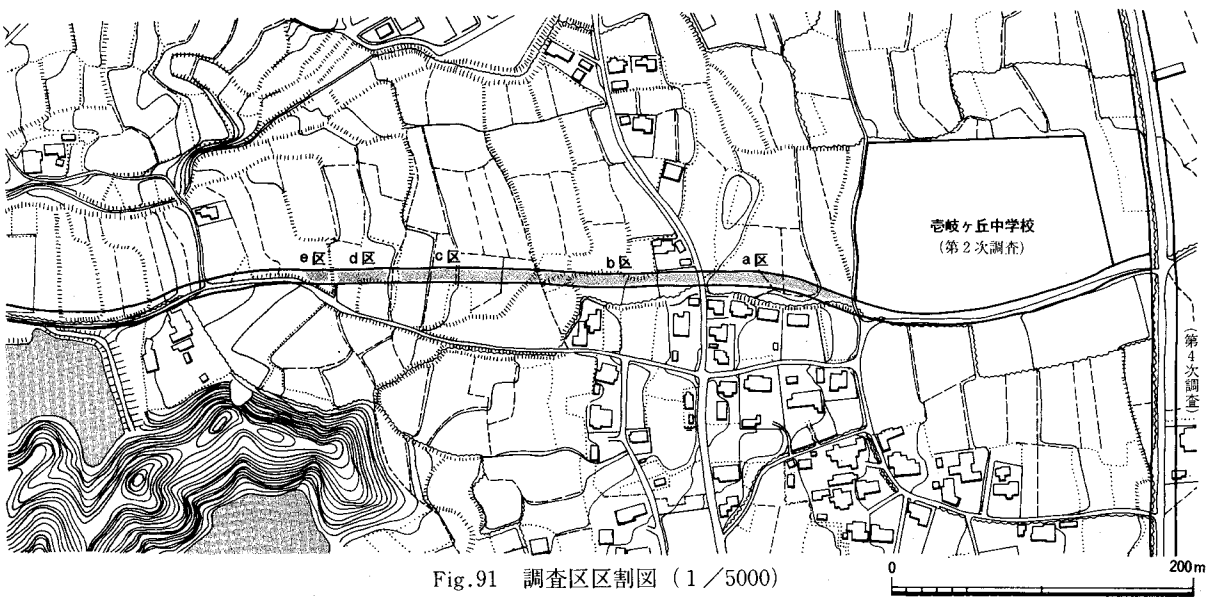


Fig.91　調査区区割図（１／5000）

ておきたい。

第１次調査（1983年）

市道野方金武線側溝拡幅工事に伴う発掘調査で、幅0.5m、延長２ km 程の区域を調査し、弥生時代～奈良時代に至る遺構と遺物を確認した。

第２次調査（1984年１～９月調査）

市立壱岐ヶ丘中学校建設に先立って調査された。調査では弥生時代甕棺墓10基・土壙墓、竪穴式住居址（古墳時代後期16軒）・掘立柱建物（41棟のうち倉10棟で11世紀以降）、土壙22基（弥生終末～平安時代）、炉址（精煉炉）、溝状遺構、旧河川（５条）等の諸遺構とともに豊富な遺物類が出土しており、特に旧石器時代後期の台形石器の包含が認められたのは大きい成果である。

註、「羽根戸遺跡」『福岡市地蔵文化財第134集』1986、福岡市教育委員会

第４次調査（註）（1986年調査）

市道野方金武線拡幅工事に伴う調査で弥生時代中期を主とする竪穴住居址が数多く検出され、同時代の拠点的集落の可能性が高いと考えられている。

註　「羽根戸遺跡」『福岡市埋蔵文化財調査報告書第200集』、1988、福岡市教育委員会

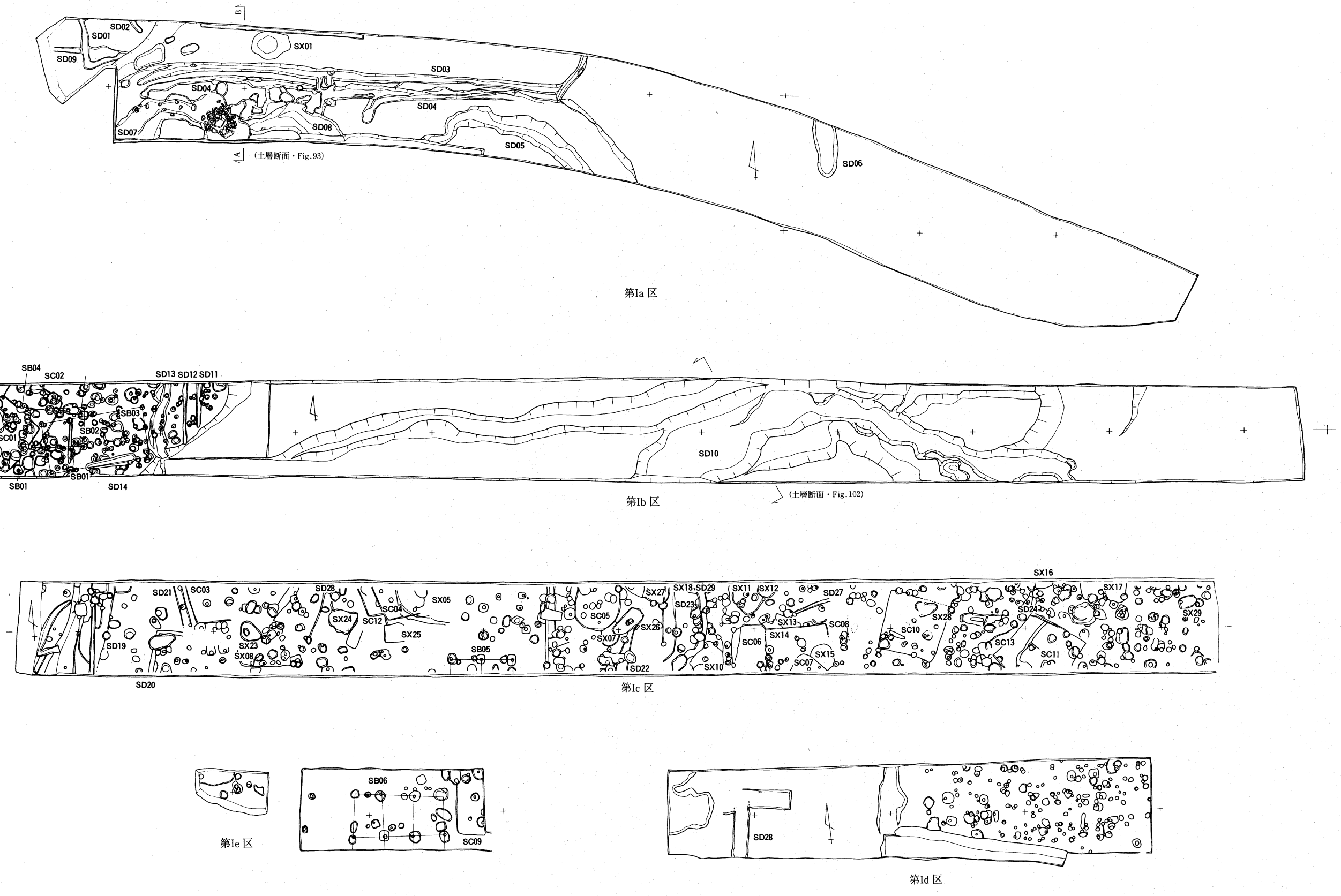


Fig.92　Ⅰa～Ⅰe 調査区全体図（1/300）

(1) 第Ⅰａ区の調査

概要 第１ａ区は、壱岐ヶ丘中学校敷地の南西隅付近から西側へ幅９ｍ、長さ約96ｍにわたって設定した。調査区はその東側で若干の弧を描き、ほぼ中央から西側が直線的な形状となっている。調査面積は約583㎡である。調査地点は、小さな谷川の流れに沿って作られた谷水田部に位置しており、北側に展開している扇状台地の南端部に相当している。現在の水田面での標高は調査区東端で27.70ｍ、西端で30.30ｍを測る。西端では比高差が約0.70ｍの段差をもって高くなっており、その地点より後述する第Ⅰｂ区のの西側部の台地落ち際まで平坦に続いている。

検出された遺構・遺物は少なく、遺存状況も悪い。遺構の検出面は黄褐色～明褐色の粘質土の上面である。この面の直上には現在の耕作土が覆っている。遺構は水田造成のためにかなり削平されたと思われ、例えばＳＤ07は床面からわずか５㎝しか残ってない。また谷川に沿っているために、流路の変化にともなって侵食されたこともあったものと思われ、遺構のほとんどが消滅した可能性がある。

遺構は、溝状遺構が９条、性格不明の竪穴遺構が１基検出された。溝状遺構のうちＳＤ01～04・09は出土遺物から中世から近世以降の水田に伴う溝、ＳＤ06は弥生時代後期以降の溝で、ＳＤ05・07・08はおそらく上流から続いている谷川の旧河道と思われる。時期は中世以降のものである。竪穴遺構ＳＸ01は中世以降のものと思われる。

１．遺構と遺物

溝状遺構 (Fig.92・93、PL.33)

ＳＤ01 調査区の西側で検出されたもので、平面形はＬ字形である。残りは悪く、約５㎝しか壁は残っていない。幅は0.5～0.6ｍで、断面形は浅皿状である。埋土は暗灰色のシルトである。遺物は出土していない。ＳＤ09を切っている。

ＳＤ02 ＳＤ01の東側で検出された。幅は0.3～0.4ｍである。断面形は浅皿状で、60㎝ほどの深さで残っている。埋土は暗灰色シルト。遺物は土師器、瓦器、須恵器の細片、白磁、龍泉窯系の青磁片、近世陶器片などが出土している。

ＳＤ03・04 調査区中央から西側にかけて現在の水田の畦畔の形状にほぼ沿ってその下部で検出されたものである。埋土は現在の耕作土とは若干異なり、暗灰色粘質土である。遺物は土師器細片、龍泉窯系青磁片が出土している。おそらく現在の水田の形状の原形となったもので

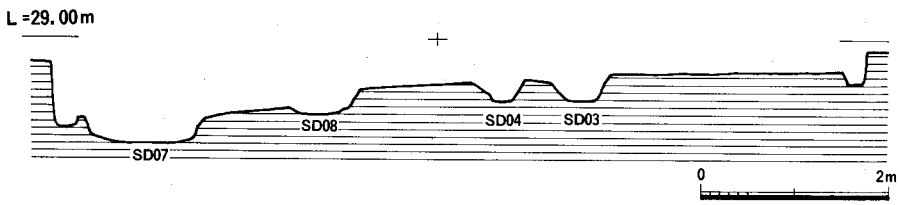


Fig.93 第Ⅰａ区ABライン断面図 (1/80)

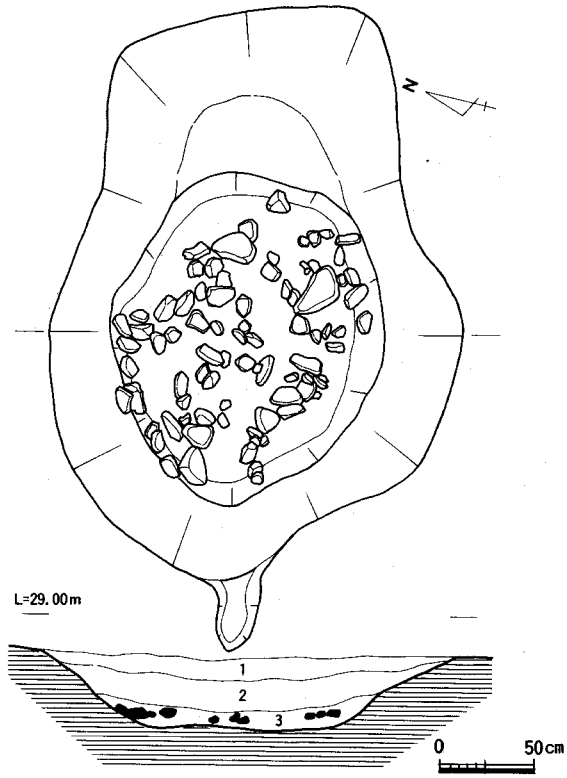
時期的には新しいと思われる。

ＳＤ05　調査区の中央で検出された。旧谷川の河道の一部と思われ、ＳＤ07とは同一の可能性がある。埋土は地山の黄褐色粘質土や砂、礫が混在している。遺物は出土していない。幅は0.8～1.9ｍ、深さは約0.3ｍである。

ＳＤ06　調査区の中央からやや東側において検出された。長さは4.40ｍである。方向はほぼ南北を向く。幅は1.50ｍ～1.60ｍ。深さは約６㎝ほどしか残っていない。埋土はやや褐色がかった暗灰色である。遺物は弥生時代後期の甕や鉢の破片が出土している。

ＳＤ07　調査区の中央で検出された。旧谷川の河道の一部で、ＳＤ05とは同一のものの可能性がある。埋土および法量はＳＤ05とほぼ同一であるが、人頭大の礫が集中している箇所がみられた。ＳＤ08を切っている。遺物は土師質土器（土鍋・擂鉢など）が出土している。

ＳＤ08　ＳＤ05・07と同じく旧谷川の河道と思われる。ＳＤ07によって切られている。



第１層：暗褐色粘質土＋黄褐色粘土層の混合したもの
第２層：暗灰褐色粘土層
第３層：黒灰色粘土層

Fig.94　SX01平面及び土層断面図（1/40）

ＳＤ09　調査区西端で検出された。基底部しか残っていない。幅は0.4ｍである。埋土はＳＤ02とほぼ同一である。遺物は出土していない。

出土遺物　（Fig.95、PL.67）

以上の溝状遺構からの出土遺物は量が少ないので一括して述べる。

１・２は龍泉窯系の青磁である。**１**は鉢もしくは杯の口縁部で、**２**は高台の破片である。いずれも釉がやや厚く、薄緑がかった青色で、**２**は、全面施釉である。**3**、**4**は土師器杯である。いずれも糸切り底で、復元口径・器高・底径は、**3**が12.8～13.2・2.3・8.6㎝、**4**が12.0～12.5・2.2・8.8㎝である。**５・６**は弥生土器である。**５**は鉢で体部はやや外湾し、目の粗いハケ目が底部から口縁に向って施されている。**６**は甕の底部片で胴部下半はやや膨らんでいる。器面調整は**５**とほぼ同じ手法である。いずれも色調は明褐色である。**７・８**は土師質土器で、土鍋と擂鉢である。**７**は復元口径が26.3～28.0㎝で、口縁部はわずかに肥厚し、外反している。外面はナデ、内面は丁寧なハケ目調整が施されている。外面には一部煤が付着している。**８**の復元口径・器高・底径は28.8・13.3・14.1㎝である。やや硬質で内面は目の細かいハケ目調整

の後、３条の下ろし目を施している。色調は明灰白色である。

竪穴遺構　(Fig.94・95、PL.33)

ＳＸ01　調査区西側で検出された。平面形は不整形である。長軸の長さは3.10ｍ、幅は2.18ｍ、深さは0.40ｍを測る。埋土は３層に分けられ、礫を含んだ有機質分の多い層が下部に見られる。最上層の土は一時的に堆積した感もある。用途、性格は不明である。

出土遺物

龍泉窯系の青磁椀片（**9**）が１点出土しているのみである。外面は無文で、内面には劃花文が施されている。釉調は良好で、透明度が高い。色調はモスグリーンである。高台径は6.8㎝。

２．小結

第Ⅰａ区においては、遺構、遺物が少ないために、遺跡の範囲、性格など十分な把握はできなかった。概要でも述べたように調査地点の地形的な制約もあるが、遺構、遺物のほとんどは後世の削平などによって消滅したものと思われる。存在していたと予想される遺跡の時期は、出土および表採遺物などから弥生時代後期、古墳時代後期、奈良時代、中世の時期のものがあったと思われ、時代構成については隣接する第２次調査時の所見とほぼ同じ様相を示している。

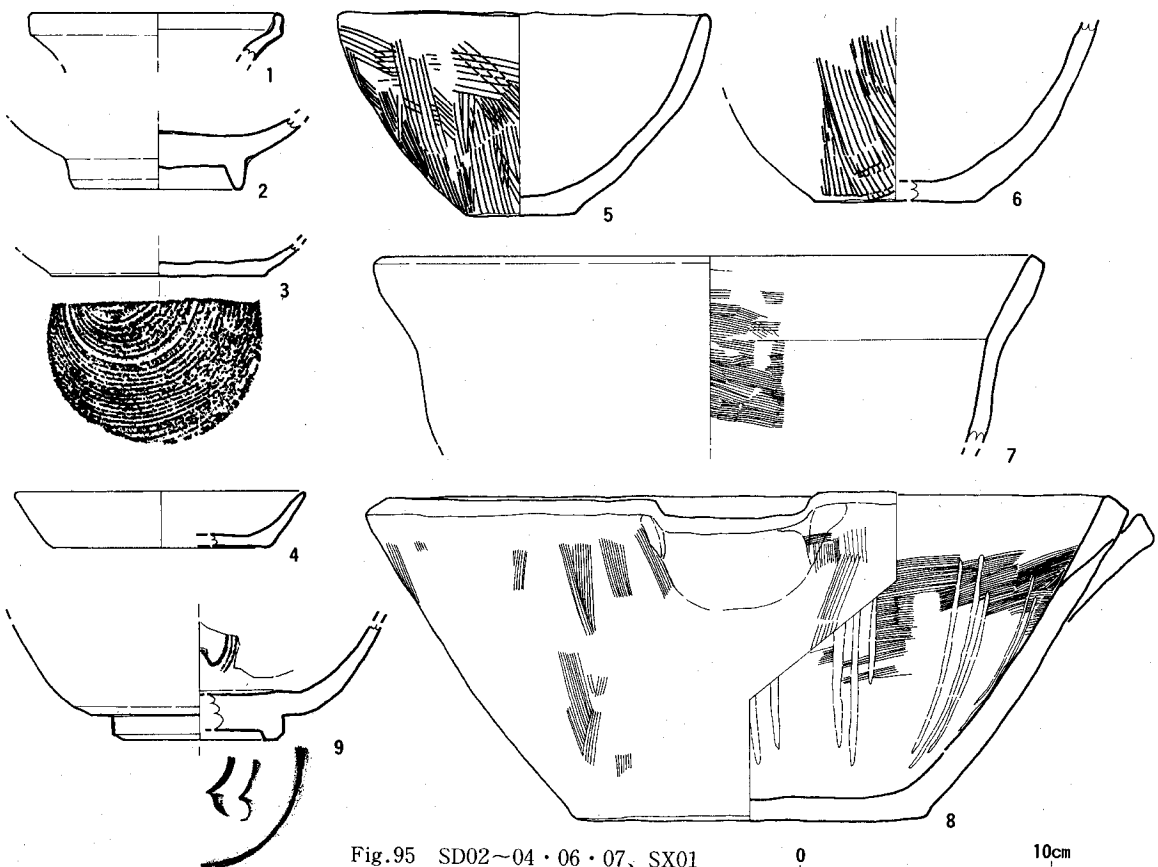


Fig.95　SD02～04・06・07、SX01
出土土器実測図（1/3）

（SD02；1、SD03；2・3、SD04；4
SD06；5・6、SD07；7・8、SX01；9）

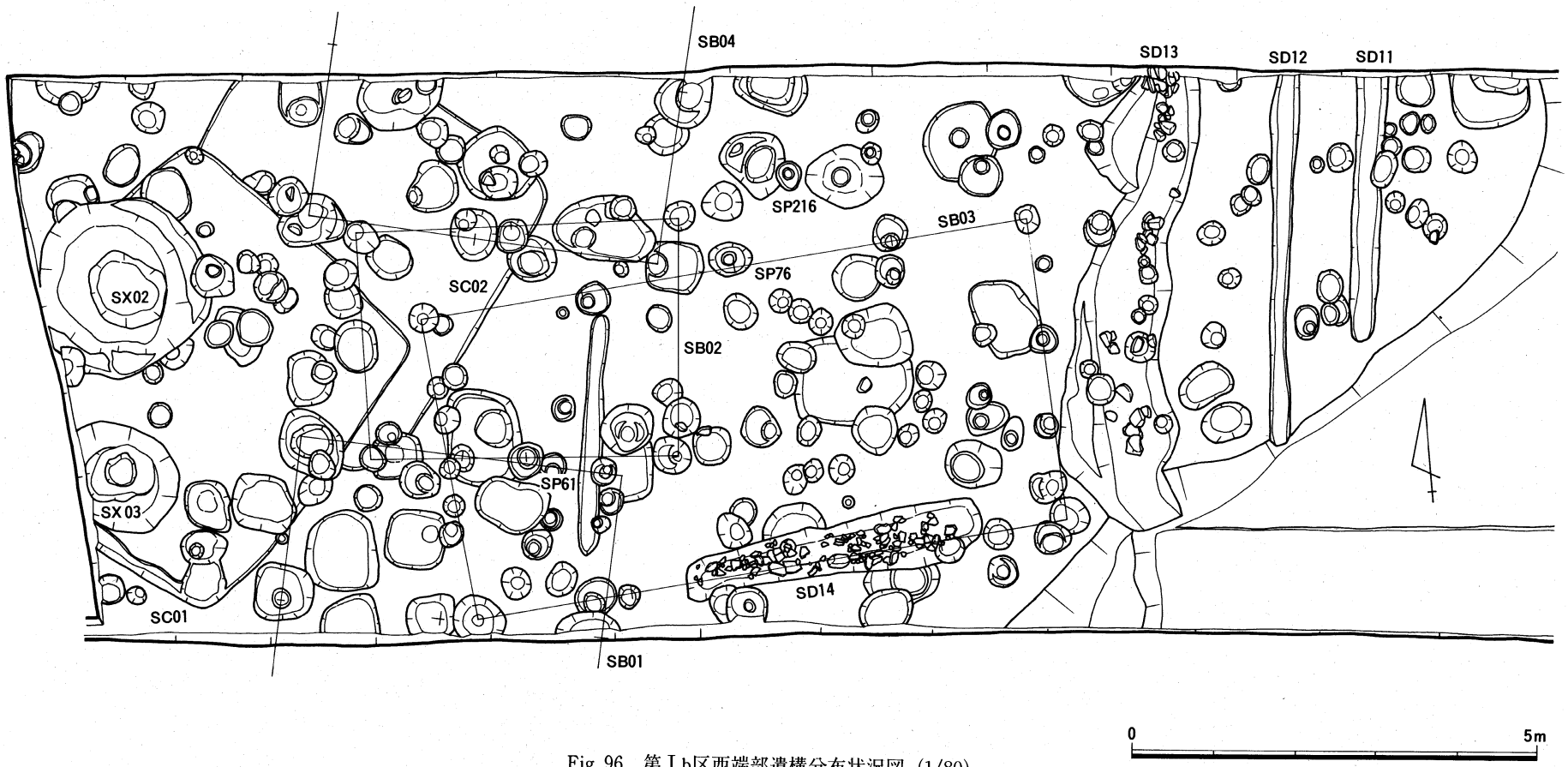


Fig.96　第Ⅰb区西端部遺構分布状況図 (1/80)

(2) 第Ⅰb区の調査

概要 第Ⅰa区とは県道を挟んで西側に位置している。調査区は幅7m、長さ98mにわたって設定した。調査面積は約686m²である。調査区の位置する地点は、第Ⅰa区同様谷川に面した水田部にあたっており、南東の方向へ低くなりながら傾斜している。現水田面の標高は調査区の東端で30.30m、西端で34.0mを測り、両端で3.70mの比高差がある。地形の大きな変換点が西側と中央部にあり、約70～80cmの比高差をそれぞれ持って一段ずつ高くなりながら西側（第Ⅰc区）へ続いている。第Ⅰa区でも見られたように、約100mごとに大きな段差を持たせた平坦面の造成が、過去において行われており、第Ⅰc区西側でも1.6mほどの段差が見られる。この造成によってかなりの遺構が消滅している。第Ⅰb区ではその西端から約20mの間は比較的残りは良いがそれから東側は旧河川の形状をかろうじて残す程度である。

検出された遺構は掘立柱建物4棟、竪穴住居址2基、溝状遺構5条（うち1条は旧河川）、柱穴多数、性格不明の竪穴遺構2基である。掘立柱建物は、古墳時代のものが2棟、古代末のものが1棟、時期不明1棟である。竪穴住居址は古墳時代前期のものである。溝状遺構は、古墳時代のもの2条、奈良時代以降のもの2条、古代末以降のもの（旧河川）1条である。柱穴は、出土遺物から弥生時代から中世までの時期にわたっている。竪穴遺構は奈良～平安時代のものである。出土遺物では弥生時代終末の土器が量的に目立った。

1．調査地の土層 調査区西側の基本的な土層堆積の状況は、上層から第1層；表土（厚さ20cm）、第11層；暗褐色土（厚さ15cm）、第13層；やや暗い褐色土（厚さ10cm、良くしまっている）、褐色～明褐色粘質土（基盤土層、固くしまっている）となっている。土層の遺存状況は部分的には残り良いものの全般に削平を受けているものと思われる。遺構の検出面は11層と13層の上面で遺構検出を行った。遺構の埋土の異なりや出土遺物からみると11層上面は古代末以降、13層上面では弥生・古墳～奈良時代以降の遺構が検出されている。

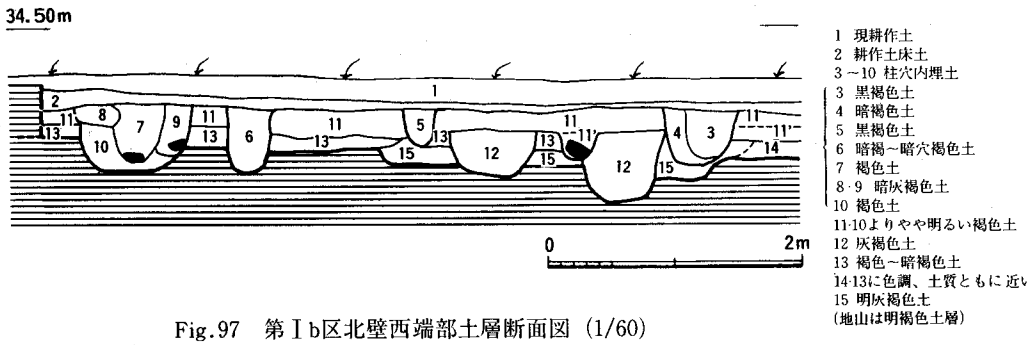


Fig.97 第Ⅰb区北壁西端部土層断面図（1/60）

2．遺構と遺物

竪穴住居址

竪穴住居址は調査区の西端で２軒検出された。竪穴住居址の分布はこの地点から西北の平坦な台地部に展開しており、規模のかなり大きな集落址が弥生時代終末から古墳時代にかけて存在したことが予想される。

ＳＣ01（Fig.98、PL.34）

調査区の西端で検出された。全体の規模の四分の三ほどが確認されており、北西コーナーは未掘である。住居址の中央から北西にかけてはＳＸ02によって、南西部ではＳＸ03によって切られ、また北東部においては竪穴住居址ＳＣ02を切っている。

住居址の規模は一辺が3.70～4.00ｍほどのやや小規模なもので、北東－南西軸がやや長い方形の平面プランをなしている。側壁の残りはあまり良くなく平均して約８～10㎝である。最も

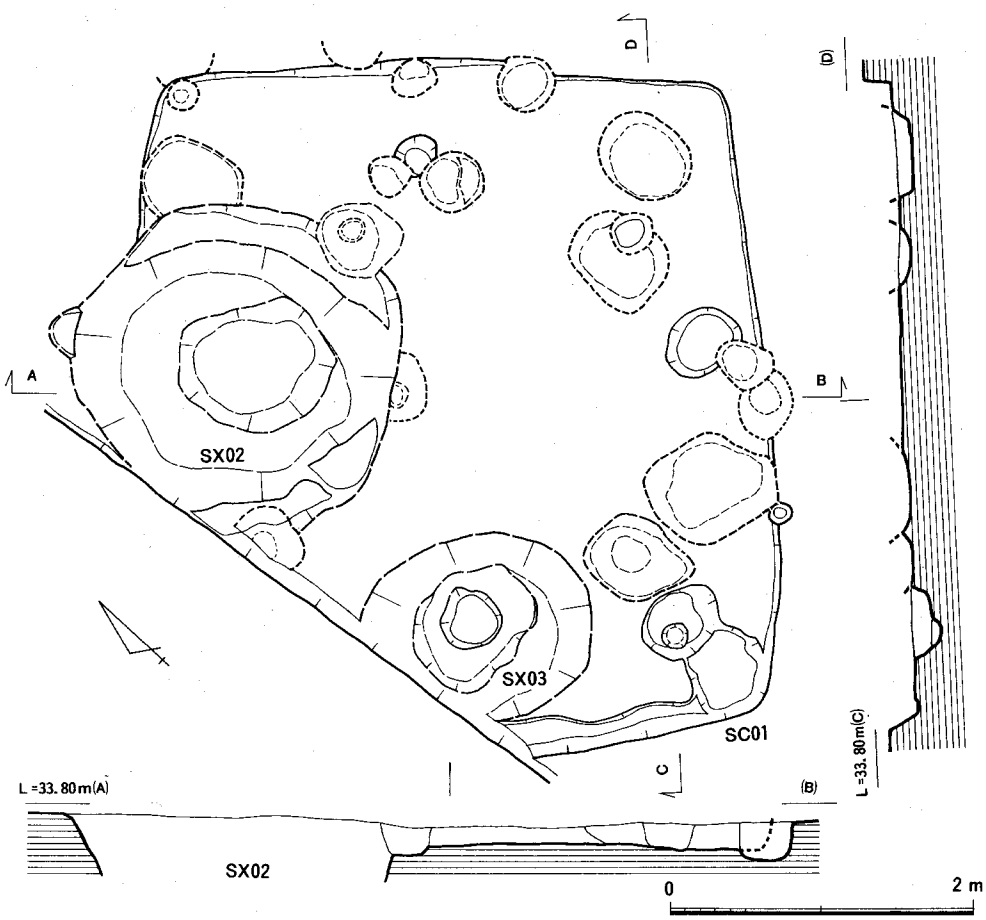


Fig.98　SC01平面および断面見通し図（1/50）

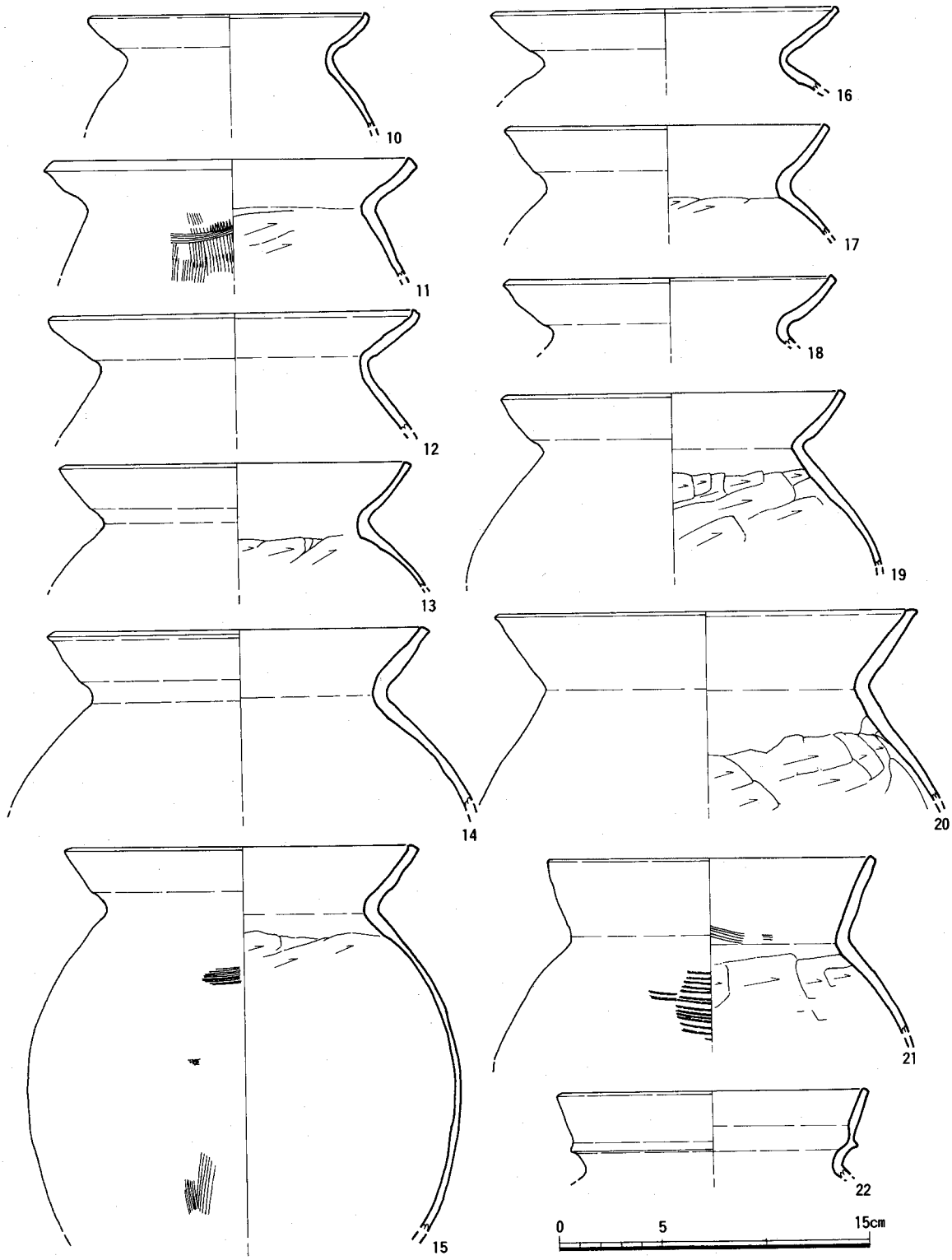


Fig.99　SC01出土土器実測図（1/3）

良好な部分(南隅)で15cmしかない。住居址基底面は平坦で、明褐色粘質土層を掘り込んでいる。この層の上面に約3～5cmの厚さでややしまった灰褐色土が堆積しており、その上面が本来の住居址床面だったと思われる。床面直上で検出された柱穴はFig.98の実線で示した3本で、この住居址の主柱は2本柱だったものと思われる。また南隅に浅皿状のくぼみと壁溝の一部が確認された。ベット状の高まりは認められなかった。中央からやや西南へ寄ったところに木炭・焼土が集中してみられた。おそらく炉があったと思われるが人為的な掘り方は見られない。

出土遺物 (Fig.99・100、PL.67)

出土遺物は弥生時代終末の土器や土師器が中央からやや東側にまとまって出土した。ほとんどは破片で完形になるものはない。**10～20**は土師器甕の口縁～肩部にかけての破片である。復元口径は13.4～19.6cmで**10**が最小で、**20**が最大である。口径の平均値は16.5cmである。器形は**13・14・16・17**が肩のやや張る球形の胴部となり**10・12・15・19・20**は長胴となる。口縁部はいずれも「く」の字形に屈曲している。**14・20・21**が頸部近くでやや肥厚し直線的に屈曲しているほかは、わずかに外湾しながら口縁端部へ続いている。口縁端部はわずかに摘み出すもの(**10・12・15・16**)とそうでないものとがある。内外面の調整痕は器面が荒れており明確でないが、きめの細かな叩き目およびハケ目がみられるもの(**15・19**)、やや目の粗いハケ目のものがある。**11**のヘラ沈線は緩やかな波状を描いているものと思われる。これらの甕の内面は頸部の屈曲部分近くまで横方向の粗いヘラケズリが施されており、特に**13・15・19**は器壁が薄く仕上げられている。胎土は素地はきめ細かいが、やや目の粗い砂粒や雲母を多く含んでいる。

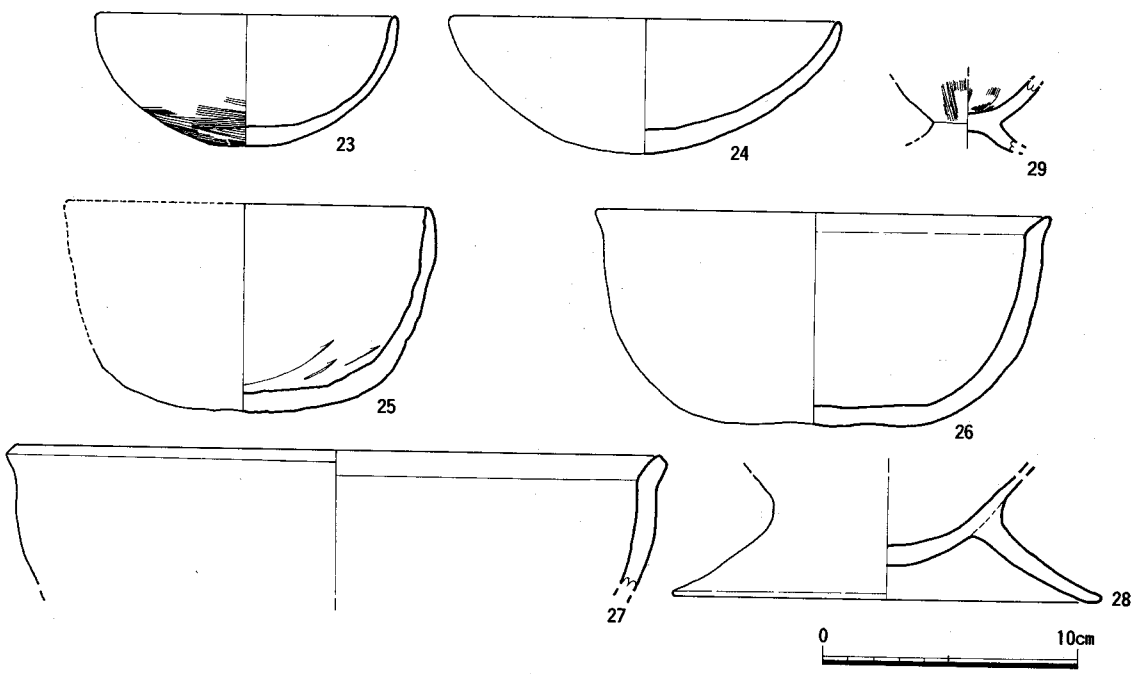


Fig.100　SC01・02出土土器実測図 (1/3)　(SC01；23～28、SC02；29)

色調・焼成は**10～13**・**17～19**が薄く褐色がかった灰褐色でもろく、**14～16**・**20～22**が明褐色で、良くしまっている。なお**21**は以上の甕とは形態をやや異にするもので、口縁部は直線的に外反し、やや胴長の器形である。外面肩部には叩き目が、内面にはヘラケズリが施されている。色調・焼成は明褐色でややもろい。**22**は二重口縁を持つ壺である。復元口径は15.0cmである。頸部は短く、口縁の立ち上がりは頸部の傾きにほぼ等しい。胎土・焼成・色調は甕**10～13**等とほぼ同一である。**23～27**は鉢である。**23**は復元口径・器高が、12.0cm・5.2cmである。内面はナデ、外面はハケ目調整が施されている。焼成はあまり良くなく、灰色を呈す。**24**は復元口径・器高が15.6cm・5.3cmである。内外面ともナデ調整が施されている。口縁端部はわずかにつまみ出され、やや尖っている。焼成はあまく、薄く褐色がかった灰白色を呈す。**25**は底の深い器形のもので、復元口径・器高は14.4cm・8.6cmである。底部内面にはヘラケズリの痕が残る。**26**・**27**は作りがやや厚手のもので口縁部内面に弱い稜線が走る。内外面ともナデ調整。底部は平底に近い。復元口径・器高は**26**が18.4・8.6cm、**27**が25.6cmである。**28**は脚付きの甕底部と

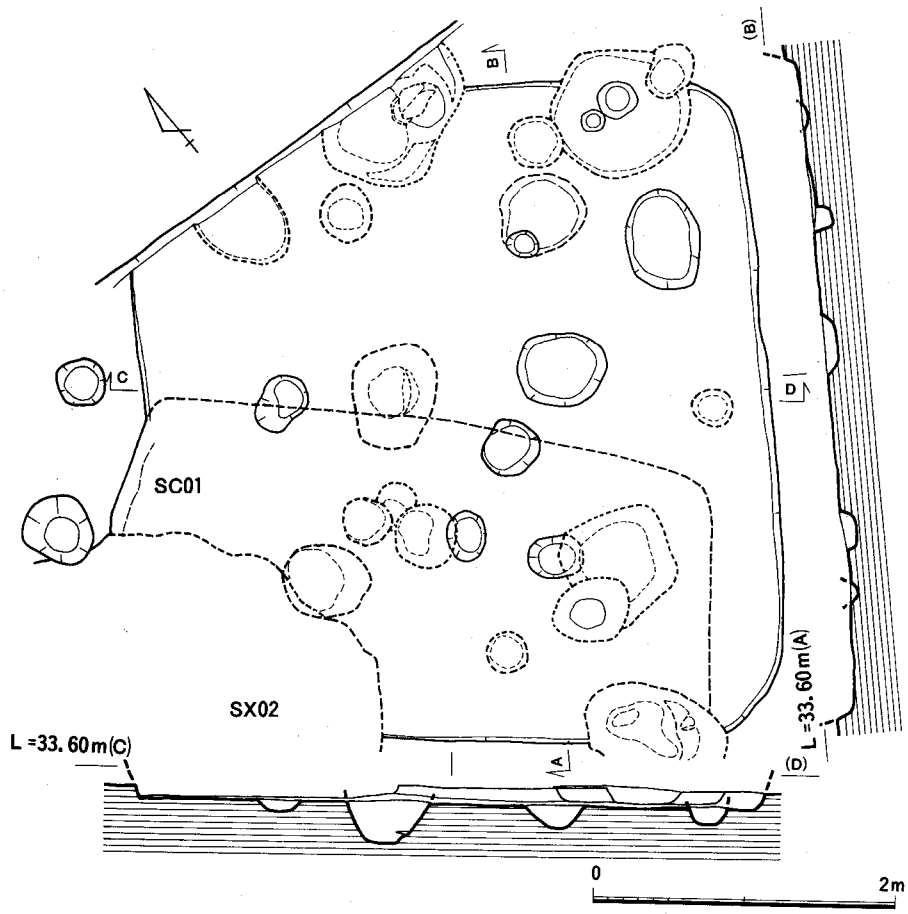


Fig.101　SC02平面および断面見通し図（1/50）

思われる。器面はハケ目調整の後丁寧なナデが施されている。色調は褐色で、焼成はややしまり悪い。なお**26・27**は弥生土器の可能性がある。

ＳＣ02（Fig.101、PL.34）

調査区の西端で検出された。ＳＣ01・ＳＸ02から西南部半分を切られており、さらに多くの柱穴によって切られており全体形は窺えない。住居址の規模はＳＣ01と比べてやや小さく、竪穴は一辺が3.50～3.70ｍほどの方形プランである。側壁は５㎝程しか残っておらず、最も残りの良いところで８㎝である。遺存状況は良くない。住居址を覆う埋土は木炭片をわずかに含む灰褐色土で、床面直上に見られた。床面で検出された柱穴は５本あるが、ＳＣ01同様この住居址も東南－西北ライン上にほぼ位置する２本の柱を主柱とする住居址と思われる。竪穴中央はまわりと比べやや低いが、炉跡などは見られなかった。壁溝、ベッド状の高まりなどは確認されていない。

出土遺物（Fig.100）

埋土から弥生土器、土師器の細片が出土しているが図示できるのは**29**しかない。いずれも２次堆積のものである。**29**は土師器で低脚付き鉢もしくは高杯と思われる。内外面ともハケ目の後ヘラミガキが施されている。胎土は細かく焼成良好。やや赤みのある褐色を呈す。

溝状遺構

溝状遺構は旧河川も含めて５条検出された。ＳＤ10は旧河川で調査区中央から東側にかけてみられた。ＳＤ11～14は西端部の一段高くなった台地の上で検出されたものである。

ＳＤ10（Fig.92・102、PL.35）

形状から旧河川と思われる。最大幅で7.5ｍほどを測るが、本来は８ｍ以上はあったものと思われる。本調査区中央で蛇行している河道の一部を確認できた。河道は蛇行を繰り返しながらさらに第Ⅰａ区の南側へ流れ落ちてゆくものと思われる。なお淀み状の土層（８～11層）から古代末の土師器や輸入陶磁器がまとまって出土した。完全に埋没したのは中世以降である。

出土遺物（Fig.104、PL.67）

遺物は第２層上部（**30**）、９層（**31～50・54～56**）、11層（**57～60**）、河床（**51～53・61～63**）で、量的にはそう多くないが層位的にまとまって出土している。いずれも２次堆積である。

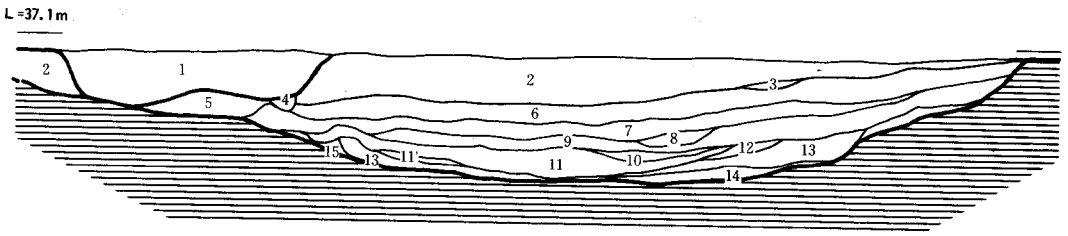


Fig.102　SD10土層断面図（1/60）

土層所見

1　現代攪乱
2　暗褐色粘質土層
3　明褐色粘質土（ブロック）
4　明褐色粘土（ブロック）
5　黄褐色粘土層
6　黒褐色粘質土層
7　暗褐色粘質土層＋わずかに明褐色粘質土が混入
8　黒褐色粘質土層（木炭片）
9　暗褐色粘質土層
10　暗灰褐色粘質土層（やや砂粒）多し
11　暗灰褐色シルト層
11′　青灰色シルト層
12　暗灰色粘質土層
13　明褐色シルト層
14　黄褐色～明褐色粘土層
15　明褐色～黄褐色粘土層
16　黄褐色粘土層＋褐色土

30～37は土師器皿である。糸切り底のものは**30・37**で、他はヘラ切り底である。復元口径・器高・底径（平均値）は、8.8～9.9(9.3)・1.1～1.9(1.4)・6.1～7.8(6.7) cm。胎土・焼成はいずれも精良でしまり良い。色調は**32・37**がやや赤みがかった褐色のほかは明褐色である。**38～40・54～62**は土師器椀の口縁、高台部片である。**39・40**は底部と体部の境近くに「ハ」の字形に開く高台が貼付され、体部はやや直線的に立ち上がっている。高台径は、**38**が7.1cm、**39**が7.5cm、**40**が7.0cmである。胎土・焼成はいずれも良好。**54**は内面はヘラミガキ、外面は丁寧なナデが施されている。復元口径・器高・高台径は15.1・5.1・6.1cmである。体部は球形に近く、内外面ともヘラミガキが施されている。胎土・焼成良好。色調は薄く褐色がかった明灰白色。**44・45**は丸底皿片である。復元口径・器高は**44**が14.3・3.8cm、**45**が14.4・4.0cm。いずれも体部の口縁近くには弱い屈曲がみられ、内面から口縁およびこの屈曲部分まで丁寧なナデが施されている。下半はヘラ切りである。胎土・焼成ともに良好。やや灰色がかった褐色を呈す。**46・58**は黒色土器の高台部片である。**46**は球形の体部を持ち、「ハ」の字形に踏んばった高台がつく。いずれも内外面は丁寧なヘラミガキが施されている。高台径・高さは、**45**が6.8・0.9cm、**58**が6.2・0.8cmである。**41～43・55～57・61**は瓦器椀の口縁、高台部の破片である。体部中位ほどに弱い屈曲が見られるもの（**43・55・56**）や、球形になると思われるもの（**42・57**）がある。**41・61**は他と比べ高台が高く、体部は直線的である。深い器形のものと思われる。色調はいずれも暗灰～黒灰色。以下はいずれも白磁の説明である。**47・59**は口縁部がわずかに玉縁状をなす椀（椀Ⅱ-1類）である。復元口径は**47**が14.2cm、**59**が10.6cmである。わずかに青みのある透明な灰白色を呈す。**48・53・60**は玉縁の口縁を持つ椀（椀Ⅳ-1a類）である。復元口径は**48**が17.8cm、**53**が16.8cm、**60**が17.2cmである。**48・53**は玉縁がやや小さい。体部はわずかに丸みを帯びる。**51・52**は体部外面にヘラ沈線が施された小椀（椀Ⅴ-2b類）である。復元口径は**51**が10.6cm、**52**が10.3・3.9・3.4cmである。**49**は口縁端部がわずかに外反する椀（椀Ⅴ-3a類）である。復元口径は14.6cm。**63**は椀（椀Ⅷ3類）の高台片である。**50**は淡く灰緑色がかる釉色の、双耳もしくは四耳壺である。肩部の張りは弱く、耳の貼付の方法に特徴がある。

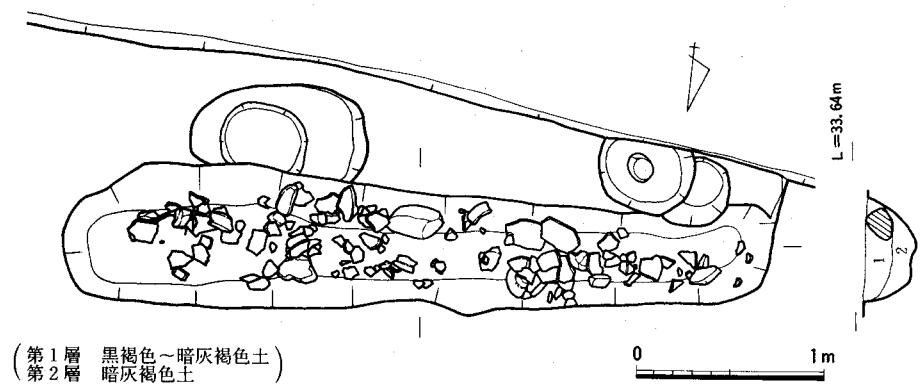


Fig.103　SD14遺物出土状況および断面図（1/40）

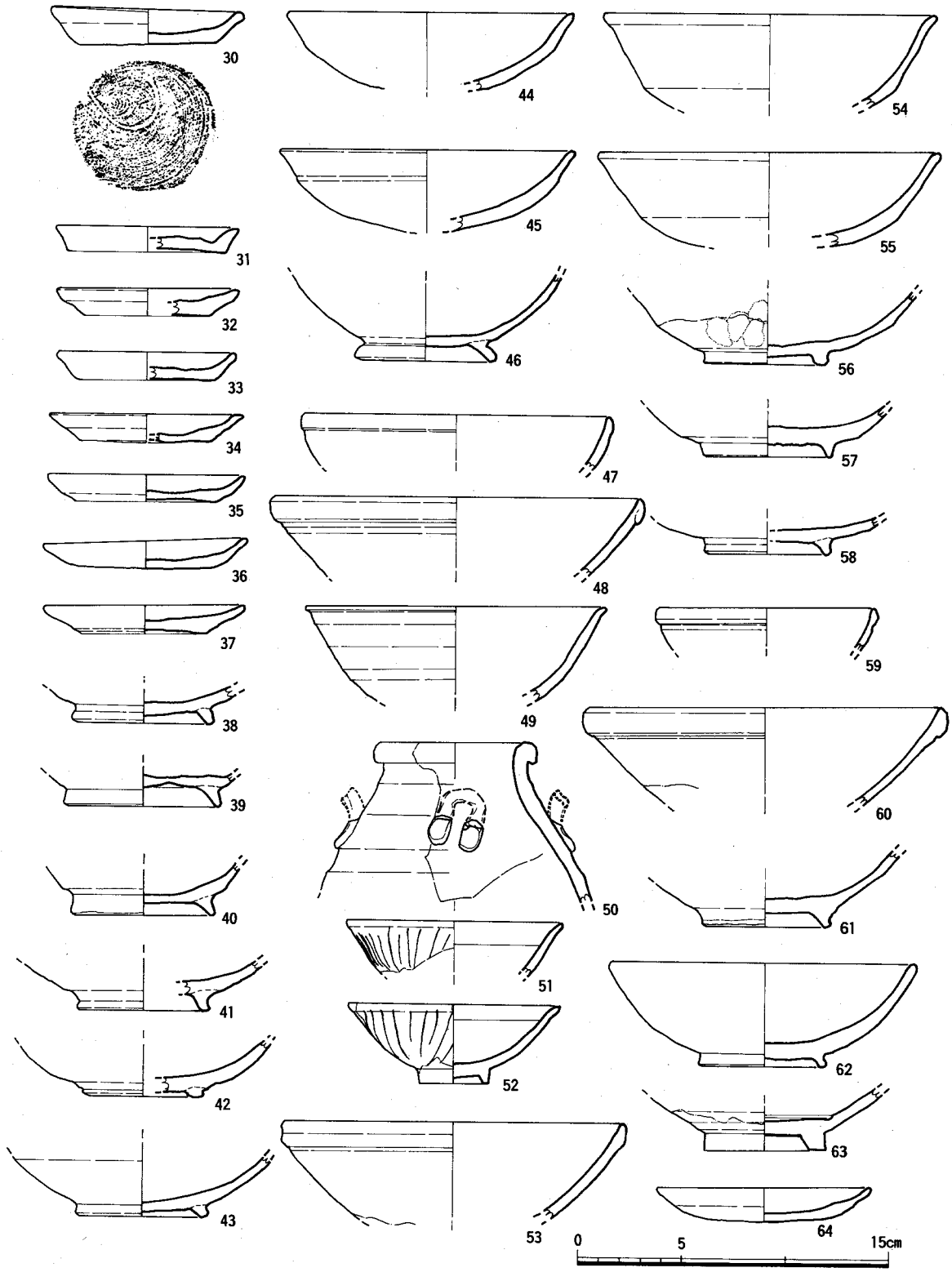


Fig.104　SD10・13出土土器実測図（1/3）　(SD10；30～62　SD13；64)

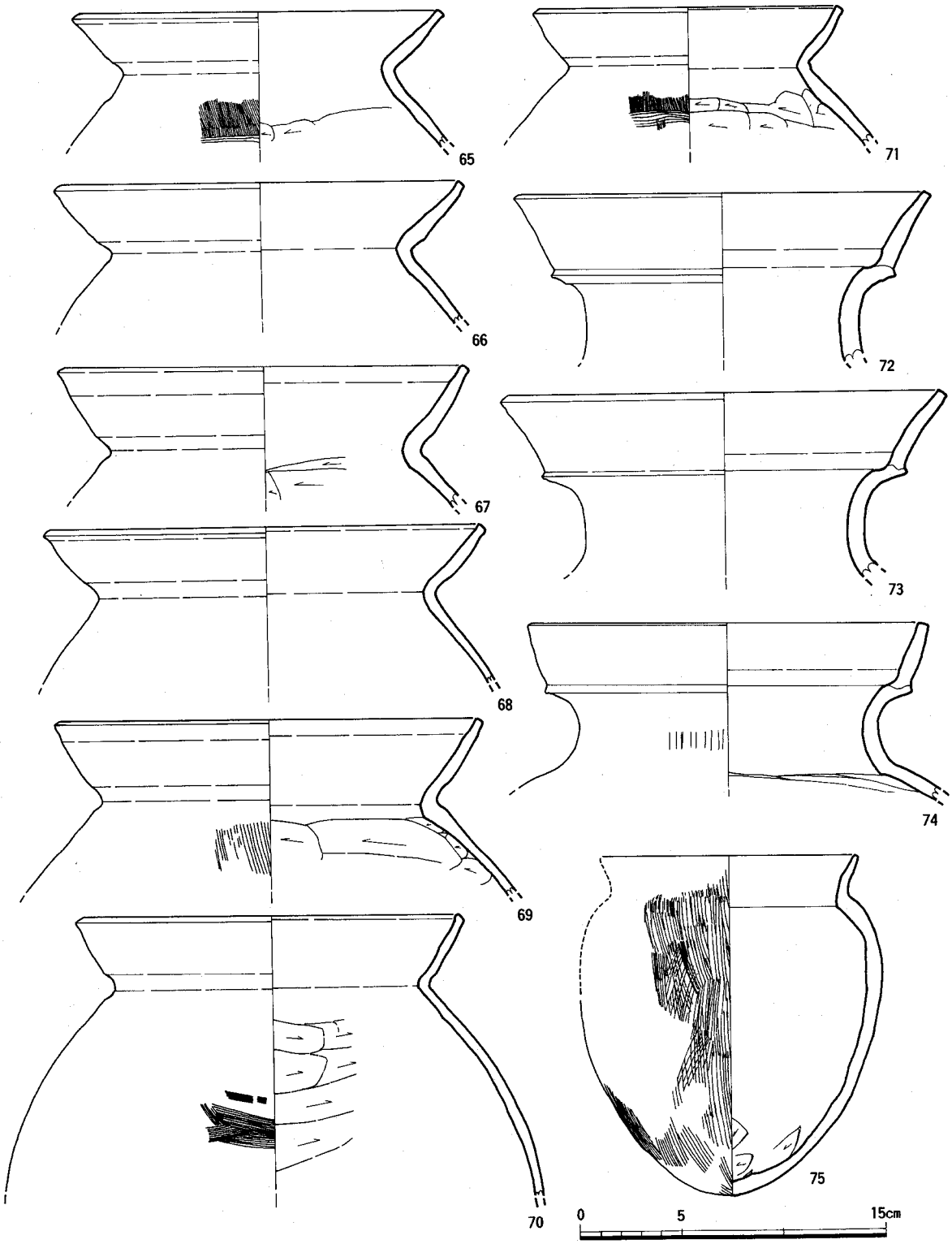


Fig.105　SD14出土土器実測図（1/3）

ＳＤ11（Fig.96、PL.35）

西端部台地の東側で検出された。幅は25cmほどで、深さは10～15cmほどである。断面形は「Ｕ」字形をなす。弥生土器、土師器、須恵器、白磁片、鉄滓などが出土しているが、図示しうるものはない。中世以降のものと思われる。

ＳＤ12（Fig.96、PL.35）

ＳＤ11の西側に隣接して検出された。幅は18～25cmで、深さは10～13cmである。断面形は「Ｕ」字形で、形状・規模ともにＳＤ11とよく似ており、両者は一連のものと思われる。出土遺物は弥生土器、土師器片が出土しているが、図示しうるものはない。埋土はＳＤ11と同様黒褐色土である。

ＳＤ13（Fig.96、PL.35）

ＳＤ12の西側で検出された。幅は40～60cmで、深さは25～30cmである。断面形は逆台形で埋土中には礫石、土器片が多く見られた。いずれも投棄されたものと思われる。埋土は黄褐色土と暗褐色土との混ざり合ったもので、一時的に埋まった可能性がある。出土遺物は弥生後期の土器片が量的に多く見られたが、土師器、須恵器片が若干出土している。時期は古代末以降のものと思われる。

出土遺物（Fig.104）

図示できるのは**64**しかない。**64**は土師器皿である。復元口径・器高・底径は10.6・1.6・60cm。胎土・焼成良好。白っぽい明褐色を呈す。底部はヘラ切りである。

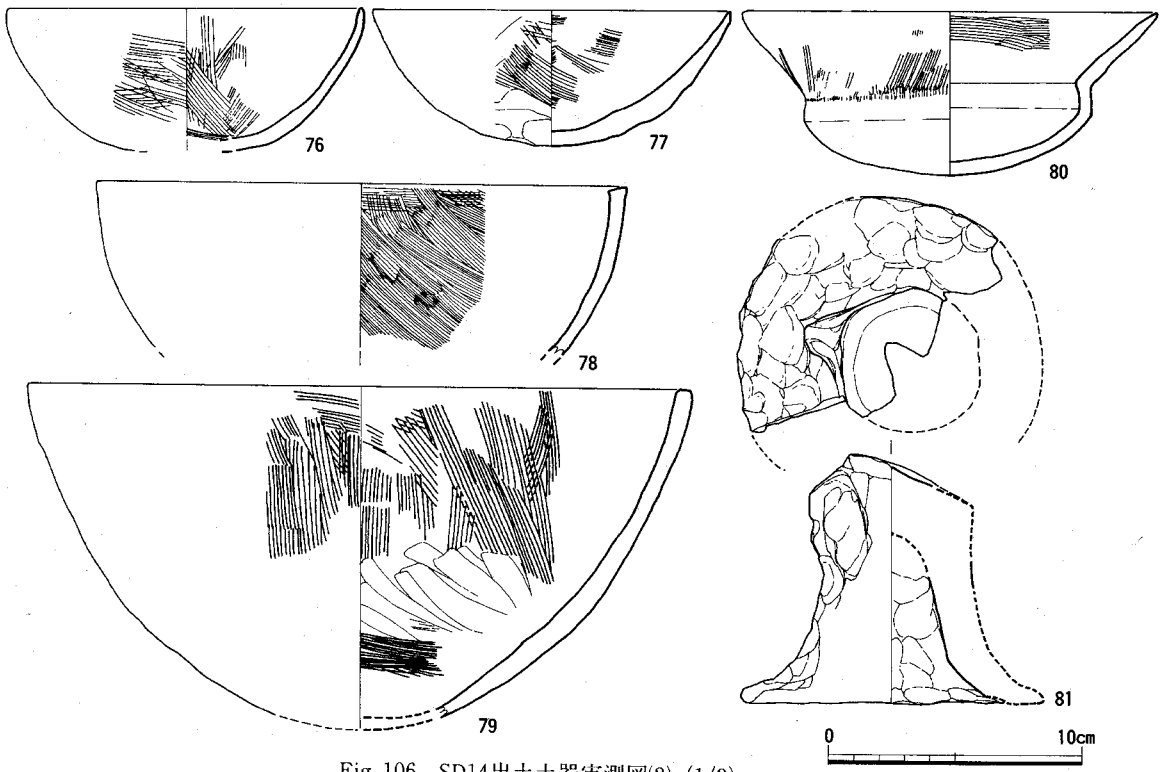


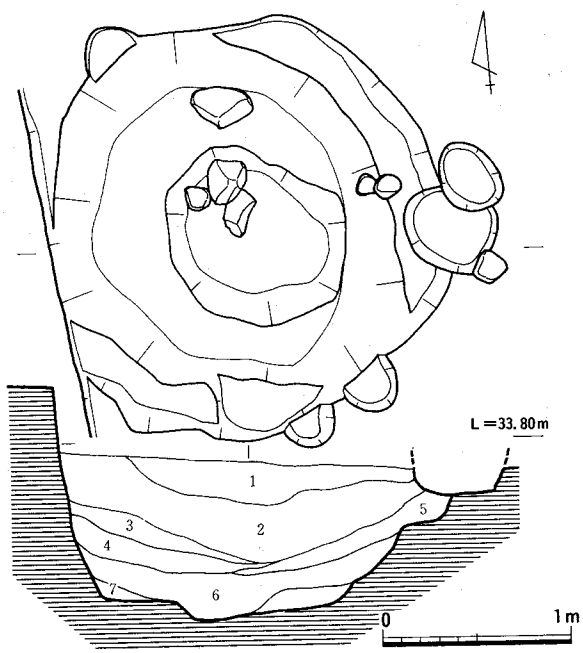
Fig.106　SD14出土土器実測図(2)（1/3）

ＳＤ14（Fig.103、PL.35・36）

調査区南壁際で検出された。溝というよりも縦長の土壙といったほうが適切かもしれない。長さは3.75m、幅は0.40～0.75mである。断面形は「U」字形に近い。埋土は黒褐色～暗灰褐色土で、弥生土器や土師器片が投棄された状況で多く出土した。時期は古墳時代前期のもの。

出土遺物（Fig.105・106、PL.　）

65～71・75は土師器甕である。復元口径はやや個体差が大きく14.8～21.8cmを測り、数値の上ではまとまりはない。口縁部はいずれも「く」の字形にやや外湾して屈曲するが、**70**は若干直線的である。口縁端部がわずかに摘み出されるもの（**65・68・71**）、とそうでないもの（**66・67・69**）がある。内面はヘラケズリをそのまま残すものと（**65・67・69・71**）、ナデ消しているもの（**66・68・70**）がある。**65**と**71**の肩部にはヘラによる波状文が施されている。胎土はいずれも素地はきめ細かいが砂粒を多く含む。**70**以外は焼成良好。色調は**70**が褐色のほかは、いずれも白っぽい明褐色。**75**は小型の甕で、口径・器高・胴部最大径は12.7・16.9・15.1cmである。内面はヘラケズリの後ナデ仕上げで、外面はやや目の粗いハケ目が施されている。器形は卵形で弱い肩部を持ち、口縁は強く屈曲する。**72～74**は二重口縁を持つ壺である。復元口径は19.0～21.6cmである。口縁部の傾きは**74**がやや直にちかいが、**72・73**は大きく外反している。頸部はいずれも円筒状であるが、**74**は他と比べ少し短い。いずれも丁寧なナデ仕上げで、胎土、焼成良好である。**76～79**は鉢である。復元口径・器高は**76**が14.2・5.7cm、**77**が14.3・5.5cm、**78**が19.6cm、**79**が25.7・14.0cmである。いずれも器面はハケ目調整により整形されている。**77**の胴部下半には指頭圧痕が、**79**の内面下半にはヘラケズリが残る。**78**の胎土は精良で、焼成もしまり良好であるが、他は胎土・焼成ともあまり良くない。**80**は小型丸底壺である。口径・器高は16.8・6.6cm。胴部の中位からやや上部に弱い稜が走る。口縁はやや内湾気味に大きく開く。器面は口縁内以外はナデ仕上げである。胎土・焼成ともに良好。**81**は器台である。高さ・底径は10.1・12.2cm。体部上位を指先で強く摘み出している。器面には指頭圧痕が明瞭に残る。



土層所見
1．褐色土
2．赤褐色土（バイラン）
3．（やや黄味を帯びる）
4．バイラン＋暗褐色＋褐色粘質土　炭化物
5．３とほぼ同じ
6．４とほぼ同じ
7．淡赤褐色土（バイラン？）

Fig.107　SX02平面および土層断面図（1/40）

竪穴遺構

ＳＸ02（Fig.107、PL.36）

調査区の西側で検出された。ＳＣ01・02を切っている。平面形は不整な円形で、東側と南西側に段がある。直径は2.1～2.2ｍほどで、深さは0.75ｍほどである。断面形は深い鉢状を呈す。埋土はやや硬質の花崗岩風化土が主で、一時的に埋め戻されたものである。人頭大の転礫が４点見られた。調査区周辺にない風化土で埋め戻している点が性格を考える上で注意される。

出土遺物（Fig.109、PL.68）

遺物は埋め戻し時の混入と思われ、埋土中に散発的に見られた。**82～85・89**は須恵器である。**82・85**は椀である。口径・器高は**82**が7.8cm、**85**が13.6（6.7）cmである。いずれも底部がヘラケズリのほかは内外面ともナデ整形。口縁部はやや内傾し、丸くおさ

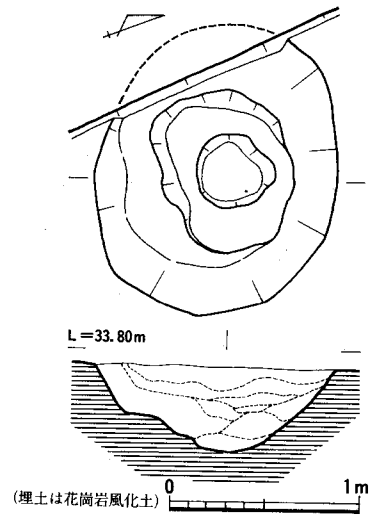


Fig.108　SX03平面及び土層断面図 (1/40)

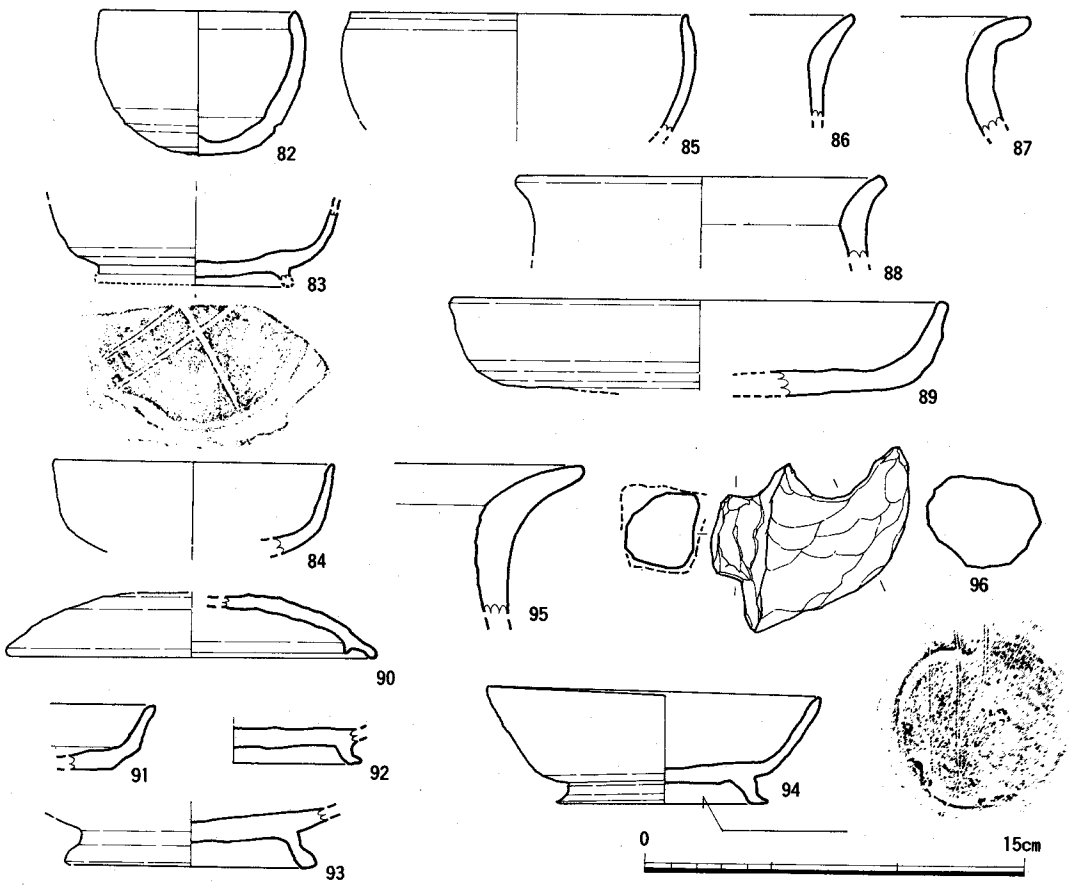


Fig.109　SX02・03出土土器実測図 (1/3)　(SX02：82～89 / SX03：90～94)

まる。**83**は高台付杯である。体部はやや丸みを帯びながら立ち上がり、高台は体部との境のやや内側に貼付されている。底部にはヘラ記号がある。**84**は杯もしくは高杯と思われる。復元口径は11.1cm。体部下半はヘラミガキが施されている。**89**は皿である。復元口径・器高・底径は19.7・16.6・3.9cmである。体部下半から底部にかけてはヘラケズリが施されている。口縁端部はやや外反する。以上の須恵器は胎土・焼成とも堅緻である。色調はおおむね灰色～明灰色を呈す。**86**～**88**は土師器の甕口縁部片である。**88**の復元口径は10.6cm。口縁部は大きく外反するもの（**87**）と内面にヘラケズリが施され、弱い稜をもってわずかに外反するもの（**86・88**）がある。胎土はややきめ粗く、しまりがない。

ＳＸ03（Fig.108、PL.36）

ＳＸ02の南に隣接して検出された。ＳＣ01を切っている。平面は楕円形で、長軸が1.54m、短軸が1.28m、深さが0.46mを測る。埋土は花崗岩風化土が混入しており、ＳＸ02と堆積状況はほぼ同じである。床面は南側に段がある。遺物は埋土から散発的に出土した。

出土遺物（Fig.109、PL.68）

90～**92・94**は須恵器である。**90**は杯蓋で、復元口径は14.8cmである。天井部外面はヘラケズリで内外面はナデ整形。**91**は杯身もしくは皿である。内外面ともナデ。**90・91**は黒赤みがかった灰色で、胎土・焼成とも堅緻である。**92・94**は高台付杯身である。**94**の口径・器高・高台径・高台高は13.4・4.5～4.8・8.5・1.1cmである。いずれも体部は直線的に立ち上がり、高台は体部との境からやや内側に「ハ」の字形に貼付されている。**93**は内黒土器椀である。高台径・高台高は10.1・1.5cmでややふんばった「ハ」の字の字形の高台が貼付される。**95・96**は土師器甕と甑の取っ手である。**95**の口縁部は強く外反しており、体部内面はヘラケズリが施されている。甑取っ手は体部との接着部がソケット状になっている。胎土・焼成はやや粗くしまり悪い。

掘立柱建物　（Fig.110、PL.34）

調査区西側で多数の柱穴が検出された。埋土は、その土質の違いから大きく４つに分けられた。時期の異なりによるものかどうかは判然としないが、これを参考にして図上において建物の復元を試み３棟（ＳＢ01・02・04）の建物を考えた。ＳＢ03は、調査中に想定したものである。

ＳＢ01（Fig.110、PL.34）

調査区の南西部に位置する。２×２間の総柱の建物になると思われる。ＳＣ01を切っており、ＳＢ03から切られている。柱穴掘り方はやや不整方形もしくは長方形で、一辺が0.7～1.1mを測る比較的大きな規模のものである。柱痕跡が残っているものがある。柱穴からは弥生土器、土師器、須恵器片が出土している。時期は切り合い関係から古墳時代前期から古代末までの間に想定できるが、須恵器片の特徴から、古墳時代後期から奈良期にかけてのものと思われる。

ＳＢ02（Fig.110、PL.34）

調査区西側中央に位置する。１×２間の建物である。ＳＢ01・ＳＣ01を切っている。柱穴掘

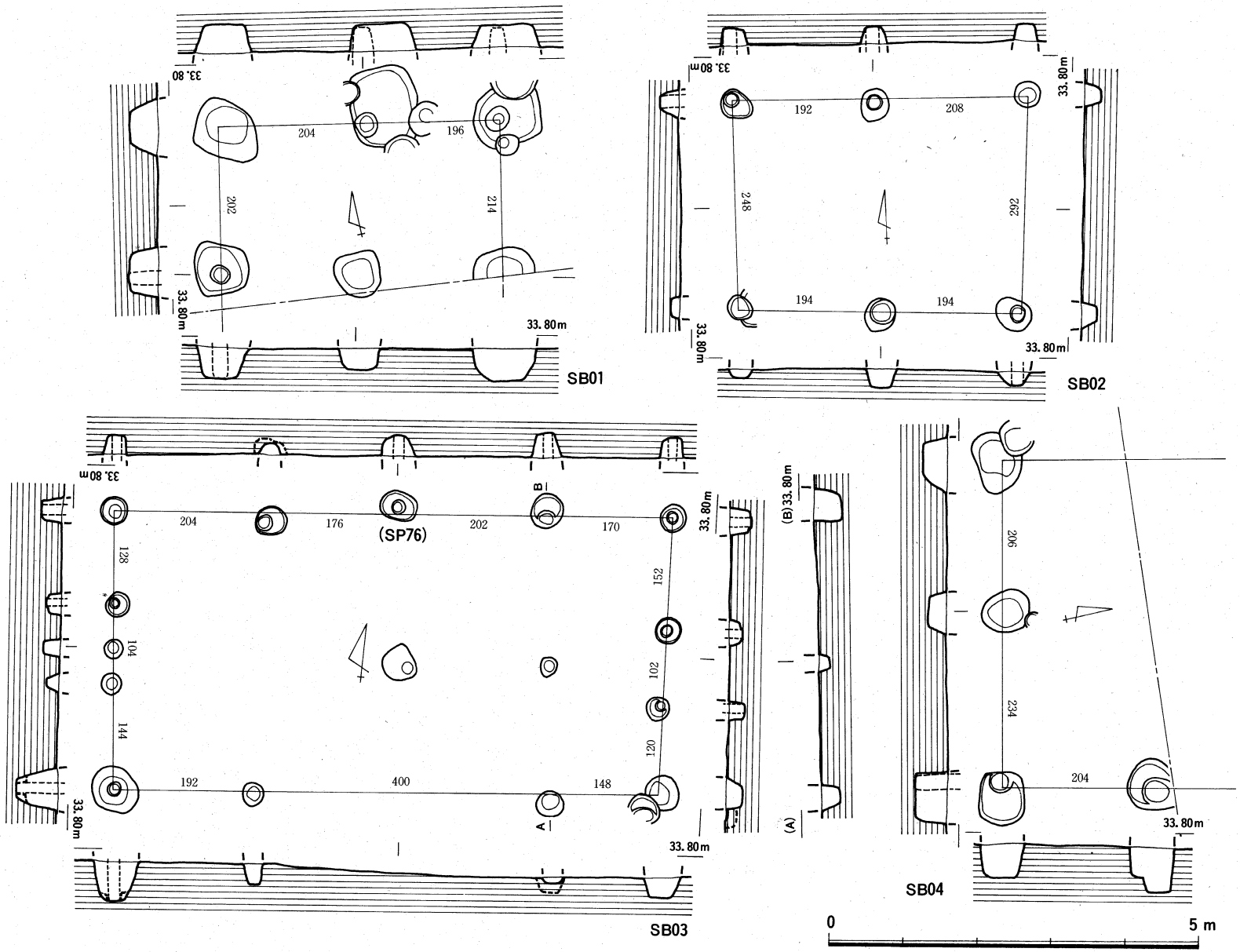


Fig.110　掘立柱建物（SB01～04）平面および断面図（1/80）　（柱間の数値は、cm単位）

り方は径20～30cmで規模は小さい。柱穴埋土はＳＢ03のそれと良く似た、暗灰褐色土である。出土遺物は土師器の細片が若干見られる。時期は明確でないが、切り合い関係などからＳＢ03にちかい時期と思われる。

ＳＢ03（Fig.110、PL.34）

２×４間で、東側に２本の束柱が見られる建物である。ＳＢ01を切っている。東西の妻中央には２本ずつの柱が配されている。柱穴掘り方は30～40cmでやや大きい。北辺の側柱の中央に位置するＳＰ76から、おそらく柱の抜き跡へ埋置したと思われる、完形の土師器椀（**109**）が出土している。時期は平安時代末のものと思われる。

ＳＢ04（Fig.110、PL.34）

調査区北壁にかかる。ＳＢ01と並行し約2.6ｍ離れている。２×２間の総柱の建物と思われる。柱穴は60～70cmの楕円もしくは隅丸方形で、ＳＢ01と比べやや小さい。方向性と遺物からＳＢ

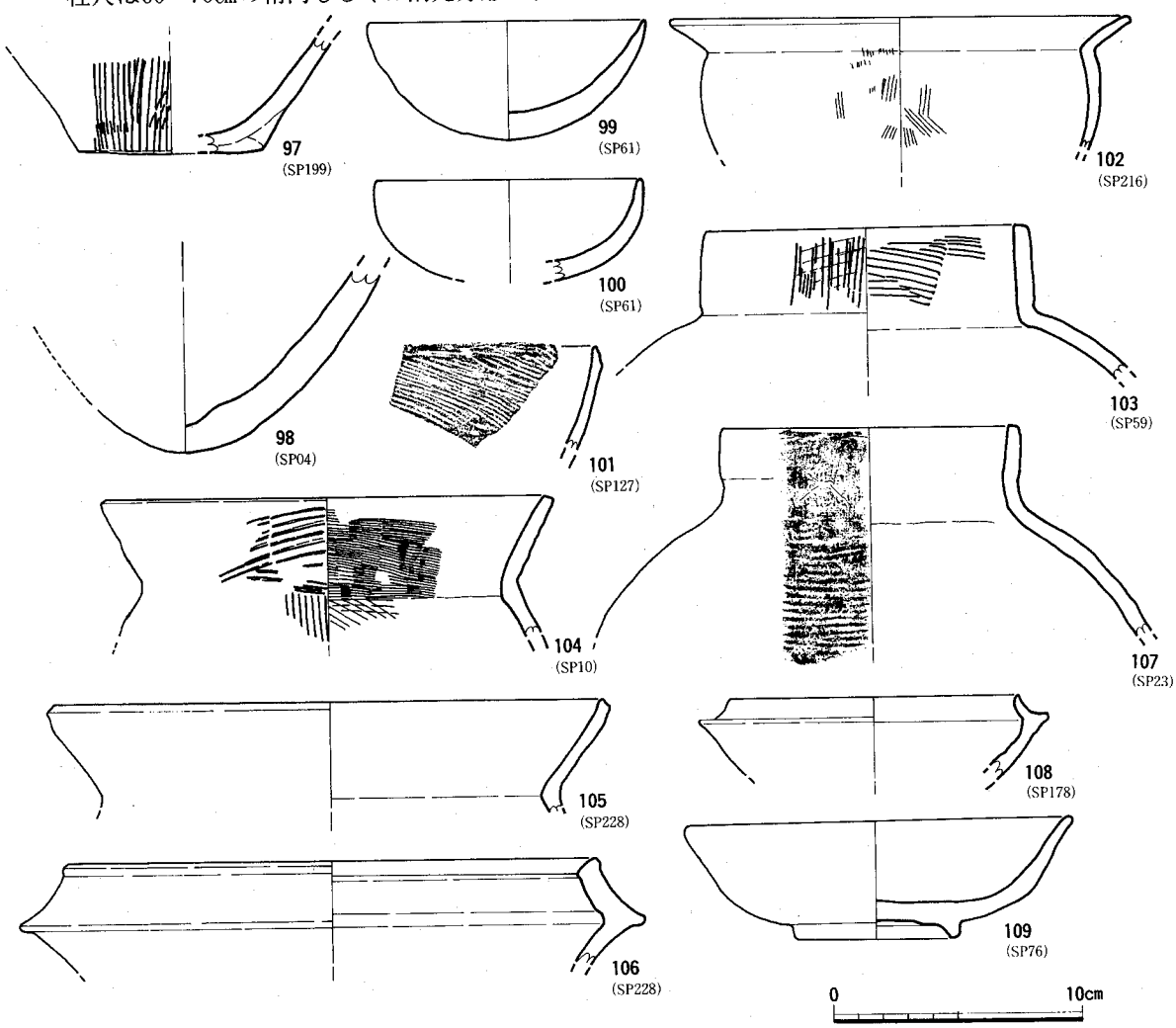


Fig.111　柱穴出土土器実測図（1/3）

01とほぼ同じ時期が考えられる。

柱穴出土の遺物（Fig.111、PL.68）

柱穴からは弥生時代から中世に至る各時期の土器片が出土しているが、図示し得るものは少ない。**99・100・109**は完形で出土したもので、柱の抜き跡へ埋置されたと思われる。

97・98・102～104・106は弥生土器で、**97・106**以外は弥生時代終末の土器である。**97**は甕の底部径7.4cm。**98**は甕の底部片である。外面はヘラケズリの後ナデ、内面には指頭圧痕が残る。焼成はよくしまり良好。**102**は鉢の口縁部片で、口径18.6cm。内外面ともやや目の粗いハケ目調整の後ナデ仕上げ。**103**は直口壺の口縁部片である。口径は13.0cm。口縁部内外面は目の粗いハケ目調整。**104**は甕の口縁部片である。復元口径17.6cm。口縁外面にはタタキ目が残っている。胴部の外面にもかすかであるがタタキ目の痕跡が残る。**109**は複合口縁の壺である。復元口径は21.6cm。内外面とも丁寧なナデ整形。焼成良好。**99～101・105・107**は古墳時代前期の土師器である。**99～101**は鉢である。口径・器高は、**99**が11.0・4.9cm、**100**が10.6・（4.3）cmである。**99・100**はいずれも内外面は丁寧なナデ整形で、焼成良好。底部はやや厚手である。**101**の内外面は目の細かなハケ目整形が施されている。胎土・焼成良好で作りが良い。**108**は須恵器杯身である。復元口径・受け部径は11.8・14.8cmである。胎土・焼成ともに堅緻である。**109**は土師器椀である。口径・器高・高台径・高台高は15.8・4.9・6.8・0.8cmである。器高はやや低めで、口縁部はやや外反している。内外面はヘラミガキもしくはナデによる整形。焼成はややあまい。褐色がかった灰白色を呈す。

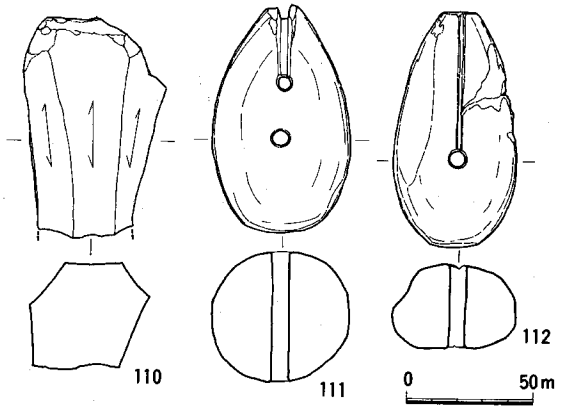


Fig.112　第Ⅰb区出土石器実測図（1/3）（SX02；110　表採；111、112）

その他の出土遺物、石器（Fig.112、PL.68）

110は珪質砂岩製の砥石である。現存長・幅・厚さは8.8・5.6・4.8cm。**111・112**は滑石製石錘である。長さ・幅・厚さは**111**が9.0・5.5・5.2cm、**112**が9.4・4.9・3.3cmである。

3．小結　本調査では、西端部において比較的良好に残った遺構を検出できた。中央から東側においては第Ⅰa区同様後世の削平により遺構はほとんど残っていない状況であった。検出された遺構と遺物は古墳時代前期の竪穴住居址を初めとして、古代末から中世にかかる時期のものが認められた。出土遺物の中では弥生時代後期から終末の時期のものが量的に多いことが注意され、この時期の遺構の存在が十分予想される。遺構の残り方からは、本調査区周辺では、古代末から中世以降においてかなりの規模で地形の改変が行われたことが想像される。これにより消滅した遺構が多いと思われるが、本調査区での遺存状況から見れば地点によってはかなり良好に残っていることが予想され、今後の周辺の調査が期待されよう。

(3) Ⅰc区の調査

本調査区は第Ⅰb調査区の西側にあたり、同調査区の西端から約5m程の未調査区を挟んで延長ほぼ85m程を調査した。

調査区は幅員が8m程であったが排土処理のために十分これを完掘することはできなかった。

調査は東側から開始し、第Ⅰb区の調査成果に鑑み、重複する遺構の埋土を区別し乍ら進めたが十分にその成果をあげ得なかった。

調査での主要な検出遺構は竪穴住居址10軒、土壙20基、溝状遺構11条などである。これらの遺構は重複の度合いが著しく、柱穴群など大型のものも散見できるが、黒褐色土を地山とする遺構群の確定は非常に微妙な埋土変化しかみせず、それらの形状や出土遺物を十分に把握する事は困難でもあった。

この様に各遺構の時期や形状を十分に明かにはし得ない条件ではあったが、出土遺物から少くとも弥生時代中期後半より古墳時代後期、更には古代から鎌倉時代に亘る複合遺跡であることは考えられて良いであろう。

以下では個別各遺構と出土遺物について若干の説明を加えていくことにしたい。なお各遺構での遺存状況から個別図の作成は選別した。

2. 遺構と遺物 (Fig.113～118、PL、37～44・69・70)

竪穴住居址 (Fig.113)

SC03 (Fig.91・114)

調査西端部の北壁部に検出された。南壁辺が3.5mをはかる小型の方形竪穴住居址である。壁高は6cmを残すのみで、床面より土器類とともに転礫が多く出土した。

SC04 (Fig.91)

調査区西側の北壁部で検出された。南西部コーナー部があり、2.2m程が確認される。壁高19cmで方形をなすと考えられる。

SC05 (Fig.91)

調査区中央にあって、北壁近くで確認された壁高9cmが残し、平面形は隅丸長方形を呈し、長辺3.3m、短辺3.2mの規模をもつ。土器が少量出土した。

SC06 (Fig.91)

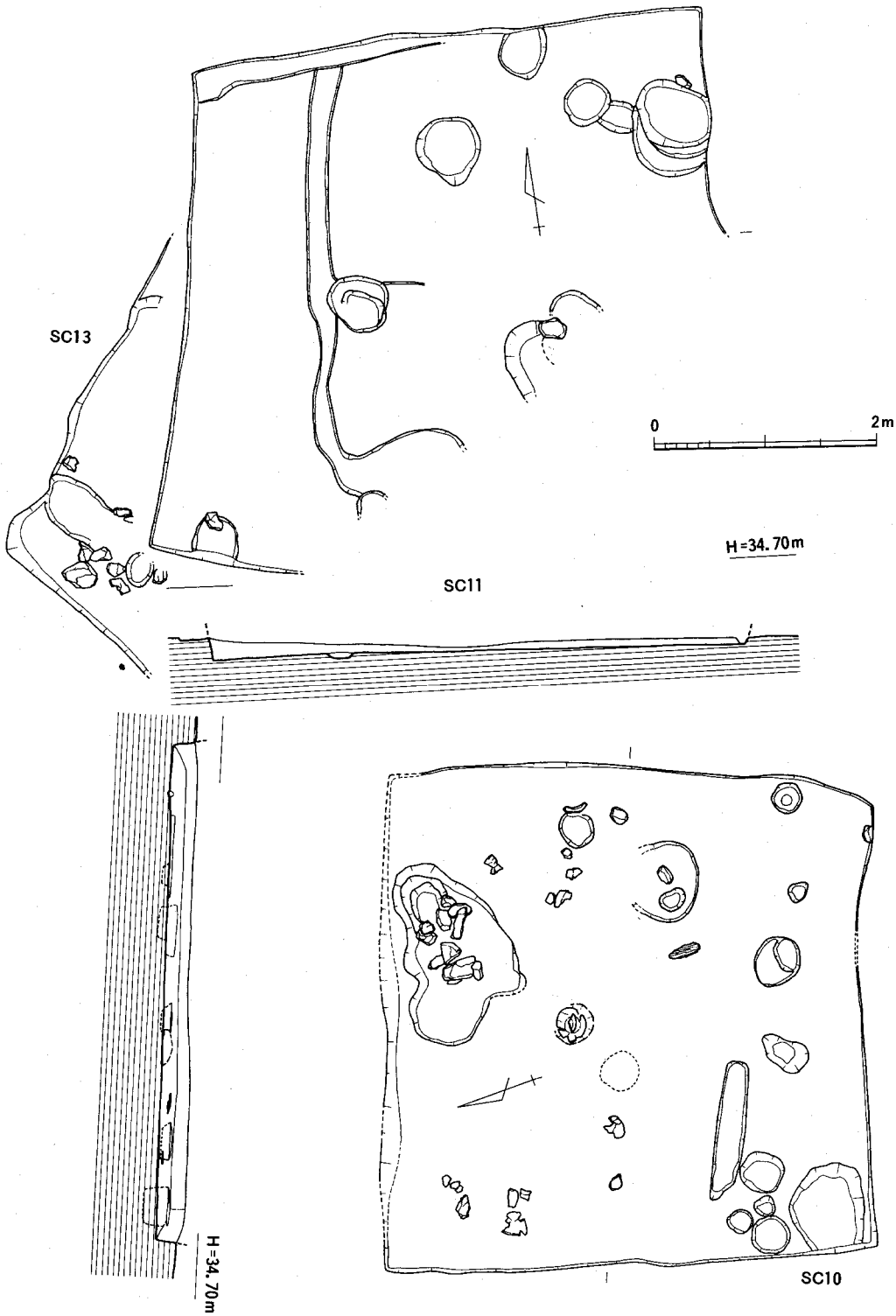


Fig.113　SC10・11・13住居址出土状況図（1/60）

調査区中央南壁で検出された。西側コーナー部のみがあり、北辺で壁高20cm を計る。また西壁に沿って幅50cm 程のベッド状高まりがみられる。床面よりまとまって土器類が出土した。

SC07 (Fig.91)

調査区中央の南壁で確認した。北側のコーナーが知られ、壁高は殆ど無い。東辺で2.cm を計る。

SC08 (Fig.91)

調査区東寄りに南北に走る直線的な壁が確認されたが、プランは把握できず、土器類の出土にとどまった。

SC10 (Fig.113)

調査区東寄りの中央部に検出された。西側壁長4.3m、南壁長 4 m とほぼ正方形をなすプランと考えられる。壁高は15cm 程を残し、主柱穴は南壁に沿う位置に 2 本が確認され、本来 4 本と考えられる。北壁はＳ×28土壙による影響を受ける。床面より土器類がまとまって出土した。

SC11 (Fig.113)

調査区東端部近くの南壁寄りで検出した。西壁長4.3m、北壁長3.2m、南壁長1.4m を確認した。西壁には幅1.1m 程のベッド状遺構が付設され、ベッド縁に沿って溝がめぐる。主柱穴については不詳である。SC13 が西側にあって本住居址に切られる。

SC12 (Fig.91)

調査区は中央部の北壁部で検出した。西壁長1.7m、南壁長2.2m で壁高10cm を計る。方形プランをなすものと思われる。床面で若干の土器類が出土した。

SC13 (Fig.113)

調査区東端部にあってSC10に切られる。北壁長2.2m、西壁長に1.8m を計り、方形プランをなすものと考えられる。コーナー部分より転礫類が多く出土した。壁高20cm を残す。

出土遺物 (Fig.114～118、PL.69)

SC03 (Fig.114、PL.69)　**113**は手づくね脚付鉢である。端部の尖る分厚い底部に内弯気味に伸びる体部をもつ。体部上面はナデで、下半に縦位の粗い刷毛目が施される。内面は不定方向の刷毛目調整である。器色明橙色を呈し、焼成軟質である。口径9.6cm、器高7.7cm を計る。**114**は大型の鉢である。底部は緩い平担部をなし、口縁は立あがる。全体に器壁が厚い。器面は外面でナデ調整後に粗い刷毛目を加える。また内面は不定方向の刷毛目で口縁部はこれをナデ消している。器色は暗褐色を呈し、焼成堅緻である。口径22cm、器高10.6cm (復原値) をはかる。**115**は胴部上半を欠失する甕である。底部は丸底をなし、胴は膨らみが少なく直立気味である。

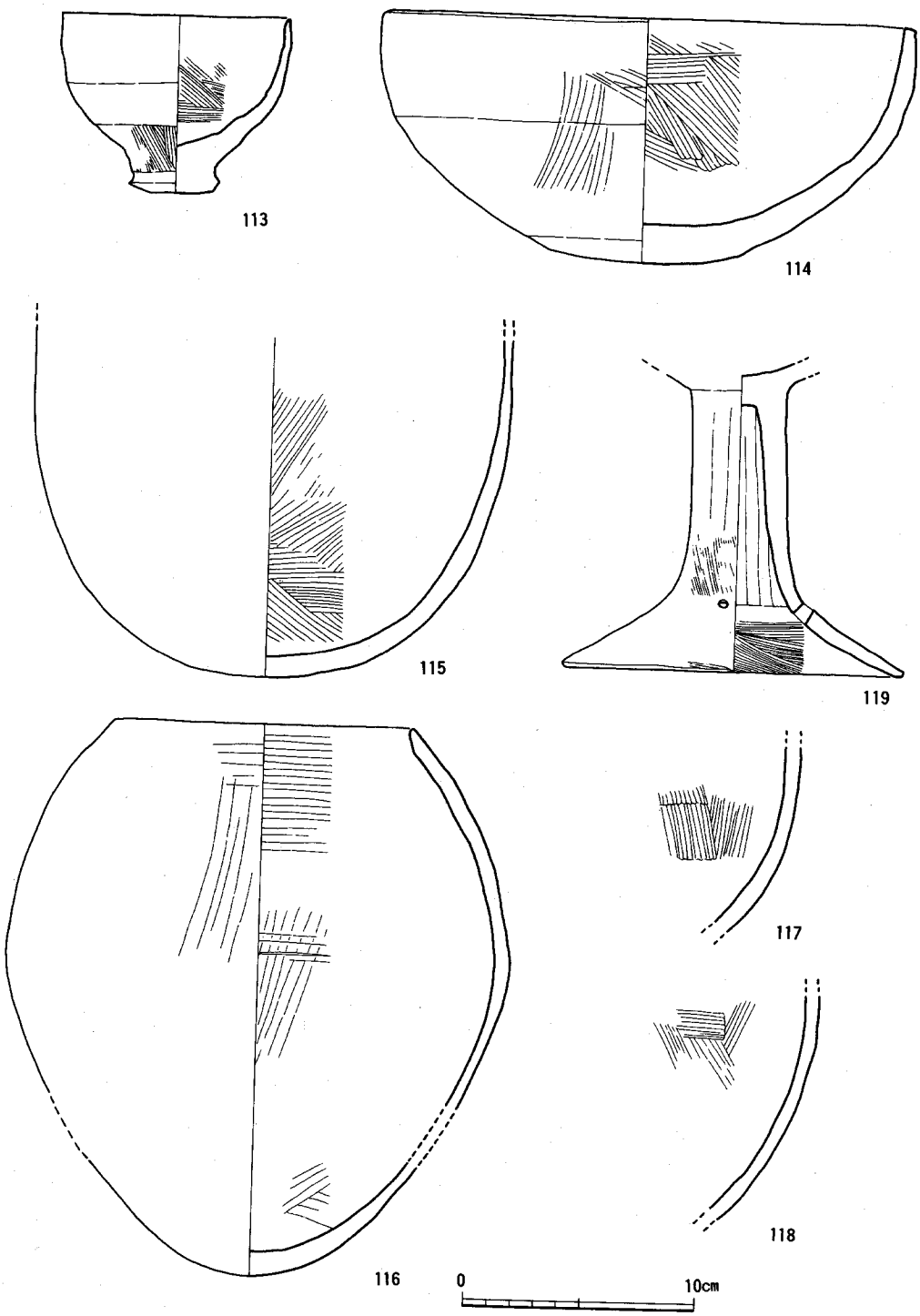


Fig.114　SC03住居址出土遺物実測図 (1/3)

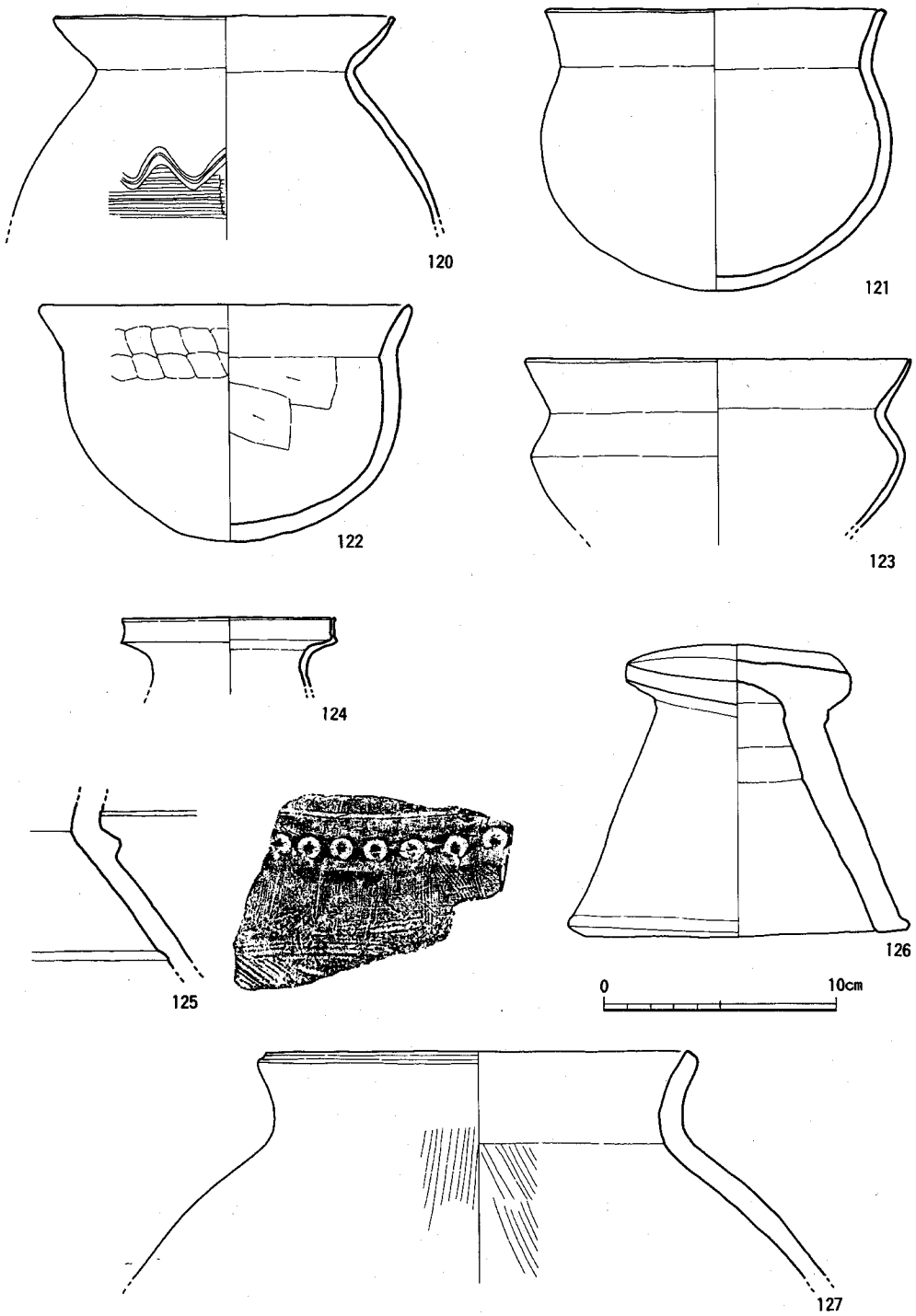


Fig.115　SC04・05・06・07住居址出土遺物実測図（1/3）　（SC04－120、SC05－121・122、SC06－123－126、SC07－127）

器面は荒れが著しく、外面はナデで、内面は不定方向の粗い刷毛目を残す。器色は暗褐色を呈し、焼成堅緻である。現存高14.9cm を計る。**116**は長胴の甕で尖る底部を有し、胴部中位から内傾している素口縁となる。器面調整は全体に荒れのため不明瞭であるが、外面口縁付近が荒い横刷毛目調整でこれ以下は粗い縦刷毛目となる。また内面は口縁付近が粗い横刷毛目で、胴中位は粗い縦刷毛目の後に横刷毛目を施す。また内底部は不定方向の粗い刷毛目となる。器色は暗赤褐色を呈し、焼成堅緻である。口径13cm、器高24cm、胴部最大幅21.6cm を計る。

117は甕胴部破片である。器面調整は外面に粗い横位の篦研磨を施し、内面は下部から上部に向って施される粗い刷毛目調整である。器色は明るい赤褐色を呈し、焼成は堅緻である。**118**も甕胴部破片である。器面調整は外面タタキ後に粗い横刷毛目を施す。また内面は不定方向に粗い刷毛目を粗雑にナデ消している。器色暗茶褐色を呈し、焼成は堅緻である。

119は高坏である。坏部の殆どを欠失する。細い中空の脚筒部からゆるやかに裾部が外開する。裾部との境に3ヶ所6mm程の透孔を配する。器面調整は筒部が刷毛目後に上半が丁寧な縦位のヘラ研磨で、下半は粗雑なヘラ研磨である。裾部は縦位のヘラ研磨である。内面は筒部が横ヘラ削りで裾部が逆時計まわりの刷毛目調整である。器色明るい赤褐色を呈し、焼成堅緻である。裾部径14.4cm を計る。

SC04 (Fig.115、PL.69)

図示できるものは**120**のみである。120は器壁のよく調整された土師器類である。胴部は膨らみが弱く、頸部から内弯気味に外方に開く口縁を有する布留式土器である。器面調整は外面のうち、口縁部横ナデで頸部付近ヘラ削りし、これ以下は横位の刷毛目調整後一条の波長のゆるやかな波状文をめぐらす。また内面は不定方向のヘラ削りを施す。器色は淡褐色を呈し、焼成は堅緻である。口径14.2cm を計る。

SC05 (Fig.115)

図示可能なものは2点にすぎない。**121**は口縁部がゆるやかに開く鉢である。器面調整は外面のつうち口縁部が縦位のヘラナデで、下部の胴部はヘラによる研磨である。また口縁端部外面および内面は横位のナデであり、内底部がナデである以外は全て横位のヘラ削りである。器色は淡赤褐色を呈し、焼成はやや軟質である。口径15.6cm、器高10.1cm を計る。

122は121と同様な鉢である。口縁は直立気味に外方に開き、器壁はよく均一に整えられている。器面調整は外面で全体に荒れが著しいが、口縁部で縦位の刷毛目横ナデで胴上半は縦刷毛目後に不整なヘラ削りを加える。また下半部は不整なヘラ削り後にナデを施す。内面は口縁が横位のヘラ削り後ナデで、胴部は荒れが著しく若干刷毛目の痕跡が残る。器色は淡褐色を呈し、焼成は堅緻である。口径14cm、器高12.1cm を計る。

SC06 (Fig.115、PL.69)

本住居址出土のものは4点が図示できるに過ぎない。**123**は胴部が肩をなし、口縁部が内弯気味に外方に開く特徴をもつ鉢である。器面調整は、口縁部内外面が横ナデで、胴部外面横位のヘラ削り、内面横位のナデである器色淡褐色を呈し、焼成堅緻である。口径16.4cmを計る。**124**は器面の荒れが著しい二重口縁の小型壺である。器面は一部が剝落する。器壁は非常に薄く2mmを前後とする。器面調整は口縁端部外面および内面は横ナデで、他はヘラ削りである。器色淡褐色を呈し、焼成軟質である。口径9cmを計る。**125**は甕頸部付近の破片である。外面は口縁との境に三角形の段状突帯を1条めぐらし、この上に竹管文を施す。また内面は胴部との境が稜をなす。調整は縦位の刷毛目後に粗い横刷毛目を施す。また内面は縦位の刷毛目である。器色は暗茶褐色を呈し、焼成堅緻である。**126**は支脚である。上端部は一端が口ばし状に尖り、脚部は肉厚で直線的に外方へ開く。器面は外面が横位のタタキ、内面指おさえ、ナデがみられる。器色淡赤褐色を呈し、焼成堅緻である。脚部径12.4cm、器高12.5cmを計る。

SC07 (Fig.115・116、PL.69)

本住居址は5点が図示可能であった。**127**は短く外方に開く口縁を有する甕である。胴部との境は不明瞭である。調整は口縁部内外面とも横ナデで胴部は粗い刷毛目調整後外面では粗雑なナデを加える。器色暗褐色を呈し、焼成堅緻である。口径18.2cmをはかる。**128**は口縁部が短く直立気味に開く甕である。調整は口縁外面が不定方向のヘラナデ、胴部タタキの後にナデる。内面は口縁に粗い刷毛目を施す。器色淡褐色を呈し、焼成堅緻でである。口径17.6cmを計る。**129**も胴部と境が不明瞭な直立する口縁をもつ甕である。口縁外面にヘラナデを加える。また内面は粗い刷毛目後に口縁部横ナデである。器色は明るい橙色を呈し、焼成堅緻である。口径23.8cmを計る。**130**は高坏である。全体に薄手づくりで、浅い坏部は口縁が長く外方に伸びる。調整は外面坏部がヘラ研磨で脚部の筒部～裾部にかけても同様である。内面は脚筒部がヘラ削りである以外は全てヘラ研磨である。器色は明るい暗褐色を呈し、焼成堅緻である。脚部筒部端に上下2個単位の透孔を対象位置に一対設ける。口径30.6cm、器高19.5cmを計る。**131**は支脚である。外面粗いタタキで口縁端部をナデる。内面は脚筒下部に粗いタタキを施す以外は指・ヘラによふ年ナデ調整である。器色暗赤褐色を呈し、焼成堅緻である。口径12.4cm、器高10.1cmを計る。

SC10 (Fig.116～118、PL.69)

本住居址では完全にプランを確認し得たために比較的多くの資料に恵まれた。

132は小型の脚付鉢である。脚端部を欠失する。調整は外面で鉢部縦位のヘラ研磨、脚部が指ナデで一部に刷毛目が認められる。内面は鉢上部に刷毛目を残す以外は縦位のヘラ研磨である。器色明るい暗赤色を呈し、焼成堅緻である。口径15.6cmを計る。**133**は口縁部の直立する甕である。調整は内外面ともに粗い刷毛目で、現存胴部の外面下端にタタキの痕跡を認める。

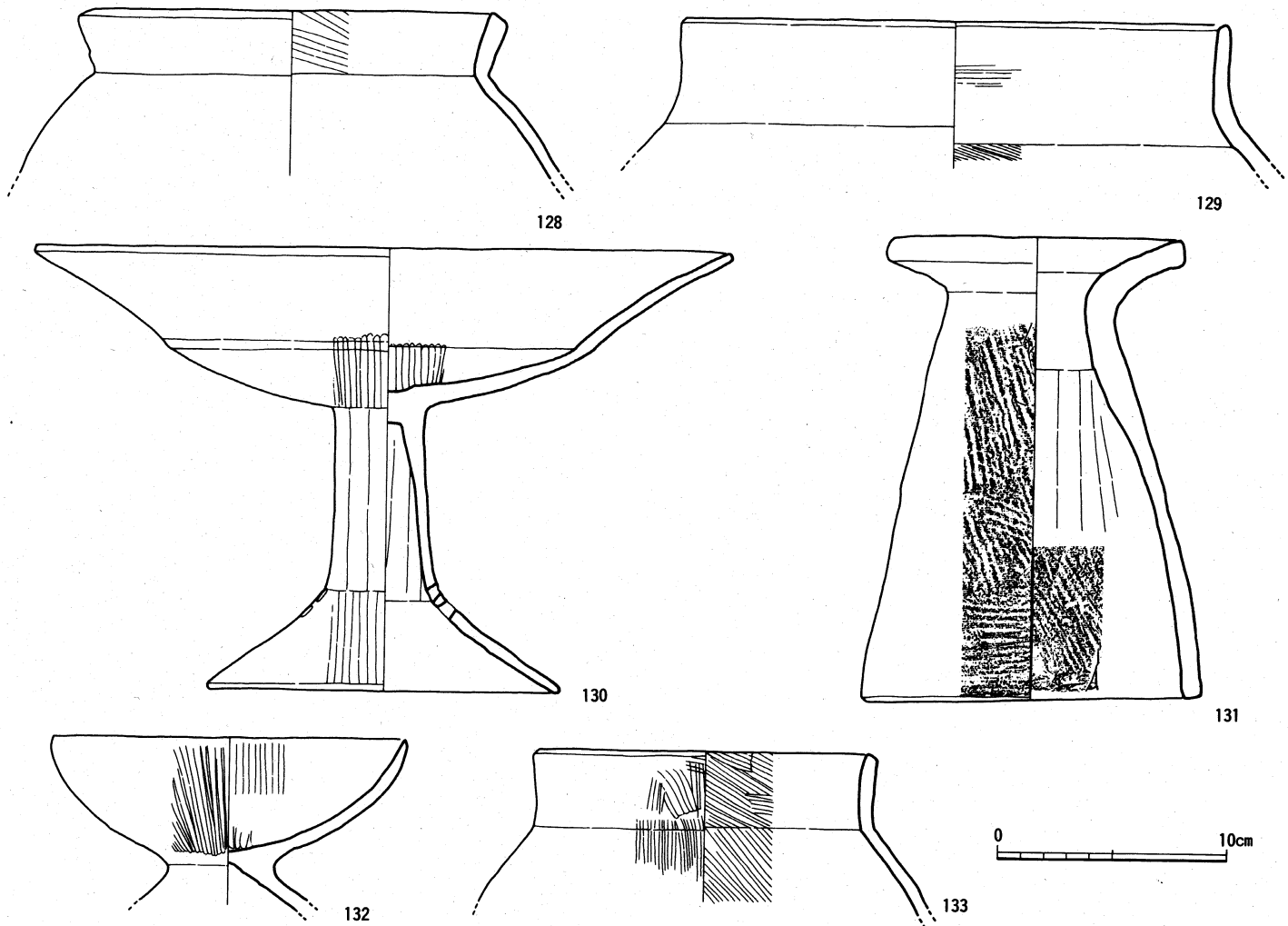


Fig.116　SC07・10住居址出土遺物実測図（1/3）　（SC07－128～131 SC10－132・133）

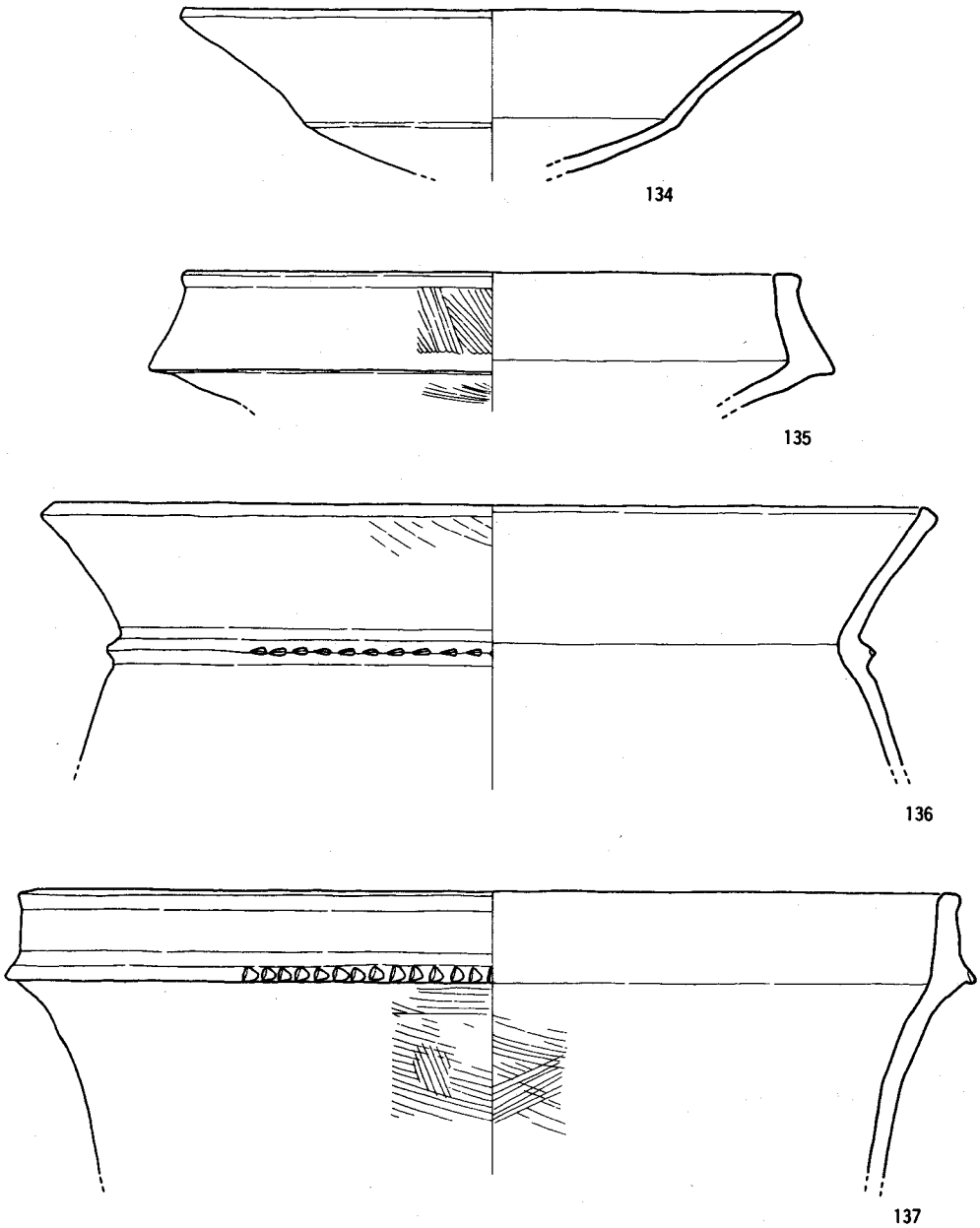


Fig.117　SC10住居址出土遺物実測図（1/3）　0　10m

器色赤褐色を呈し、焼成堅緻である。口径14.4cm を計る。**134**は高坏々部破片である。坏の反転部はゆるい稜をもって外方に開く。調整は外面の荒れのため不明瞭であるが、外面口縁部付近に横位のナデがみられる。器色は明るい赤褐色を呈し、焼成は堅緻である。口径24.6cm を計る。**135**は口縁部の内傾度の著しい二重口縁壺破片である。口縁上端部は平担で外方にやや張り出す。器面調整は外面で粗い縦・横の刷毛目を加え、他は横ナデである。また内面は全て横ナデである。器色は暗赤褐色を呈し、一部に黒斑が認められる。焼成堅緻である。口径25cm を計る。**136**は「く」字形に屈折する口縁を有し、胴部との境に三角状の刻目突帯をめぐらす。また口縁端部は内外面に小さく張出し、内面は蹴上げ状となる。調整は口縁部に荒い刷毛目が痕跡的に残り、胴部は横位のタタキである。また内面は荒れのため不詳である。器色淡赤褐色を呈し、焼成は堅緻である。口径35cm を計る。**137**は壺である。直立気味の頸部に直立する短い口縁がつづく、頸部との境は刻目を付す。調整は口縁部横ナデで、頸部は横位の刷毛目、また頸部内面は横位の刷毛目である。器色赤褐色を呈し、焼指は堅緻である。口径36.2cm を計る。**138**も**137**と同様の壺である。胴部の下半を欠損する。胴部は殆ど膨らみを持たず、頸部との境に低い刻目突帯を廻らしている。またこれより口縁までは大きく径をひろげる。口縁下端部には刻目を施す。調整は外面で口縁部横ナデで、頸部以下胴部までタタキを施した後胴上端部で荒い刷毛目を施す。また内面は頸部で横位の刷毛目が認められる以外は剝落のため不詳である。器色暗赤褐色を呈し、一部に黒斑が認められる。焼成堅緻である。口径35.4cm を計る。

SC11 (Fig.118)

図示可能なものは**139** 1点のみである。140は口縁が「く」字形に屈曲する甕口縁である。調整は外面がヘラ状工具によるナデで、胴部は上半に浅い刷毛目、下半にタタキを残す。また内面は口縁が横位の刷毛目後にナデで、胴部は一部にタタキ痕が残る。器色暗赤褐色を呈し、焼成堅緻である。口径22cm を計る。

SC12 (Fig.118、PL.70)

本住居址で図示可能なものは3点にすぎない。**140**は小さい底部をもつ小型の鉢である。器面調整は外面で、口縁端部横ナデ、外底部付近はヘラによる強いナデであるが、中位は不詳である。また内面は口縁端部が横ナデである以外は細かい刷毛目調整である。器色は淡赤褐色を呈し、焼成は堅緻である。口径15cm を計る。

141は「く」字形に屈曲して外方に開く口縁を有する甕である。胴部との境には一条の突帯を付す。調整は外面で、口縁部は荒い縦刷毛目で、胴部も同様と考えられる。また内面は口縁部横ナデで、胴部縦・横の刷毛目を施す。器色淡褐色を呈し、焼成は堅緻である。口径24cm を計る。

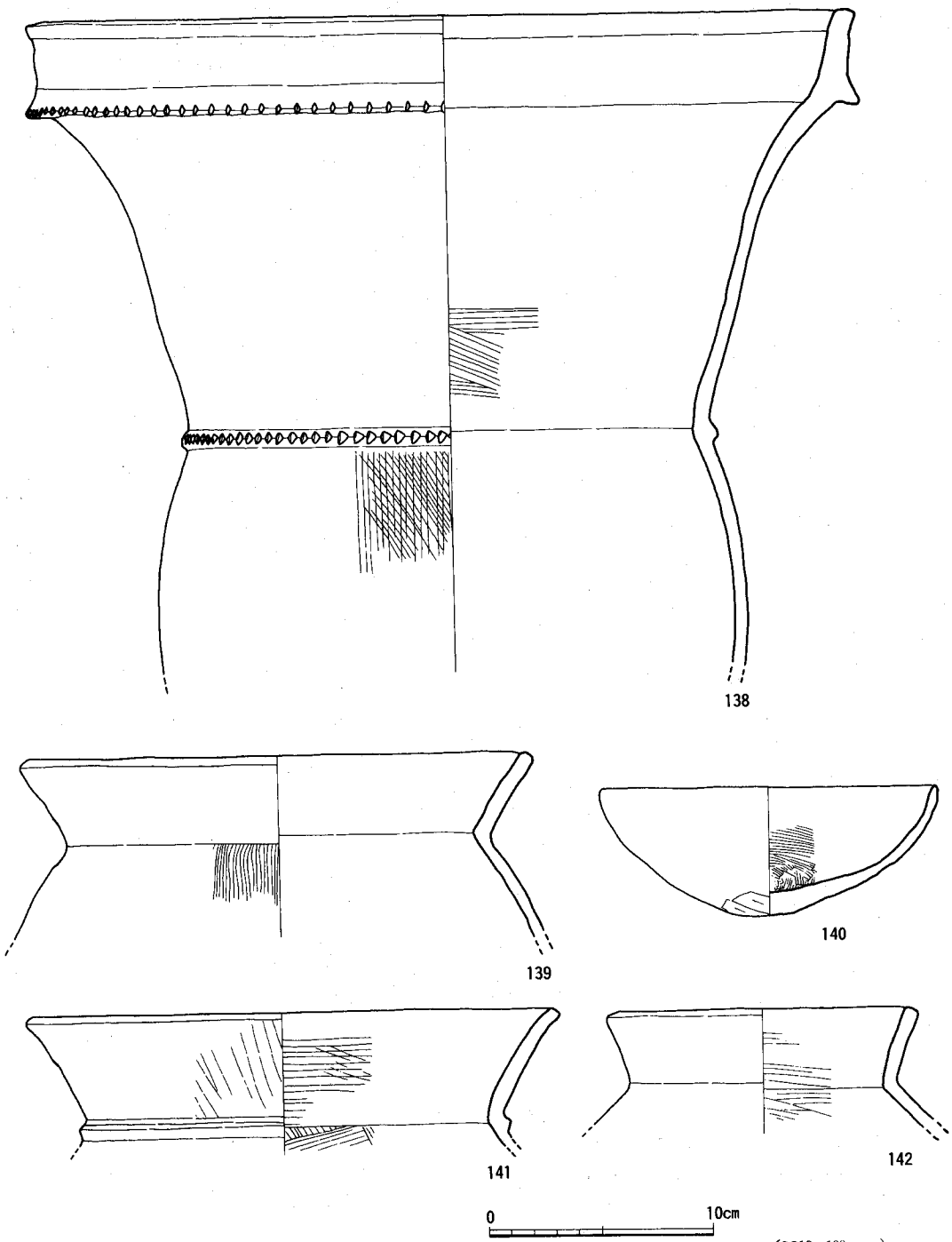


Fig.118　SC10・11・12住居址出土遺物実測図（1/3）

（SC10－138
SC11－139
SC12－140～142）

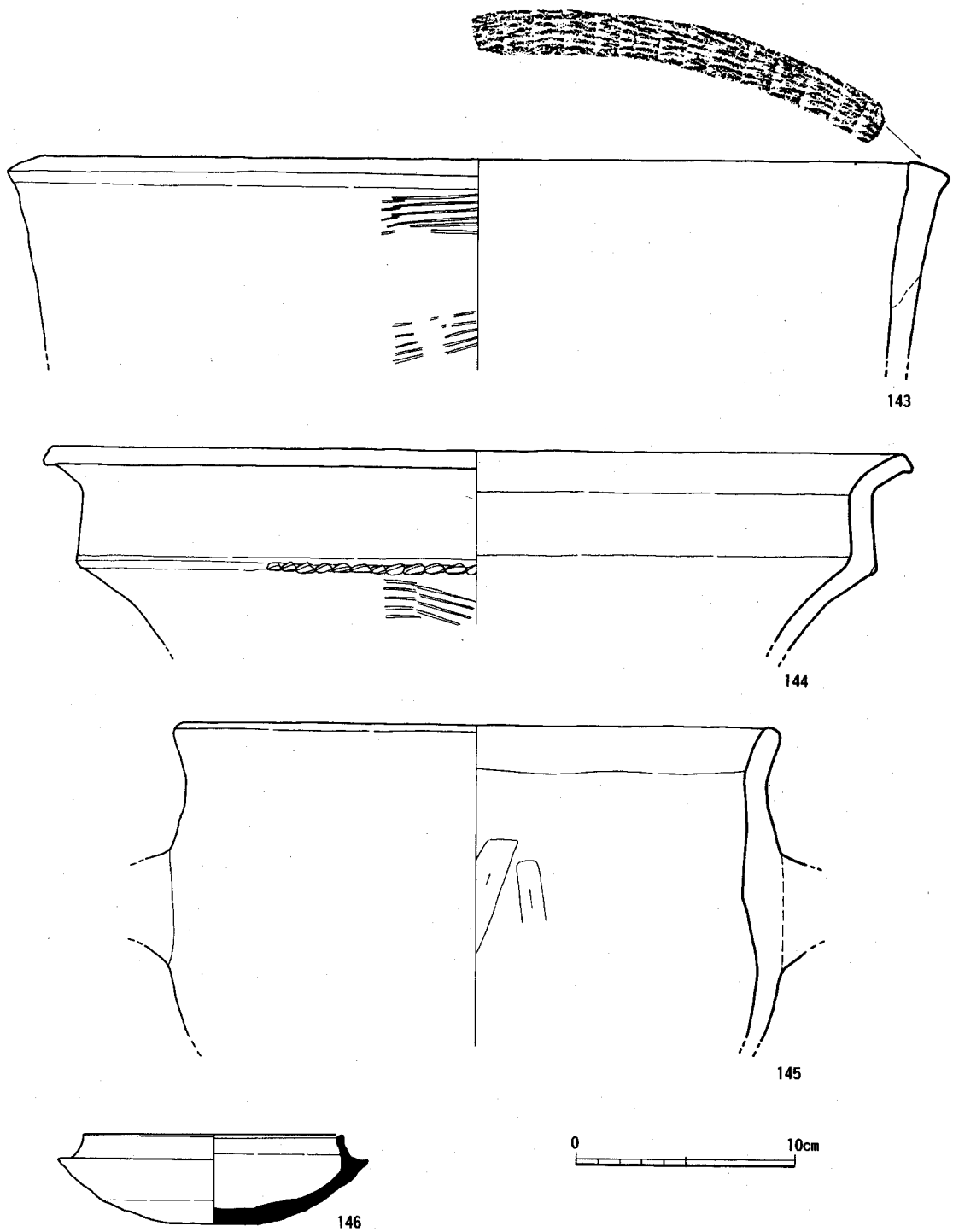


Fig.119　SX05・15土壙出土遺物実測図（1/3）

142は直立気味に外方に開く短い口縁を有する甕である。調整は外面で口縁部横ナデ、胴部が縦位のタタキ痕跡を残す。また内面は口縁・胴部ともに横刷毛目調整である。器色は淡褐色を呈し、焼成は堅緻である。口径12.8cmを計る。

土壙 (Fig.92)

土壙（SX）は各地点で数多く検出されたが調査区の狭少さと検出面堆積土の不分明さとで

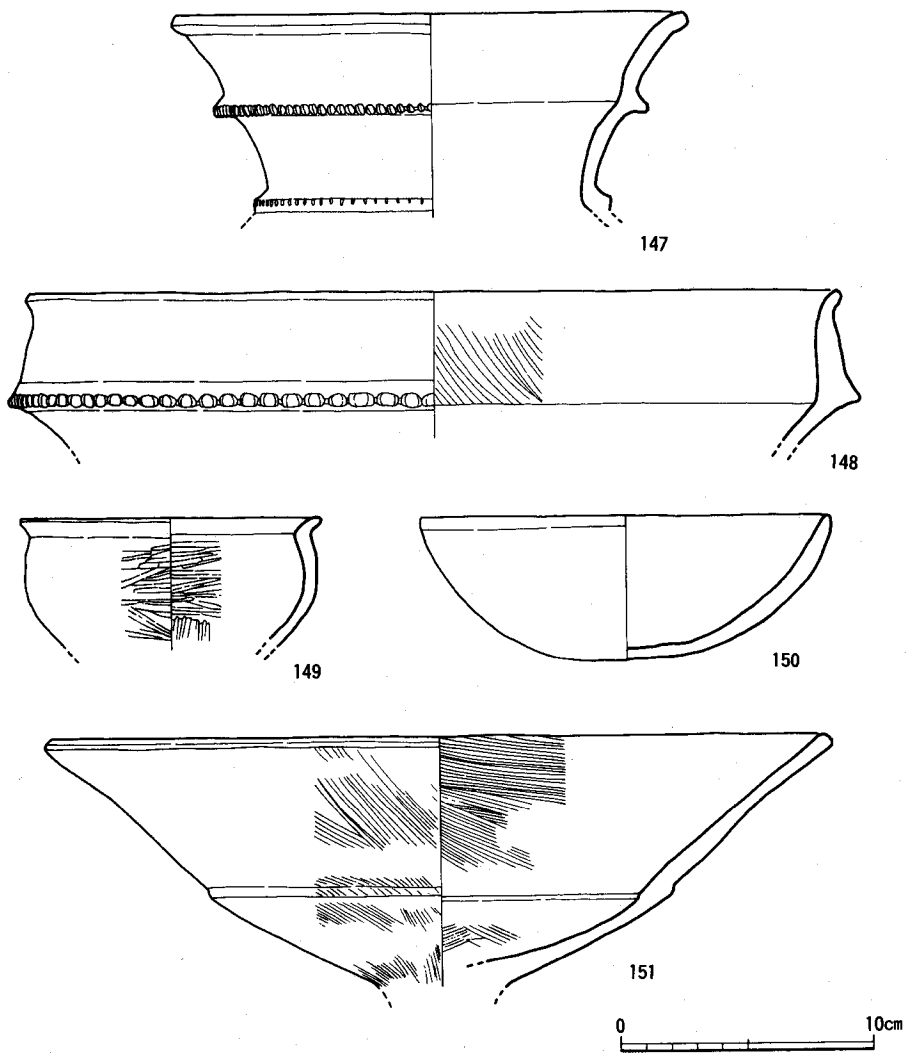


Fig.120　SX16・17・25土壙出土遺物実測図（1/3）

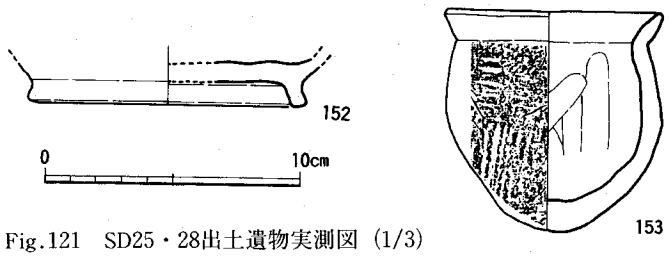


Fig.121　SD25・28出土遺物実測図（1/3）

十分に確認することが困難で、完全に全容を把え得たものは多くなかった。各土壙は個別に図示できる程遺存が良好ではなく、以下では記述によってその内容を示したい。

SX06（Fig.92、PL.41・70）

調査区中央部に位置し、北壁側に検出された。調査では遺構南端の一部を検出したにすぎない。遺構埋土は黄褐色土混りの黒色土層である。プランは西側で半円状をなし、東側では不分明である。東西長3.2m、南北2.3m を計り、周壁下に幅30cm 程の段を有する。壁高30cm 程を残す。

SX07（Fig.92、PL.41）

調査区中央に位置し、SC04住店址の西側に検出した。遺構は大部分が北壁に這入るが、プランは不整な円形と考えられ、東西長1.2m、南北長60cm、壁高 5 cm 程でSX10に西側を切られる。

SX08（Fig.92、PL.42）

調査区中央に位置し、SC04住居址に切られる。プランは南北に長い長円形を呈し、南北長2.3m、東西長1.4m、壁高10cm を計る。埋土中より土師器高坏脚部破片が出土したにとどまった。

SX09（Fig.92、PL.42）

調査区西側に位置し、SC03住居址の南側に検出された。プランは南西側にコーナーが残り、方形あるいは長方形をなすもので、北側が試掘トレンチによって失なわれている。現存で東西長3.3m、南北長1.3m を計る。また壁高は南壁で10cm 程を計る。

SX10（Fig.92）

調査区中央に位置し、SC04住居址の西側に位置する。遺構は南端が中央にあり西へ回るコーナーとして検出された。北側は壁に這入るが南北壁長3.8m、東西壁長50cm を計る。壁高は 3 ～ 5 cm 程で竪穴住居址の可能性もある。

SX11 (Fig.92)

調査区中央に位置し、SC06住居址の西側に検出され、SD24溝に西側を切られる。プランは北東側がコーナーなし方形に近いものであろうか。周辺のピット群によって形状は判然としない。殆どが南壁に這入る。現存では東西長3.4m、南北長2.2m を計る。

SX12 (Fig.92)

調査区中央部にあって、SC06住居址の北側に位置する。プランは不整な方形プランと考えられ、大部分は北壁に這入る。現存では南北2.2m、東西2.4m、壁高15cm を計る。SX13に切られる。

SX13 (Fig.92)

調査区中央にあり、SX12を切る土壙で長円形をなすと考えられる。プランは南北に長く、現存で南北長 1 m、東西長1.3mや壁高25cm を計る。

SX14・15 (Fig.92)

調査区中央に位置し、SX15か14を切る。SX14は辺の不揃いなる長方形プランで東西長2.4m、南北長80cm、深さ 7 cm 程を残す。SX15はこれを切り、調査区に平行に長辺を向けている。東西長3.6m、南北長90cm、深さ 5 cm 程を残し、東端に直角に曲るコーナーを持った点で竪穴住居址の可能性もある。

SX16 (Fig.92)

調査区中央に位置し、SC07 住居址に切られる。プランは南側を殆ど失うため確実ではないが隅丸の長方形となろうか。現存では南北長 2 m、東西幅1.6m、深さ 5 cm 程を残す。

SX17 (Fig.92)

調査区東端部近くに位置し、17が殆ど北壁に這入るために不詳乍ら、コーナーが 2 ヶ所にみとめられるため長方形プランとなるか。現存で東西1.7m、南北0.4m、深さ15cm 程となる。またこれの東側 4 m にSX18があり、これも北壁に殆どが這入る。遺構は複数の遺構の切合いかとも考えられる。プランは方形に近いものとなろう。東西長3.3m、南北長1.5m、深さ23cm 程である。

SX19 (Fig.92)

調査区中央部に位置する小土壙で北側が北壁に這入る。長方或は方形をなすものである。東西1.3m、南北0.5m、深さ30cm を残す。

土壙と考えられるものは調査区中央部を中心に更に 6 基程の非常に浅く、長楕円形あるいは不整方形をなすものがある (SX24～29)。

出土遺物 (Fig.119・120)

土壙で出土した遺物は殆どが小破片であり、図に供することの可能なものは多くない。

SX05 (Fig.119－144・145、PL.40)

図示可能なのは２点である。**143**は直立する口縁を有し、口縁上端部が平担でこの上に櫛歯状工具で押し引きの連続文様を施す。器色は暗褐色を呈し、口径40cm を計る。内外面ともに調整はタタキ後にナデを加える。**144**は複合口縁を有する壺破片である。頸部上端より反転し

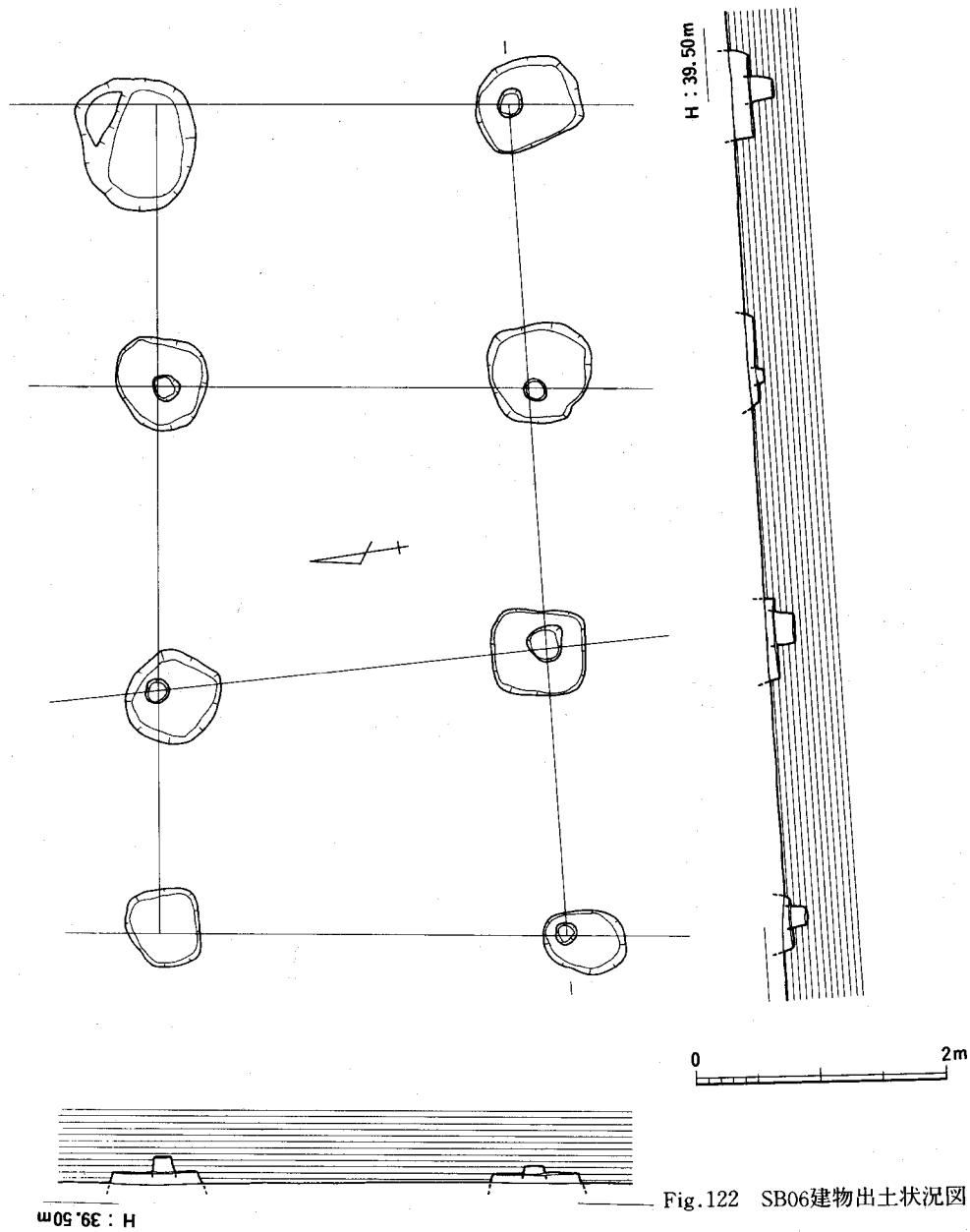


Fig.122　SB06建物出土状況図（1/60）

て立ちあがり、更に外方へ屈開する。器色は暗赤褐色を呈し、口径39.2cm を計る。調整は頸部にタタキを残す外は横位のナデで、頸部上端に刻目を施す。

SX15 (Fig.119－146・147、PL.70)

本土壙も２点のみの図化である。**145**は甑と考えられる把手付土師器甕である。把手は端部を失う。口縁部は僅かに折れて外方に開く。器色は淡黄褐色を呈し、口径27cm を計る。調整は内面下部に縦位の粗いヘラ削りを残す。**146**は須恵器坏身である。受部は中央が窪み、ほぼ水平に伸びる。また立ちあがりは内傾して上端部が屈折する。体部のヘラ削りは⅔に及ぶ。器色灰白色を呈し、焼成堅緻である。口径12cm、器高4.2cm を計る。

SX16 (Fig.120－148・149)

２点ののみを図示する。**147**は複合口縁をなす壺で頸部や口縁反転部には細かい刻目突帯が廻らされる。器色は暗橙色を呈し、焼成堅緻である。口径20.2cm を計る。**148**は壺口縁部破片である。反転する口縁部は内傾気味で上端部は小さく屈開する。器色暗赤褐色を呈する。調整は口縁外面がタタキ（？）状調整後に横ナデで、内面は粗い縦刷毛目を施す。また屈曲部にはヘラによる刻目文を付す。口径32cm（復原値）を計る。

SX17 (Fig.120－150・151)

２点のみが図示し得た。**149**は小型の甕形鉢である。口縁部は屈曲して小さく外方に開く。調整は口縁端部に横ナデを施す以外は全て縦横のヘラ研磨である。器色は明るい赤褐色を呈し、焼成は堅緻である。口径11.8cm を計る。**150**は浅い鉢である。器色は暗赤褐色を呈する。調整は外面上部がタタキ後に粗いヘラ削りを加え、下部はナデ調整となる。また内面は上半部にタタキのあて具痕がみられ、内底部はナデによる仕あげである。口径16cm、器高5.8cm を計る。

SX28 (Fig.120－152)

151は高坏で、脚部を全て失う。口縁は直線的に外方に開く。器色は暗い赤褐色を呈し、黒斑が外面にみとめられる。調整は外面が縦刷毛目後に横ナデを加える。また内面も同様であり、内底部は刷毛目をナデ消している。口径30.6cm、現存高10cm を計る。

溝状遺構 (Fig.92)

溝状遺構は近世～弥生時代終末期に亘ると考えられるもの11条（SD19～29）が検出されたが何れも調査地の遺構確認作業の困難なために掘下げが不十分であり、これらの時期、性格を明らかにできなかった。ここでは遺物の図示可能な溝（SD25）についてのみ記すことにする。

SD25 (Fig.92・Fig.121－153)

SD25は調査区東端部のSX17の土壙の南側に隣接する幅40cm、深さ５cm を計り、「L」字形に曲る小溝である。内部から出土した**152**は高台付土師器坏である。高台は坏外底部に付き、

外側に踏んばるように開く。器色は外面が明赤褐色で内面は茶褐色を呈する。所謂内黒土師器である。外底部ヘラ削りで、他外面は横ナデである。高台部径10cm を計る。

(4) Ⅰd区の調査 (Fig.92、PL.43)

Ⅰc区に続く西側にⅠd調査区がある。Ⅰd区はⅠc区調査区西端より西へ6m程の地点より開始し、途中の未掘区を含めると延長55m程となる。

調査では竪穴住居址1軒、掘上柱建物1棟、溝1条などであり、他に調査区東半部を中心にして多くの小ピット群が検出されたが建物としてのまとまりを把えるおとはできなかった。以下個別に説明を加えたい。

竪穴住居址 (Fig.92、PL.44)

本住居址SC09は調査区西寄りに検出され、プランは方形或は長方形をなすと考えられ、南西部にコーナーを確認した。現存では南北壁長3.5m、東西壁長2.1m、壁高15cm程を計る。また主柱穴は床面で配置を確認できなかった。

掘立柱建物 (Fig.92・122、PL.44)

調査区西端部近くで2×3間以上を考えられる建物1棟を検出した。(SB06) 柱掘方はやや四隅をもった円形で径が1～0.6m程とがらつきがある。なお柱痕は20～25cm程度の径である。掘方内からは時期の特定し難い土器片が少量出土した。柱間は南北で3～3.2m、東西で2.1～2.4mとなる。

溝状遺構 (Fig.92)

SD28は調査区中央よりやや西寄りで検出された南北溝で、幅員1.2m、深さ20cmで延長3.3m程を確認した。溝内埋土は灰色粗砂で若干の遺物を検出した。**153**は小形甕でほぼ完形に近い。器色は淡橙色を呈し、黒斑が一部にある。調整は外面が縦横の粗いタタキで、内面は縦位の指ナデである。口径8.4cm、器高8.9cmを計る。

(5) Ⅰe区の調査 (Fig.92)

本調査区はⅠd区の西側に2m程の未調査三を挟んで延長5m程の小地区である。

調査では6個の小ピットと不整な竪穴1基を検出した。遺構面は現地表より50～60cm程下った灰色砂質土層上面であった。

Ⅳ　まとめ

これまで第Ⅰ区羽根戸原C遺跡群第3次調査及び第Ⅱ区羽根戸古墳群N群（11基）の調査成果について事実報告を述べてきた。

第Ⅰ区調査では羽根戸原C遺跡群の実像の一端に触れ得たと考えられ、第1・2・4次調査の成果をあわせ考えると本遺跡群がこの地域の弥生時代中期期以来の拠点的集落の位置を占めるるものであると考ことができよう。

今回の第Ⅰ区調査では特に第Ⅰb～c地区において弥生時代後期終末から中世期に亘る重複した遺構群が検出されたが、著しい重複のために十分に各時代遺構の形状および時期を把握することが困難であったため、各時期のステージが成果として作成できない状態である。この中には遺物としてしか想定できない弥生時代中期集落や古代末の鉄製煉に関連する遺構群などがあって、本遺構群の内容の濃さを物語るものと考えて良かろう。

第Ⅱ区の羽根戸古墳群N群（11基）の調査では古墳調査での十分な問題意識の不足から遺構および出土遺物についての検討をなし得なかった。

以下では古墳出土の須恵器類を中心として各古墳の築造時期と使用年代について若干の考察をしたい。尚検討する須恵器の型式編年観は小田富士雄氏によるものである。

第1号古墳（Fig.123）

本墳はN群中最高所を占める長方形石室墳であり、複室が意識されている。石室壁体の構築には煉瓦積み手法が多く採用され、腰石以上が持ちおくり積みとなり天井部に至る。

出土須恵器類では蓋坏類が最も多く出土した。坏蓋は玄室で2類に分けられ、このうちⅠb類はⅣA期に、Ⅱ類はⅤ期であろう。また羨道部のものは3類に分けられ、Ⅰb、Ⅰd類がⅢB期に、Ⅰc類がⅣA期、Ⅲb類がⅤ期に相当しよう。

次に坏身は2類が区別され、Ⅰ類のa・b類ともにⅤ期に相当するか、更にⅡa・Ⅱd類がⅢB期に、Ⅱb・Ⅱc類はⅣB期に相当しよう。

第2号古墳（Fig.123）

本墳もN群中で第1号墳の東側に隣接して、丘陵部の最高所に立地する複室の横穴式石室である。石室の壁体構築法は第1号墳と類似し、平面プランも同様である。

出土した須恵器蓋坏は全体器種の殆どを占め、出土位置も玄室内のものが多い。坏蓋は3類

に区別され、Ⅰ類のうちⅠa・Ⅰd類がⅢB期に、またⅠb類がⅣa期であり、Ⅰc類もⅣB期に相当すると考えられる。Ⅱ類は低い天井のつまみを有するものでⅣ期にあたり、内面にかえりをもつⅢ類のうちつまみをもたないⅢaと宝珠つまみを有するⅢb類ともにⅤ期に相当しよう。

次に坏身は口縁立あがりの有無によって2類に区別したが、このうちⅠa類はⅢB期、Ⅰb類がⅣA期、Ⅰc類がⅣB期と考えられる。またⅡ類のうちⅡa類はⅤ期であろう。

第3号古墳（Fig.123）

本墳はN群中丘陵裾部に位置する横穴式石室墳で、石材の使用法から複室を意識したもので、壁体の構築は基本的に煉瓦積み法をとるが、全体に石材が小ぶりで、積み方にも粗雑さが目立つ。

使用時期を示す須恵器類は全く出土していない。

第4号墳（Fig.123）

本墳も第3号古墳と同様にN群中南面する丘陵裾部に立地する小型の横穴式石室墳である。腰石石材もかなり小ぶりでこれ以上の壁体構成も粗雑で小型の転礫が使用されている。

また玄室・羨道部の区別が平面的プランでは把え難く、僅かに腰石石材が使用法によって区別ができる。

出土した蓋坏類は僅少であり、蓋は天井部に断面菱形の宝珠つまみを付す小型のものでありⅤ期に這入ると考えて良かろう。坏身は平底坏で同様にⅤ期に相当するものであろう。

第5号古墳（Fig.123）

本墳も第4号古墳と同様にN群中の南面する丘陵裾部にある玄室がほぼ正方形をなす横穴式石室墳である。腰石石材は第4号墳に比較するとやや大型となるが、上部の壁体構築については左右側壁および奥壁部ともに使用石材サイズの均一性は無く、小型転礫の不規則な使用が特徴的である。

蓋坏類は全部で7点であり、少数の出土である。蓋は3類に区別できる。Ⅰa類はⅣb期に相当し、Ⅰbは不詳である。Ⅱ類は天井部のつまみの断面がやや退化した宝珠つまみを施し、低い体部内面にかえしをみる。Ⅴ期と考えて良かろう。

坏身は蓋Ⅰa類とセットとなると考えられるⅠ類と坏部が浅い高台坏とがあって坏部の形態と高台位置の形状から同様のⅤ期に時期比定をして良いものであろう。

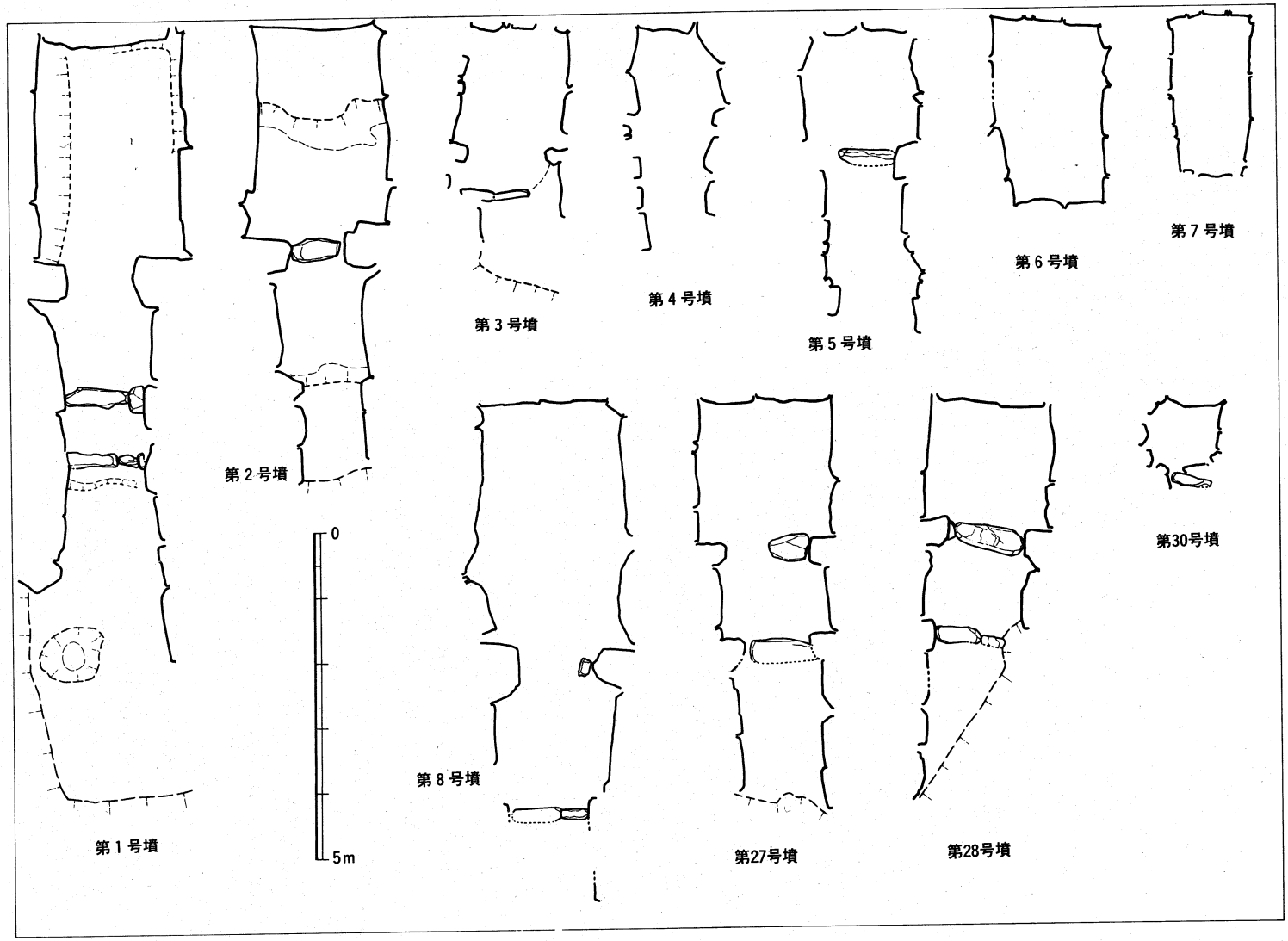


Fig.123　調査古墳平面図（1/100）

第６号古墳（Fig.123）

本墳はＮ群の他の古墳とは異なり第７号墳とともに石室構造・開口部方向を別にする。

石室は平面プランが奥壁のやや広いバチ形をなし、使用石材は一体に腰石および壁体使用のものともほぼ同じ程度のサイズである。石積み法は壁面の横位に目筋の通る所謂煉瓦積ゐの手法で、壁面の傾斜が少なく、閉塞は小口部に限られる。西側に石室が開口する。

副葬遺物は殆ど全てが玄室内出土であるが原位置をとどめるものは無い。

蓋坏は、身・蓋がセットをなすものが３組程あり、良好なものである。蓋は２類に区別される。口縁部と天井部との境に一条沈線を廻らし、口縁端部か段を有するⅠ類と口縁内面に痕跡的に段を有するが天井部との境には何も設けないⅡ類とがある。

また身も器高が高く、受部が斜上方に延びて、比較的立あがりの高いⅠ類と受部形状は同様ながら口縁部が内傾化し、器高が低くなるⅡ類とがある。前のセットでは身・蓋の各々Ⅰ類はⅠ類とⅡ類はⅡ類との組合せがある。更に本墳では円環状把手を持つ提瓶や坏、小型甕などの良好な資料も多い。

第７号古墳（Fig.123）

本墳も第６号墳と類似する石室形態と構造を持っている。また羨道部の閉塞は小規模である。

副葬遺物は殆ど玄室内より出土していないが、各施設から見付かった土師器・須恵器甕類は良好な資料がある。

蓋坏は大・小２種があると思われるが、何れも坏類では第６号墳に比較すると小型であり、より古式の形態をなしている。

蓋は口縁内面に段をなし、天井部との境が明瞭な突起を有するⅠ類と比較的口径が大きく、天井部と口縁との境が沈線状となるⅡ類とが区別できる。

また坏身はいずれも小口径で２類が区別できる。口縁部立あがりは大きく、全体に整美な感じを受ける。

第８号古墳（Fig.123）

本墳はＮ群中最も墳丘部の遺存の良好な古墳で、長方形の複室構造をなす横穴式石室墳である。

主に出土したのは石室内および西側墳丘部埋甕遺構からであるが、蓋坏に限って考えると前・後室とも遺物の際立った差はないと考えられる。蓋は３類に分けられ、何れも内面にはかえりがない通常の製品である。Ⅰ・Ⅱ類は小さな変化はあるがⅣＡ期であり、Ⅲ類はⅢＢ期と考えて良い。

坏身も３類に区別できるがⅠ類がⅢＢ期、Ⅰ類がⅣＢ期、Ⅱ類がⅣＢ期、そしてⅢ類はⅣＢ期でもやや新しい時期の所産であろう。

第27号古墳（Fig.123）

本墳はＮ群中で墳丘裾部の西端に位置し、玄室プランが正方形に近い複室構造の横穴式石室墳である。

蓋坏類に限ればこれは玄室・羨道内からの出土である。蓋は３類に区別されるがⅠ・Ⅱ類がⅤ期に、Ⅲ類がⅣＢ期に考えられよう。

また身はⅢ類程が区別されるが、この内にはⅠ類（Ⅴ期）の他に高台付坏もみられる。

第28号古墳（Fig.123）

本墳も第27号墳と同様に玄室プランが正方形をなす複室構造の横穴式石室である。

蓋坏は石室・羨道から若干出土している。蓋は３類に区別できる。Ⅰ・Ⅱ類は大きくⅤ期に相当し、Ⅲ類はよく判らない。

また坏身は３類に区別され、不安定な平底・平底・高台坏などがあるがⅤ期を中心としてこれ以降に下るものがある。

第30号古墳（Fig.123）

本墳は４・５号墳間にある非常に小型の横穴式石室墳である。直接内部主体にともなうものがないが周辺でⅣａ期頃の蓋が出土している。

以上各古墳出土の蓋坏を中心にしてみたがここで該当する須恵器型式を各古墳毎に取出してみる。

まず第１号墳では羨道でⅢｂ～Ⅴ期までの蓋坏が、また玄室でもⅣＡ～Ⅴ期のものがある。第２号墳では蓋・身ともⅢＢ～Ⅴ期があり、坏Ⅱｂ類は更に新しい所産である。

第４号墳はⅤ期で、第５号墳もともにⅤ期の須恵器を含み、他にⅣｂ期のものを混じる

また第６・７号墳は各れも蓋・身が２類に分類されているが第７号墳が古く、６号墳がこれに続く型式をもっている。（Ⅱｂ→ⅢＡ期）

第８号墳はⅢBb－ⅣＢが占め、27号墳でⅣＡ～Ⅴ期が主となる。また28号墳はⅤ期の須恵器が主となり更に時間の下るものもあろう。

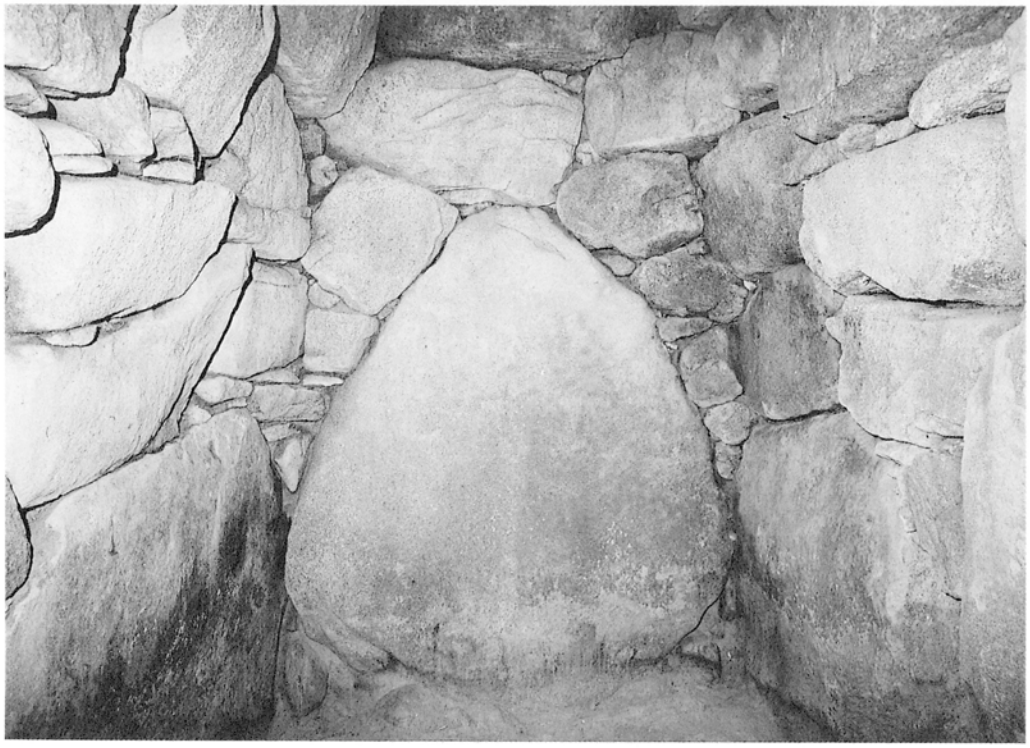
羽根戸古墳群では他に第１号前庭部や第28号墳西側で検出されたSK04土壙内より出土した鉄滓類があり、供献例として調査を肉眼観察でおこなったが、何れも精錬滓である可能性が高いものである資料であった。

図　　版

PLATES

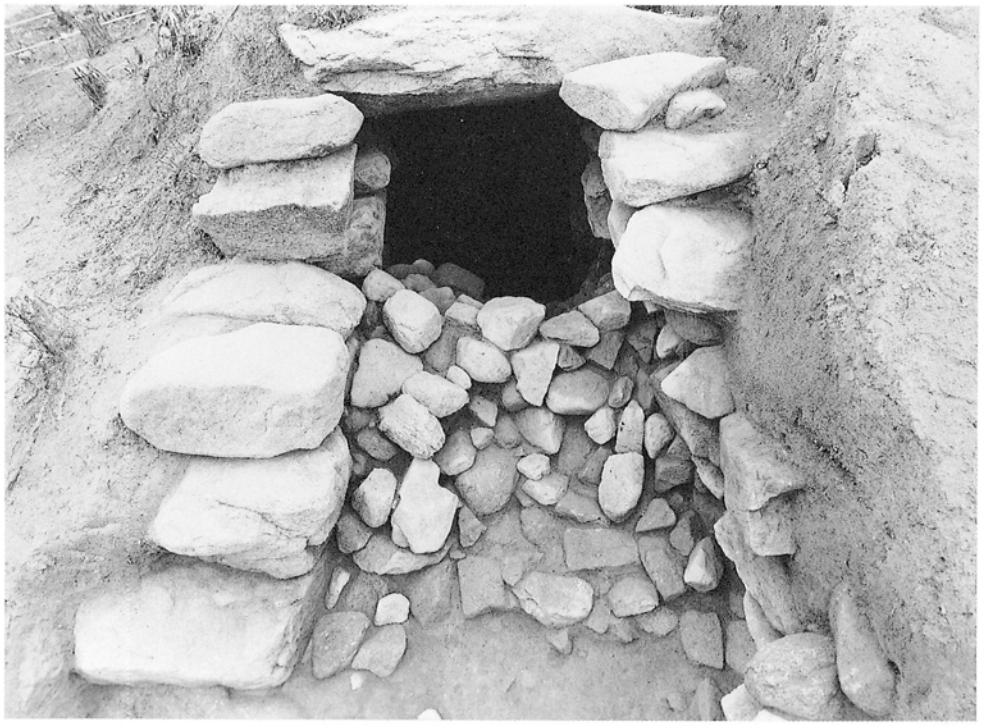
羽根戸古墳群N群調査区全景（東より）

(1)

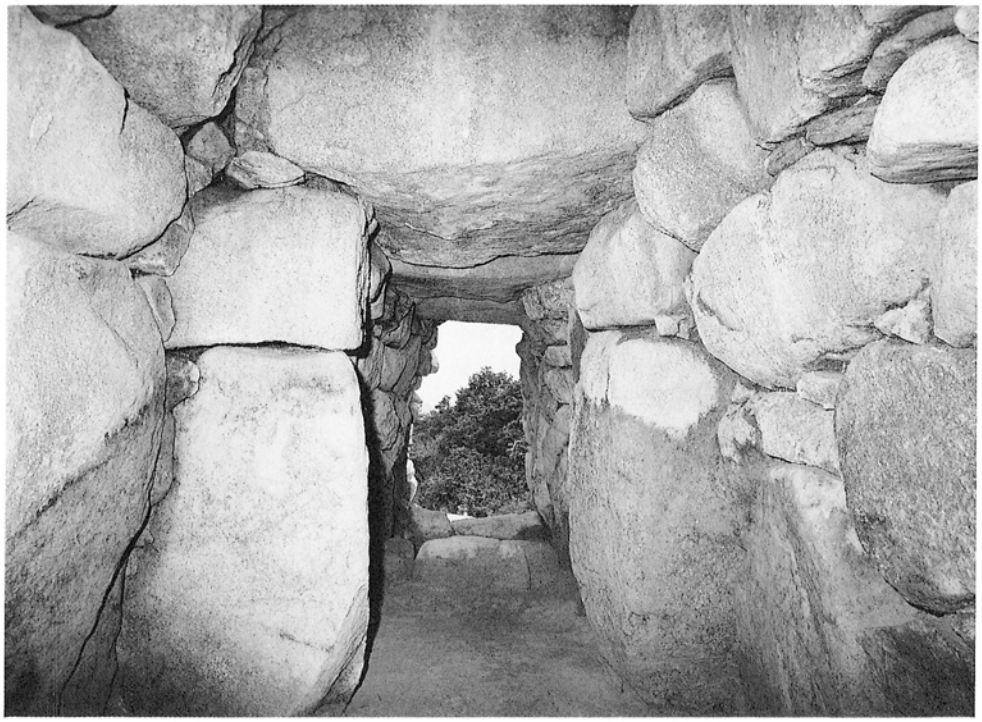


(2)

(1)N群第1号墳調査前全景（西より）
(2)第1号墳玄室奥壁（玄門部より）



(1)



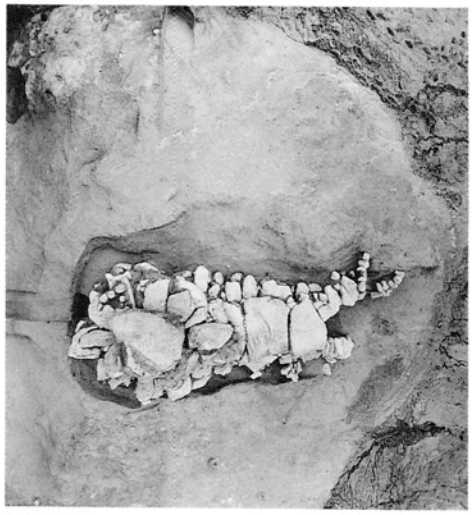
(2)

(1)第1号墳羨道閉塞状況（南より）
(2)第1号墳羨道（玄室より）

(1)

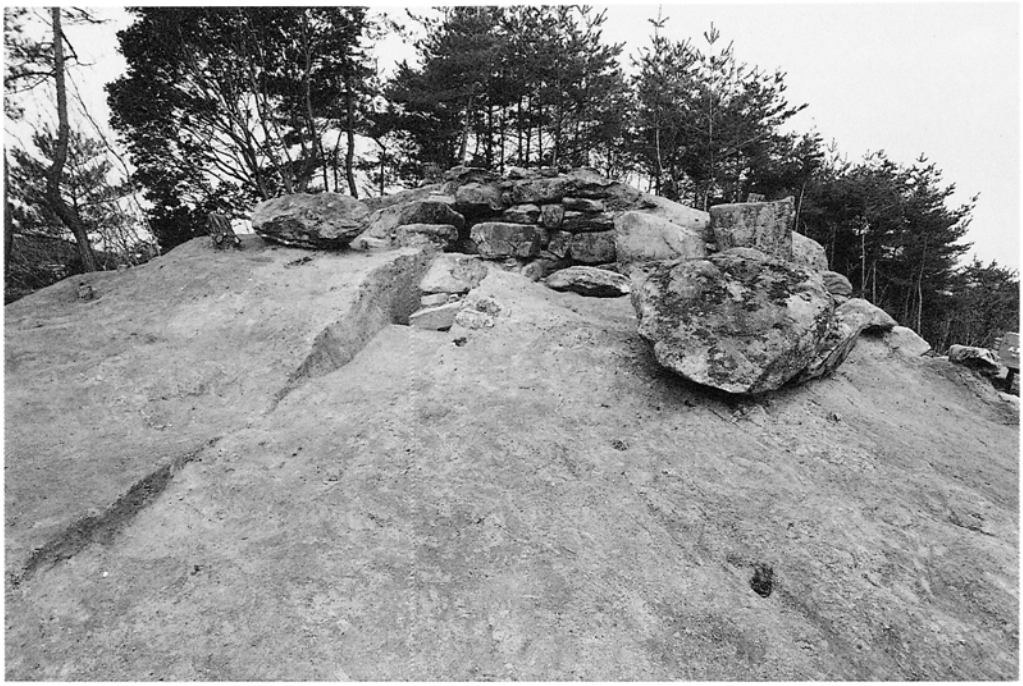
(3)

(2)

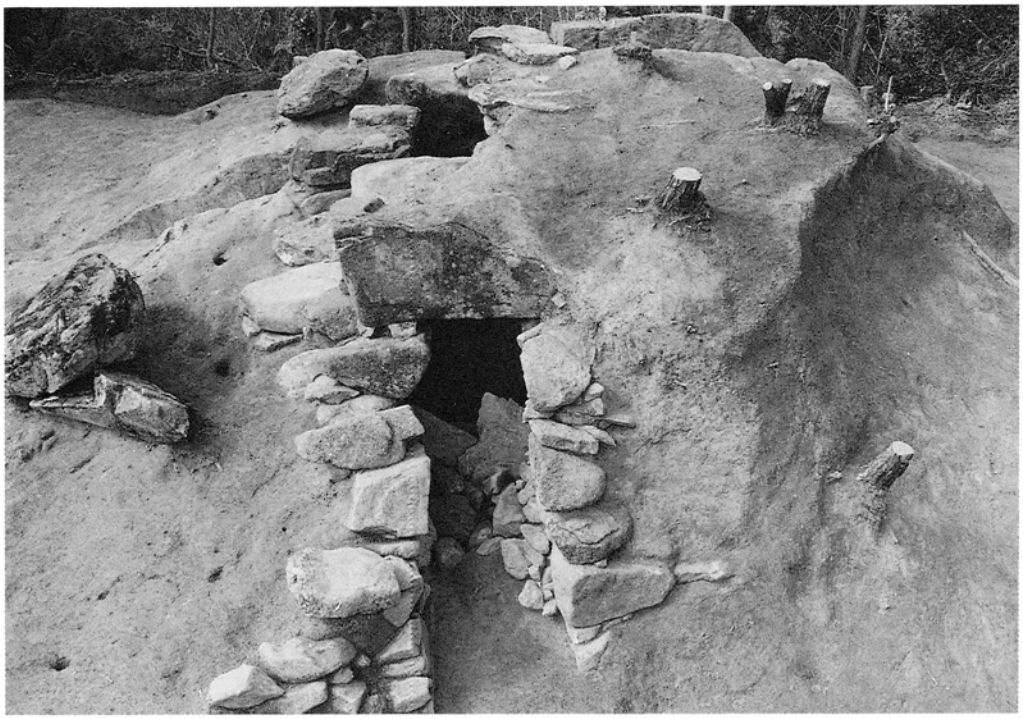


(4)

(1)第1号墳墳丘遺存全景（南より）
(2)第1号墳墳丘遺存全景（東より）
(3)第1号墳石室側面観（西より）
(4)第1号墳石室墩（北より）

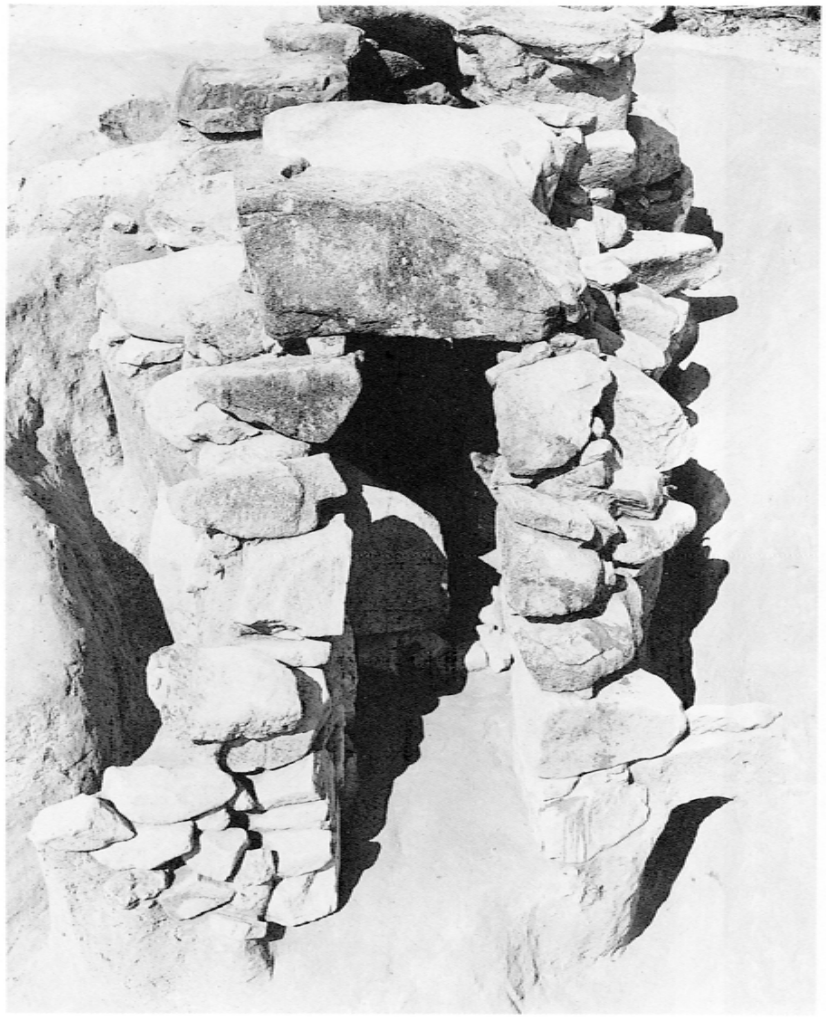


(1)

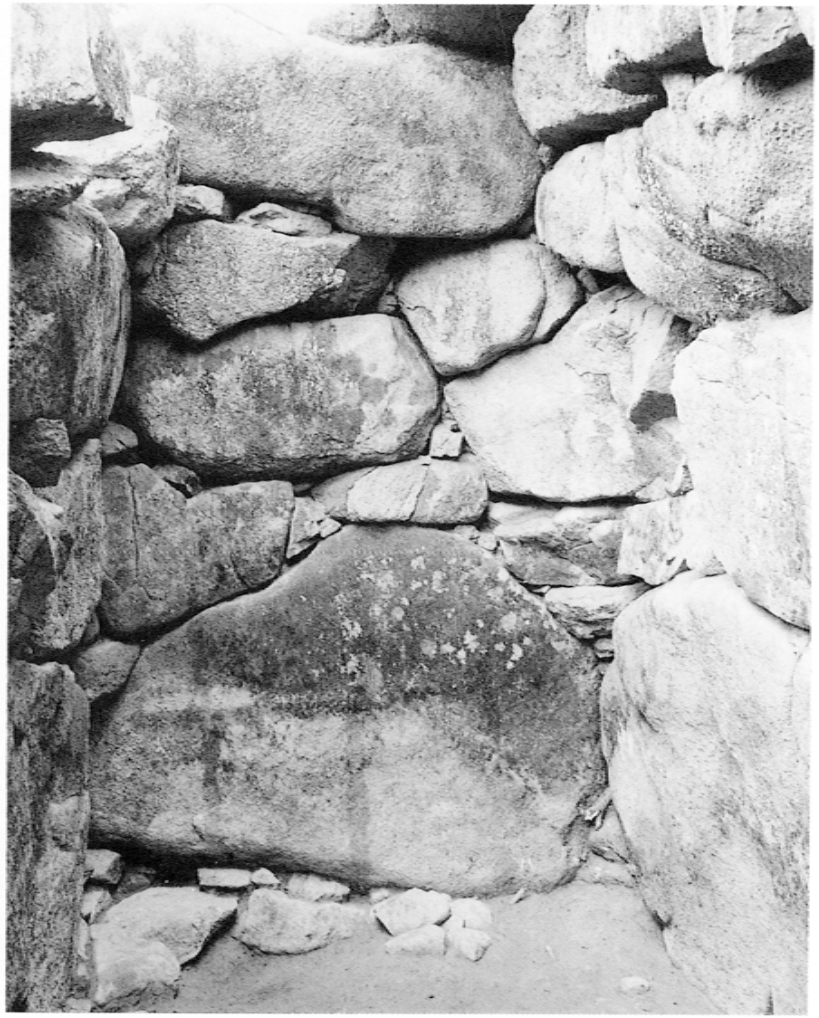


(2)

(1)第2号墳石室遺存状況（西南より）
(2)第2号墳墳丘遺存状況（南より）



(1)第2号墳石室遺存状況（南より）

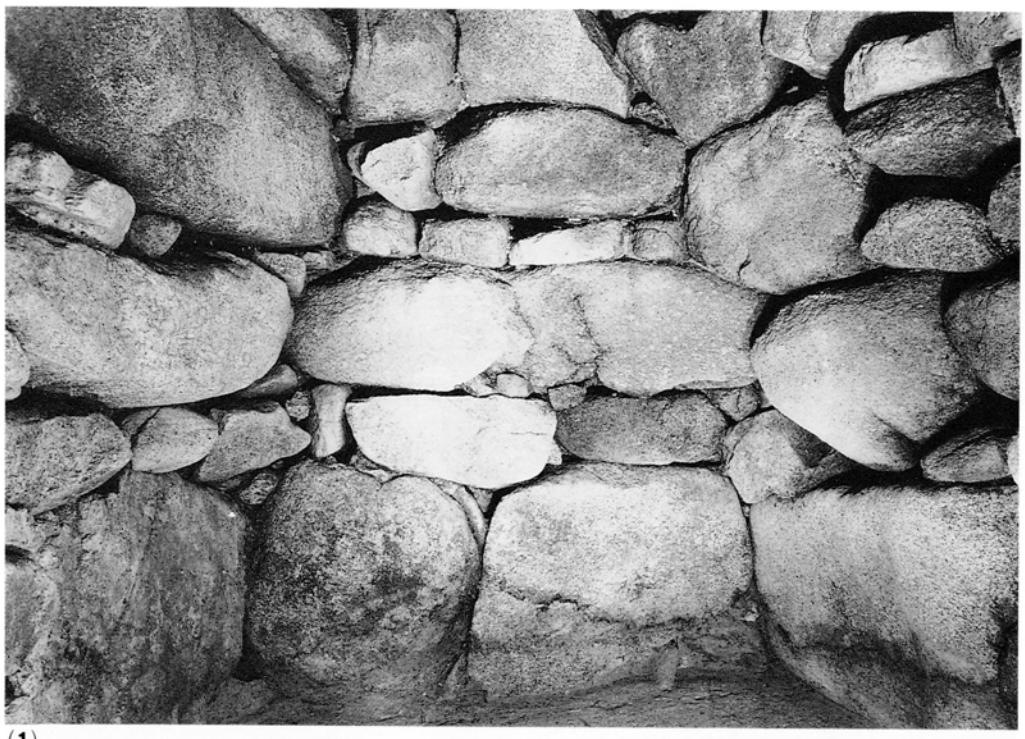


(2)第2号墳玄室奥壁（玄門より）

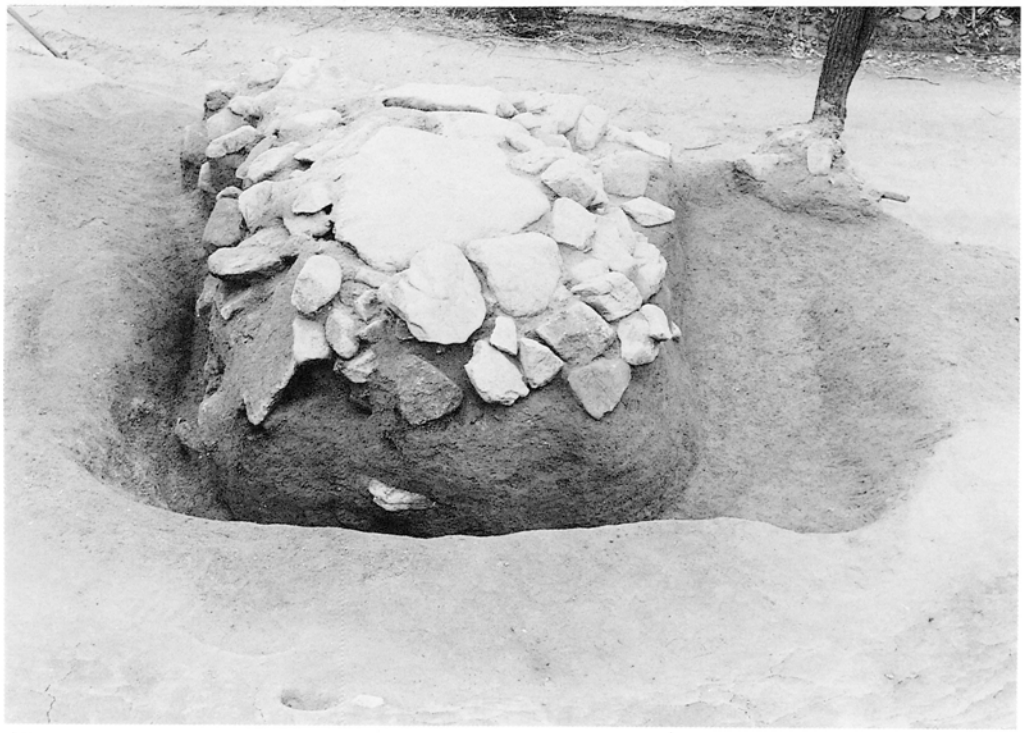
(1)

(2)

(1)第3号墳墳丘遺存状況（南より）
(2)第3号墳石室遺存状況（南より）



(1)

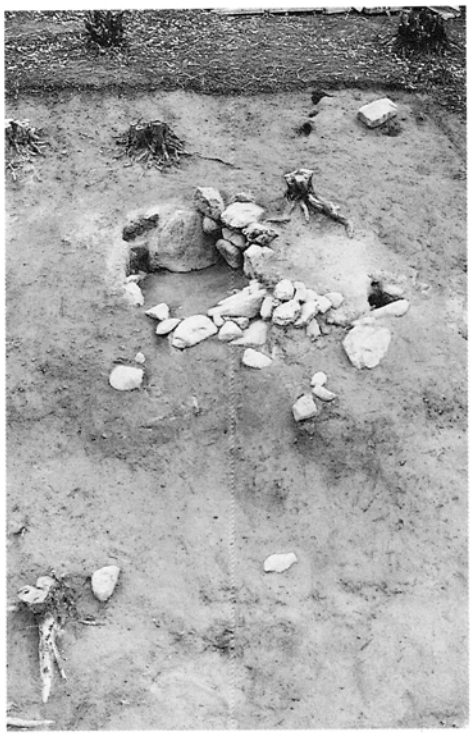


(2)

(1)第3号墳玄室奥壁（玄門より）
(2)第3号墳石室墩（北より）

(1)

(2)



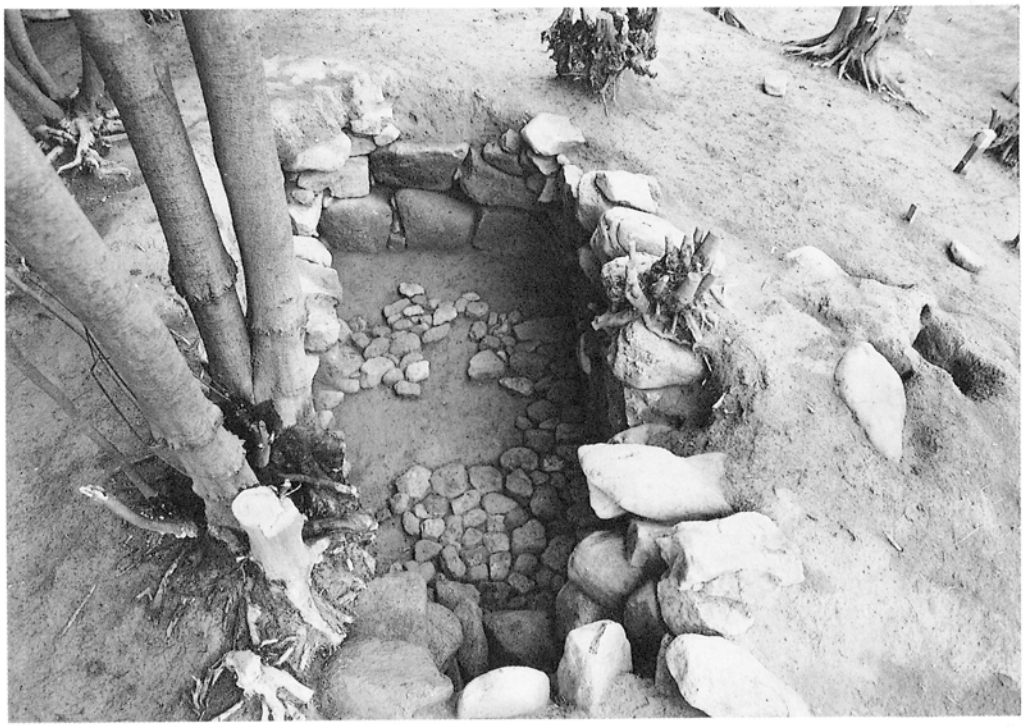
(3)

(1)第4・30号墳全景（東南より）
(2)第4号墳石室遺存状況（南より）
(3)第30号墳石室遺存状況（南より）

(1)第5号墳石室遺存状況（閉塞除去前・南から）

(2)第5号墳石室遺存状況（閉塞除去後・南から）

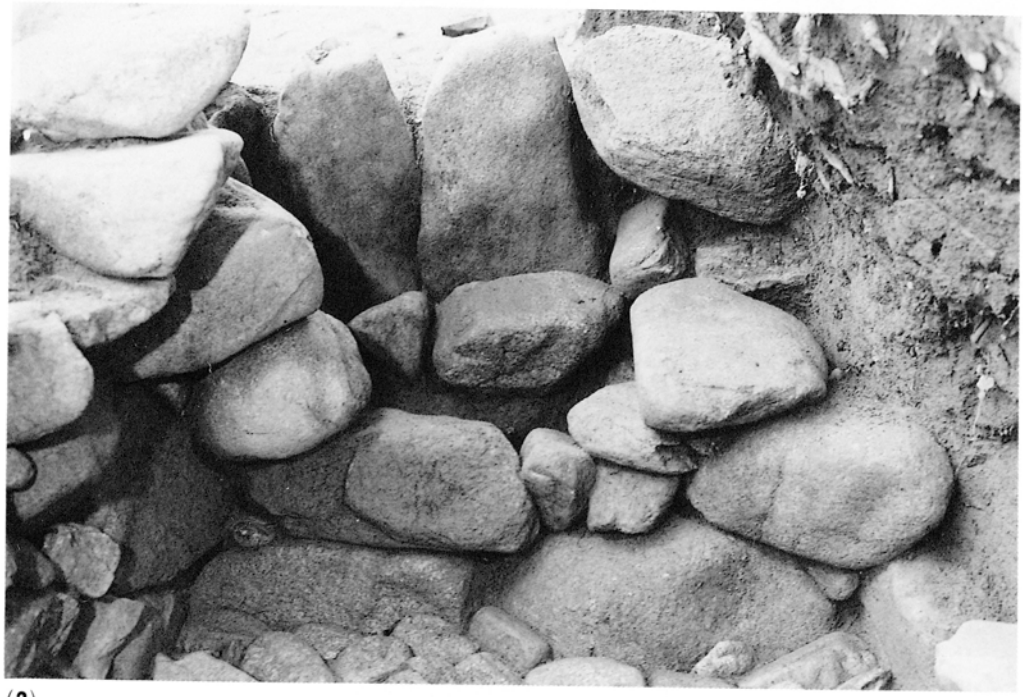
(1)



(2)

(1)第5号墳墳丘遺存状況（南から）
(2)第6号墳石室遺存状況（西から）

(1)



(2)

(1)第6号墳石室遺存状況（北より）
(2)第6号墳閉塞状況（玄室側より）

(1)

(2)

(1)第6号墳玄室奥壁構築状況（玄門より）
(2)第6号墳南側壁部供献坏類出土状況（西より）

第6号墳墳丘遺存状況㖞（南より）

(1)

(2)

(1)第7号墳墳丘遺存状況（東南より）
(2)第7号墳玄室北側壁構築状況（南より）

第7号墳石室全景（奥壁より）

(1)

(2)

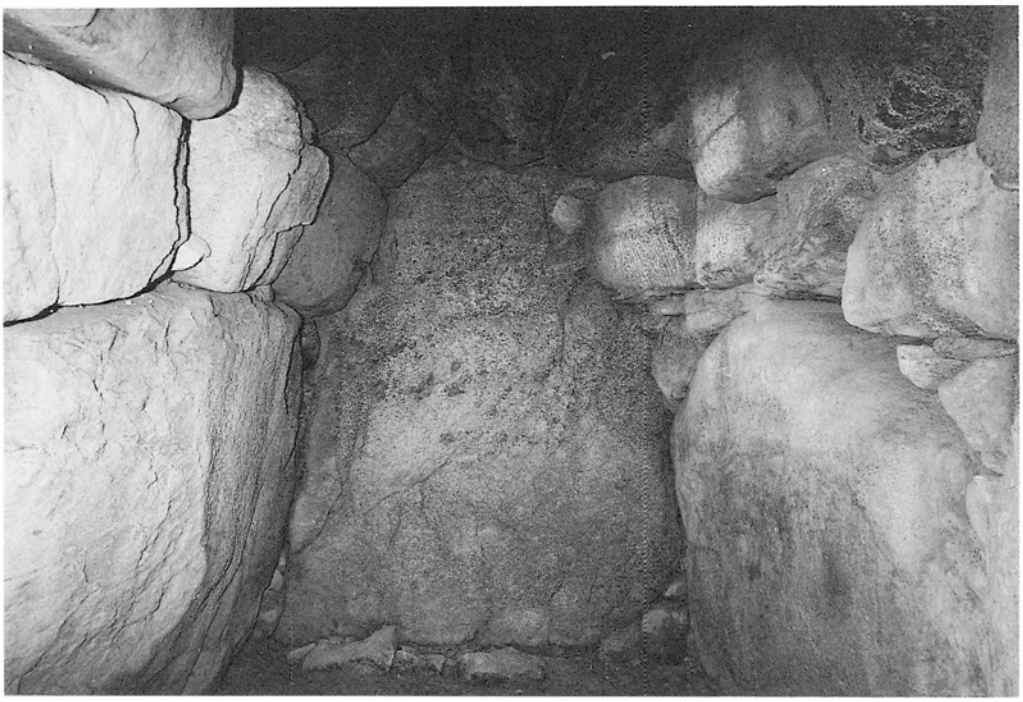
(1)第7号墳玄室奥壁構築状況（玄門より）
(2)第7号墳石室およびSX01石棺墓検出状況（南西より）

(1)

(2)

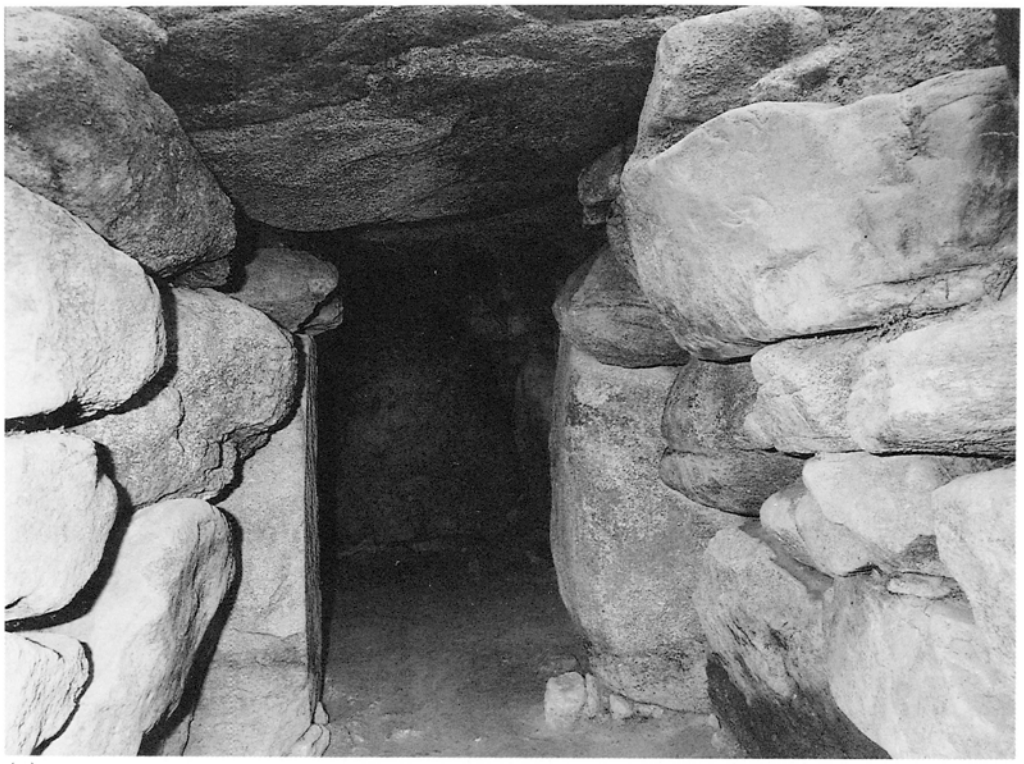
(1)第7号墳閉塞状況（玄室より）
(2)第7号墳閉塞状況（羨道より）

(1)

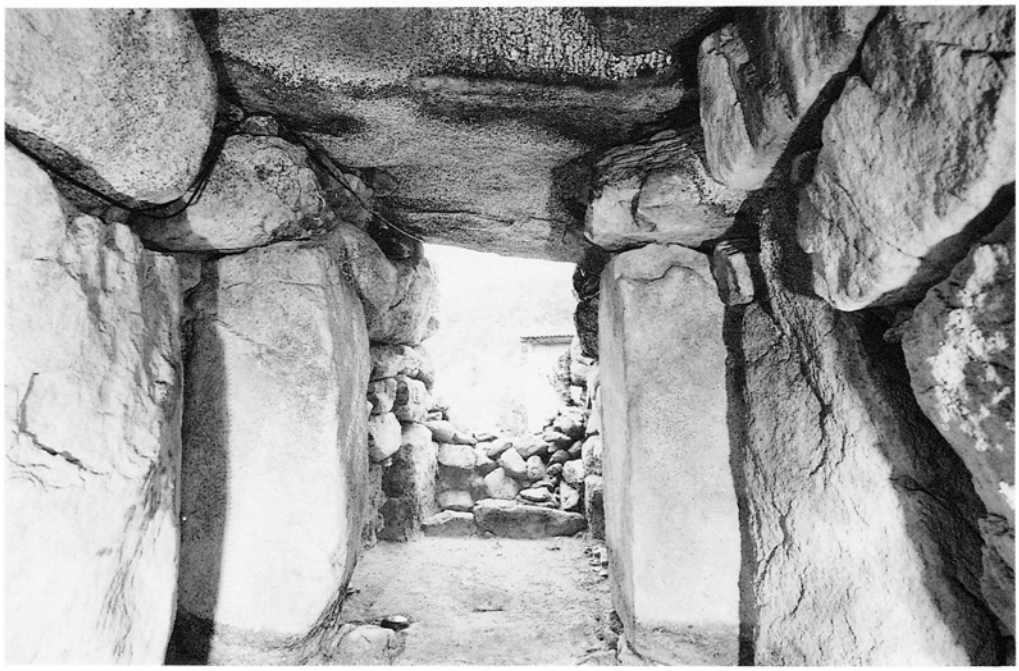


(2)

(1)第8号墳墳丘調査区全景（東より）
(2)第8号墳玄室奥壁（玄門より）



(1)



(2)

(1)第8号墳玄室後室（前室より）
(2)第8号墳玄室前室（後室より）

(1)

(2)

(1)第8号墳墳丘調査区全景（西より）
(2)第8号墳墳丘葺石構築状況（南より）

(1)

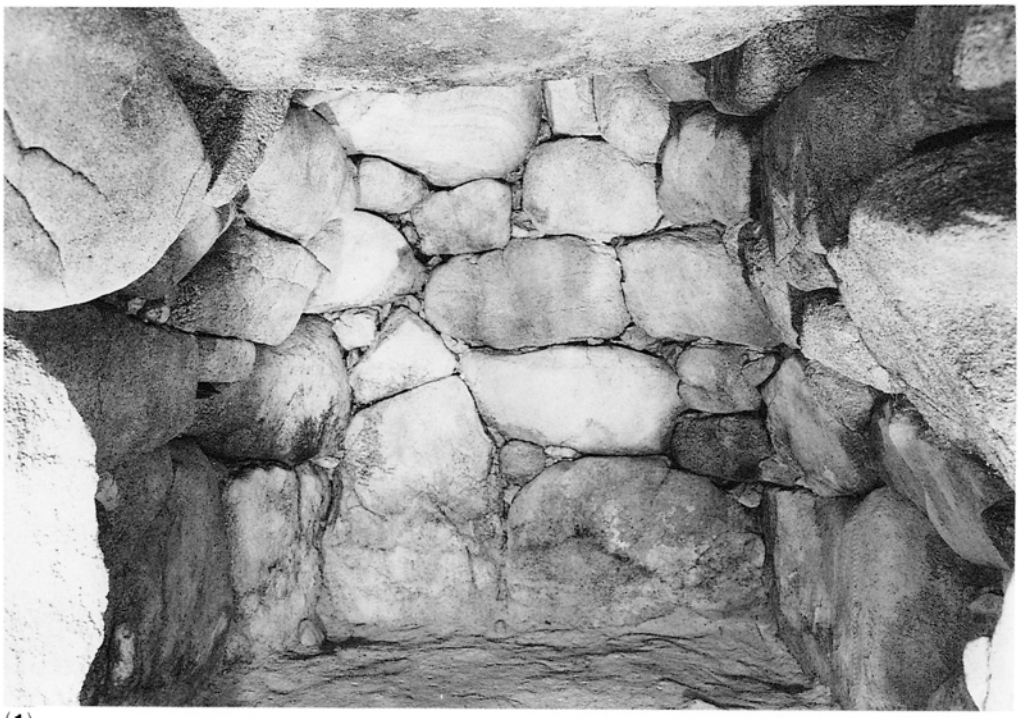
(2)

(1)第8号墳玄室前室内遺物出土状況（坏類）
(2)第8号墳前室内遺物出土状況（坏類および鉄器）

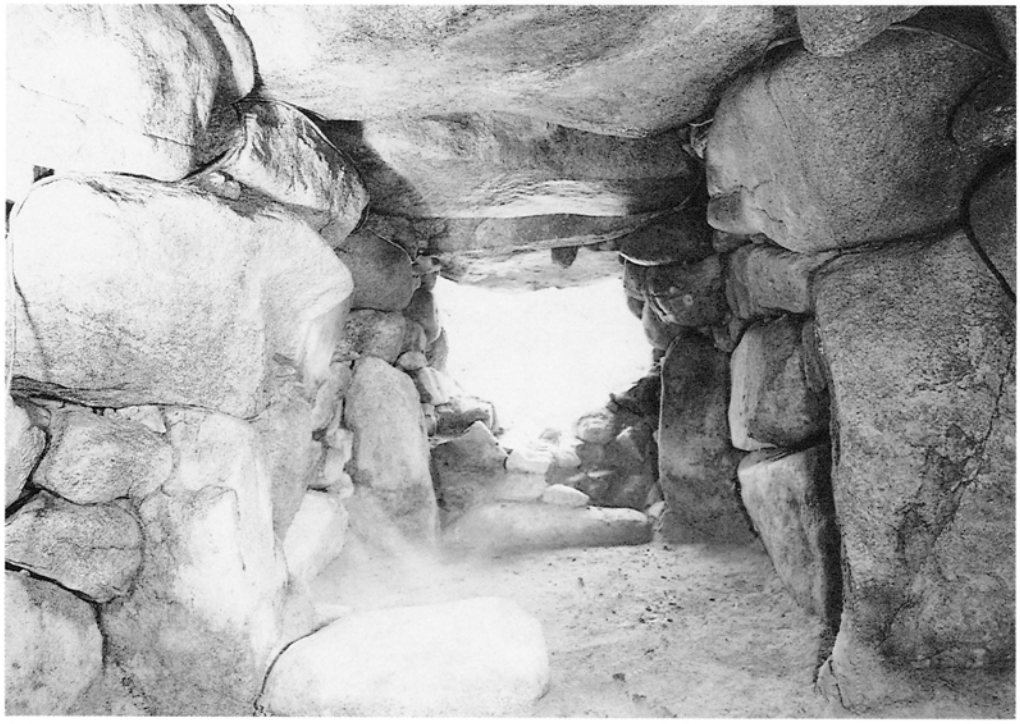
(1)

(2)

(1)第27・28号墳遺存状況遠景（南より）
(2)第27号墳羨道閉塞状況（南より）

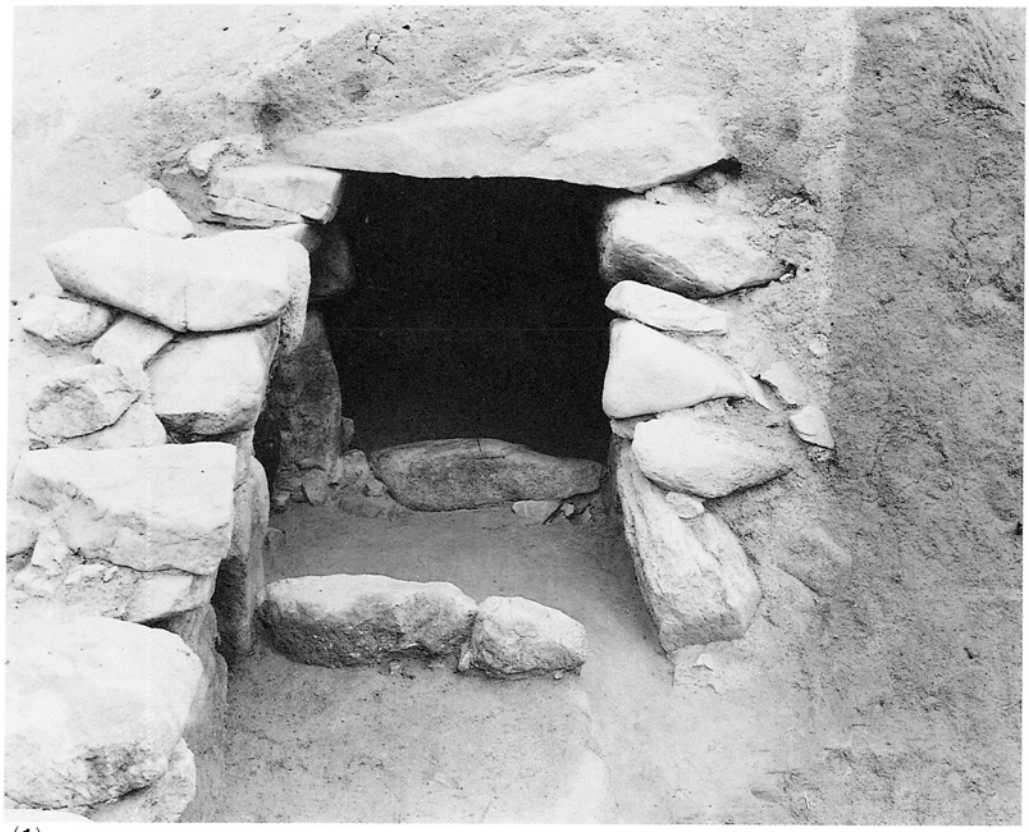


(1)

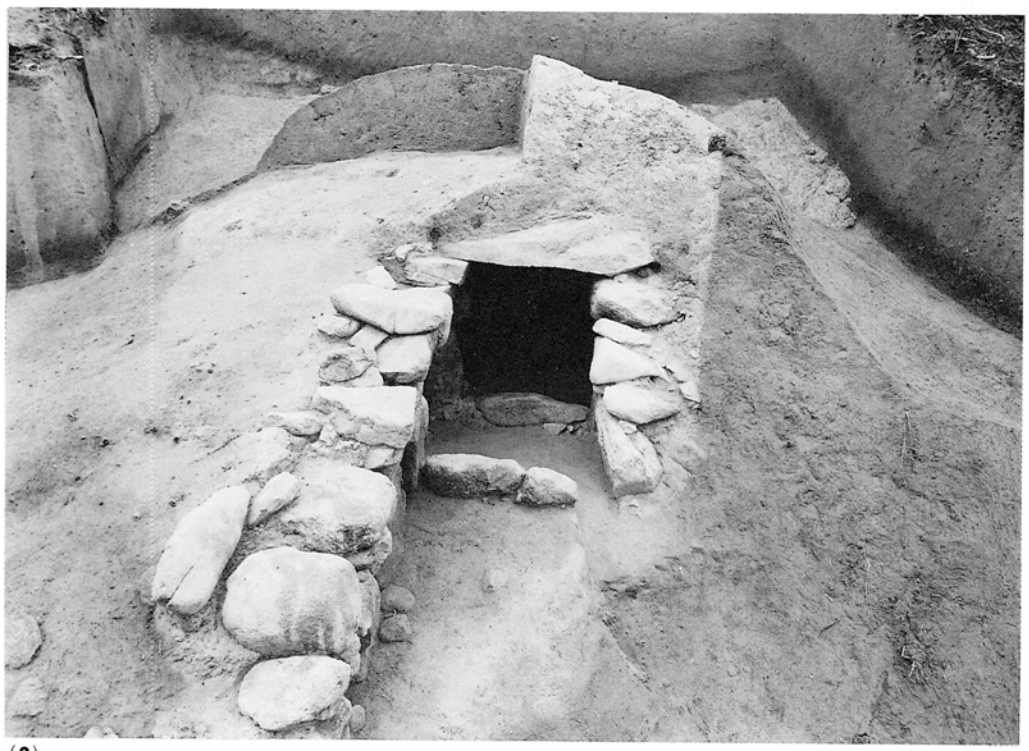


(2)

(1)第28号墳玄室奥壁（玄門より）
(2)第28号墳玄室前室および閉塞部

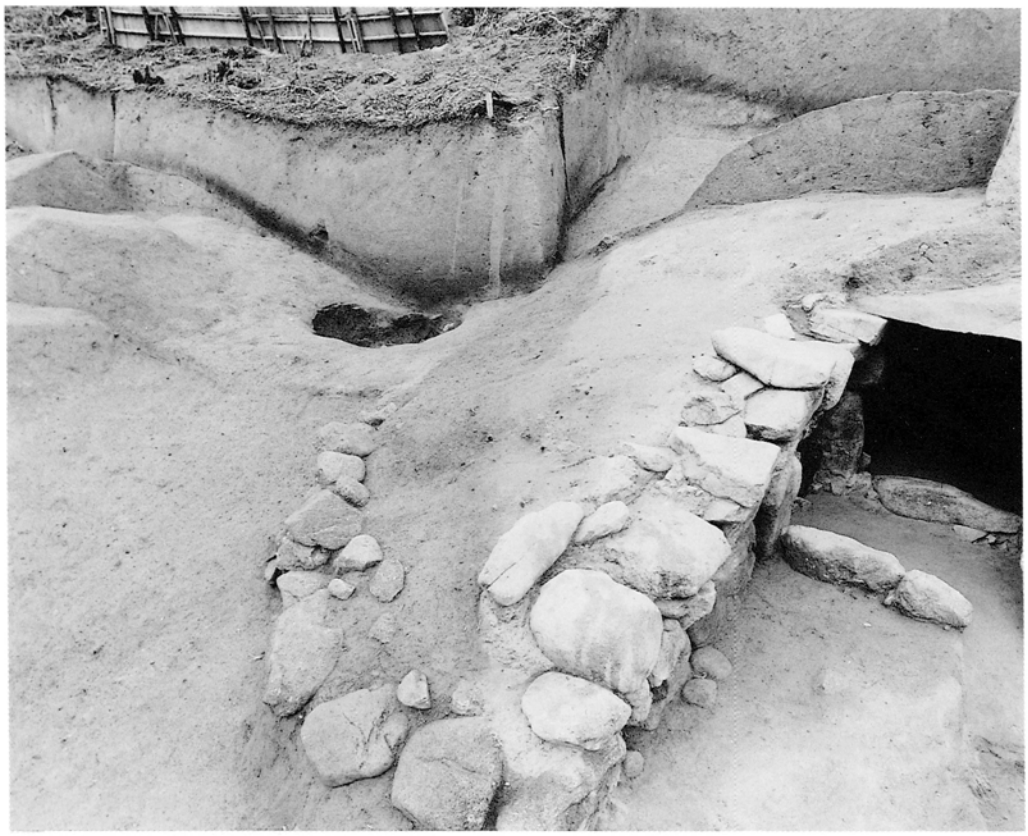


(1)



(2)

(1)第28号墳石室遺存状況（閉塞除去後）
(2)第28号墳墳丘遺存状況（南より）



(1)

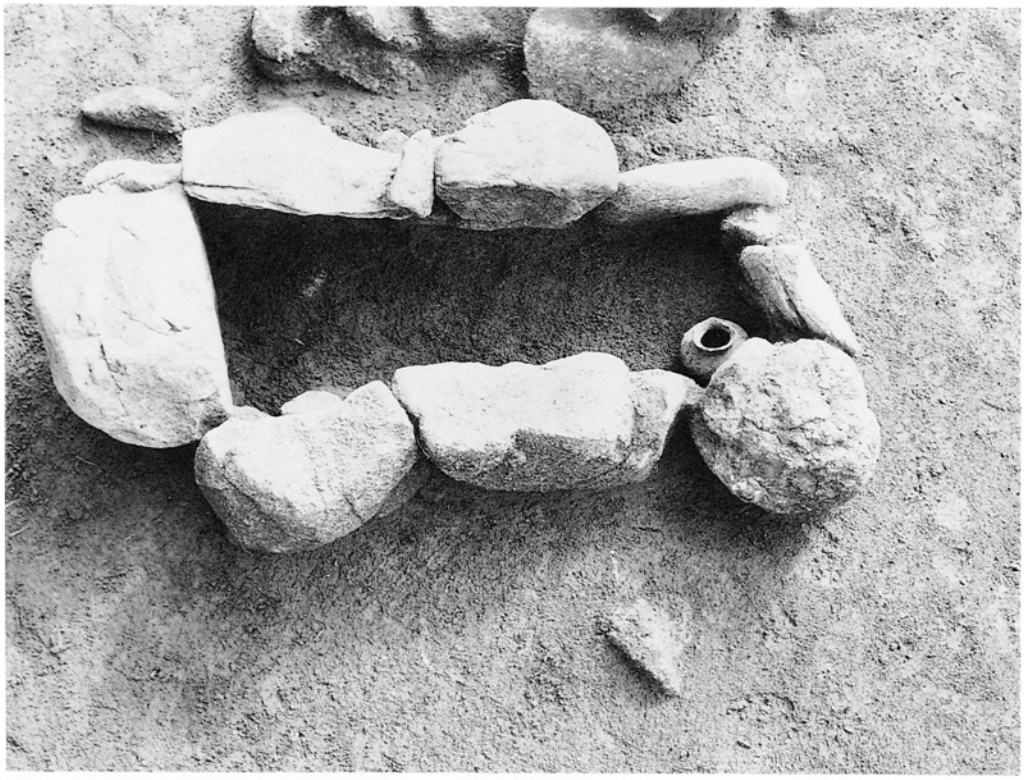
(2)

(1)第28号墳西側墳丘遺存状況（南より）
(2)第28号墳墳丘補強石材構築状況（西から）

(1)

(2)

(1)第28号墳墳丘遺存状況（西より）
(2)第28号墳墳丘遺存状況（北より）



(1)

(2)

(1)SX01石棺墓検出状況（西より）
(2)SX02石棺墓検出状況（南より）

(1)

(2)

(1)SK01土壙検出状況（南より）
(2)SK02土壙検出状況（西より）

(1)

(2)

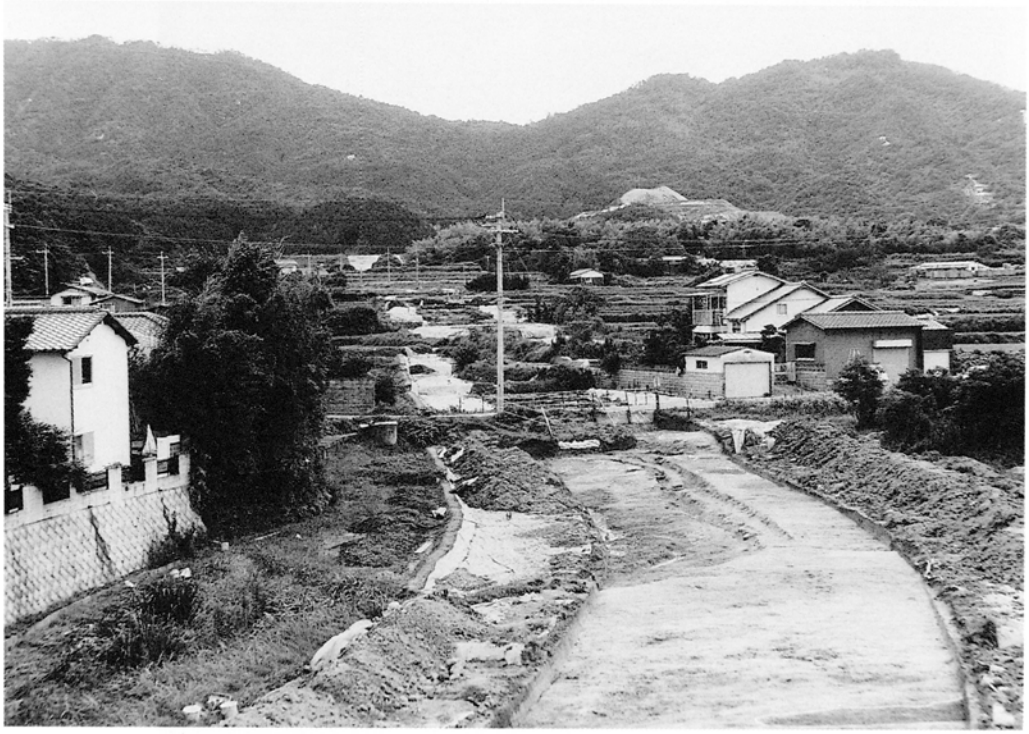
(1)SK02土壙検出状況（東より）
(2)SK02土壙東西土層断面（南壁）

(1)

(2)

(1)SK04土壙検出状況（南より）
(2)SK06土壙検出状況（北より）

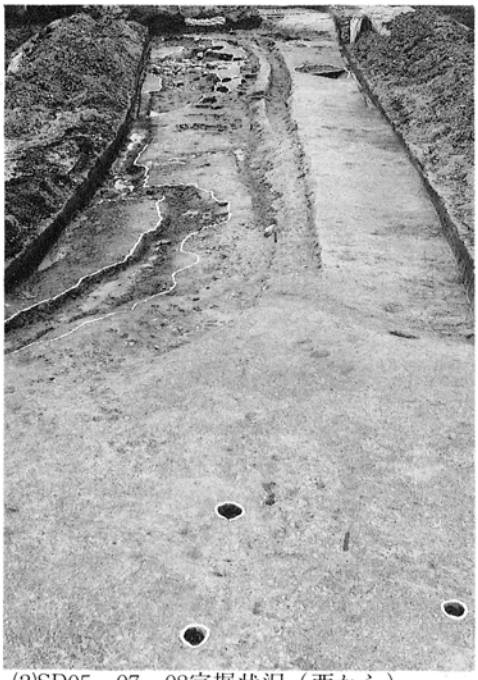
(1)



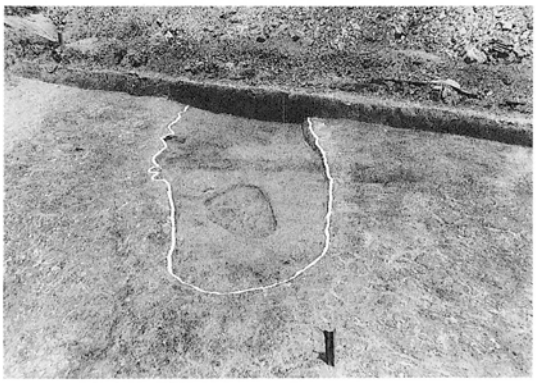
(2)

(1)遺跡遠景（西から）
(2)遺跡遠景（東から）

(1)Ia区完掘状況全景（西から）



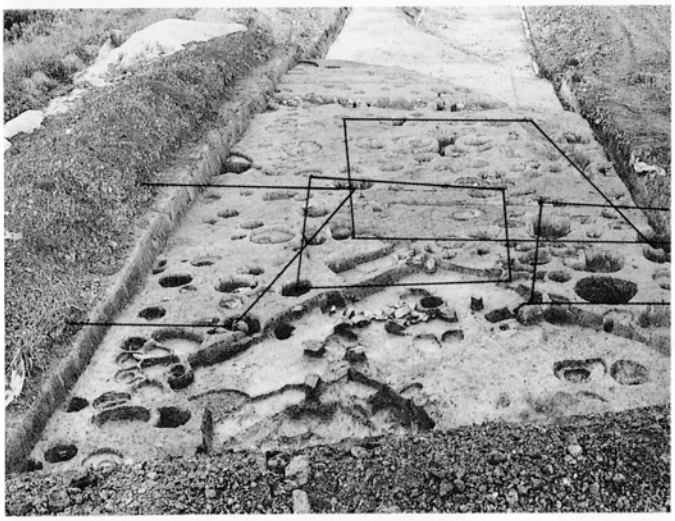
(2)SD05・07・08完掘状況（西から）



(3)SD06完掘状況（南から）

(4)SX01完掘状況（西から）

(1)Ib区完掘状況（西から）

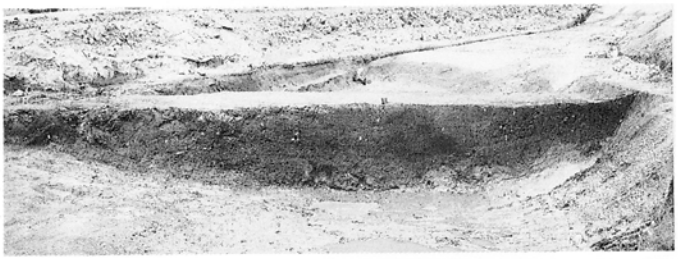


(2)掘立柱建物分布状況(Fig 96参照)

(3)SC01完掘状況（南東から）

(4)SC02完掘状況（南東から）

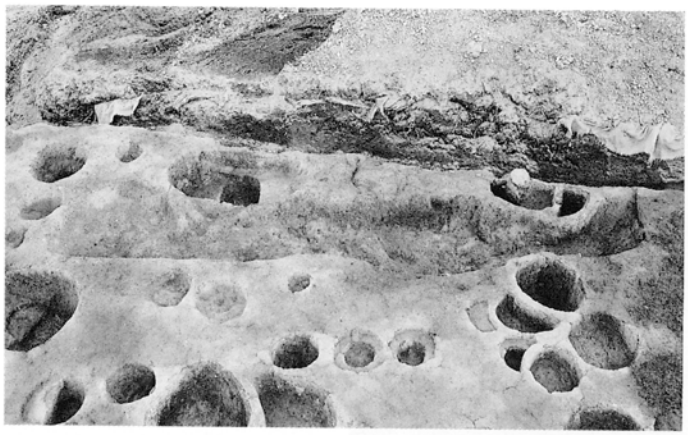
(1)SD01完掘状況（西から）



(2)SD10土層断面状況（北東から）

(3)SD11・12・13完掘状況（南から）

(4)SD14遺物出土状況（南から）



(1)

(1)SD14完掘状況（北から）

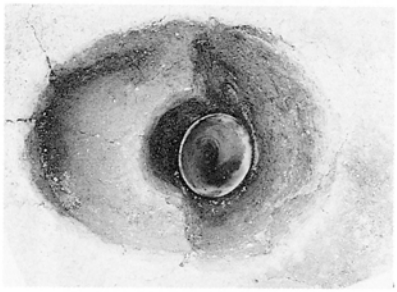
(2)

(3)

(2)SP121柱痕跡断面（西から）

(3)SP128柱痕跡断面（西から）

(4)



(5)

(5)SP76柱痕内遺物出土状況

(4)SP133柱痕跡断面（西から）

(6)

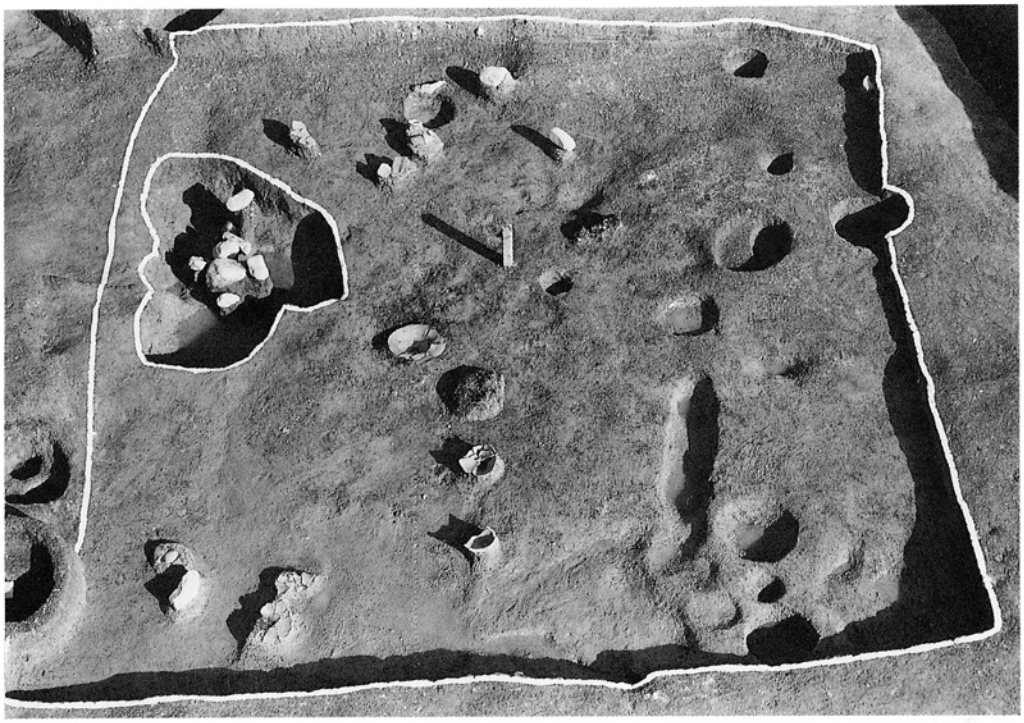
(6)SX02完掘状況（南から）

(7)

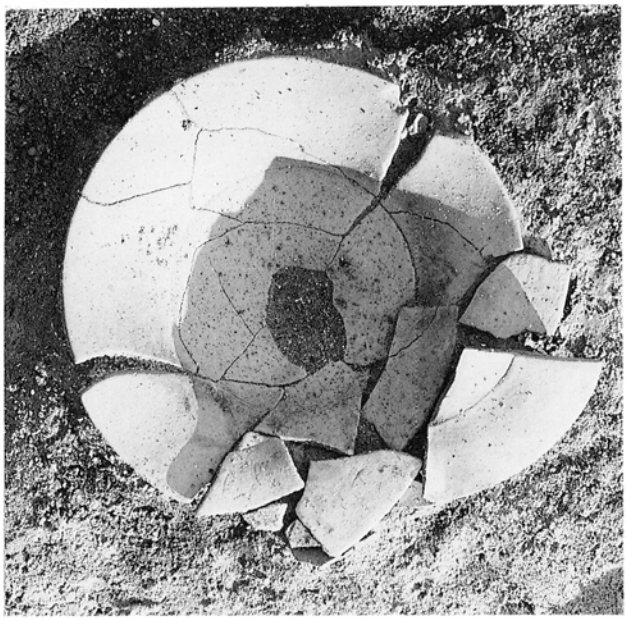
(7)SX03完掘状況（南東から）

IC区遺構出土状況全景（東から）

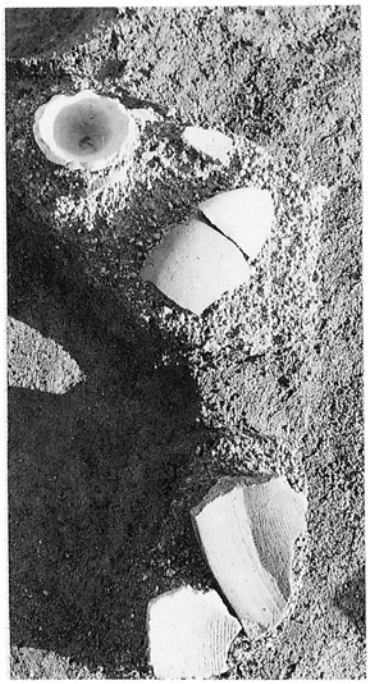
IC区SC10・11・13検出状況（東から）



(1)

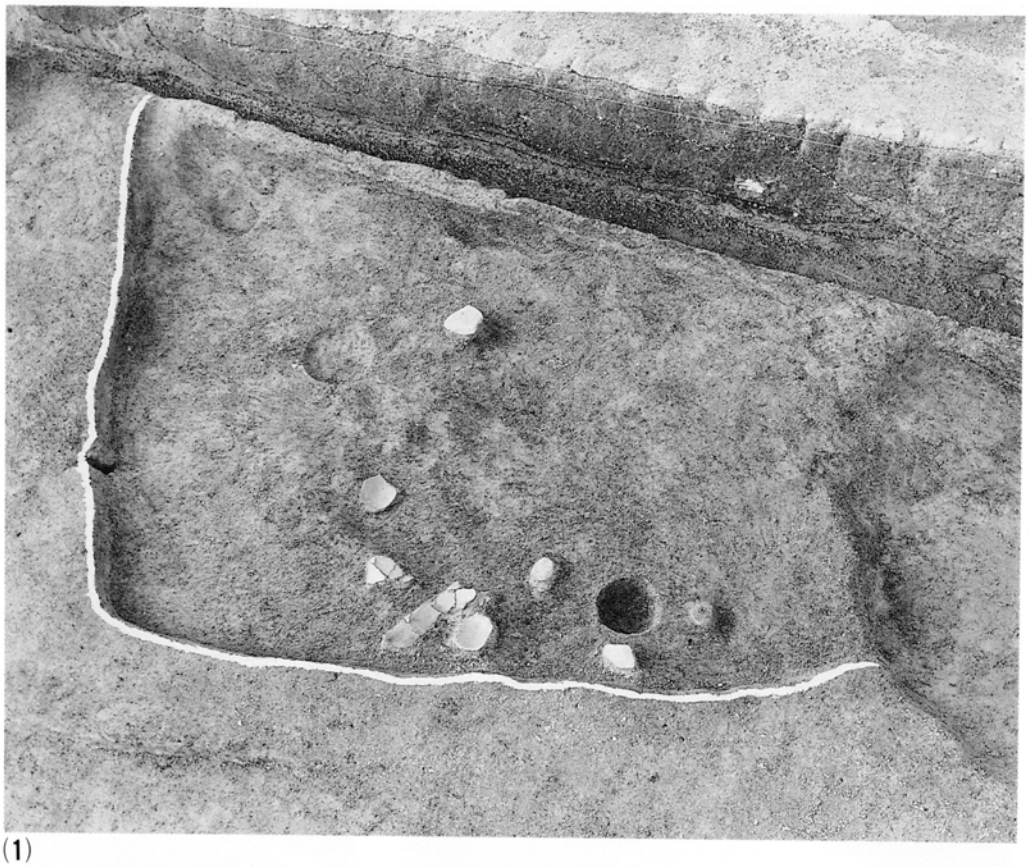


(2)



(3)

(1)SC10完掘状況（東から）
(2)SC10床面土器出土状況（高坏）
(3)SC10床面土器出土状況（甕）

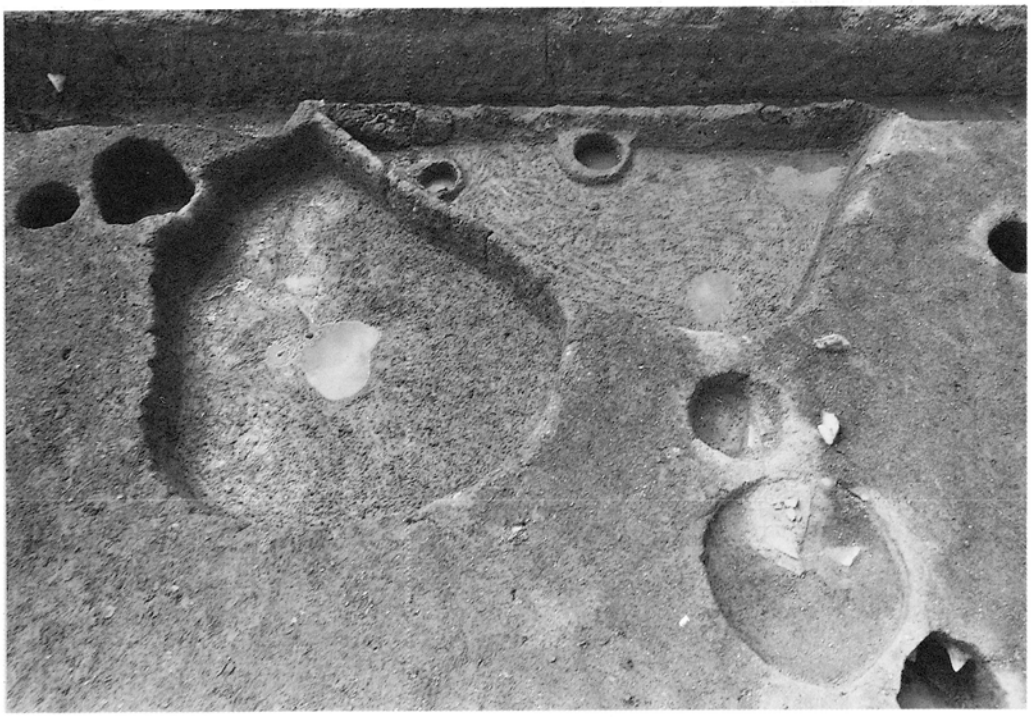


(1)

(2)

(1)SC07完掘状況（東南から）
(2)SX05完掘状況（北西から）

(1)



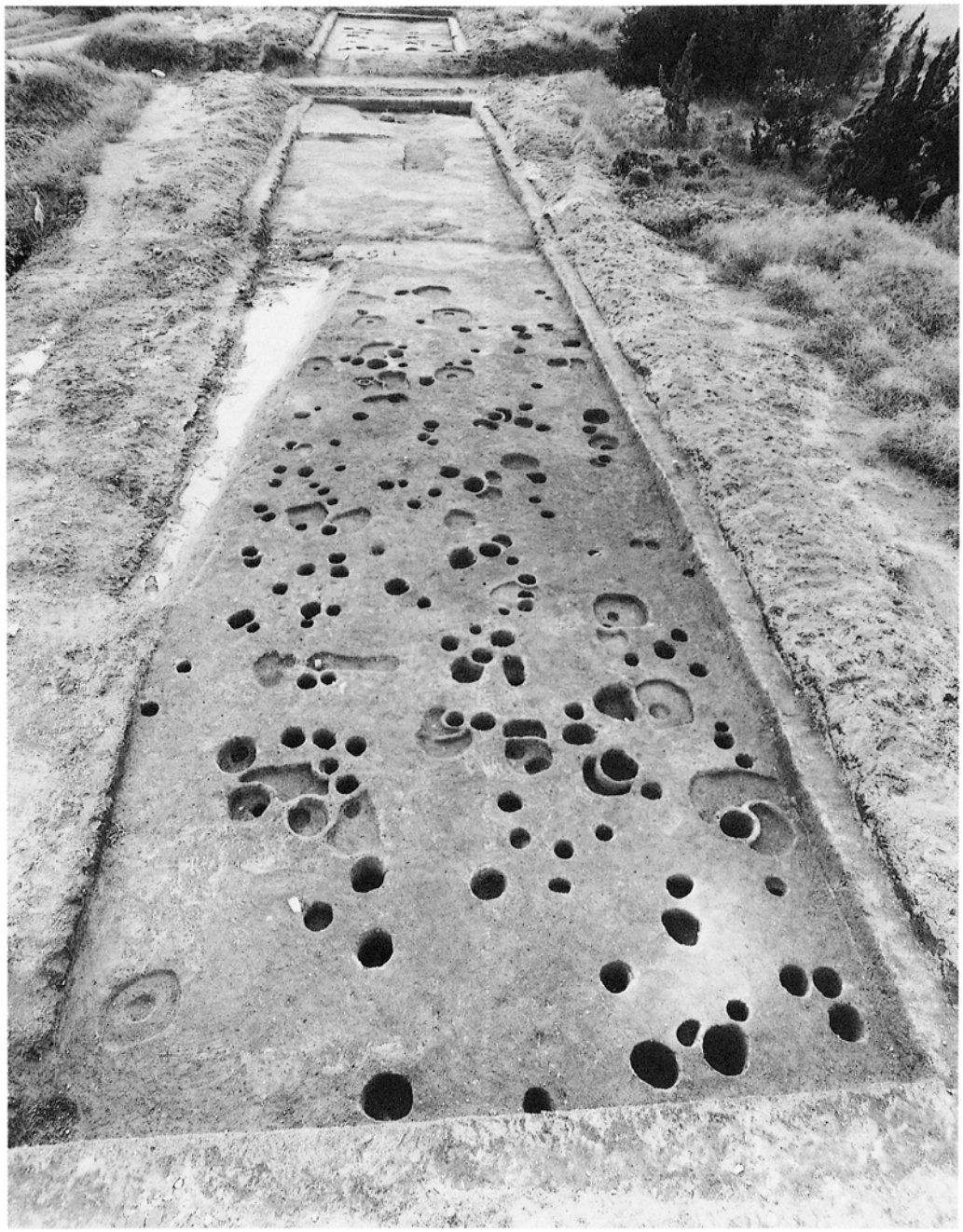
(2)

(1)SX11・12完掘状況（南東から）
(2)SX15・SC07完掘状況（南東から）

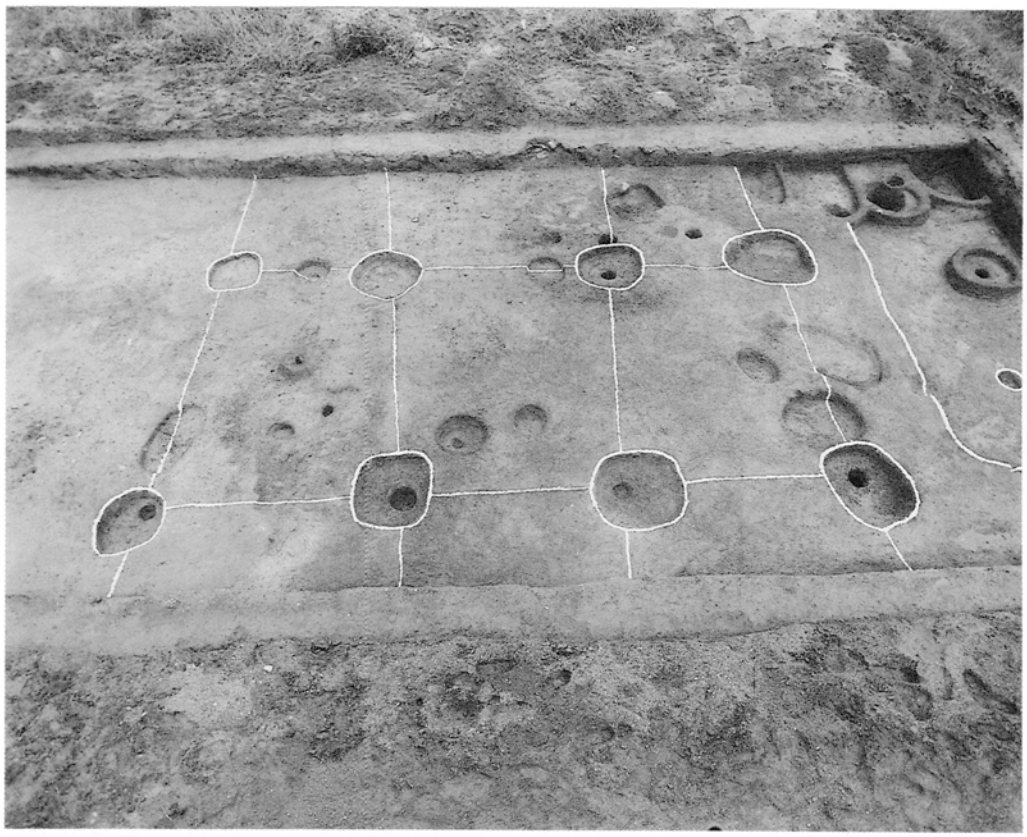
(1)

(2)

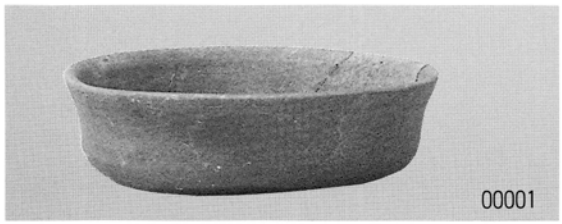
(1)SC06完掘状況（西から）
(2)SB03完掘状況（南から）

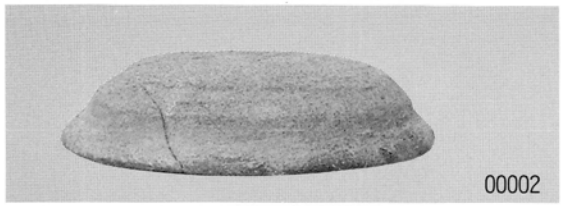


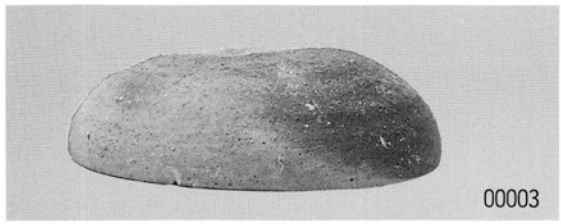
Id区遺構出土状況全景（東から）



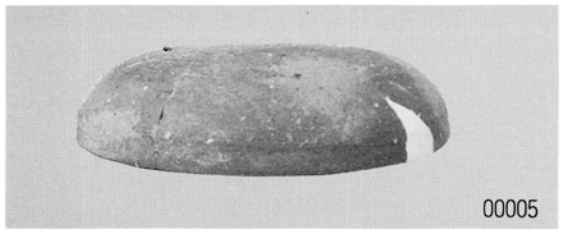
Id区SC07・SB05完掘状況（南から）

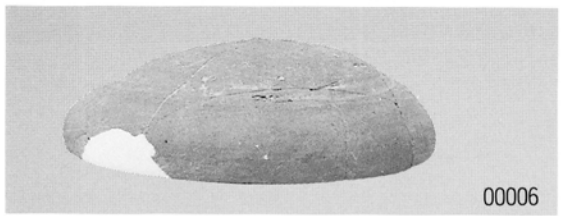

00001


00002

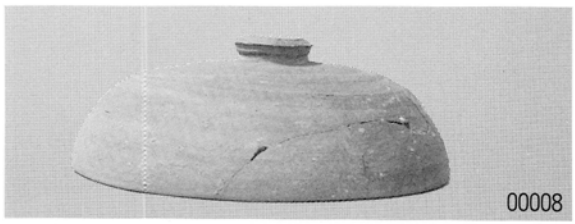

00003

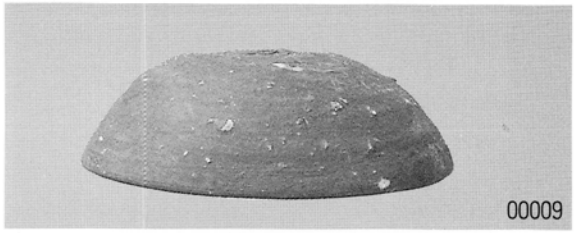
00004

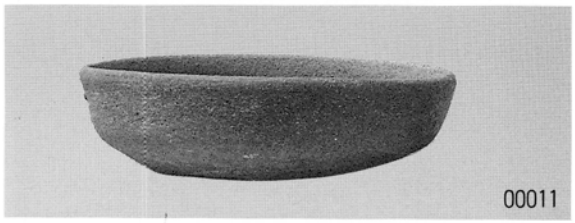

00005

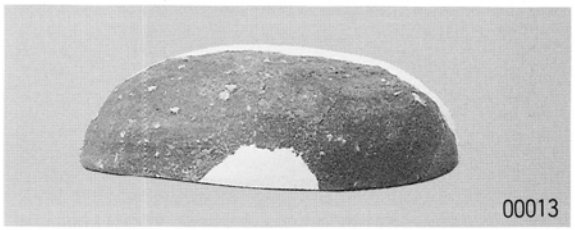

00006

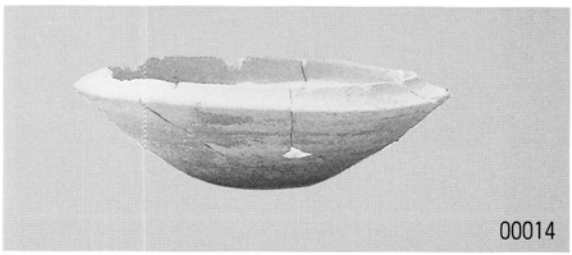
00007

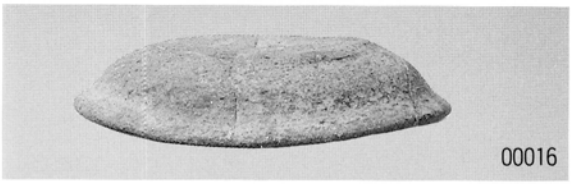

00008


00009


00011

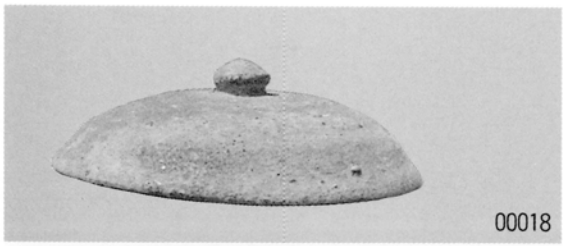

00013

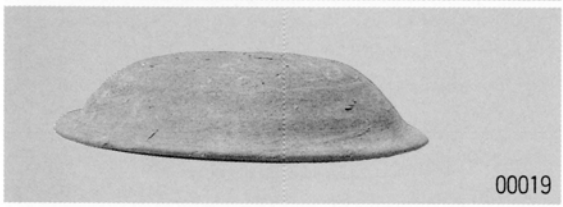

00014

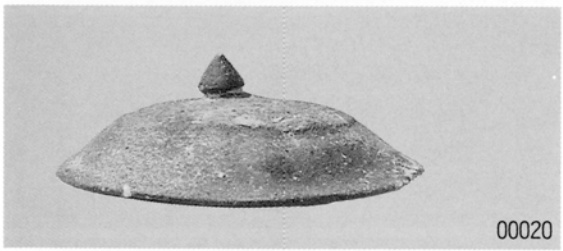

00016

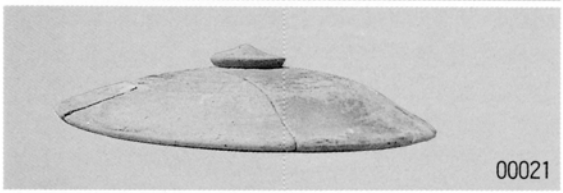
00017

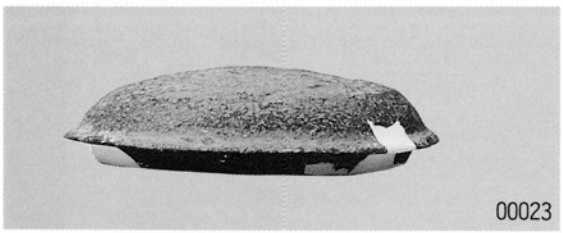
第1号墳出土土器(1)

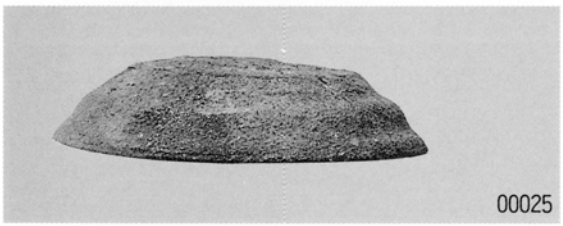

00018

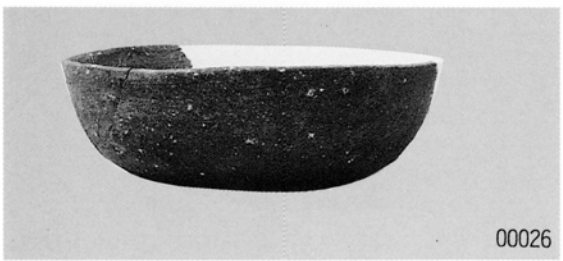

00019


00020

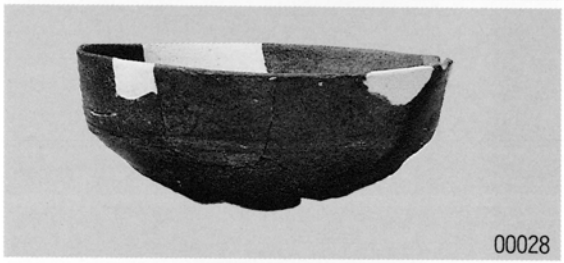

00021


00023

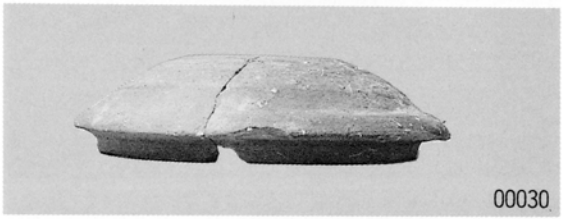

00025


00026

00027

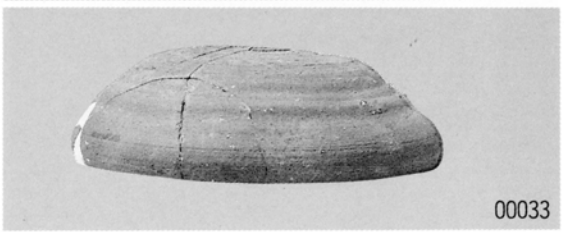

00028

00029

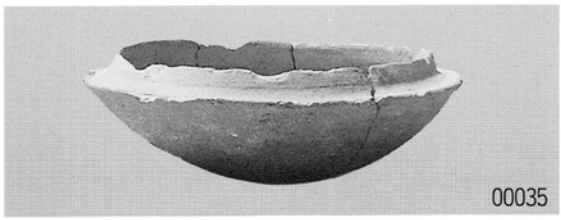

00030

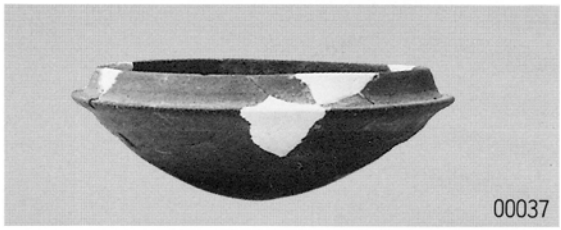
00031

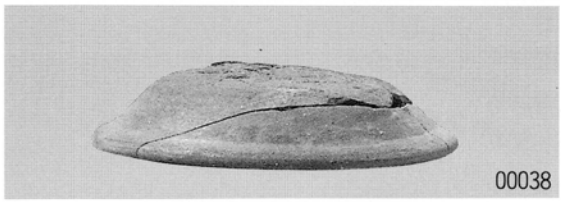
00032

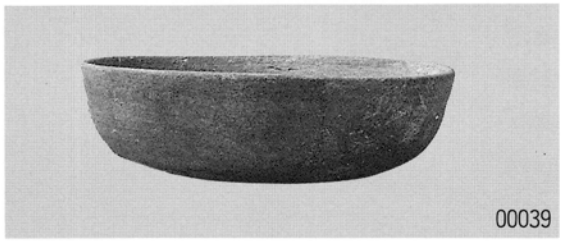

00033

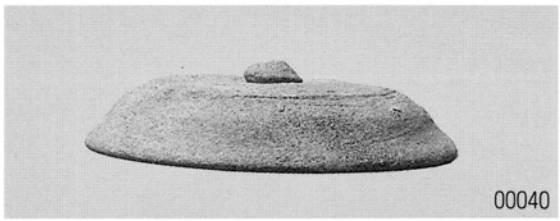
第1号墳出土土器(2)

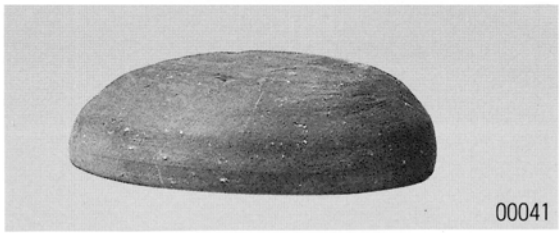

00035

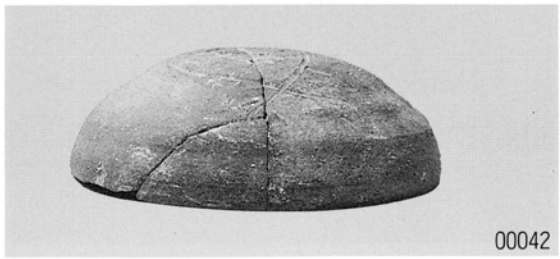

00037

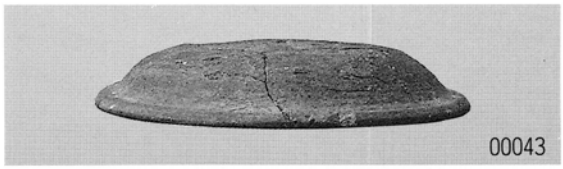

00038

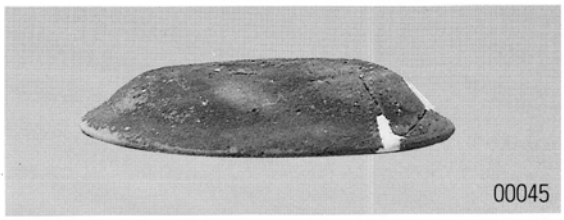

00039

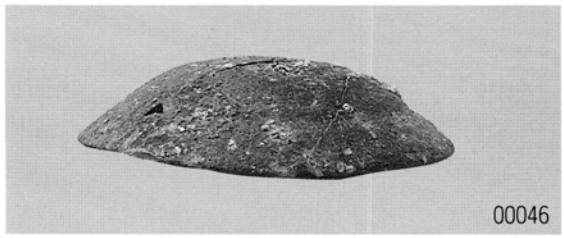

00040

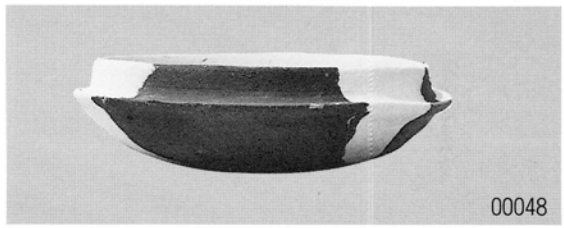

00041

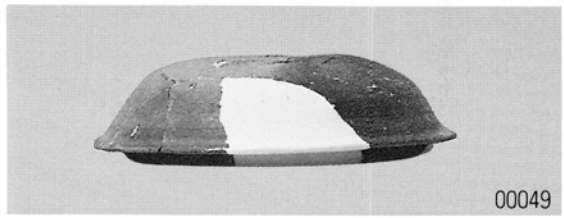

00042

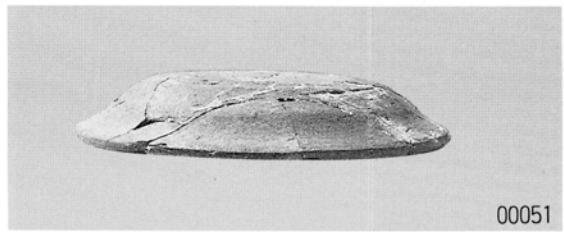

00043


00045


00046

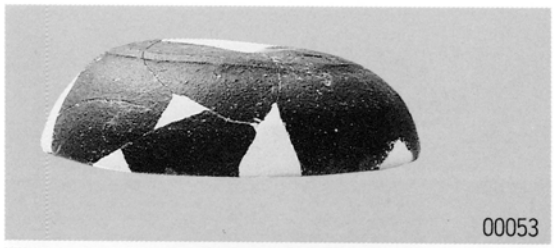

00048


00049


00051

00052

第1号墳出土土器(3)

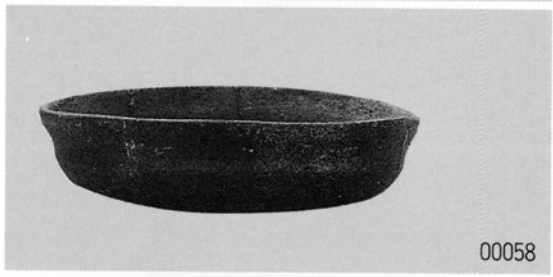

00053

00054

00055

00056

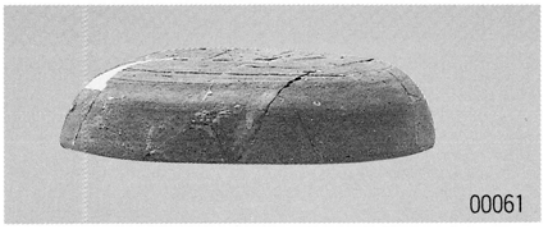
00057


00058

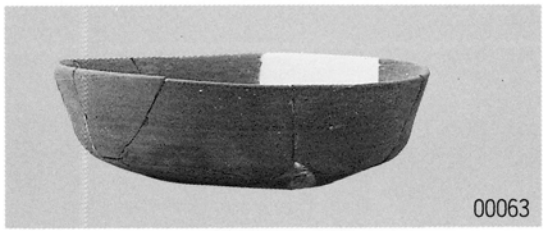
00059

第1号墳出土土器(4)

00060

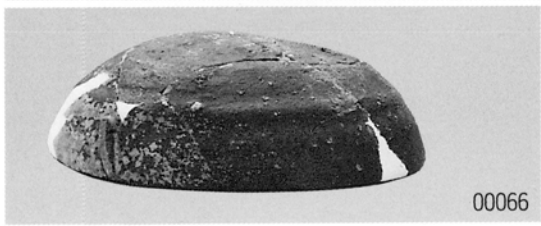

00061

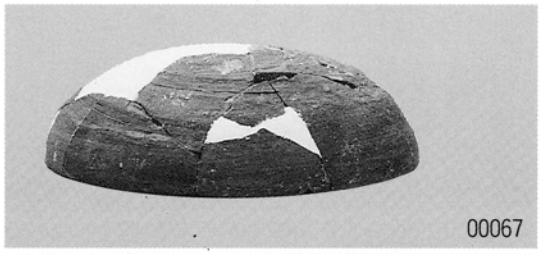
00062

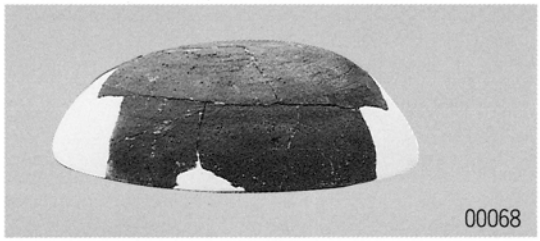

00063

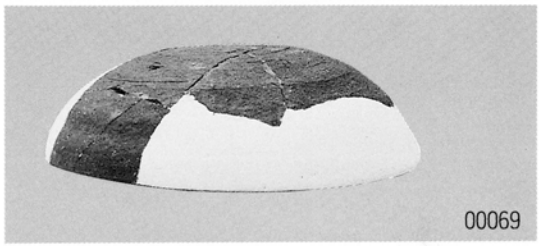
00064

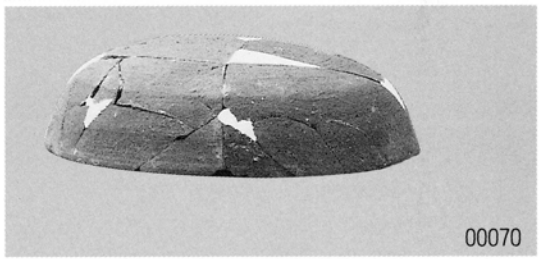
00065

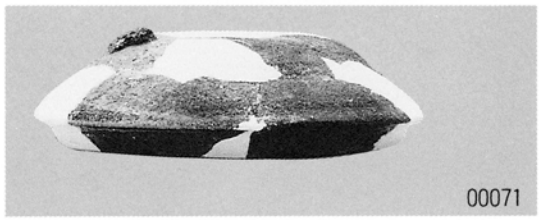

00066

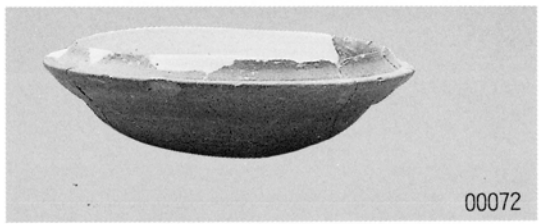

00067

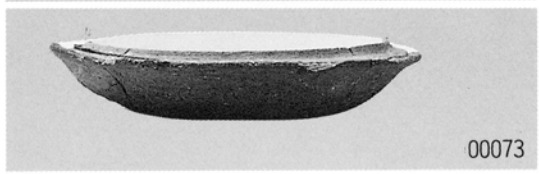

00068


00069

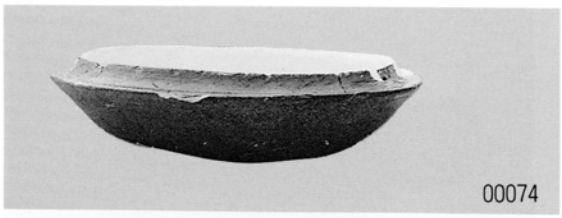

00070

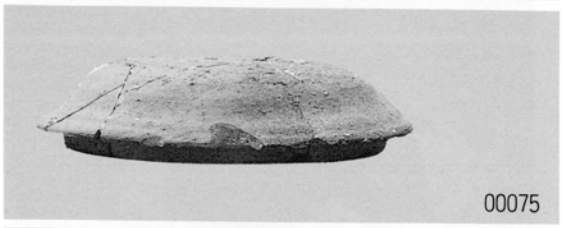

00071

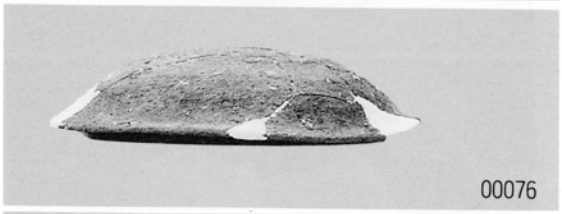

00072

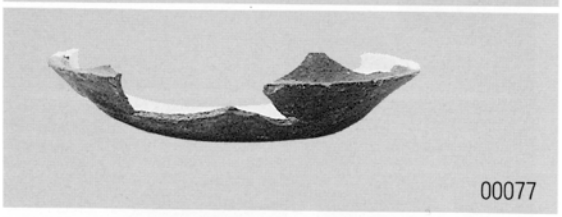

00073

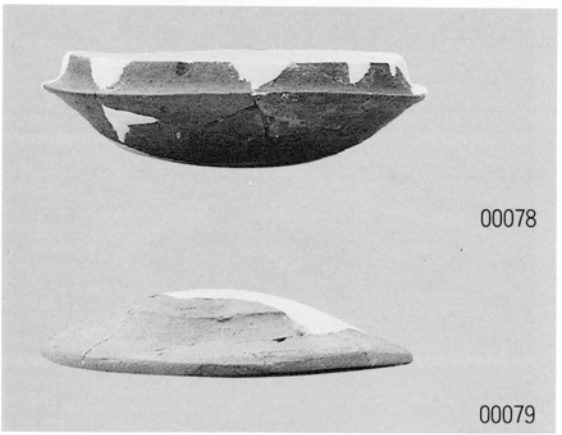
第1号墳出土土器(5)


00074

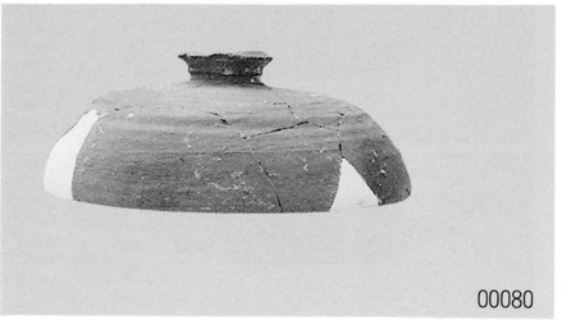

00075

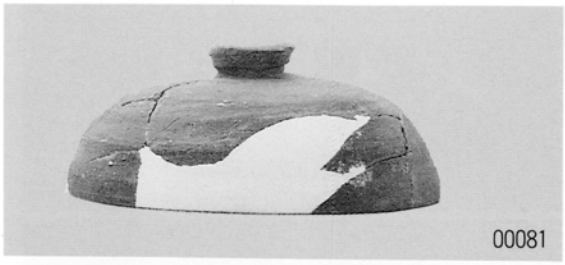

00076

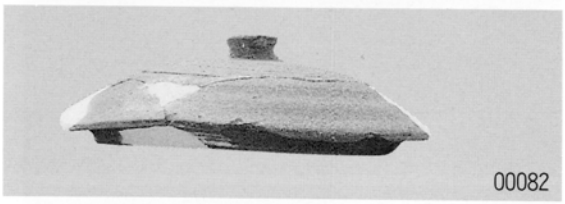

00077

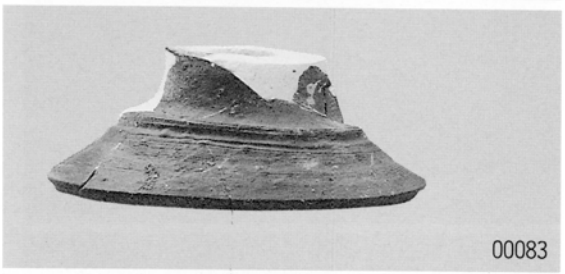

00078

00079

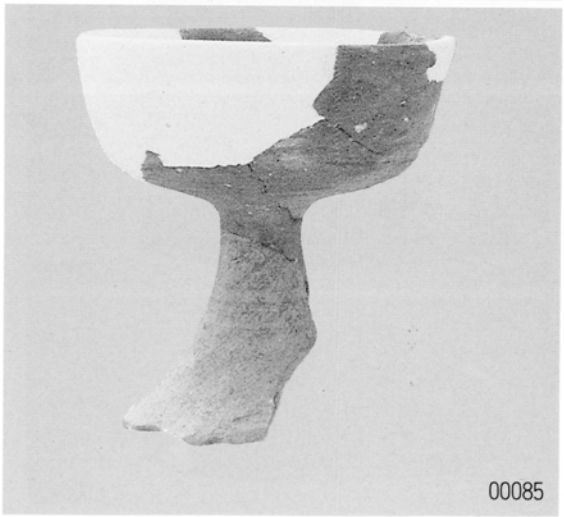

00080


00081

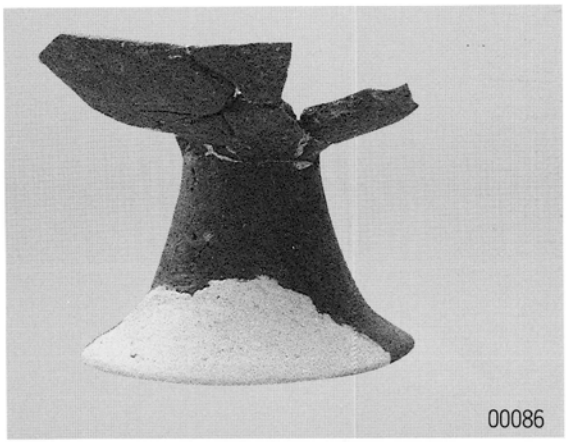

00082

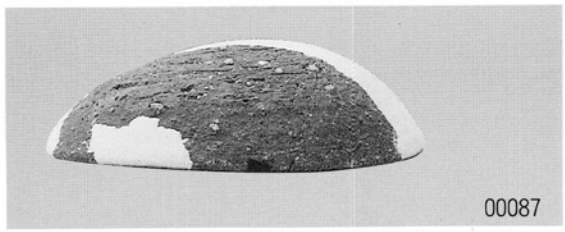

00083

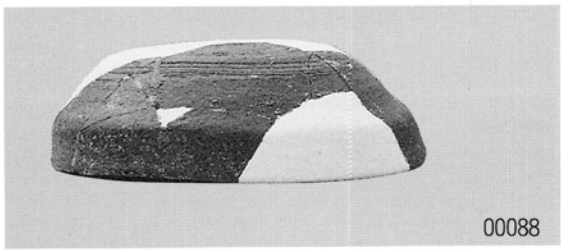
00084

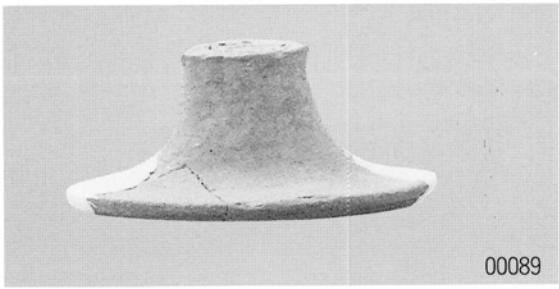

00085

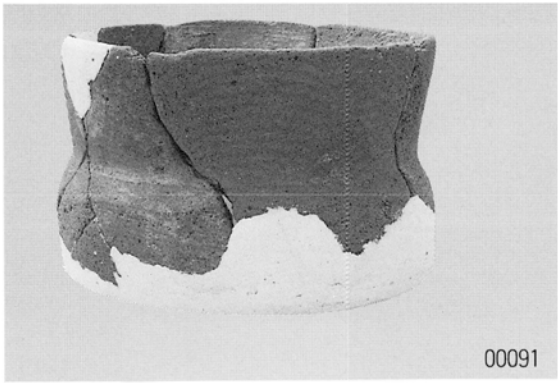
第1号墳出土土器(6)

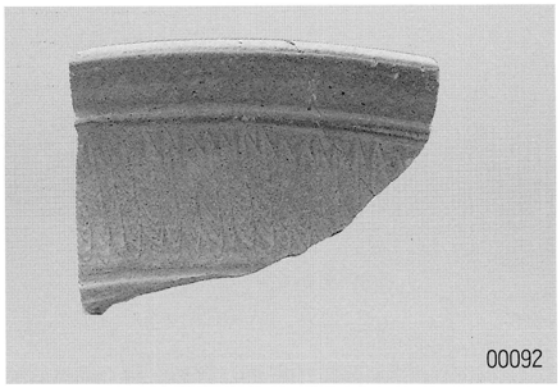

00086

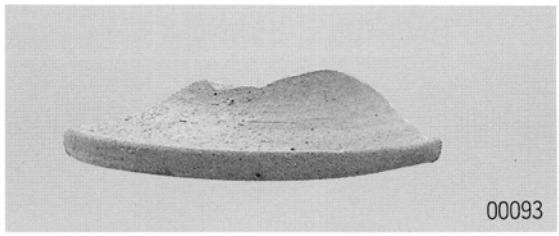

00087

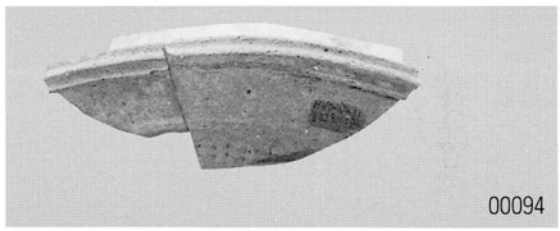

00088

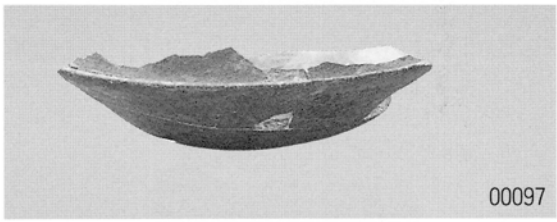

00089

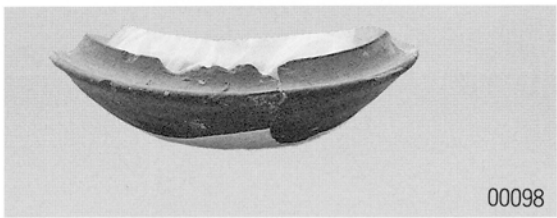

00091

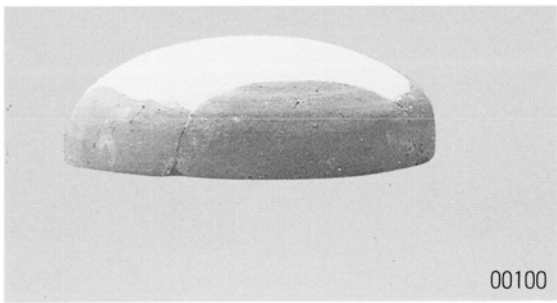

00092


00093


00094


00097

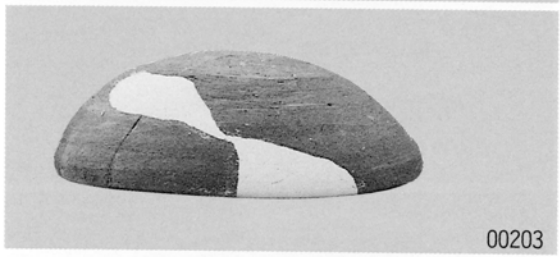

00098


00100

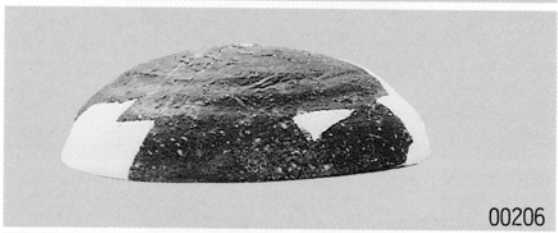
第1号墳出土土器(7)

00201

00202


00203

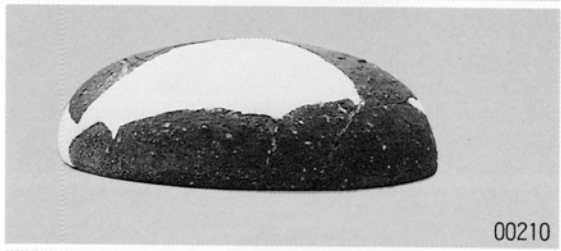
00204


00206

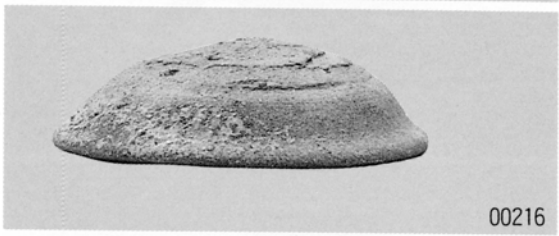
00207

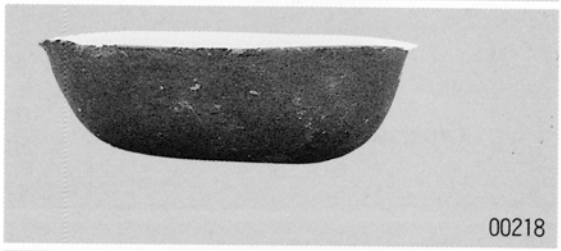
00208

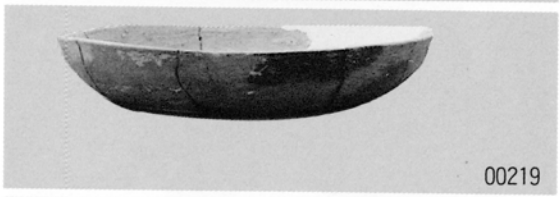
00209


00210

00211

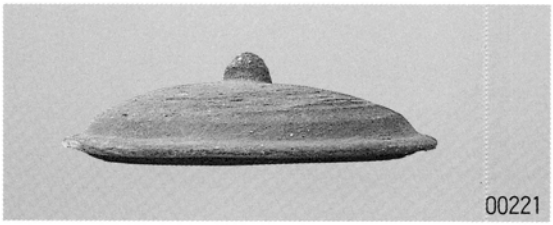

00216

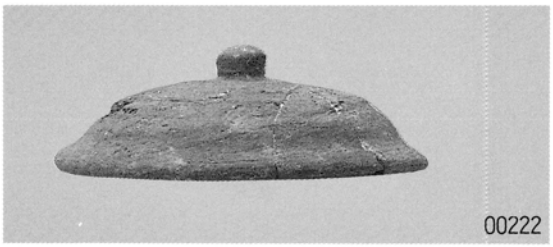

00218

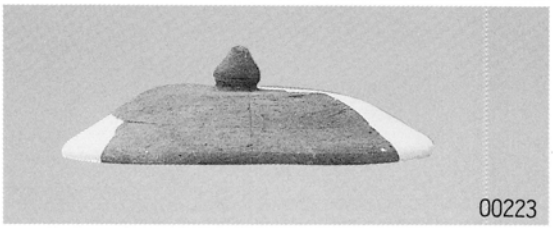

00219

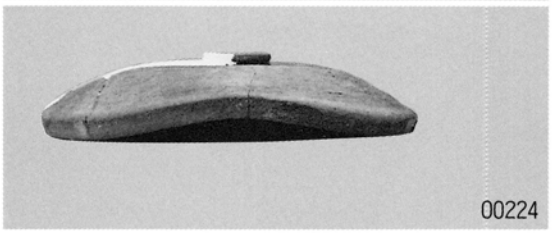
00220

第2号墳出土土器(1)

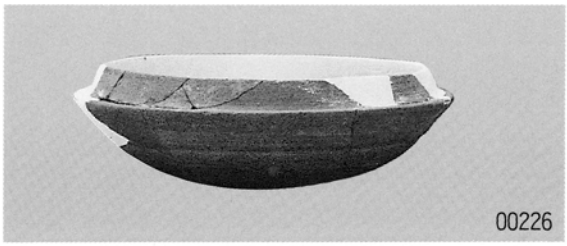

00221

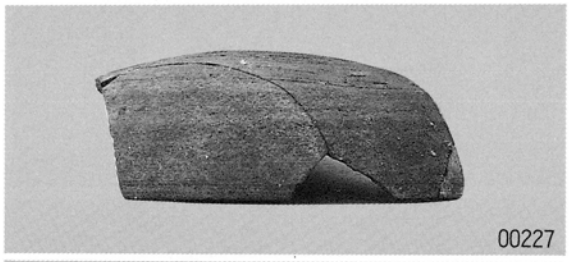

00222

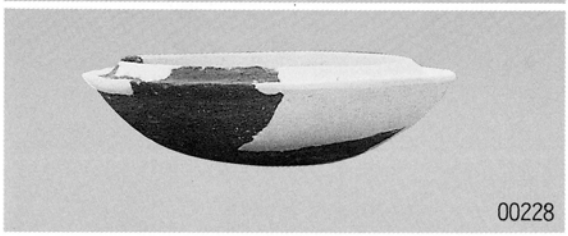

00223

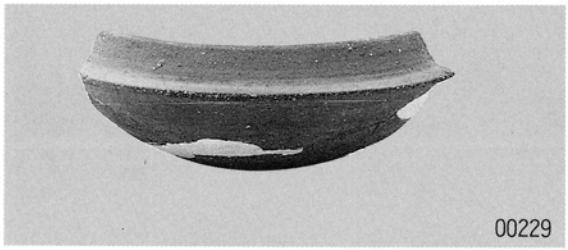

00224

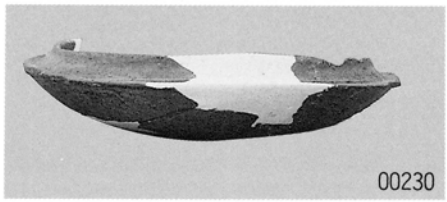
00225

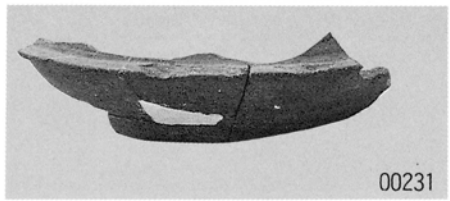

00226

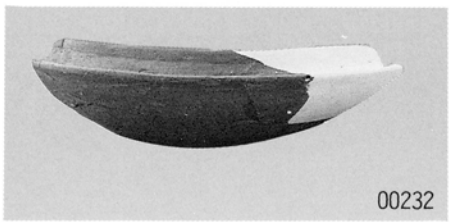

00227


00228

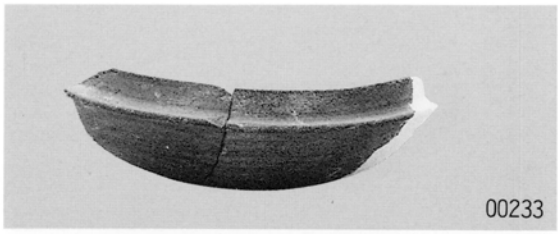

00229

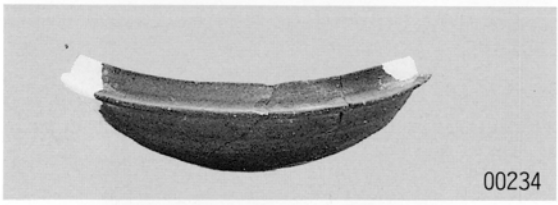

00230

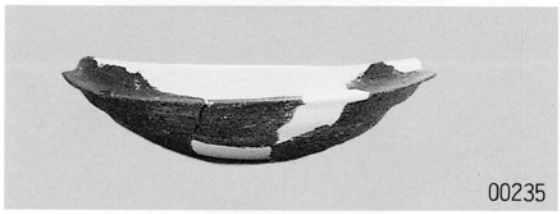

00231

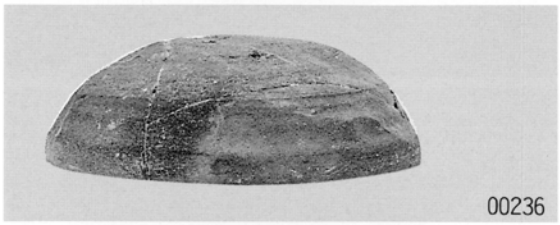

00232

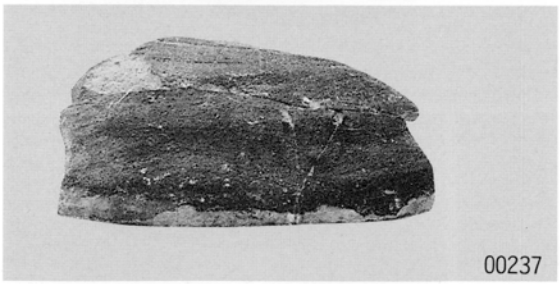
第2号墳出土土器(2)

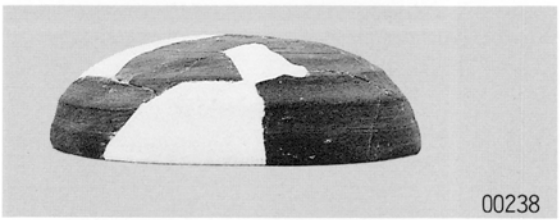

00233

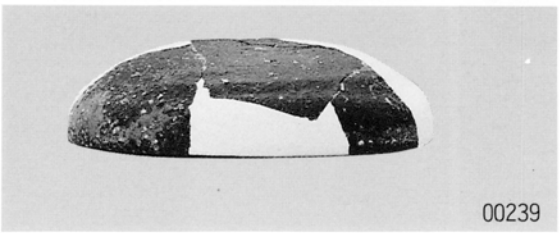

00234

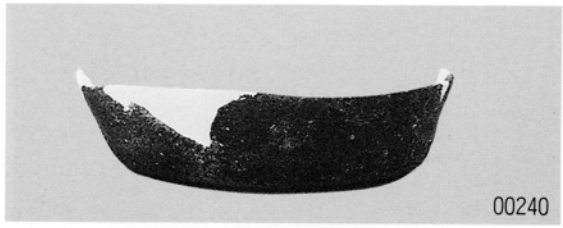

00235

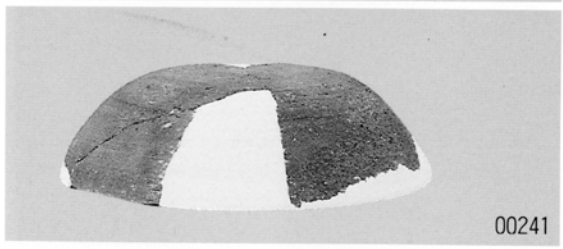

00236

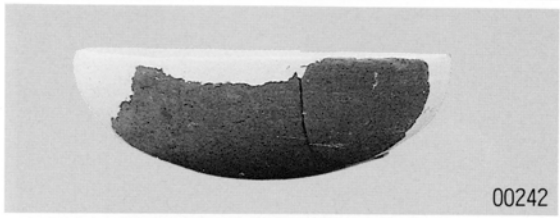

00237


00238

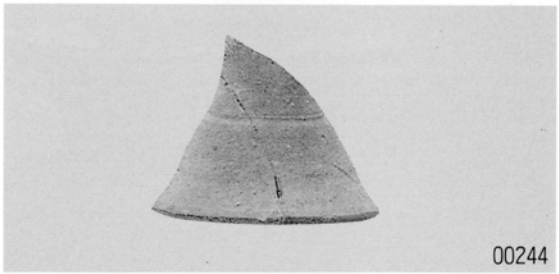

00239

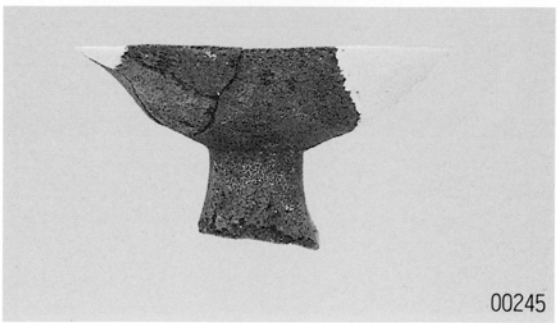

00240


00241

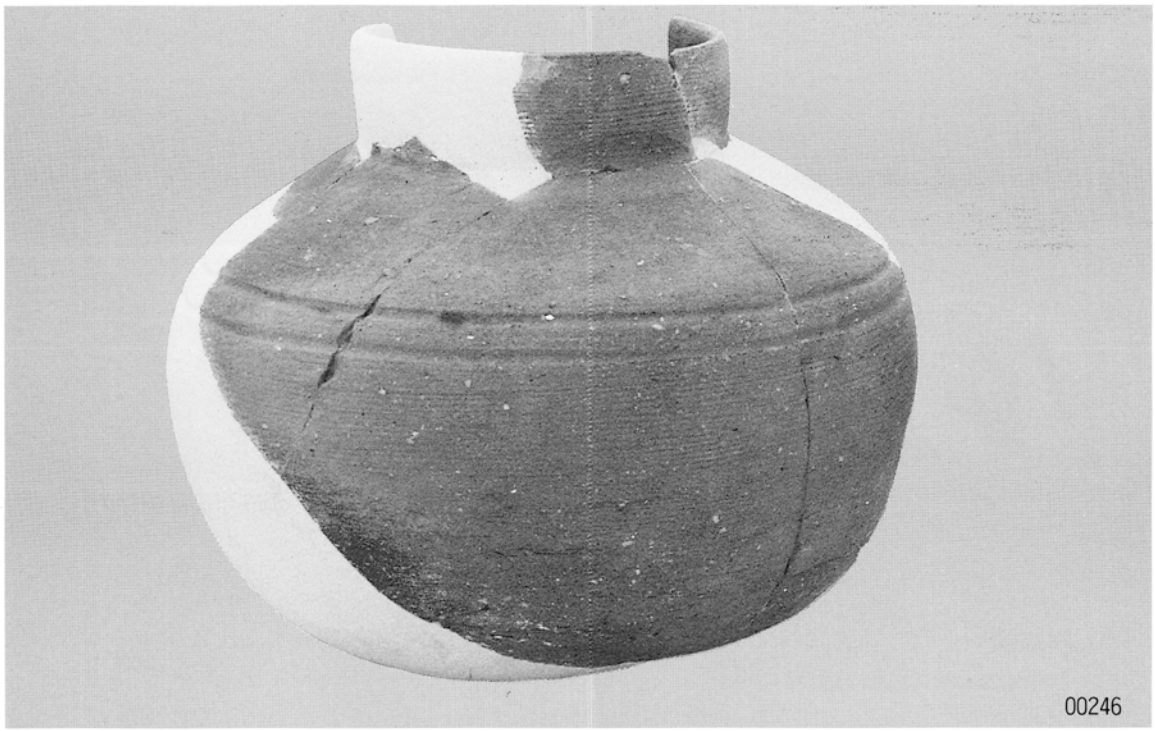

00242

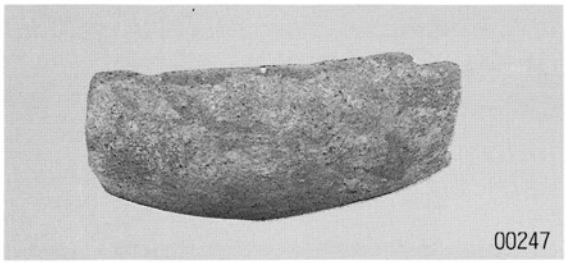
00243

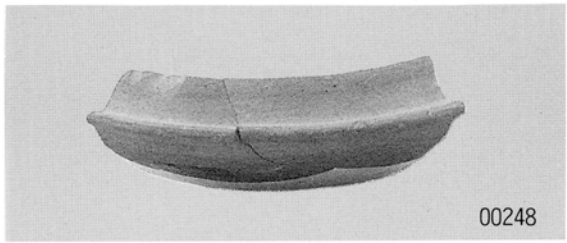

00244

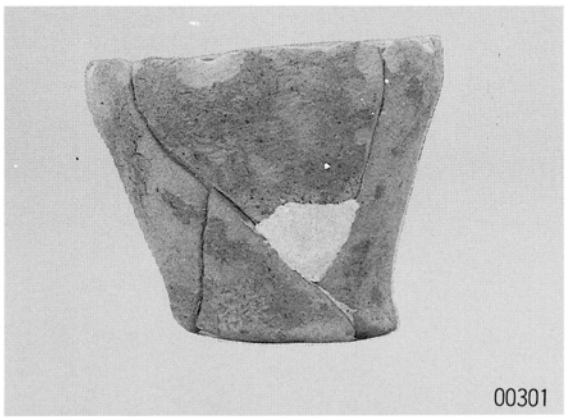

00245

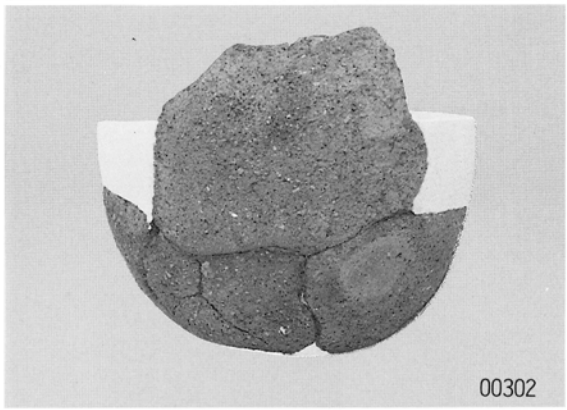
第2号墳出土土器(3)

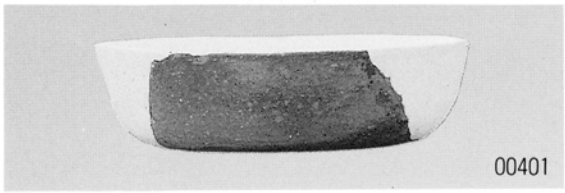


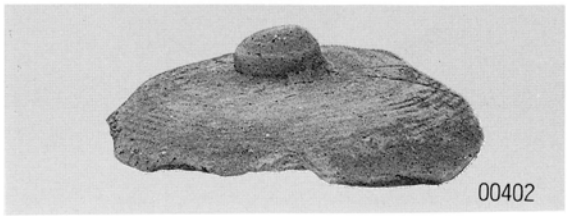






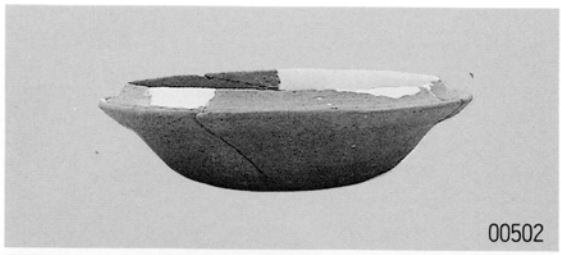


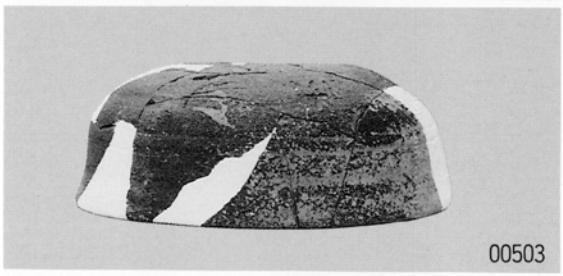


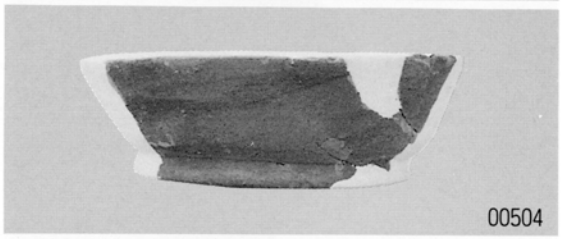


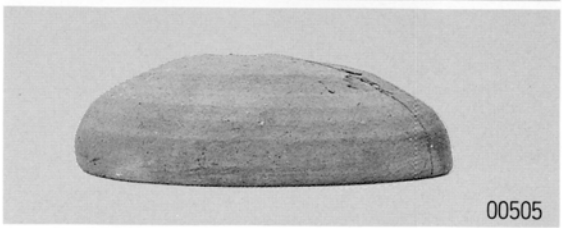
第2・3・4号墳出土土器

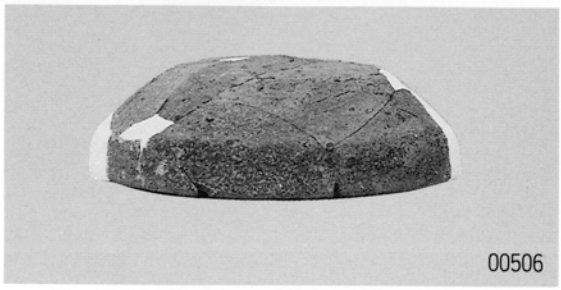
00501

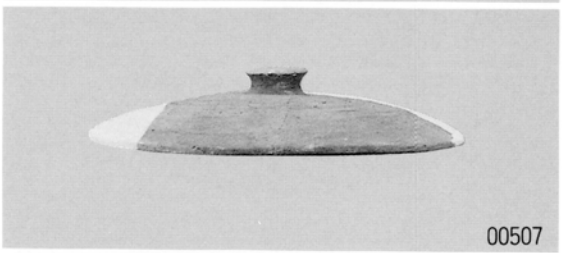

00502

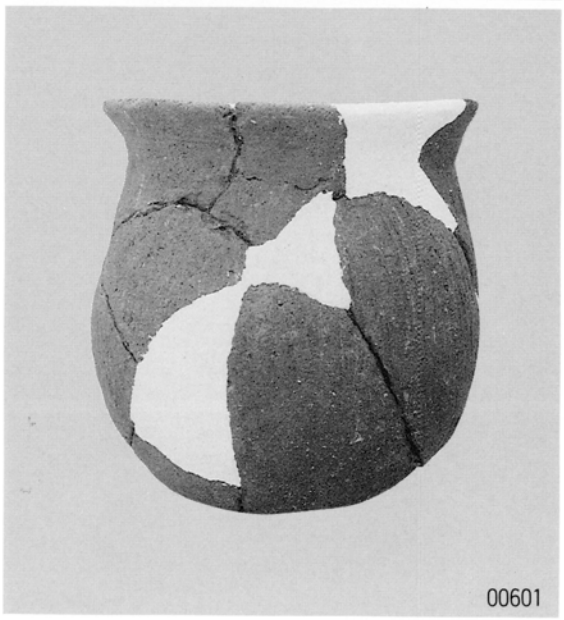

00503


00504


00505

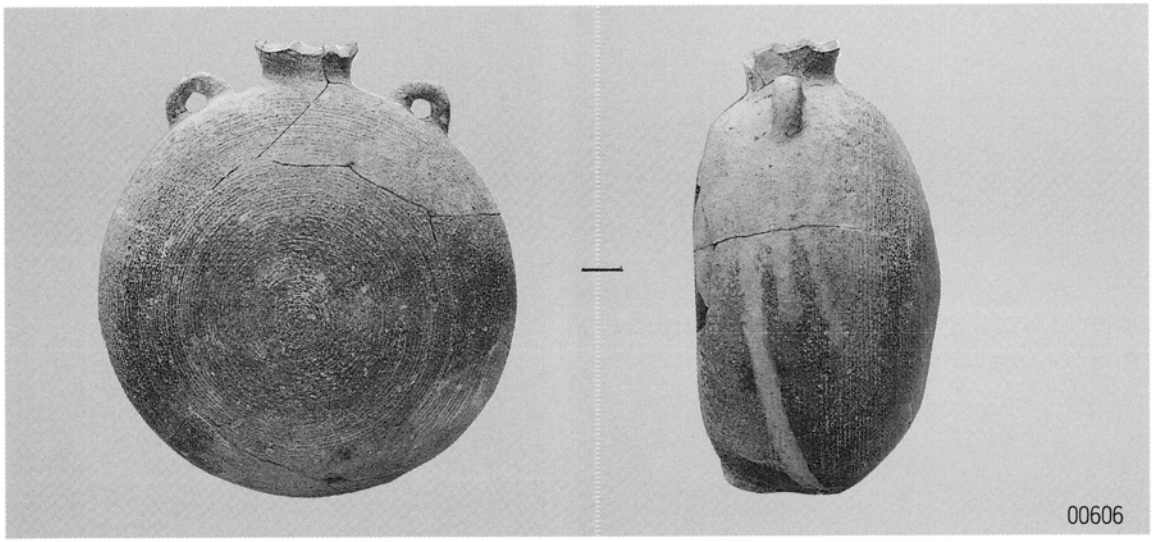

00506

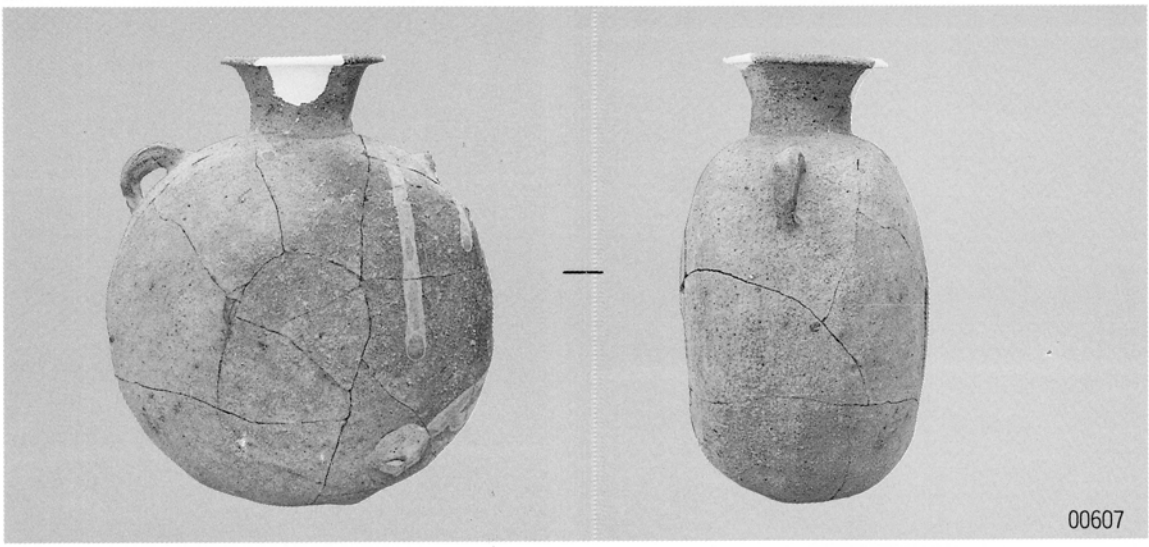

00507

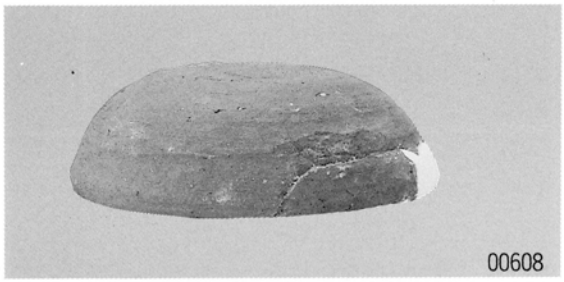

00601

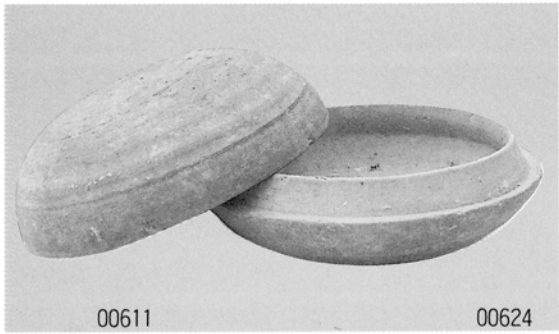
00602

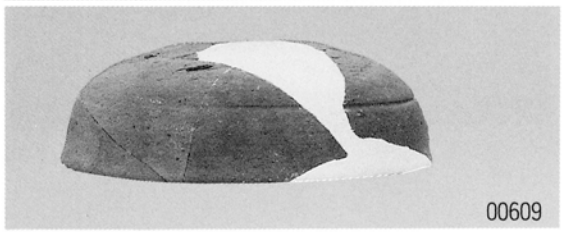
第5・6号墳出土土器

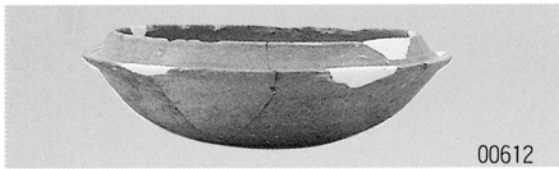








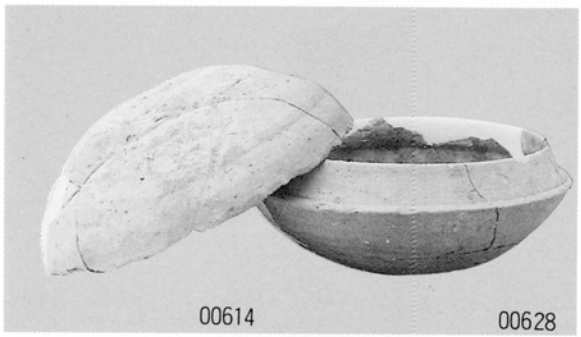




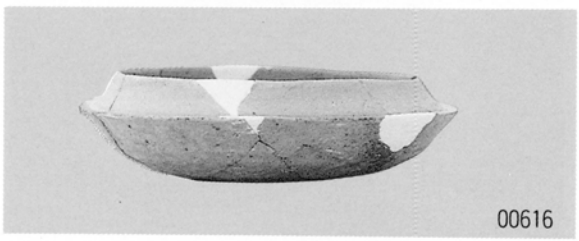
第6号墳出土土器(2)

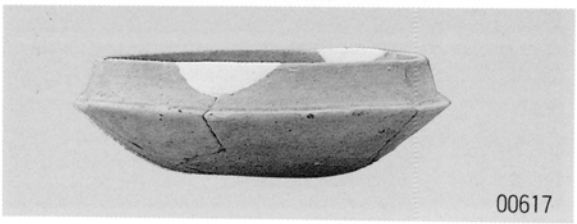
00615
00622

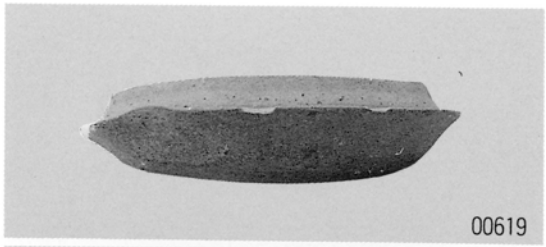
00618
00621

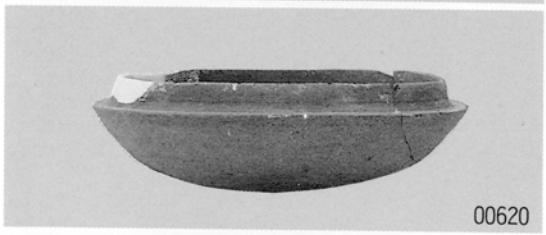

00614
00628

00613

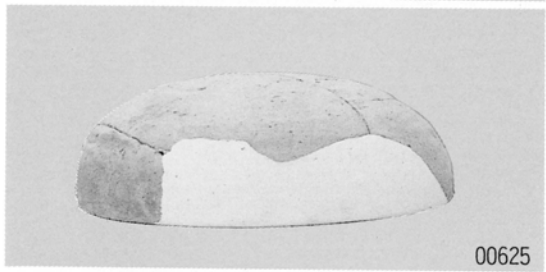

00616


00617


00619


00620

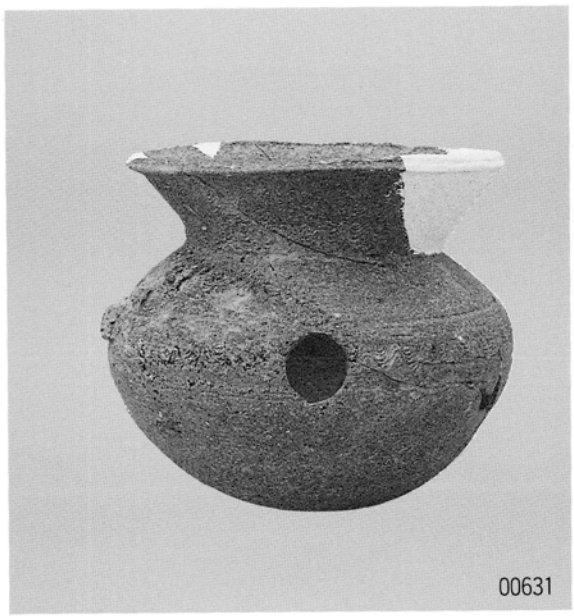
00623

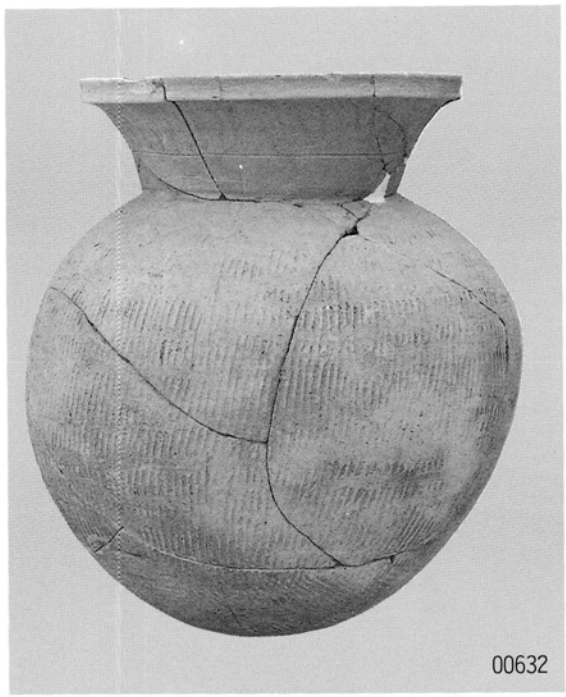

00625

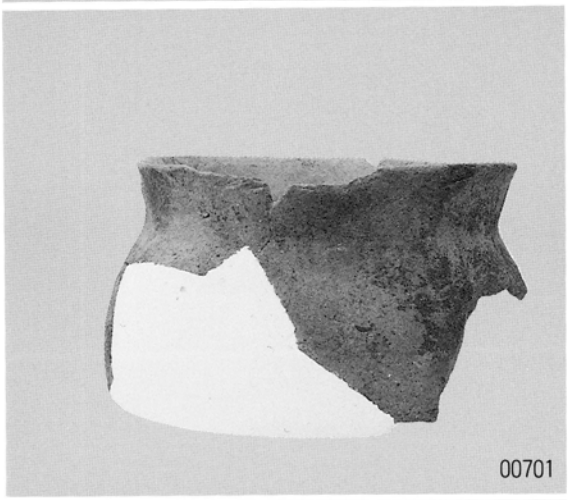
00626

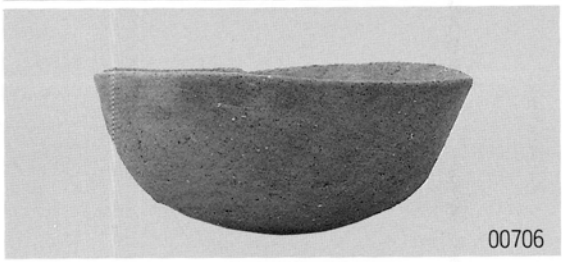
00627

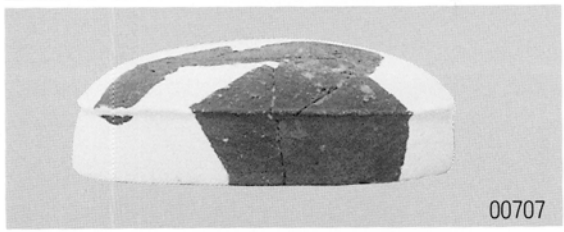
第6号墳出土土器(3)

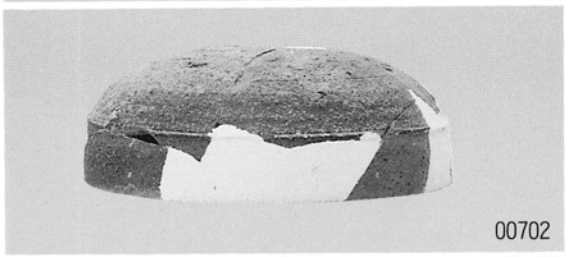


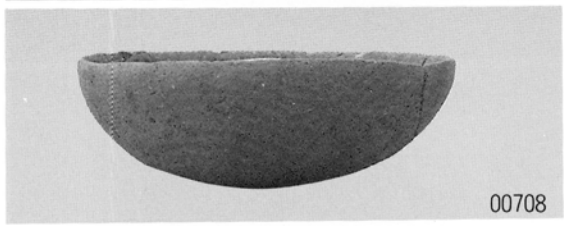


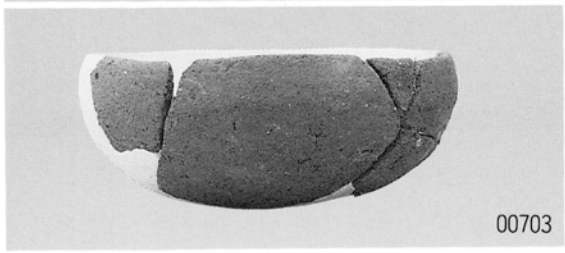


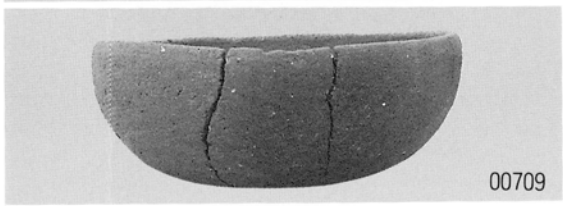




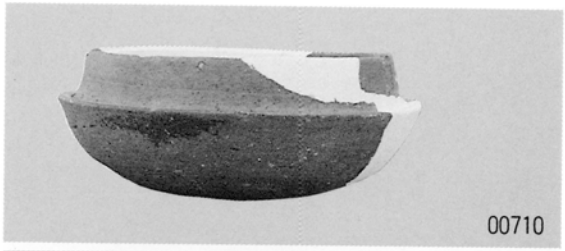


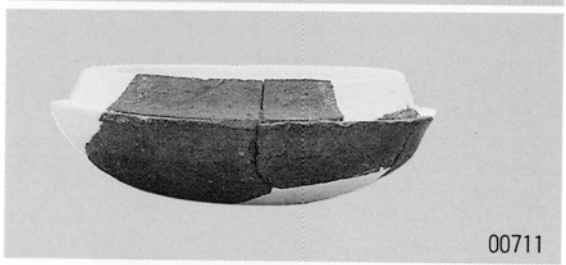


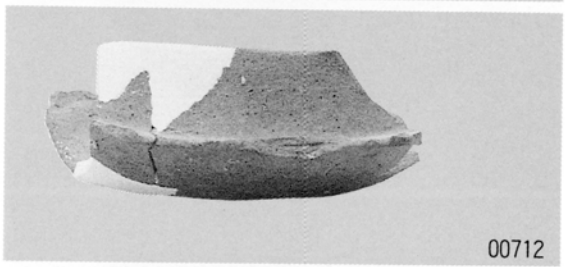


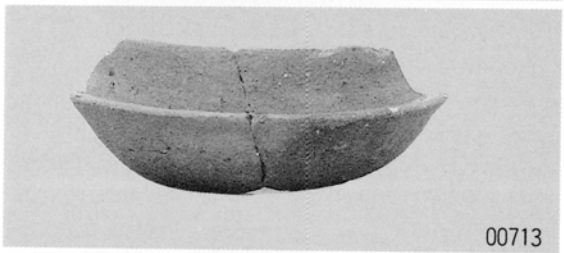


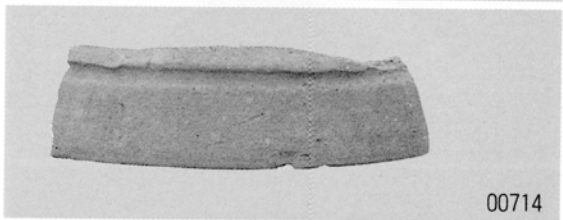
第6・7号墳出土土器

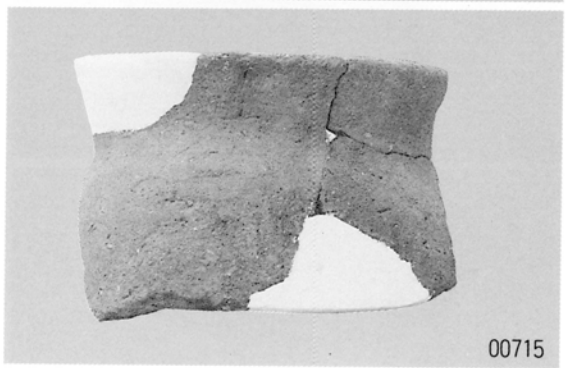

00710


00711


00712


00713


00714


00715

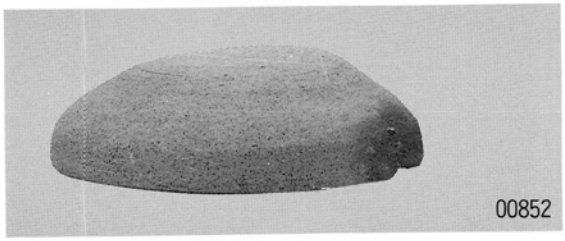
00717

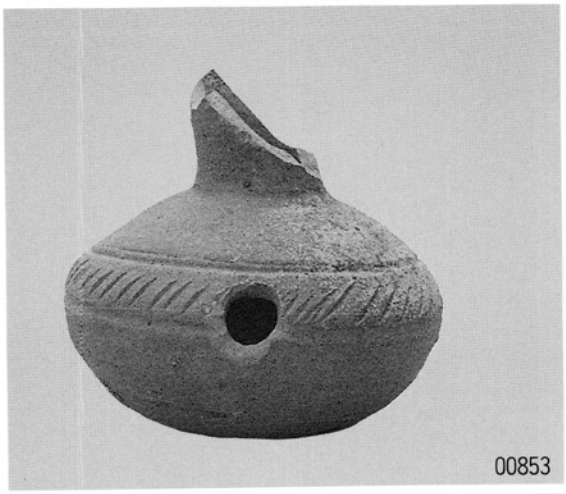
00720

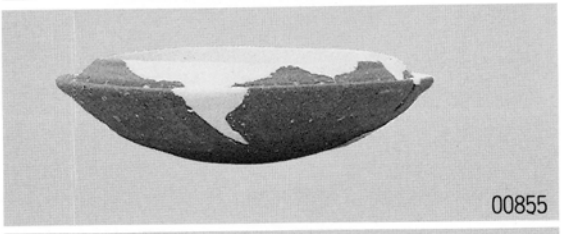
00721

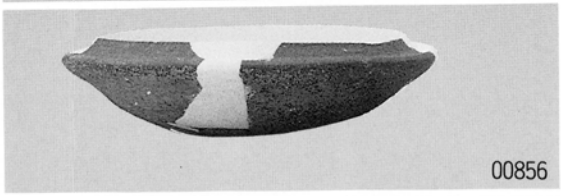
第7号墳出土土器(2)

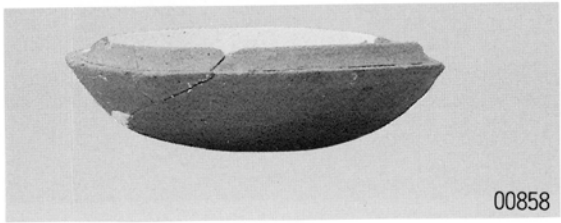
00851

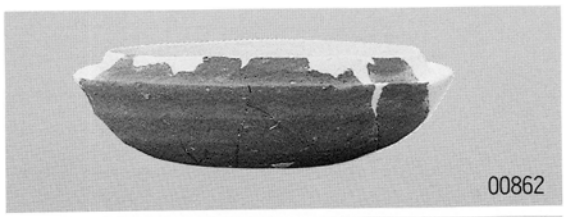

00852

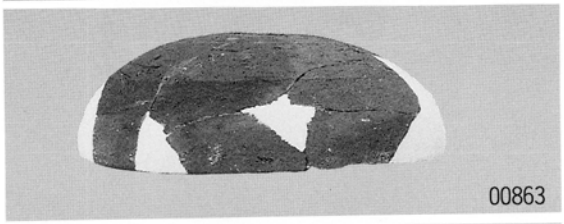

00853

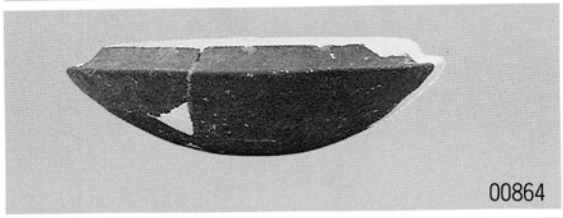

00855

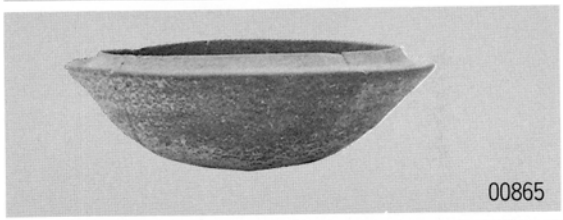

00856

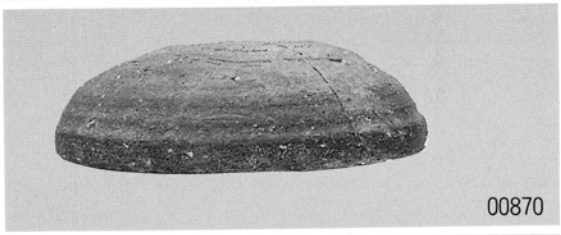

00858

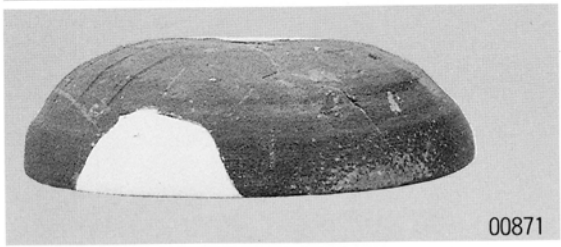

00862

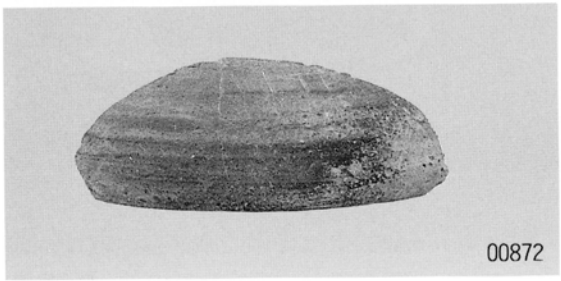

00863


00864

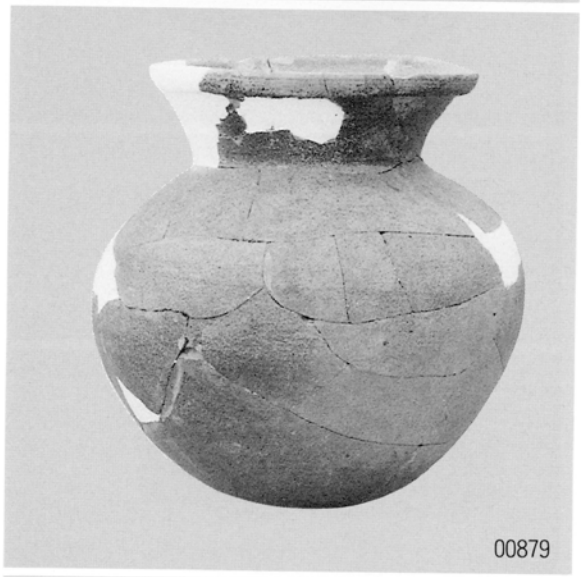

00865

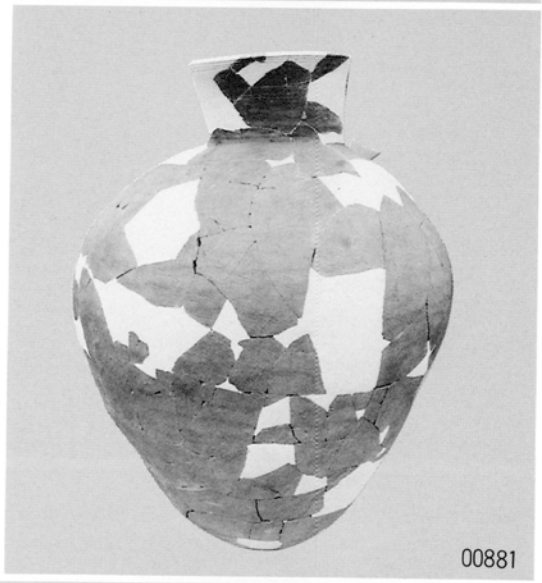

00870

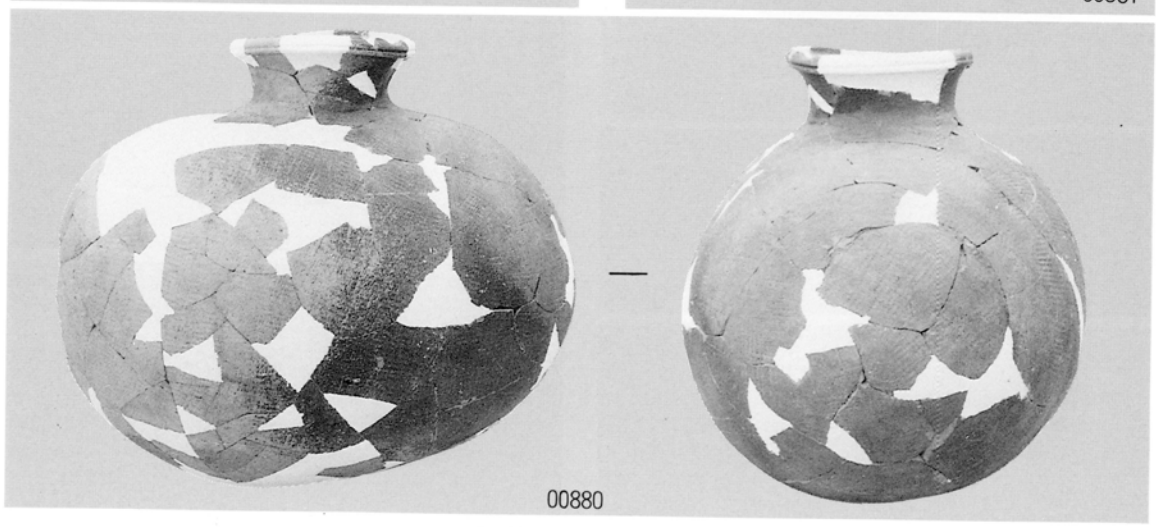

00871


00872

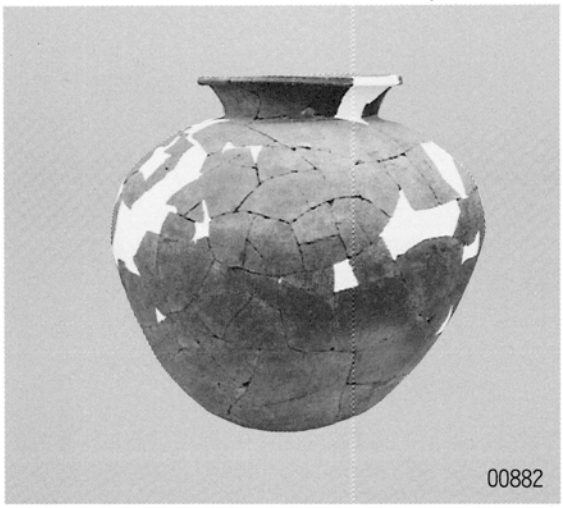
第8号墳出土土器(1)

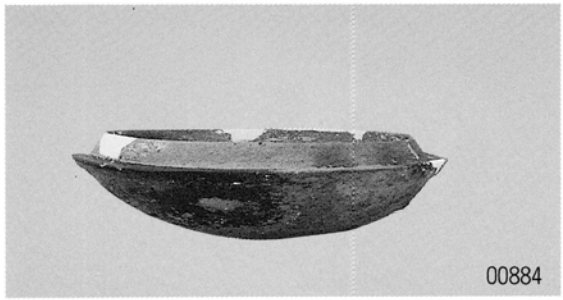


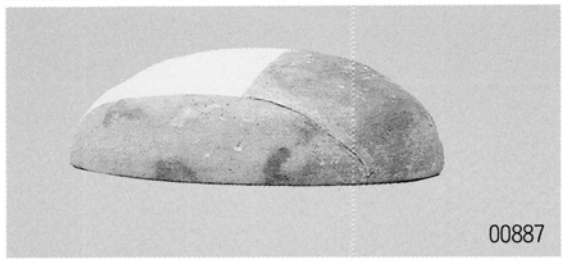




第8号墳出土土器(2)

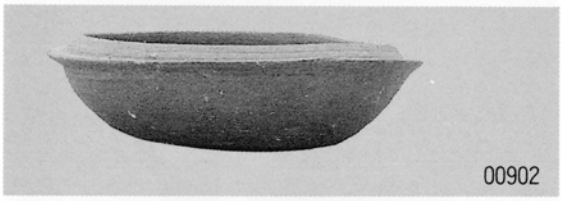




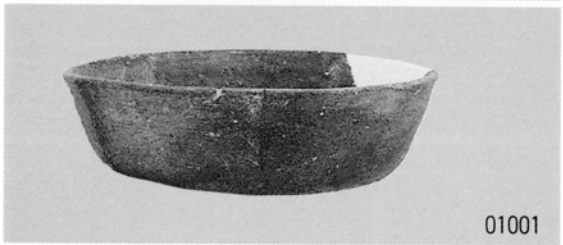


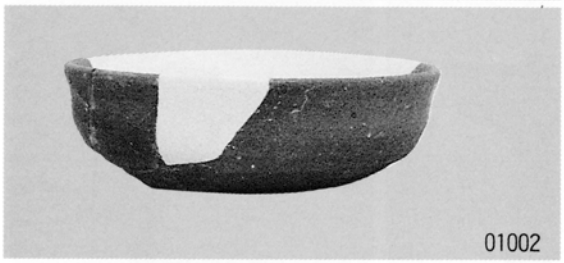
第8号墳出土土器(3)

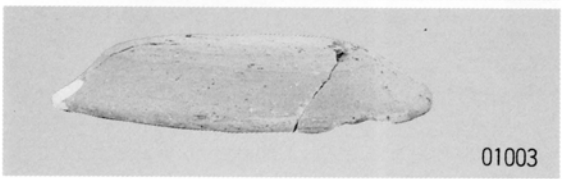
00900

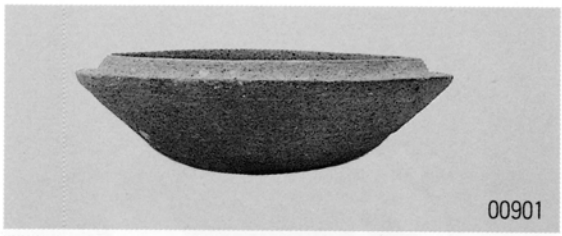

00902

00905

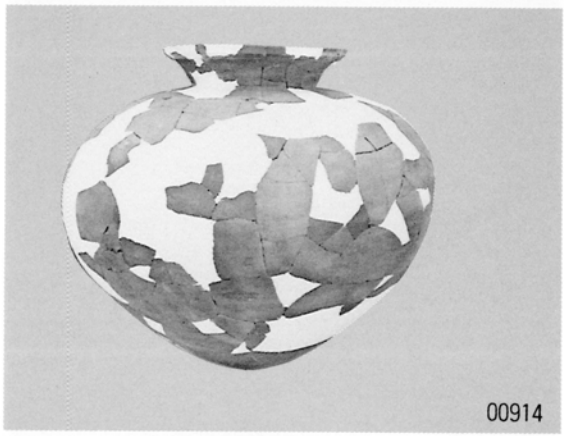

01001

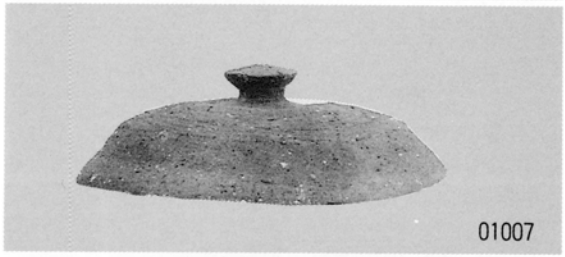

01002


01003

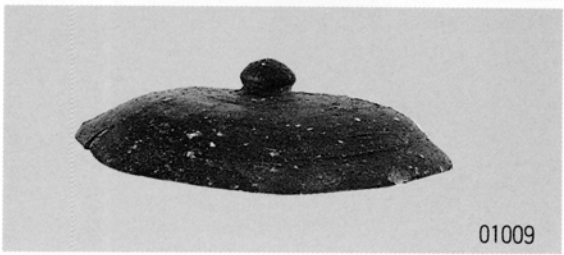

00901

00903

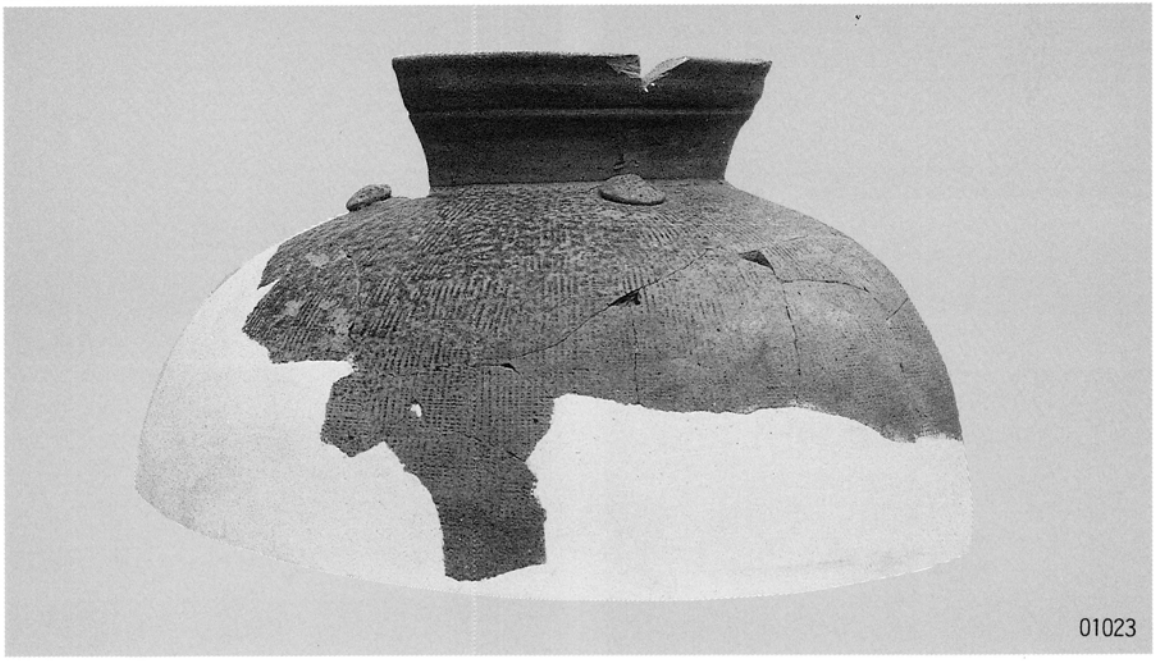

00914


01007

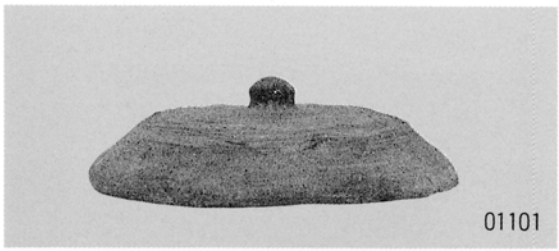
01008

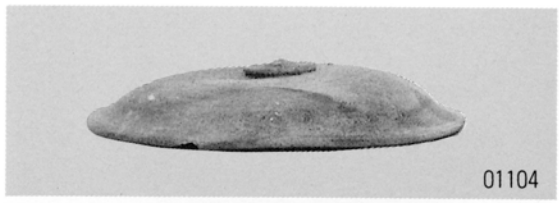

01009

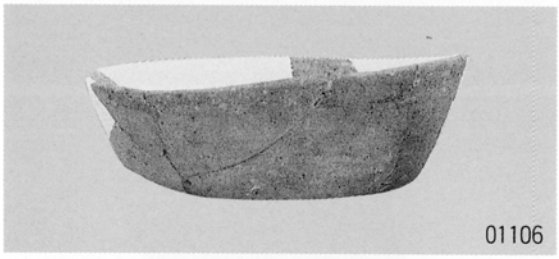
第8・27号墳出土土器

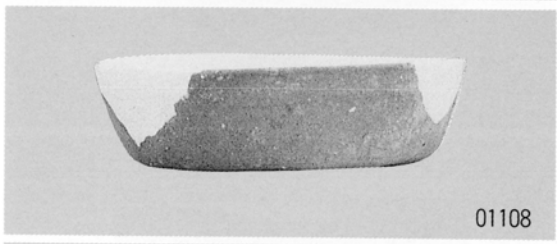


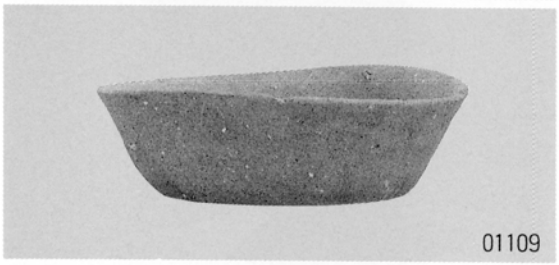
第27号墳出土土器(2)

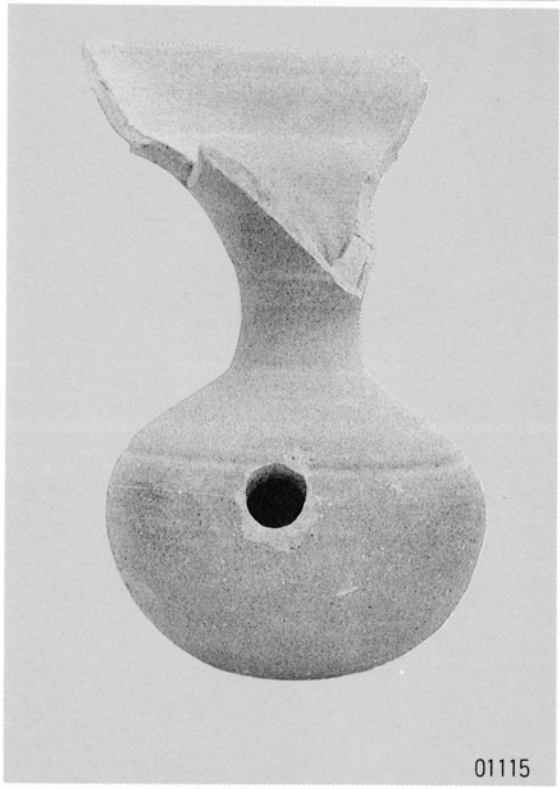

01101

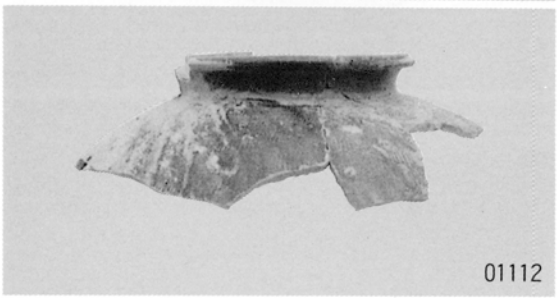

01104

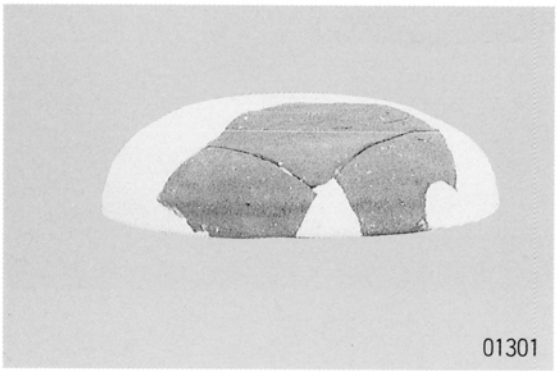

01106

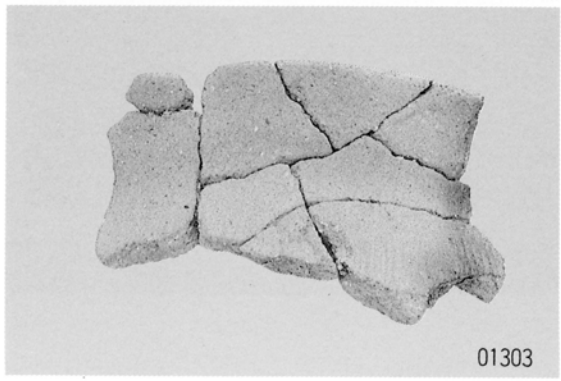

01108


01109

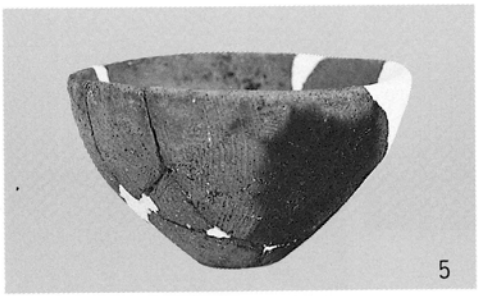

01115

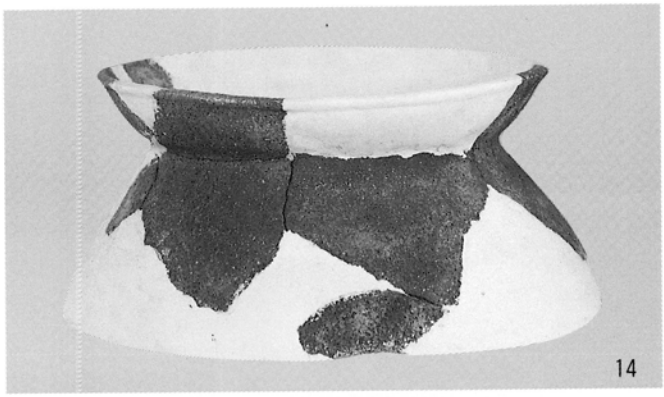

01112

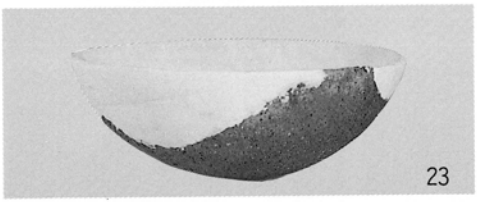

01301

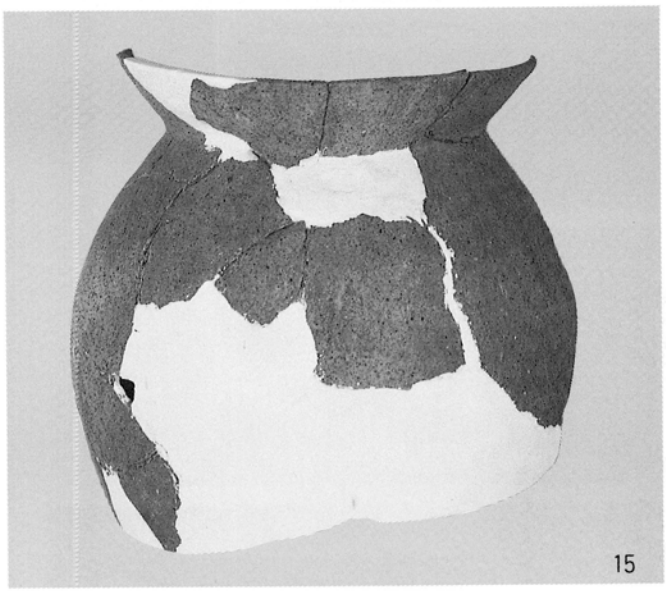

01303

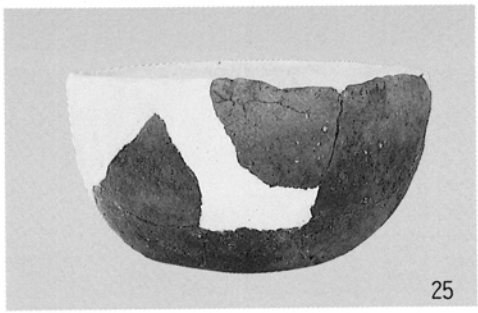
第28号墳・SK06土壙および第30号墳出土土器

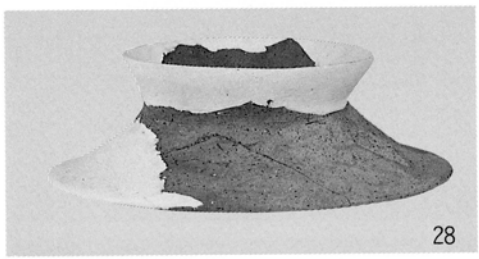


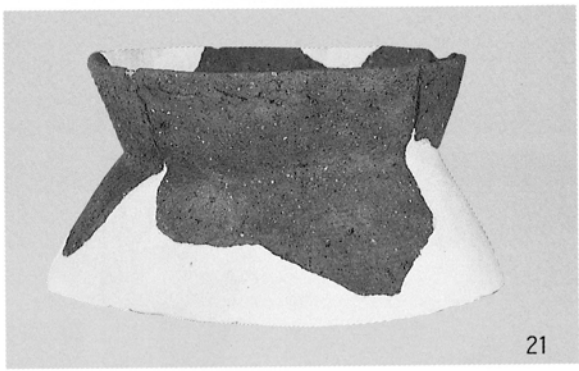


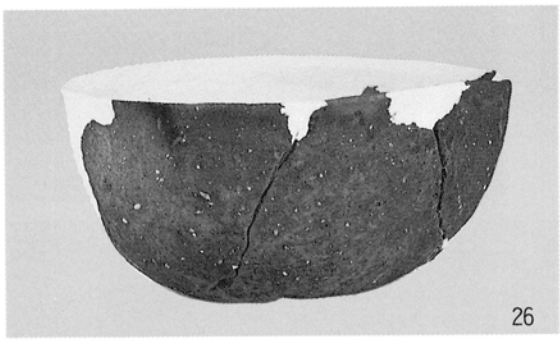


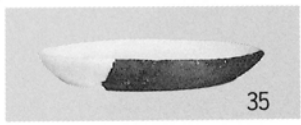


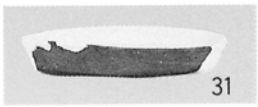




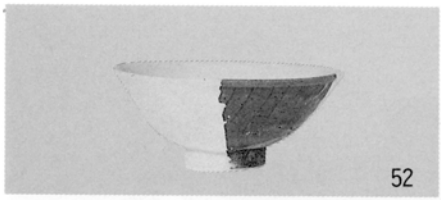


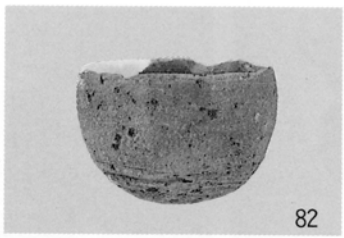


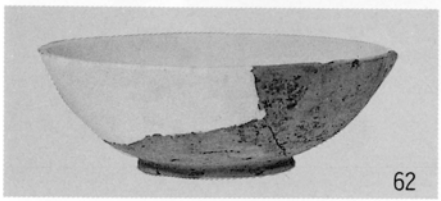


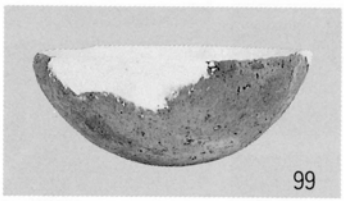


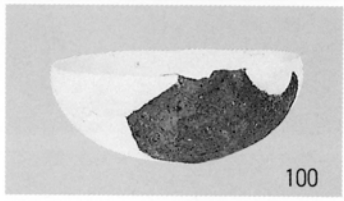
第Ia・b区出土遺物(1/3)

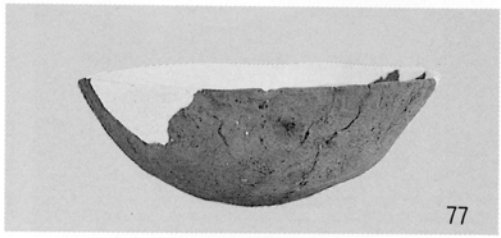


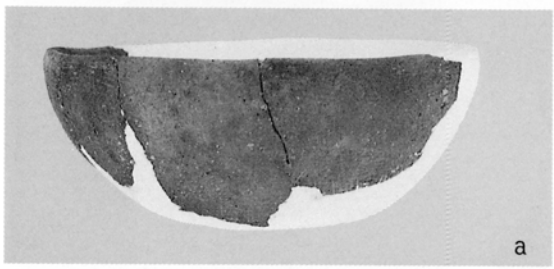


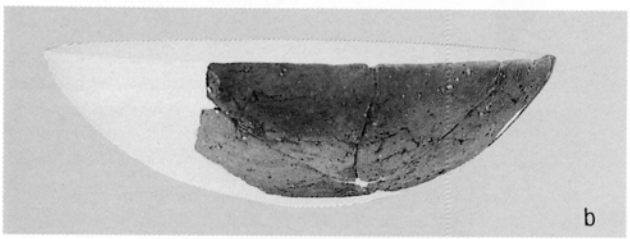


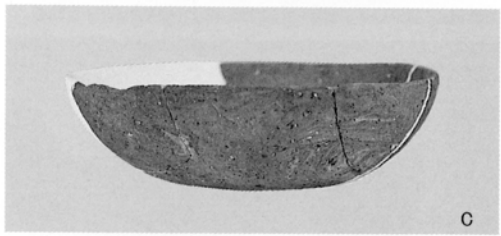




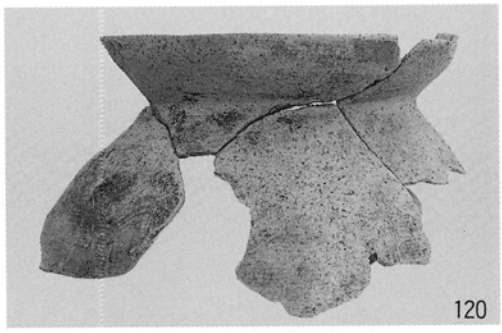


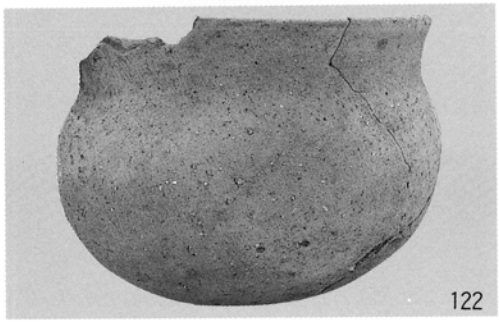


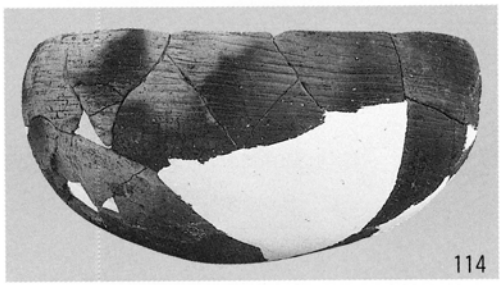


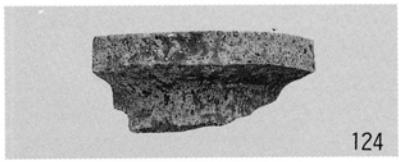


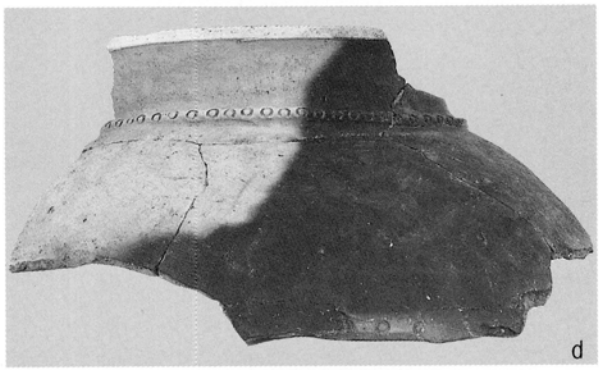
第Ib区出土遺物(1/3)



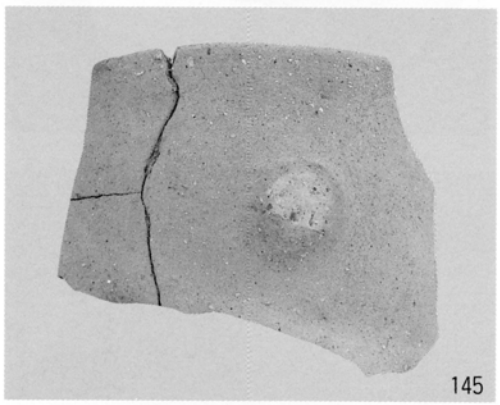


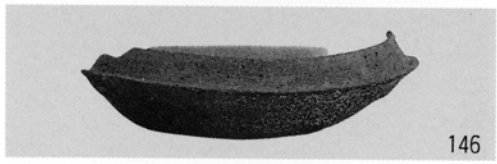


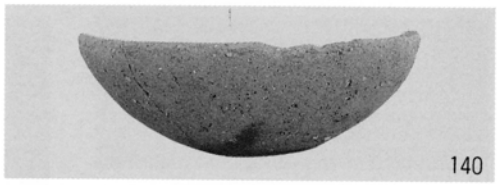




第Ic区出土遺物(1)







第Ic区出土遺物(2)

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第180集

羽根戸遺跡

1988年3月31日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8－1
印刷 祥文社印刷株式会社

―題字は安野 良氏による―